

---

# とある異常（アブノーマル）の能力完成（スキル ジ・エンド）

戯言

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アフノーマルスキル ジ・エンド  
とある異常の能力完成

### 【Nコード】

N1230N

### 【作者名】

戯言

### 【あらすじ】

俺こと近衛戸隠は神様の劇的な変化の渴望の被害者！？俺は神様に弄ばれた哀れな子羊！？ふざけんなよ！……………えっ？禁書の世界に転生？それなら許してやるよ。禁書の世界、原作ブレイクしまくりで神様の渴望なんか吹っ飛ばしてやるよ！（実は只の八つ当たり兼ストレス発散）

はあ！？愛？友情？んな綺麗事は俺は好かないね。ハーレム？興味ないね。俺は楽しいことがありやなんだって良いんだよ！

これは只の作者の暇潰しにより完成された完成です。過度な期待はせず、ニヘラと笑いながらなま暖かく見守ってくれろと幸いです。

## 始まりは劇的に(前書き)

性懲りもなく出したこの作品。読んでもらえれば分かりますが作者はナデシコと西尾維新作品が大好きです。しかし西尾さんのものは深すぎて設定なんかがつる覚えです。間違っていたり、出してほしいものがあれば容赦なく指摘してください。戯言でした。

## 始まりは劇的に

「やあ、久しぶりだね……………、いや、初めましてかな？このえとがくれ近衛戸隠くん？」

「アンタは……………、誰だ……………。何故俺の名を知っている？そしてここは何処だ……………。」

今俺は不可解な出来事に苛まれている。俺の目の前には白い色の輪郭のみがはつきりしたヒトガタがいて、現在俺は地球ではまだまだ先の技術であるう代物、空中モニターが乱立しては消えて、膨大な情報を映し出している。

「あつ…………それは見ないほうがいいよ。あまりの情報量で頭がパンクどころか沸騰しちゃうから。」

…………いや今の君ならいけるか？」

どうやらこれを見ると脳が沸騰するらしい。いや今はそんな事はどうでもいい。さっきの質問に答えてもらわねば。

「再度聞く。ここは何処だ……………。そしてお前は誰だ。どうして俺はここにいる。」

「そんなにカリカリすんなよ。何か良いことでもあったのかい？」

しかしヒトガタは俺の質問に飄々として態度で答える。

「ぶざけるな！！とつとと答える！！そして俺を元の世界に返しや

「がれー!!」

俺はヒトガタに掴み掛かろうとしたが止めた。あいつに掴む場所が見当たらない。

「いや、無理だから。」

「はぁ? どういう事だ!」

俺は奴に詰め寄る。帰れないって有り得ないだろ。俺はまだする事もやりたい事もあるってのに。

「いや、まず物理的に無理かな? 秒速約25? / sで二年半かかる。」

しかしヒトガタの口(見当たらんがあるだろう。)から発せられたのは絶望的なものだ。

「おいおい……、此処って火星なのか……?」

「そつ せいかりい! よくわかったね。因みに火星は火星でも此処は俗に“遺跡”と呼ばれているものだから。」

「……はぁ? 遺跡? ナデシコかよ……。」

新事実。俺はどうやらナデシコの世界に跳ばされたようだ。

「いや、当たらずとも遠からず……かな?」

違った……。恥ずかしい……。

「此処は君のいた世界の火星で時間軸も君の生きていた時間軸と同じさ……………」

そうか…………、ならば俺は地球人で初めて遺跡に来た人物か。歴史に残るな…………。

なんて思っていた時期もありました。

「……………ん？生きていた？生きていたってどういう事だ。」

「言葉の通りさ。生きるの反対は死ぬ。君は肉体的にも地球には帰れないのさ。」

何たる事だ。地球には未練もないし、恋人も家族もない。こんな貴重な体験もしているけど、やはり、

「なあ、俺ってどうやって死んだんだ？」

死に目位は確認したい。

「あ、ああ。君が死ぬように設定したのは僕だけど死因は決めてなかったからね。一番死ぬさいに君に近かったものが死因になったのさ。だから君は食べていた蕎麦を喉に詰まらせて死ぬ…………、つまり窒息して死んだよ？」

……………

「恥ずかしいいいい!!!!!!」

なんだよそれは!!!蕎麦喉に詰まらせて死ぬなんて子供か!!!

「まあ、多少悪かったと思っているよ。」

「多少なのか!!!」

「まあ、そういきり立つなって。聞きたいことがあるんだろ?」

「うっ……!!!」

俺は呻き声をあげた。

はあ……。なんか言い包められた気がする。

.....

「よし、この場所は何処か言ったから、次は僕の正体だね。」

「ああ、そつだ。」

奴に言い包められて少したった後奴は話しはじめる。

「そつだねえ、まず僕はこの遺跡の管理人……かな?そして君でも



ある。」

「遺跡の管理人は判るが……………、俺ってどついう事だ？」

「それも今から話ささ。」

奴が不可解な事を言う。なんなんだ俺は……………。

「まず君は僕の分身で、どの世界にも属さない人間さ。その身体に内包するナノマシンの数と性能、種類。どれをとっても人間を超えている。」

「……………はあ？」

何だよそれ……………、俺は奴の分身でナノマシンを保有する人間か？

「何だよそれ……………。俺ってナニモンなんだよ……………。」

「それも今から言うよ。まず君の成り立ちだが、君は普通の両親のもとに普通の子供として生まれるはずだったんだ。だけど世界、君たちの言う神様が劇的な変化を求めた挙げ句、この遺跡にアクセス。君の情報の九割、つまり感情や性格以外を全て僕のデータに変換した。だから僕らは分身。どちらかというところクローンだね。」

奴の口から出た言葉は突飛で劇的で理不尽で驚愕で……………残酷だった。

「は、はは、ははははは、ハハハハハ！！！！！！なんだよそれ！！俺は神に弄ばれた玩具だと言いたいのかよ！！なんで……………なんで……………！！俺なんだ！！！！」

「僕も必死で修正しようと思ったけど、どうやら君の素体、つまり元の身体自体が僕に酷似していて僕にしやすかったみたいだ。だから修正はどう足掻いても無理だった……。すまない……。」

奴が俺に頭を下げる。そくだ悪いのはこいつじゃねえ。運命を改悪させたのは神だ。

「あ、ああ。俺こそすまない……。頭ごなしに物事を偏見するだけで……。」

「いや、良いんだ。」

俺と奴はやはり同じなのか喧嘩するのも早けりや仲直りも早かった。しかし一つ疑問があった。

「そついやなんで俺は死んだんだ？」

「ああ、それは君の力が強くなり過ぎたからだよ。超能力も魔術も超科学もない世界には君の力は大きすぎる。今までは僕が力を押さえて来たけど君の成長と共に無理が出てきたんだ。だから肉体的にも精神的にも存在的にも殺して此方に転送したわけ。」

そついう事か。ならば文句もいえまい。しかし、

「これから俺はどうなるんだ？」

最もな疑問だろう。いくら自分のため、世界のために死んだとしてもそれじゃ何も報われない。今はこうやって世界では死んだことになりどの世界にも属さない存在になっているが何故生かされたのかわからない。

「ああ、君には転生………というよりは転移してもらつよ。せめてものお詫びさ。」

成る程世界に属さないからこそ為せる技か……。

「嬉しいんだが何処へ？半端な世界じゃ地球の二の舞だから、特殊な所か……。」

「そう………。君にはとある魔術の禁書目録の世界に行つてもらつ。」

とある魔術の禁書目録。これはなかなか楽しくなりそうな世界だ。しかし……。

「俺に超能力なんざ無いぜ。どうするんだ？」

俺には超能力も魔術もない。どちらかがなければ只のモブキャラで終わってしまう。だが奴はニヒルに笑う。

「おいおい………、忘れたのか？君は僕の分身だよ？その身体に内包するナノマシン……、使い用は有るはずだ。」

そうか……、俺はあの世界の間には無いものを持っている。ナノマシン。どれもこれも高性能だ。

「君のナノマシンは特別だね。君以外には解析不能だし高性能だ。それに君は僕の分身、遺跡へのアクセス権もある。未来の事象の掌握は無理だけどね。ナノマシンは君の脳のシナプスの役割もしてくれるし、遺跡も君の脳だ。君は完璧なる知識を身につけたも同然。」

演算速度も“樹系図ツリーダイアグラムの設計者”なんて比じゃない。さらに君はA級ジャンパー以上……特例のS級ジャンパーだ。生体ボソンジャンプディストーション・ファイルドは勿論、時間なんて赤子の手を捻るが如く操れる。“次元歪曲障壁”もカロリーを代償に操れる。どうだ？超能力なんて目じゃない。」

もう超能力云々より人外に達しているよと宣告されているようで嫌なんだがな。しかしなんで奴はニヒルに笑ってんだ？

「確かに君は人外だ。だけど君は武術の経験も無ければ修練もない。どうも火力不足だ。だから何か付けてあげるよ。その能力に合った何かをね。希望は有るかな？」

成る程そういうわけか。奴も存外ノリノリと言うわけか。ふむ、特に思いつかな……。……

「そっか、なら此方がランダムに決めるよ。」

ふむ、これは面白いね。」

やはり自分につく能力は気になる訳で身を乗り出して聞いてしまった。

「それは、めだかボックスより黒神めだかのアブノーマル、ジ・エンド“完成”。まさかこれが出るとは思わなかったね。」

おいおい……。チートすぎんだろ。アブノーマルの最大の天敵か。しかし…………、

「とあるの世界にアブノーマルなんざ存在するのか？」

そう、あれはめだかボックスに存在するものであるには存在しない。アブノーマルがいなければこのアブノーマルは宝の持ち腐れだ。しかし、奴はやはりニヒルに笑っている。

「実はこの能力はアブノーマルを完璧に混じり気なく完成させるアブノーマルなんだけど、実はこれの効果範囲のアブノーマルに超能力までオブションで付けられた。魔術は使えないにしても、超能力は使えるし、君はスパコンなみの脳と無限のシナプスを持っている。デュアルスキル“二重能力”も出来るし、複数の能力を同時に操れる。正直能力者に敵はいないし、明らかオーバーキルだと思うけど……………」

チートすぎる。有り得ねえよ。最強すぎんだろ。

「まあこれだけの火力があれば生きていけるだろ。」

生きていけるとどこか支配できそうだな……………。禁書の世界を。

「だが、これだけの力を持てば平穩に生きていても原作に少なからず介入するぞ？良いのか？」

「それに付いては問題ないよ。世界の抑止力なんて僕が抑えるし、君を送る世界は原作の平行世界だからね？」

「成る程……………。なら良いな。」

「ああ、まだ聞きたいことも有るだろうけどそれは向こうについてから実地で確認してくれ。もう時間だからな。」

奴は面白そうに笑いながら言う。

「ああ、何から何までありがとう。」

「ああ、それでは禁書の世界に送るよ。それ!!」

ぱかん!!

奴が俺の足元を指差すと、同じく足元からぱかんと音がする。……  
……ぱかん？

「て、てめえええ!!最後につまんねーオチつけてんじゃねー!!」

「オチだけに落ちってね!」

「つまんねーよ!!!!うああああ!!」

あいつ!!今度あつたら殺す!!

そうして俺は遺跡から姿をけし、禁書の世界へ転移した。

## 早速原作ブレイク（前書き）

はい、懲りずにやってきた戯言です。有り得ない展開とか思ったら即座に言ってください。直しはしませんがこのからの糧にしますの  
で。

## 早速原作ブレイク

「うわああああ……！アンノヤロー……！」

今俺は絶賛落下中です。奴め！なんで空の上から落とすんだ……！

「ちいいい！自由落下は気持ちいがこのままじゃ地面に当たってスプラッタだ！何か無いか、なにかないか……！」

そして俺は映画では必ず見るドラ もんの慌てながらポケットから必要な物を出すようにじたばたしている。いつも思うんだがなんで映画のドラ もんは役たたずなんだ？

「くううう………！！ボソソジャンプするしかないのか！まだ練習もなんもしてないけど……！」

確証も確実も確立もなんも無いけどーか八かボソソジャンプするしかないようだ………。

「くそっ……もう地面が近く………ってあれは……あの四人組は……あの花の飾りは………！！」

もう原作介入するのか？！してしまうのか？！もっとゆっくりしたかったんだけど………。

「ええい、ままよ……ジャンプ……！」



俺は遺跡にアクセスして地面のイメージを頭にインプットしてボンジャンプを開始する。俺の体からボース粒子が発生し、空中から消える。

ズドンッ!!!

くそっ!!!少し遅かったか!速度を少し殺しきれなかった……。俺は足元にディストーション・フィールドを展開して落下の衝撃に耐えた。周りから四つの疑惑の視線を感じるが、生憎俺はそれを感じるMじゃないのでやめていただきたい……。取り敢えずは……。

「成功したか……、」

命があつてよかった……。

……

今現在俺は四人の視線を感じながら現状確認を行っている。目の前にはファミレス。ここにこの四人がいるということは、今は7月16日なんだろう。そして俺の服装。何故か死んだときよりも身長が低くなっていて、かの有名な(?)柵川中学の制服を来ている。何故中学生か……。俺は生前高校二年生だったんだが……。上条

さんに会えん……。

ばさっ……

俺が若返ったことを落ち込み、orzポーズをかましているとカッターシャツの胸ポケットから一枚の紙と生徒手帳らしきものが落ちる。

生徒手帳には、柵川中学一年 近衛戸隠の文字が……。やはり柵川中学の生徒手帳だ……。そして、もう一つの紙を見る。

やあ、“僕”。これを見ているということはボソソジャンプを成功させて無事に着地したところだろう。

さて前置きはここ迄にして今頃服装やら身長やらが変わっていて困憊 している頃だろう。まず君の身の上だが、ちよっと不審だが7月17日に天馬中学から柵川中学に転校する事になっている。その理由やらは君の右ポケットのなかに入っている。後で見えてくれ。

次に君の能力だが、テレポルト空間移動の大能力（レベル4）にしてある。流石に完成はまずいからね。ジ・エンド

というわけで頑張って生きてね？

By “君” より

それは奴からの手紙だった。有り難いのやら有り難くないのやら分からないが取り敢えず奴は死んだほうが良いと思う。そういえば急な転校の理由がポケットに入っているらしい。だからポケットに手をつまもつとしたときに、

「あなた……………誰よ。」

電撃姫に声をかけられた。あれ？死亡フラグ？

「誰と言われましても……………、名前は近衛戸隠ですが……………」

「この人柵川中の制服来てますよ？」

「でもこんな人居ましたかね？」

俺が電撃姫に名前を告げると、黒髪ロングと花飾りが話す。

「取り敢えず、ファミレスに入りませんか？込み入った話になりそうですし……………。ちっ…お姉様とのラブラブショッピングが……………」

「……………」

茶髪ツインテがファミレスを指差しながら言う。しかし顔が笑ってません。正直怖いです……………。

「そうね。あなたの事、きっかり話してもらおうから。」

電撃姫がそういって話した後俺たちはファミレスに入る。俺……………  
どうなるんだ？

……………

果たして、俺は異様な光景の真っ只中にいた。俺の目の前には電撃姫にツインテ。左には黒髪ロング、右には花飾り。正直これなんてエロゲ？なんて言いたいけど、空気が無駄にしている。電撃姫は俺の生徒手帳を持ちながら睨んでるし、ツインテは睨んでるし、黒髪ロングは睨んでるし、花飾りは睨んでるし……、ってあれ？俺睨まれすぎじゃね？

「で、あなた……えっと近衛戸隠くん？色々と聞きたいことあるんだけど……、まずなんで空から落ちてきたわけ？」

ちよつと電撃姫さん！！素が出てるよ！横の二人も多少引いてるよ。怖いからちよつと下手に出ようか、なんて思ってた口を開いたら、

「はん！！常盤台の超電磁砲レールガンは礼儀つてもんを知らねーのかあ？先ずは名乗ってからだろ？俺の生徒手帳は勝手に見やがって……。」

なんて電撃姫に喧嘩売っちゃいました……。って俺のアホオオオオオ！！なんで喧嘩売っちゃってんの！

「あなた……！！！」

ほら、なんだか額からパリパリと電撃出しちゃってますよ！！

「まあ、良いわ。私の名前は御坂美琴。常盤台中学二年よ。これでいいかしら？さあ話してもらおうよ。」

しかし直ぐに電撃を収めてくれる電撃姫……、もとい御坂。

……あれ？原作より優しくね？俺がこの世界に来たからか？

「ん、御坂ね。まあ俺は知っての通り名前は近衛戸隠だ。よろしく。

さて、さっき聞いていた俺が落ちてきた理由は、まあよくある話で能力を使っていたらミスって落ちたって訳。」

そして御坂に空から落ちてきた理由を話したが本当の理由を話すわけには行かないので適当に誤魔化した。ちよつと無茶があったけどなんとかなるだろ。

「ふうん、ならあんた。そこそこの能力者なんだ？能力は？レベルは？」

そういつたら今度は能力の話。立て続けに、しかも爛々とした目で見られて、ちよつと辟易してる。バトルマニアって厄介……………。

「俺は空間転移……………所謂テレポーターって奴だ。因みにレベル4。」

「……………！！！」

そういうと今度はツインテがびっくりした目で見てくる。御坂はなあーんだって顔でジュースを飲んでる。

「あなた空間転移能力者でしたの？」

「君は？」

「ああ、失礼。わたくし白井黒子と申しますの。あなたと同じ能力とレベル何ですよ？」

ツインテ……………白井が何だか自慢そうに話す。いや、俺も今のところと同じレベル4だし……………。なんて野暮な事は俺は言わない。

「ふえ〜……………、凄いですね！白井さんと同じレベル4なんて！」

「あれ？でも……………、うちの学校にレベル4なんて居たっけ？」

次に花飾りと黒髪ロングが話す。

「君たちは？」

俺が名前を聞くと花飾りは慌てて、黒髪ロングはニヘラと笑いながら言う。

「あっ！ごめんなさい……………、私柵川中学の一年で初春飾利です。よろしくお願いします、近衛さん。」

「ごめんごめん、私は同じく柵川中学の一年で佐天涙子。よろしくね、近衛。」

俺的には佐天が一番好きだな、容姿的にも性格的にも……………、まだ早計かもしれないが……………。おっと話を戻そう。

「ああ、よろしく。」

それと、二人が僕を知らないのは当たり前だ。俺、今日から天馬から柵川に転校したんだから。」

「……………転校?!……………」

俺がそういうと、佐天と初春以外にも白井と御坂までも声を荒げる。

「こんな半端な時期に？」

……てことは何か理由が有るのね。学校なんて滅多に転校出来るものじゃ無いしね。」

御坂が代表して聞く。その後俺はポケットの中をまさぐる。

「おつ……あつたあつた、これだ。」

そういつて俺が取り出したのは一枚の紙と、緑の腕章。

……俺、ジャッジメント風紀委員だったのか。嫌でも原作介入すんじゃないか……。

「あら、あなたジャッジメントでしたの。何だかキャラが被りますわね。近衛さん、何だか女顔ですし。」

俺もそう思うよ白井……、なんて気軽に言えない。俺が女顔だつて？それだけで疑問だし、何だか白井から不穏な空気が流れている。正直話し掛けたくないです。

「まあ、そこに書いてある通り、第二十二支部から第一七七支部に転属だ。それで学部もかなり離れているから、柵川に転校って訳。上は何を考えてんか分かんねーよ。」

奴が何か細工したのは明らかだが、最後に俺の転属を決定したのは恐らくアレイスター・クローリーだろう。俺の能力も把握している

だろうし。ホントに何考えてんだ？奴は……。

「でも、ようやく合点がきましたの。そういえば明日うちの支部に転属の方がいらっしやると聞いてましたわ。」

俺が思考に耽っていると、白井が言う。聞いてたんなら先に言えよ……。

「まあ、これで万事解決ね。」

あ、そうだ。今から四人で遊びに行く予定だったんだけどあなたも一緒に来ない？」

話が終わり、帰ろうとした俺に御坂が話し掛ける。いきなり原作介入フラグ。これは折るより回収したほうがいいな。

「良いんですか？余所者ですけど……。」

俺が下手に出ると初春が言う。

「もう名前を交換したら友達ですよ。」

「そうだよ。それにこれから同じ学校なんだから今から親睦深めとこうよ。」

「そうですね、これから一緒に仕事をするんですし、何かと仲が良かった方が良いでしょうね。」

初春が行った後に佐天と白井も同意する。まあ、ここまでいわれたら



「それじゃ、よろしく。」

「じゃあ、行くわよ。」

行くしかないでしょ。

.....

「はあ〜……凄い人ですね〜。なんでこんなに人が多いんでしょう？」

「間が悪かったかもね。」

今現在俺はかのゲコ太なるもののストラップが貰えるクレープ屋にいる。それにしても学園都市は凄いな、前世じゃ考えられんな。清掃ロボットやらなんやらは……。

「それでは、私はベンチを確保してまいりますわ。」

「あつ、私も行きます。佐天さん、私たちの分もよろしく願いますね。」

「あつ、ちよつ……。」

周りを眺めていると、どうやら並んでいるのは御坂と佐天と俺になったようだ。やはり佐天は緊張……、というか御坂の思案顔にびびっているみたいだ。どれ、助け船でも出してやるか。

「佐天、ここに三人並んでいたら他の客に迷惑だ。それに俺は甘いものが苦手でな、買うのは四つだろ。なら三人もいらんから一緒にベンチを取ってきてくれ。序でにコーヒーを買ってきてくれると有難い。」

そういうと、佐天は俺に近づいてきて耳に口を近付ける。

「（ありがと、近衛。御坂さんがいい人なのは分かるんだけど、まだ緊張しちゃって……。）」

「（まあ、わからんでもない。あの超電磁砲レールガンだからな。）」

「（うん、ホントにありがと。コーヒーだね。なんでも良いの?）」

「（ああ、ブラックにしてくれ。）」

「（了解。）」

そういつて佐天は俺の後ろから列を抜けて走っていく。因みに先程迄の順番は俺、佐天、御坂だ。

「御坂。」

その後に俺は御坂に話し掛ける。

「なに?」

「前に並ぶか?そんなにゲコ太が欲しいなら。」

「なっ……………!!」

俺がそういうと御坂は顔を赤くして、仰け反る。

「べっ、別にゲコ太が欲しいわけじゃないのよ！ただ単にクレープが欲しいだけよ!!」

なんて言いながら子どもが持っているゲコ太に目が泳ぐ御坂。

「はあ……………、何を恥ずかしがってんだかわからんが、別に良いじゃねーか。お前がゲコ太が好きでも。」

「えっ……………?」

意外そうに呆ける御坂。なんも分かってないようだから言ってる。

「お前がゲコ太が好きでも、誰もお前の事を変だとは思わねーよ。確実に俺は思わないね。良いじゃねーか、可愛くて。愛らしいぜお前。ギャップ萌ってやつ?」

「なっ……………!!」

俺の言葉に赤くなる御坂。

「あんま肩肘張んなよ、そんな事で。だってお前はレベル5や超電磁砲以前に女の子なんだからよ。」

「……………。」

俺の言葉に顔を赤くして俯く御坂。やべっ、ちょっと可愛いかも…

……。

「次の方どうぞ。」

「おっと、呼ばれたな。というわけでお前はお前だ。人の評価なんて気にすんな。ありのままの自分で行けよ。」

と言いながらニコツと笑う。

「……………ありがとう……………」

その後御坂は顔を赤くして恥じらいながら礼を言う。

ぐはっ……………！！これがギャップ萌という奴か……………！！

「おう。気にすんな。それじゃ買うかな？」

そういつて初春と佐天のクレープを注文する。

「はい、これ。最後の一個です。」

あっ、これ最後の忘れてたぜ……………。

気付いたときにはとき既に遅し。後ろからドシャツ……………、と何か  
が崩れ落ちる音がする……………。十中八九御坂だろう。

「……………つう。」

俺が励ました後だからダメージが原作より大きい……………。こんなこと  
と原作ブレイクすんなよ……………、俺……………。

「御坂……、これやるよ。」

そついいながら御坂の前でゲコ太ストラップをちらつかせると、

「いいの????!?!」

「お、おう……。」

猫じゃらしの前の猫、肉の前の野獣、蛙の前の蛇のごとく御坂が食らい付いてくる。ていうか蛙の前の蛇って、ある意味御坂が蛇って事に……、はいすいませんつまらなかつたですね……。

「ありがとうー!?!?!」

「……………」

寒いギャグを言って自分で自爆した荒んだ心を持つ俺は御坂の感激の表情に不覚にも癒されてしまった。

こうして俺と御坂はクレープを無事に買い、三人の待つベンチへ向かった。

……………

ベンチに行くと佐天と初春と白井が談笑していた。佐天の手には透明なプラスチックカップに入ったコーヒーが。どうやら望みの通りブラックのようだ。有難い……。

「はい、これ。初春と佐天の分だ。それと佐天、コーヒーありがとう。」

「ありがとうございます。」

「ありがとね、それとコーヒーね。」

俺は佐天と初春にクレープを渡した後、佐天からコーヒーを受け取る。うん……うまい……。

「あれ？近衛さんはクレープ食べ無いんですか？」

俺がコーヒーを飲みながら、白井が納豆クリームクレープを御坂に食べさせて間接キスを狙っているのを眺めていると、初春が聞いてくる。

「ああ、甘いものは苦手だね。食べられるけどあまり食べたくないというか……。特にチョコレートは苦手だね。98%しか食べれないな。クッキーは好きなんだがね。」

「そうなんですか……、意外ですね。」

……………それはどういう事だ。

「だって近衛って女顔だしね？」

「そうですねよ。その女顔の人が満足そうにコーヒー飲むなんてあり得ません！」

やはりそれか……。そんなに俺は女顔なのか……。ちょっとシヨツクだ。それと初春。世の女性のコーヒー愛飲者に謝っつけ。

「あれ？そういえばなんであの銀行昼間からシャッター閉まってるんでしょ？」

「あれ？そういえば……………」

「「えっ？」」

「……………」

話を反らしたな……………、なんて突っ込みたいけど原作が始まるからな、止めといてやるよ……………。

「……………くるな……………」

俺が呟いたときにシャッターが爆発する。白井がこちらを見た気がするけど、気にしてられんな。

「初春は警備員アンチスキルに連絡を、わたくしは……………」  
「俺が行く……………」  
「……………」  
えっ？」

ここまで来たんだ。原作介入してやるよ。

「じゃっ、行つて来る。」

「あっ、ちょっと……………！」

そういつて俺は腕章をつけて柵を越えようとジャンプする。

「うおっ！……！」

だがジャンプしたら人間では有り得ないくらいジャンプしてしまった。高さで言うと5メートルくらい……。ナノマシンの存在をすっかり忘れてたぜ。

「よいしょ……。」

その後空中で二回前転してから地面に着地する。そしてまだ周りを見てキョロキョロしている強盗三人組に近づく。

「おい、風紀委員だ。おとなしくしゃがれ。」

……。俺って喧嘩売るのが好きなのな。風紀委員なのにおとなしくしゃがれなんて……。

「ああ？なんだお前。風紀委員だと？」

「ああ、そうだよ。お前らをぶつ殺しに来たんだよ。」

「んだとこら……！」

……。俺ってホントに喧嘩売るのが好きなのな。風紀委員なのにぶつ殺すなんて。

……。あれ？デジャヴ？

「ギャハハハハ！！てめえなんか俺を殺せる訳ねーだろ！」



俺が自己嫌悪に走っているとバンダナ男が鉄パイプを担ぎながら近寄ってくる。能力を使わない辺り無能力者か？楽勝だな。

「てか、そういう奴って大抵雑魚いよな……………」

「死ねえええ!!」

俺の呟きを無視したのか、聞こえてなかったのか鉄パイプを振り下ろす。

ガシッ!!!

「なっ……………!!」

「これだから雑魚は……………。死亡フラグばっか乱立させやがって……………。回収すのが面倒いんだよ……………。死ねばいいのに。」

それを右手で受け止めて呟く。俺の心って荒んでるのかな？

グイツ!!!!

「アデデデデッ!!!!」

そして、俺は鉄パイプごとバンダナの腕を捻り、組み伏せる。一瞬肩外そうと思っただけと止めといた……………。これ以上荒んだ自分を見るのが嫌だからな……………。

「くっ、くそっ!!」

バンダナを組み伏せるとリーダーらしき奴が手から火球を出す。レ

ベルアツパーの使用者か……。やはり火球が大きいみたいだ。

「これでもくらっ……げふっー!!」

「一人で先行しないで下さいませ、近衛さん？」

「……すまん。」

そしてそれをリーダーが放とうとした時にテレポートしてきた白井が上からリーダーにドロップキックを放つ。……白井、容赦ねーな。

「これで殲滅完了よ……。「きゃあああ!! 止めてください!!」  
「うるせえ!!」……忘れてたぜ……。」

俺が二人を拘束したのに満足していて、佐天が子どもを庇って殴られるのを忘れてた……。……不覚ッ!!!!

「くっ、あの男……!!」

「黒子、ちょっと待ってくれる？」

「お姉様？」

白井がキレて男に向かおうとしたところにカーディガンをクレープで汚した御坂が顔を俯かせて立つ。男は既に車に向かっている。

「喧嘩を売られたんだ。なら買っても良いよね？」

あーあ、素直に佐天が殴られたからだといえれば良いのに。

なんて思いながら俺は完成ジ・エンドで完成させた発火能力を確認する。ふむ、レベル5でメラゾ マくらいの球は作れるか。応用すればベギゴン位は出来るかな？

ん？無責任？此処は御坂に任せりゃ万事解決だし、後で佐天にも謝つとくよ。それに友達のために怒ってる奴を止めるほど俺は不粋じゃないよ。

「お、思い出した！風紀委員には捕まったが最後身も心もロボ口にする悪魔のようなテレポーターがいるって！！」

「誰ですの？それ？」

お前だよ、お前。それにしてもリーダーも言うね。なかなかおもしろーじゃん。

「それに、その悪魔がお姉様と慕う最強の電撃使い（エレクトロマスター）がいるって……………！！」

「そう、あの方こそが学園都市頂点の七人しかいないレベル5、常盤台のエース、超電磁砲レールガンと呼ばれる……………」

おい、白井。それ自分で悪魔って言うてるようなもんだぞ。なんて怖くて突っ込めないの、一応二番目に手に入れたテレポートを完成させて、エレクトロマスターを見る。もう既に御坂はコインを宙に浮かせている。

そして

ズギューウウウウン！！！！

超電磁砲レールガンを放つ。そしてそれは車を吹き飛ばし、車は加速の慣性の法則を無視できず、くるくる宙を舞ながら落ちる。

……よく上条さんはあれを受け止めたな……。尊敬するよ……。

「御坂美琴お姉様ですわ!!」

そして白井に問いたい。なぜお前が誇らしげだ。そう思いながらエレクトロマスターを完成させる俺がいた。俺って姑息なのね。今知つたよ。

そして警備員が到着する。おせえよ来るのが……。

……

俺が夕暮れのなかベンチへ戻ると、頬に絆創膏をつけた佐天がいた。彼女は能力者に対してコンプレックスを感じてるからな。しょぼんとしている。

「佐天……。」

「近衛……、私何もできなかつた。」

俺が声をかけるとますます落ち込む佐天。

「お前が何もできてないんじゃない俺なんて死んだほうが良いな……。」

「  
えっ？」

俺の言葉に顔を上げる佐天。

「俺は単に能力を振りかざして弱いものいじめしてるだけだ。風紀委員って権力楯にして。必要悪かもしれないが……。いや弱いもの虐めなんて、上から目線もおこがましいかな。」

「でも、近衛は……。」

しかしすぐに頭を下げる佐天。

「確かに俺は能力を持っていて、お前は持っていないかもしれない。だがな、お前は俺には無いものを持ってるよ。」

「えっ？」

俺は一呼吸おいて言う。

「それは強い心だ。お前は能力が無いながらも強盗から子どもを守った。確かに強盗は捕まえられなかったけど、子どもの心は守れたよ。ほら……。」

俺が指差した方には男の子が。佐天が助けた男の子だ。

「君……。」

「ほら、お礼言いなさい。」

「うん、お姉ちゃんありがとう!!!」

佐天がそちらを見ると男の子が佐天にお礼を言う。そして男の子は去っていった。

「なっ？俺じゃあの子の心は救えなかったさ。だがお前は救った。それって能力より大切なんじゃない？俺は知ってるぜ、そういう奴。どんだけ能力者がいようと、自分の信念のため、守る人のために一人で突っ込んでくやつ。」

つまりお前は誇っても良いんだ。胸張ってな。能力は後付けのステータスだ。お前はそれをも上回る心を持ってんだから。」

そうやって俺が言つと、後ろから御坂がくる。

「へえ、近衛、良いこと言うじゃない。それと佐天さん？」

「は、はい!!」

御坂の呼び掛けに過剰に反応する佐天。

「私は近衛みたいな気のきいたことは言えないけど……、格好よかったわよ？こどもを守ってるどころ。」

それに佐天は呆け顔からにっこりとしたいつもの顔に戻る。

「ありがとうございます、御坂さん!!!近衛!!」

おいおい、俺があんだけ言ったのに俺はついでか？憧れというのは怖いね。

「近衛……………」

俺が佐天からバスの方に目を向けていると、佐天が声をかけてくる。

「なんだ？」

「……………その、ありがとね。私勇氣出たよ。感謝してるよ。」

「……………。」

感謝の言葉がなんで上から目線だよ、なんて言わない。それが佐天だからな。

「それじゃ、帰ろつか。まだ分かんないでしょ？学生寮。」

「あ、ああ……………、っておい！！引っ張んな！！」

佐天に手を握られてその手の柔らかさにどぎまぎはしないが、多少戸惑った俺がそこにいた。

……………

「ただいま〜っつと……………。疲れたぜ〜。」

俺は今しがた銀行事件から学生寮に帰ってきた。ご丁寧に前学の

校の教科書や生活用品が段ボールに詰められている。奴の仕業だろ  
うな。俺の転移でドンだけの人か欺かれて金が動かされたんだろな  
……………。

「……………考えんの止めよ……………。鬱になる。」

俺は電気をつけて中に入る。部屋の生活調度はリビングにテレビ、  
ガラステーブル、エアコン、低反発ベッド、大きなアルミ製のキャ  
ビネット、勉強机、デスクトップパソコンにプリンタ。キッチンに  
は冷蔵庫とIHのキッチン。学園都市製の新品ばかりだ。

「明日はやりたいこともあるしもう寝よ……………。」

そういつて俺は管理人や隣人への挨拶もそこそこに眠りに就いた。



暗部に入るのは簡単だ（前書き）

はい、三話目きました。

今回は口調の難しい方々が多かった……………。

まあそれでもいいやという方は先にお進みください。

## 暗部に入るのは簡単だ

「ん、んわ……………、知らない天井だ……………」

テンプレな事を呟いておはようございます。先日このとあるの世界に転生？転移した近衛戸隠です。

……………なんて挨拶も済ませたことだし、行動しますか……………。

「今日は、7月17日か……………。学校行って挨拶して、能力測定をして177支部に挨拶しに行って終了か。なんのイベントも無いな。」

俺はいそいそとベッドから這いずりだして制服を着る。現在の時刻、6時半。まだまだ学校まで余裕だったりする。

「顔洗って飯作るか……………」

俺は洗面所、昨日確認しなかったので多少探したがトイレの横に風呂とともにあった に行って顔を洗う。

「朝は軽めにするか……………」

なんていいながらトーストの上に焼いたベーコンと目玉焼きを乗せる。味付けは塩胡椒だ。さらにサラダとコーヒーを用意して、プチブレックファーストの出来上がりだ。

「てか、冷蔵庫に食材が有るのはびびったな。一瞬腐ってるかと思

ったぜ。」

そう今朝一番びっくりしたのは冷蔵庫に食材があったことだ。奴……、介入しすぎ……。なんて思った俺は悪くないだろう……。

「さて、今日の天気はと……。」

そうやってテレビを点けると朝のニュース番組で一ヶ月間の天気の情報が出ていた。さすが“樹系図ツリーダイアグラムの設計者”、精確だな。

まだ竜王ドラゴン・プレスの殺息なる厨二全開な名前の魔術に打ち落とされてないからな。小萌先生涙目だ……。

「だがあれが壊れないと、“量産型能力者計画（レディオノイズ計画）”も、“絶対能力者進化計画（レベル6シフト計画）”も中止にならないからな。必要悪だと思ってくれ、アレイスター・クロウリ」。

もうすでに空気中に漂っている滞空回線アンダーライン……、ナノマシンによって聞かれているだろうからもうべらべらと喋る。原作介入は暗部に入れば楽に出来るからな。生臭いのは嫌いだが……。

「さて、学校に行くか……。色々面倒だが……。」

そうやって俺は寮を出た。

……

「ええ、今日から風紀委員の都合で転校生がいます。」

「なんたらしようごか、なんたらそうごだったか忘れたが、とある科  
学で出てきた優男先生に紹介されて壇上の前に入る俺。もうお気付  
きの方もいるだろうが、初春と佐天と同じクラスだ。これなんてテ  
ンプレ？」

「…………お約束もしたところで自己紹介するか…………。」

「天馬中から転校してきた近衛戸隠だ。能力は空間移動、レベルは  
大能力（レベル4）だ。よろしく頼む。」

「ざわざわ…………。」

「おい、レベル4だってよ。」

「しかも空間移動だ。すげーな。」

「ああ…………。」

「格好い。」

「そうかな？可愛いんじゃない？」

「やはり騒がしくなるか。一介の公立中学にレベル4がいるとは思え

んからな。無理もないだろう。しかし可愛いつてなんだ可愛いつて……。おれ泣くぞ？

「皆さん静かにしてください。」

えーっと、それじゃ近衛くんは佐天さんの隣の空いている席に座ってください。」

先生の注意が飛んだが一向に静かならない。先生も諦めたようだ。どうやら原作よりフランクな先生らしい。

「（……………駄目だる先生として……………。」

俺はそう思いながら佐天の隣に座る。佐天は苦笑い状態だ。

「それでは一時間目は近衛君のシステムスキャン身体測定なので自習です。見学は自由です。」

先生から指示が飛ぶ。なんだかなんでも有りらしい。俺はそう思いながらグラウンドに向かった。

……………

俺は現在ハンマー投げのグラウンドのような場所に立っている。周りにはクラス全員のギャラリーが。テレポーターの身体測定なんか

つまらんと思うんだが。因みにこの世界では天馬中はまだ能力測定が行われておらず、身体測定しないまま転校したのでここです…、という設定になっている。

「それでは測定始めます。」

俺は昨日白井のを見て完成させたテレポートを多少出力を押さえて発動する。所謂ボソソジャンプの偽装だよ。横にある錘に手を触れると錘は音もなくその場から消える。  
ドスンッ！！

それは遙か離れた………と言っても八十メートル程の場所に落ちる。

『誤差 49センチ 能力レベル 4』

「おおおお！！！」

機械から測定結果が話される。どうやら調節は上手くいったようだ。しかしギャラリー五月蠅いな。

「それでは教室に戻ってください。」

先生の指示が飛び、生徒達がわらわらと教室に戻っていく。俺もそれに続き、教室に戻る。

………

ある部屋の一角、そこに白井黒子がいた。彼女はある部屋……、  
一七七支部のパソコンに向かって何か調べものをしているようだ。

「彼は何者なんですの……？初春も佐天さんもお姉様もあまり気  
になさっていないようですが、いくら風紀委員の都合でも簡単に転  
校が出来るわけ有りませんわ。」

どうやら彼女が調べているものとは近衛戸隠らしい。彼女は物凄い  
スピードで三台のパソコンのモニターをスクロールしていく。

「くっ……！流石に一般公開のサイトや資料にはこれといったも  
のは載っていませんでしたわね。ですが……。」

「書庫バンクならば……。」

彼女は初春がいつも打ち込んでいる書庫バンク閲覧のパスワードを打ち込  
む。

書庫……全ての学園都市の能力開発を行った生徒、先生のデータ  
がある学園都市直轄のデータベース。彼女はそれにアクセスする。

「近衛……、近衛……、有りましたわ。えっと、  
近衛戸隠。柵川中一年、能力はレポート。レベルは4。風紀委員  
に所属しており、一七七支部に転属。チャイルドエラーなので家族  
構成はなし……、チャイルドエラーですって？」

彼女は近衛戸隠の経歴を知り、驚愕するが、今は近衛のあの時の言  
葉が気になっていた。

「経歴に別段おかしい所は有りませんの……。しかしあの銀行事

件の『……………くるな……………』という発言。どうとんでも事件の発生を知っているようでした。」

彼女は深く深くまで考え込むがある結論に至る。

「彼についてはまだ不確定事項が多すぎますしここは観察しましょう。」

彼女はそついいながらパソコンをシャットアウトする。

「さて、帰りますわ。」

そして彼女は部屋から出ていく。

……………

俺は現在第七学区の街中を歩いている。風紀委員に挨拶しに行ったんだが、誰もいなかった。だから今日やることを前倒しにしていると思う。

「(さて……………目的の人物は……………つと)……………いたいた。」

まず最初の予定、土御門に接触してあわよくばアレイスター・クロウリーに接触。

俺は予定を確認し、前から歩いてくる土御門元春にすれ違いざまに、



「……………魔術師。暗部……………」

とつぶやく。

「っ……………！！！！」

土御門は少し歩いた後に此方に思い切り振り向く。

「貴様……………、何処まで知っている……………」

「にゃーにゃー言わないんすね。土御門先輩？」

「……………貴様……………」

俺が挑発すると益々凄んでくる土御門。もうちょい挑発するか……………。

「あまり凄まないでくださいよ。舞夏ちゃんがどうなっても良いんでしたら……………ね？」

「なっ！！貴様、舞夏をどうした！！」

俺がそういうと激昂して掴み掛かってくる土御門。これだからシスコンは……………。

「大丈夫です。此方の要件を飲んでくれるなら……………、ね？」

「……………わかった。飲もう。その要件はなんだ？魔術師や暗部、俺の事を引き合いに出したところ、その関係なんだろ？」

俺の提案にあっさり折れてくれる土御門。よくも悪くもシスコンだからなこの人。まあこれで要件を楽に言えるな。

「ええ、俺をアレイスター・クロウリーに会わせて下さい。」

.....

今俺はドーム状の窓のない、扉のない建物の前にいる。改めて見ると異様だよな、この建物。

「俺はここで待っている。行くなら勝手に行ってこい。」

土御門が投げやりという。冗談が過ぎたか.....。

「アンタの妹には何もしていない。安心しろ。」

俺はそういいながらボソソジャンプを使う。

「不思議な奴だにやー.....。」

後には土御門の呟きが漏れた。

.....

俺が中に入ると、生体ポットの中で逆さ釣りに浮かんでいるアレイスター・クロウリーがいた。女とも男とも、子供とも老人とも、聖人とも囚人ともとれる姿の奴は正直不気味だ。

「おや、お客かい？土御門以外がここに来るとは思わなかったがね。」

中性的な気持ち悪い声を聞き流しながら俺はアレイスターに言う。

「俺が此処に来ることは分かっていただろうに……、この空気中に漂っているナノマシンによってな。」

「ほう……、その存在まで知っているのか。」

アレイスターは依然として無表情で言う。

「ああ、それでアレイスター……。お前は俺の能力について知っているだろう？」

「……<sup>ジ・エンド</sup>完成のことか。」

やはり知っていたか……。知る経緯はわからんが大方奴の情報操作だろ。

「やはり知っていたか……。……まあ、いい。俺はそんな事を言いに来たんじゃないんでね。」

「ほう……、ならば？」

「気付いてんだろ？俺を暗部に入れる。」

「……………」

俺はアレイスターに自分から言う。そうすれば此方に不利な条件が付けられるがその方が動きやすいときもあるからな。

「分かった。君を暗部に登録しよう。普通はこんなことはしないんだがね。条件なんかはなしにしてやろう。」

「そうか、ならばそれでいい。俺の連絡先はお前から見える場所に置いておく。仕事があれば連絡してくれ。じゃあな。」

俺はそついいながらボソソジャンプをする。言質がとれたんなら此処に長居する必要は無いからな。

そして俺はドーム状の建物から離脱する。

……………

「土御門……………」

「その様子だと同僚になったようだな。」

俺がドームから戻ると先程いた場所に土御門が立っていた。

「ああ、そつだ。これからよろしく頼むよ、多角スパイクん。」

「っ……………！！！！そこまで知っていたか……………」

「俺にはわからんことはないさ。取り敢えずこれから一緒に仕事をする事もあるだろう。電話番号交換しようぜ。」

「……………ああ、そつだな。」

未だ驚いている土御門の携帯をひったくり携帯番号を交換する。

「じゃあ、これからやる事があるんでね。じゃあな。」

俺はまだやる事があったので直ぐにボソソジャンプで学生寮の自分の部屋まで戻る。

……………

「やはりあつたか……………」

自宅に戻り、段ボールを漁っていると目的の物を見つける。それは、

「学園都市でも使えるコミュニケとIFS対応のパソコン。どうせ奴の事だ、これで遺跡のデータベースなんかにつなげられるようになってんだろ。」

なるものだった。俺はコミュニケーションをズボンのポケットに、IFSは机におく。端から見りゃただのデスクトップパソコンだからな。

「さてと、まずは金だな。」

生活にはやはり金が必要だし、武器を買うにも必要だ。暗部には借りは作りたくないからだがな。

「銀行にハッキングかけて俺の口座の預金通帳の金額かえるか。」

俺はガラステーブルの上に置いてあった銀行のカードやらと、学園都市発行の住民票みたいなカードを見ながらIFSに手を当てる。すると俺の体にナノマシンによる回路が至るところに現れる。脳内にはウィンドウが大量に乱立している。

「……………よし、これで俺の有り金は百億だな。」

終わったときには俺の口座の金はあり得ない金額になっていたが気にしない。

「……………さて次は“異常”<sup>アブノーマル</sup>だな。」

俺は引き続きIFSに手を置いて遺跡のデータベースからアブノーマルのデータを引き出す。

「……………ちつ。閲覧は出来るが、完成で自分の物にはできんようだな……………自分でアクセスするか……………」

しかし、アブノーマルのデータは閲覧するのは出来たが、自分で完成させるのは無理だった。どうやら自分の脳でアクセスしてからデ

「タをインストールして完成させるしかないようだ。黒神めだかも流石にこれは出来ないだろう。IFSもナノマシンもないし……。」

「……いや黒神めだかはそれすらも完成させそうだな。戯言だけど……。」

俺はぶつぶつ呟きながら脳内で遺跡にアクセスする。やはりIFSよりも大分繋がるのが遅いが。

「見つけた……、「骨折り指切り（ベストペイン）」のも、「<sup>クリ</sup>創<sup>エイト</sup>帝」のアブノーマルは要らないな。「完成があるし……、「欲しいのは“狭き門”と“枯れた樹海”の位だな。殺人衝動はラストカーペットのアブノーマルだが俺が欲しいのは暗器使いだだけだ。一応保険として殺人衝動も入れとくけど……。ラビットラビリンズの骨格変化は技能だしなかなか使えそうだから入れとくか。あとは声帯変化位だな。」

俺は欲しいアブノーマルとついでに技能も見つけたので、早速インストールする。

「インストールっと……、ぐっ?! うううう……ああああ! ! !」しかし途端に頭に鈍器で何百回と殴られたかのような痛みが走る。恐らく人のアブノーマルを見ていないのに完成させようとして、余りの情報量にシナプスがパンクしたからだろう。現に脳内で『情報量過多!! ナノマシンシナプス回路強制断裂!』なんてアラートが飛び回っているぐらいだ。

「ぐううううう……、……終わったか。終われば呆気ないな。ってギヤアアアア! ! !」

しかしインストールと完成が終了すると、途端に痛みが引く。しかし次は“狭き門”<sup>フレイム・オブ・インクス</sup>の電波による情報や感情が流れ込んできて、も『情報量過多！！ナノマシンシナプス回路強制断裂！』とアラートが鳴り響く。

「（……………あれ無限ループ？）」

俺は地獄のような予想を余所に、電波による情報を限られたものにする。これがオリジナルと“完成”<sup>ジ・エンド</sup>の差である。

「（オリジナルにはできんからな、これ。）」

俺は目当てのアップノーマルをインストールしたので、銀行カードと携帯を持ち、部屋を出る。武器を調達するためだ。

……………

俺は現在デパートに来ている。右手にはアタッシュケースを持ち、中には金が詰まっている。姿は声帯変化と骨格変化によりダイナマイトボディの金髪美人のものに変えてある。正直下衆の視線がうざい。特に胸にいく視線がうざいです。

「（よし、いくか……………。）」

俺はその視線を引きつれたまま、デパートに入る。しかしデパートに入った瞬間に視線は全て外れて、俺は誰からも注目されなくなる。認識障害の技能もあの後インストールしてよかった、と思う俺だっ



た。

.....

俺はデパートの端にある清掃室の前にいた。その清掃室にいるのは“<sup>デパート</sup>雑貨稼業”。メールで教えて貰った所だ。因みに殺しても構わな  
いらしい。

ガチャー！！

「いらっしやい……、おや綺麗なお姉さんだね。何かようかい？」  
俺が入ると、そこはバーのような作りになっており、その店長で  
あるう優男がバーカウンターにいた。部屋を見渡すと、窓の近くに  
中学生であるう女が三人、鎖で手首を吊されていた。

「あら、上手だね。」

因みに今のは俺である。声は水樹奈々さんの声を脳内変換していた  
できればよいだろう。咄嗟に出来た声帯変化がこれだから仕方ない。

「いやいや、ホントにいい女ですよあなたは。それで？今日はどの  
ようなご用件で？」

優男は俺に鍵をみせながら言う。

「そうね、武器を見せてもらえる？」

「武器だね。どのような種類で？」

「銃器でもなんでも良いわ。」

「そうか、ならついてきな。」

俺がそういうと、男は手招きしながらバーカウンターの隣にある扉に向かう。そこに行けば、

「あら、凄いわね。」

「うちはどのようなお客様のニーズに応えられる、をモットーにしていますから。」

銃器……手の中にすっぽりと収まるハンドガンから対戦車ライフル、ロケットランチャーまで、さらにマニア垂涎ものの骨董品が所狭しと並べられており、他の棚にはナックルや日本刀、鈍器など近接武器が幾百と並べられている。

「確かにこれならどんな客でも対応できるわね。」

「そうですね。それではどれをお買い求めで？」

俺はハンドガンが並べられている棚に行き、一つ手に取る。後ろでは男がニヤニヤ笑いながら俺が持つアタッシュケースを見ている。

「そうね、全て……かしら？」

「……………はあ？」

俺は男の質問を返す。男は意味がわからなかったようで呆けている。

「あなたの命と引き替えにね？」

「はっ?!」

パンツ!…!

「ぐううううう……………、て、てめえ……………」

俺はその隙に男を殺して、武器を“全て”服の中に仕込む。

「ごめんよ。俺も生きていけないとだからな。」

俺は自分の手を見る。自分の手が血に塗れている気がしたが、不思議と罪悪感を感じなかった。

「（はあ……………、殺人衝動は消した筈だが……………。ミスったか？）」

原因がよくわからんがどうやら殺人衝動が残っていたようだ。理不尽に殺したくなるものでは無いようだ。

「（これもオリジナルと完成の差か？笑えねーな。）」

俺はニヒルに笑いながら土御門に電話をする。ツーコール後に土御門が出る。

「あー、もしもし？近衛だ。『デパート雑貨稼業』殺しちまったから回収し

てくれ。」

「なっ……………！お前殺したのか？」

「お前が殺しても良いつつたんだろ？何ひびってんだ。」

「あ、ああ。そうだな。他に欲しいものはあるか？」

「ああ、そうだな、フリーサイズの女物の服を三つな。ここ売春もしてた見てくだからよ。」

「……………そうか、わかった。女の構成員連れて行く。」

「お気遣いども。」

俺は土御門との会話を終えて、バーカウンターの方に行く。棚には武器の類は一つも無かった。

……………

俺はバーカウンターの裏側を物色する。これから役にたつものがあるかもしれないからな。

「おっ、学園都市製の最新バイクか。おっ！Z？のもあるな。貰ってくか。」

俺はまずバイクのキーを2つ手に入れて、ポケットのなかに入れる。  
……なんか俺こそドロだな。

「あとは第七学区にある高級マンションの鍵か。隠れ家ように貰うとくか。……………あとはいらんな。」

俺は粗方見繕った後、吊り下げられている女のところに行く。

「あ……………うあ……………」

「（ひでーな、目が死んでやがる。まだ処女のあたり売られてはいねーだろうけど、精神的に追い詰められているな。）」

俺は此処にあった人身売買の紙資料を見る。

「（今までに売られてきた奴は……………、三人か……………。思ったよりすくねーな。でこいつらの名前は……………、花巻香奈に大垣小夜、飯島奈美……………、か。データはと……………」

俺は紙媒体で名前を確認した後、パソコンにUSBを差し込み、全てのデータをコピーしたあと、パソコンを破壊する。その流れで、鎖も日本刀で切り、三人を解放する。

「あ……………、ありがとう……………」  
すると、女……………、花巻にお礼を言われる。

「別に大したことじゃねーよ。俺は悪だが誇りある悪なもんでな。売春が許せなかっただけだ。」

俺は声帯変化を解いた後、骨格変化も解く。

「「「お、男ーっ！！！！？？？？」」」」

その瞬間、目が虚ろだった三人の目に光が戻る。

「う、うるせーな！！お前らさつき迄元気無かったじゃねーか！！」

俺は声を荒げて言う。

「だって、ねえ？」

「びつくりしますよう、普通。」

「あ、あの！それってなんて能力何ですか！！？？」

大方かえってくる答えは予想していたが、まさか俺が男なのよりも能力かどうかを聞いてくるやつがいるとは思わなかった。確か名前は飯島奈美。こいつは俺の中では変人に部類されてしまった。

「これは能力じゃなくて技能だ。訓練すりゃ誰でも出来る。」

「ほえええ……………、凄いですね！！」

しかしそれにも律儀に返してしまう俺って……………。

「なーに、全裸の女の子三人とイチヤイチャしてるんだにや？近衛？」

そんなとき、土御門が女の構成員を数人連れて入ってくる。

「まあ、成り行きだ……。それとサンキュー、土御門。」

「まあ、いいが……。本来ここを潰すのは俺の役割だったんだが代わりにやってもらったんだからな。……それよりその子らはどうするつもりだ？」

土御門は構成員によって服を着せて貰った三人を指差す。

「曲がりなりにも裏世界を知ったんだから、普通の世界じゃ生きていけないだろ。権利書は俺が持つてるから俺が引き取る。そんな顔すんなよ、慰みものにはしないさ。俺の直属の部下にする。良いだろ？」

「まあいいが……。アレイスターになんて説明すりゃ良いんだ？」

「ファイトだ。」

土御門にデータを手渡しながら言う。土御門は何も言わなくてもわかったようでそれを受け取る。

「それじゃ、その流れでいいな？三人とも？」

土御門との話が終わったので三人に聞くと、三人とも首を縦に振る。

「まあ、私たちはチャイルドエラーだからね。失う物は何にもないよ。だから狙われたんだと思うけど。」

代表で花巻がそういう。なるほどね、チャイルドエラーか。

「そうか、なら俺たちは家族だ。俺もチャイルドエラーだからな。」

血は繋がってないがな。」

俺がそういうと、三人は嬉しそうに首を縦に振る。

「じゃ、そういうわけで先にここに行ってくれ。そこにいる構成員に言えば連れていってくれるから。俺は後で行く。」

そっぴいなながら花巻に高級マンションの鍵を渡す。

「分かったわ。」

……あつ、そっぴえば自己紹介していなかったね。私は花巻香奈。よろしくねご主人様？」

「私は大垣小夜。宜しくご主人様。」

「わ、私は飯島奈美です。宜しくお願いします、ご主人様！！」

「俺は近衛戸隠だ。宜しく。それとご主人様じゃなくていい。俺たちは家族だからな。」

俺は三人を見送りながら言う。

「じゃ、宜しく頼む。」

三人を構成員に押しつける。三人は何か言いたげだったが無視をした。

「ふう、とりあえず目的達成か。」



俺がそついいながらバーを見渡すと、わなわなと肩を震わせた土御門がいた。

「めんどくなる前に帰るか。」

俺はバイクを取りに行くためにボソソジャンプで駐車場までいく。

「近衛えええ!!!」

土御門の叫び声が聞こえた気がするが気のせいだろう。

.....

俺はある高級マンションの一室にいる。寮には一日しか住んでいないが学校側が特例として引っ越しを許してくれた。

「（絶対アレイスター何かしたな。）」

なんて思いながら俺は今日も色々あつて疲れたので、ベッドな飛び込む。因みに三人には一つずつ部屋があり、名字も同じ近衛になっている。アレイスター余計なことを……。しかし三人は学校には通わない。いつでも意味ないからか。家で色々と学んでいらおう。裏の事について。

「さて、疲れたから寝るか。」

明日こそは風紀委員に挨拶に行こうと決意しながら……。

禁書目録と幻想殺しと魔術師と聖人と……、って……！多すぎるわ馬鹿野郎

はい、ついにあの方々の登場です

「おはよー。」

「ちいーす。」

今俺は柵川中迄の道を歩いている。時間帯は、7月18日の朝。原作開始の二日前、つまり終業式の前日だ。俺はヘッドホンをかけて音楽を聞いている。勿論身体中に暗器を隠し持っているが。

「（戯言シリーズの“一喰い（イーティングワン）”を試しにインストールしてみたが、失敗したな。作者繋がりでいけると思ったんだが。）」

実は今朝学校まで時間が余ったので、戯言シリーズの哀川潤や面影真心、匂宮出夢を完成させれるかしたが敢えなく失敗。つまり戯言、人間シリーズの能力は使えなかった。

「（超能力もインストールしようとしたが、痛い思いをせんでも此処ではサンプルなんて大量にあるしな……………。）」

その後色々な超能力を完成させようと思ったが、止めた。痛いのが嫌だし。

俺がそうやってブラブラ歩いていると、

「おーい、近衛ー。」

「近衛さーん。」

後ろから初春と佐天が走ってくる。あまり会いたくないんだがな。

「ああ、初春と佐天か……。おはよう。」

「おっはよー!!」

「おはようございます。」

「初春はまだ他人行儀だな。どれ、親睦を深めるためにスカート捲つてやるうか？」

俺が初春にそういうと佐天は引き気味に顔を引きつらせ、初春は顔を真っ赤にする。

「……………セクハラだよ、近衛……………」

「佐天さんと同じこと言わないでください!!それにセクハラですよ!!」

二人に攻められた。なんでだ……………。

「まあ、近衛のセクハラは置いといて……………」

「置いておけませんよ!!」

「まあまあ初春、落ち着け」

「誰のせいでこうなったと思ってるんですか!!」

「えっ?佐天だろ?」

……………まさかの責任転嫁!?じゃなくてあまりセリフ被せないで!!

……………じゃなくて近衛、今日なんで寮に行ったときいなかったの?」

初春と俺によるセリフ被せにより佐天が混乱するが用件を言う。あ



「良いんですか!?!」

………前言撤回。この剣幕はろくな事が起こらない気がする。不幸だーっと叫ぶ羽目になる。

「あ、ああ………良いが。」

「やったー!!」

でも二人の嬉しそうな笑顔を見ているとそんな気も薄れてくる。そうやって和みながらふと目の端に移った塔を見たら、

「つつ………!!」

戦慄が走った。

「?????………どっしたの?」

佐天が俺の剣幕に気付き、聞いてくる。

「悪い佐天!先生には学校サボるって言っといてくれ。」

しかし俺は一刻も早くあの塔に向かいたかったのでそんな返事になる。

「ちゃんと昼までには帰るから、一七七支部で待っていてくれ。」

「えっ?!ちょっと………!!」

俺は佐天の声には関心を示さず、ボソソジャンプする。俺の目には

赤髪神父とエロ剣士が映っていた。

「人払いくらい掛けとけよ。魔術師!!」

俺は一気に塔の天辺までボソソジャンプした。

.....

俺は塔の天辺の展望台の屋根に着地した。目の前には赤髪神父、ス  
テイル、マグヌスとエロ剣士、神裂火織がいた。

「.....君は誰だい？ここを突き止めるとは並みの人間じゃない  
ようだけど。」

まずステイルが話し掛けてくる。てかお前十四歳だろ？タバコ吸う  
んじゃないねえ。

「俺はこの学園都市の一介の生徒だよ。」

「.....でも並みの人間じゃない。貴方からは異様な力を感じますが  
？」

俺が飄々と返すと神裂が七天七刀を構えながらにじり寄ってくる。

「それは剣士としての勘か？それとも.....」

..... 聖人としての勘か？または.....  
プリエステス  
女教皇としての勘か？」



「っ……………！！！貴方はどこまで知っているんですか……………！！！」

神裂の柄を持つ手が更に握り締められる。

「さあね。俺としては小さい女の子の記憶を消すために追い掛け回す下衆に話す事は無いんだが？」

「……………。」

俺の言葉に啞然とする二人。なぜそこまで知っているのか……………って顔だな。

「えーっと、何て言ったっけ……………。あつ、インデックス禁書目録か。十万三千冊の魔導書を記憶している少女。その子の日常の記憶を消すんだよね？命を守るために…………。」

日常の記憶を消さなくても死ぬことは無いことを教えても良いが、それじゃあ“ツリーダイアグラム樹系図の設計者”が墜ちないからな。何度も言っただけだ。

「……………貴方は……………！！！」

ギリギリと聞こえるぐらい音を立てて歯ぎしりする神裂。

「知っているさ、お前が友達を裏切って敵側に回ってまで叶えたい悲願だな、それが。」

「君はどこまで知っているんだい？」

俺がそういいながら手をブランとする。その瞬間俺の手に日本刀が現れる。

「そうだね。君たちが“必要悪の教会”<sup>ネセザリウス</sup>の人間で、イギリス清教、<sup>アイクビシヨツテ</sup>最大主教ローラ・スチュアートの命により、禁書目録の記憶消去を命じられた炎の魔術師と天草十字清教の女教皇であり聖人であると言うことくらいかな？」

俺が肩に日本刀を担ぎながら言う。

「殆ど全てじゃないか……。」

俺の返答にコートのなかから何かを取り出そうとする。

「ああ、そうともいうね。それとやめときな。此处ではルーンは使えんよ。」

「くっ……!!」

俺の忠告に悔しそうに顔を歪めるステイル。その前に神裂が出る。

「ステイル、このものは私が相手をします。」

神裂は七天七刀に手をかける。

「おっと、俺が知ってるのはアンタ等の身の上を知っているだけじゃねーぜ。闘い方も知ってる。七閃だろ？それと……、唯閃。」

「っ……!!!貴方はナニモノのですか？」

俺がそういうと神裂は七天七刀にかけた手の力を弱めて怯えながら言う。

「さあ、ね。俺はナニモノ何だろうな？まあそんな事はどうでもいいんだ。そろそろ時間だしな。」

「どういう事ですか？」

「野暮用だよ。それに俺がなにものだろうと俺は俺だ。」

……それと魔術師。おまえらに忠告だ。ちゃんと考えて行動しないと、一生後悔する事になるぜ？じゃあな。」

俺はもうそろそろ昼だし、話すのが面倒になったのでボソソジャンプを発動する。

「……………」

後には何か思案顔で俯く神裂がいた。

……………

「ふう、ついたな。今は11時か……………。まあもう居るだろ二人とも。」

ピーガチャ！

俺は一七七支部のドアの前にある機械にカードを差し込み、ドアを開ける。

「うーす。」

俺が入ると奥の談話室のような所から初春、佐天さらには白井と御坂が出てくる。横のデスクからは眼鏡の巨乳が出てくる。この人が固法先輩とやらか……。ふむ。

「……………でかいな……………」

何がかは推して知るべし。

バキッ！

「アンタは何考えてんのよ！！！」

俺が固法先輩の立派な胸を見ながら呟くと、御坂から拳骨が飛ぶ。

「何って……ナニだが？おや？御坂さんジェラシーですか？」

俺が御坂にニヤニヤしながら言うと御坂は顔を真っ赤にしながら手で胸を覆う。件の固法先輩は呆れている。何回も言われたことあんだな。

「ア、アンタねー！！！」

「はいはい、あなたたちそこまでにしなさい。話が続かないわ。」

御坂がバチバチ額から電撃を放ちながら近づいてくると、固法先輩が止める。大人だな。

俺たちは固法先輩に止められた後談話室にいる三人のもとに行き挨拶する。

「うーす。」

「こんにちはー、じゃないわよ。近衛朝からセクハラ発言しすぎよ。こんなキャラだったの？」

「そつだが？」

佐天がなかなか失礼なこと言ってくるので開き直ってやった。

「はあ、もっとましな人だと思ってました。」

あ！朝といえはなんでサボったんですか？先生に説明するの大変だったんですよ！

「どういう事ですか？風紀委員としてあるまじき行為ですね。」

すると次は初春と白井から非難が。君ら非難するの好きね。

「まあそれは仕方がない。変態ロリコン神父とエロ剣士がいたんだからよ。」

誰とは言わない。どうせ言ってもわからんだろっつから。

「?????.....まあいいわ。それじゃ、辞令出してくれない？」

やはり全員ばかんとしてるが初春の一言で全員が納得する。初春なんて言った。

俺は固法先輩に催促されて制服の胸ポケットから辞令を取り出す。

「……………はい、確認できました。これから宜しくね近衛くん。私は固法美偉。よろしく。」

「よろしくお願いします。固法先輩。」

固法先輩が辞令を確認し、手を出してくるので握手する。

「それで？今日アンタの家に連れてってくれるんでしょ？」

俺と固法先輩が自己紹介が終わったとき御坂がジト目で見ながら聞いてくる。

「ああ、だが昼からは多少用事があるんでな。夕方からにしてほしいんだが。大丈夫、常盤台の門限迄には終わらせるから。」

俺がそういうと御坂はしょうがないなー何ていいながら首を縦に振る。後ろの三人もどうやら良いらしい。

「じゃあな、俺は用事を終わらせてくるわ。」

「ええ、早く帰ってきなさいよ。」

俺の話が終わったところでドアに向かう。御坂がなんか言ってるが思いの外早く終わるだろう。禁書と不幸少年を探すだけだからな。

「わーってるよ。」

俺はドアに向かったにも関わらず空間移動で外に出る。

シュンッ!!

俺は一七七支部の前に降り立つ。

「さーって先ずは不幸少年を探すか……………」

その後第七学区を歩く。ふと電工掲示板を見るとすいぽんの新曲の  
宣伝が流れていた。

「……………あれがにゃーにゃー言う変態に降りるのか……………。世も末だ  
な。」

くつくつと笑いながら俺は主に自販機周辺を探す。不幸少年は自販  
機前で「不幸だー!!!」なんて今のように……………。……………もう  
エンカウント  
遭遇?

「早いな。展開が……………」

俺は苦笑いしながらそちらに近づくと頭を抱えて不幸だー!!と叫  
んでいる痛い…………、いや不幸な少年がいた。我らが主人公、上条当  
麻だ。

「不幸だちくしょー!!!」

「……………」

近付きにくいな……。あれには……。しかし近付かないと話が進まないな……。気も進まんが……。

「……………寒ッ……………！」

俺は自分のおやしじギャグに自爆しながら上条さんに近付く。

「失礼だが、そこを退いてくれんか？」

「……………えっ？でもこの自販機壊れてんぞ？」

「大丈夫だ。」

俺は上条さんを少し離れた所に行ってもらい、能力発動が見えないようにする。そして500円を入れる振りをしながら発電能力を使い、自販機を中から掌握する。勿論警備ロボに見つからないようにしながらな。

ピー……………。

「よし、出てきたな。」

微弱な電撃と遺跡のバックアップの演算により警備ロボの警告にも引っ掛からずに自販機から二千円が出てくる。

「（今どき二千円かよ……………。）」

俺は二千円札を持ちながら苦笑していると、

「ああー！！俺の金！！！！サンキュー！！」



上条さんが俺を見下ろしながら言う。俺の身体は中1ながらも同年代では背が高いが、上条さんはさすが高校生。俺よりも若干高い。

「ああ、まあそれは良いさ。だが二千円札はあまり関心せんがな。」

「すまん……。あっ、そうだ。俺の名前は上条当麻。俺の生活を助けて貰ったからな。何かの縁だ、友達になろうぜ。」

「……………」

まさか上条さんから言ってくるとは……。俺から言おうと思っっていたんだがこれは好都合だな。

「ん？どうした？」

「……………ん、ああ何でもない。よろしく頼むよ上条さん。俺は近衛戸隠だ。因みに中学一年だから戸隠と呼び捨てで呼んでも良いんだからなっ……！」

「なっ……!!お前中学生だったのかよ。つか何でツンデレ?!……不覚にも萌えたじゃねーかよ。女顔だし……………」

俺は上条さんと自己紹介しあった後、ツンデレをかましてやる。案の定俺が女顔……、しかも初春曰く格好いい系の美形なので萌えてくれた。……………自分で言っけて悲しくなってきた。

「（と、取り敢えず印象付けは成功だな！次はメアドだ！）」

何だか恋する乙女のようなノリになってしまったが生憎と俺にそん

な特殊な性癖はない！断じてない！！俺は佐天が好きだからな！！

「……………自爆したああああ！！！！」

「うお！！黙ったかと思っただら次はいきなり叫びだす！上条さんは結構ドキドキ何ですがー！？」

俺の急の怒濤の叫びに上条さんが良い具合にテンパる。……………いや、話し進まんしダメじゃん……………。

俺たちが落ち着くのに15分掛かった。

「取り敢えずメアド交換しようぜ。何かと便利だろ？」

「ああそうだな。」

俺が携帯に偽装させたコミュニケを出すと、上条さんも原作で水に落ちたり、叩きつけられたり、液晶が破壊されまくっても動き続けた謂わば相棒とも言える携帯を取りだす。既にボロボロであったのを見て、上条さんの日頃の不幸が鑑みえているようだ。

「……………よし、登録完了。改めてよろしく頼むよ上条さん。」

「ああ、此方こそよろしくな。それと俺のことは当麻でいい。俺はそんな事気にしないからな！」

そういつてニカツ！と笑う上条さん、もとい当麻。

「（何でこんな良い奴が不幸なのかねえ……………。世知辛いな神様も

……。」

俺も……いや、当麻が神様の劇的な変化を求めるあまりの被害者とは限らんが、神様の被害者だからな。上条の気持ちもわからんでもない。共通点を感じるが、少し違ふところがあるな。

「（不幸のための捌け口……、当麻は不幸故の親切、明るさ。俺は背徳……か。」

俺は自分の今のたち位置を鑑みて苦笑いする。

「どうしたんだ？」

「いや、何でもない。考え事だ。」

「何でもあんじゃねーか。まあ深くは聞かない。」

「……………あんがとよ。」

当麻の優しさにやはり神様への背徳と疑念を感じざるをえない。

「じゃ、俺は帰るな戸隠。それとこれ、金を取ってもらったお礼だ。」

当麻が手渡してきた物はアイスコーヒー。

「有難い。頂戴するよ。」

俺はそれを受け取り微笑む。

「お、おうー！じゃあな。」

「?……じゃあな。」

当麻は何故か顔を赤くしながら足早に自販機の前から去っていく。  
何故だ……。

俺は当麻の態度を考えながら次の目的を探すためその場を離れる。

……

俺が自販機から離れて30分程たったとき、俺の目の端にティーカツプのような金刺繍が施しがしてある服を着た少女が横切る。早い話禁書目録だ。

「みーつけ。」

俺は舌なめずりしながらその方を見る。端から見たら只の変態だろう。俺は即座にボソソジャンプを発動する。

「やあ、禁書目録。」

「つつ……！！！」

「そんなに怖がるなよ。俺は魔術師でも“必要悪の教会”ネセサリウスの人間でもなく、ちよつと特殊な只の能力者何だからよ。」

「只の能力者は魔術師もネセサリウスも知らないかも。」

「もつともだ。」

インデックスは俺が目の前に立つと警戒したようで二、三步離れた場所に立つ。因みにこの場所は路地裏。俺はインデックスに逃げられないように、“空間歪曲場”ディストーション・フィールドを展開し俺達二人を物理的に閉じ込める。

「あなたはナニモノ？どうして私を狙うの？」

インデックスが警戒心バリバリで聞いてくる。歩く協会があるからつて、あの二人どんな攻撃したんだよ。完璧人間不審だろ、怪しい人間限定で。………当たり前か。

「別に狙いなんてないさ。読んで心が穢れる魔導書なんていらねーし、読んでも使えねーよ。」

まあ実際は能力云々とかじゃなくて、単に魔力があるかどうかかわらんから使わないだけだ。神の存在を知ってる分、疑念は有れど、普通の魔術師に比べりゃ信仰はしやすいだろうから、魔力があれば使えるだろう。能力データを遺跡にプールすれば頭んなかのデータは消えるからな。俺に“自分だけの現実”パーソナル・リアリティはあつてないようなもんだし。脳がショートする事も有るまい。完成は恐らく使えないから自分で体得するしかないがな。

「なら何しに？」

「可愛い侵入者に挨拶さ。」

「か、可愛い!?!」  
インデックスがまだ警戒心バリバリで聞いてくるが、俺の一言に顔を赤くする。

「(しかし俺もつらつらとよく嘘が吐けるもんだ。舌先三寸口八丁立てば嘔吐き座れば詐欺師歩く姿は詭道主義ってか? 戯言だねえ。

)」

俺はデイスティション・フィールドを解除しながら言う。

「俺の名前は近衛戸隠だ。よろしくな。」

「このえ……、うん分かった。このえだね。私はインデックスだよ。」

「ああ知ってる。それじゃインデックス。頑張って逃げろよ。」

「うん!じゃあね。」

俺はインデックスに自己紹介をして路地裏で道を開けてやる。インデックスはそのままピューッと走り去っていく。保護?んなもんするかよ。当麻ん所行つて貰わんと話が進まんからな。

「まっ、何とかなんだろ。えっと今何時だ?」

俺は携帯を見る。今は未だ3時。買い物するには早いし、家に帰るのももっと早い。

「後、接触する人間いたか? いない気がするな……。」

俺は次々と原作キャラを思い浮べる。  
青髪ピアス……接触する意味が無い。  
土御門舞夏……でこは見たいが兄貴に殺されんな。  
麦野沈里……俺はヤンデレは好みでは無いので却下。  
一方通行……まだ死にたくないよ……。  
シスターズ妹達……接触する意味が無い。  
ローラ・スチュアート……接触したいが物理的に無理。ボソソジャ  
ンプしても良いけど時間かかるよな。

「無いっばいな。後は物語が進めば嫌でも接触できるしな。」  
俺は思考を中断して歩きだす。路地を出ればそこは街並みだった。  
………当たり前か………。

「さて、これからどうするかだな。技能か異常か能力でもインスト  
ールするか？」

俺は辺りを見回す。特にこれといって能力が飛びあっている訳では  
ない。

「つまんねーな。能力のサンプルがとれやしねー。」

キヨロキヨロと見てみるがやはり能力行使する人間はいなかった。

「レベルアップ幻想御手のデータでも採っとくか？何かにも使えるかもしれねーし。」

俺は一路インターネットが使えるオープンカフェへと歩を進めた。  
勿論ボソソジャンプで自宅からIFS対応のデスクトップパソコン

と共に後日見つかったIFS対応のノートパソコンを転移させるのは忘れない。

.....

オープンカフェに着き席に座りコーヒーを頼む。ランを偽装のため繋げていざとキーボードを叩く。

「さて、レベルアップはと。.....あつたあつた。見つかるのが早いな。取り敢えず保存しといて家で解析だな。」

思いの外早くに見つかったレベルアップを保存し、一息つく。次に技能なんかを会得するためだ。体を休めないで死ぬからな。疲労で。

「.....よし。遺跡へ接続つと。」

俺が遺跡へアクセスすると脳内に沢山のウィンドウが現れる。

「（何かねーかな。技能じゃ音遣いなんかは面白そうだな。後はピッキング技能に曲弦系。サイコメトリーはラビットラビリンスの受信感応がありやいいいな。取り敢えずこんなもんか。）」

俺はその中から必要なものを選びインストールする。未だにこの際の頭痛は慣れないが顔に出さない程度には痛みを抑えられるようになった。



「（後はインデックスが記憶している十万三千冊の魔道書でも記憶しとくか。心が穢れるなんてことはインデックスに言ったようにはならんだろうし、対魔術師には必要だな。どれ、いっちょ頑張ってみますか。）」

俺はその後十万三千冊の魔道書を記憶する。やはり情報量が多いためか先程の様に頭が痛いのが心が穢れるなんて事はない。発狂なんて持ってた他だ。

「（くっ……………！！キツかった……………！！）」

俺は十万三千冊の魔道書を記憶して、ナノマシンシナプスに電気信号として記録したあと、超能力用のナノマシンシナプスから切り離す。これで脳はショートなんてしないし魔道書のシナプスは独立して所謂図書館のようになったのでいつでもデータを引き出せる。

「（ふう……………。しかし俺には魔力はあるのか？天使の力が感じられるということは魔力はあるのか？）」

俺は自分の手を見ながらそう思う。

「（魔力があんならもしかしたら聖人の力を完成させられるかも知れねーな。あれだって異常だ。）」

未だに馳せぬ思いに心踊らせていると既に時間が四時になっていた。

「取り敢えず魔術は後回しだ。物語が進むにつれて力を増やせれば増やしていこう。」

俺はそう結論付けて今日の夕食の材料を買いにスーパーへと向かう。

「何を作るかな。夏だし涼しいもんにするか……………」。

俺はノートパソコンをたたみ、偽装ランを切った後にレジで会計をしてカフェの外に出る。

そして俺は近くのスーパーに向かった。

……………

「ただいまーと……………」。

「お帰り〜。」「」

俺が玄関を開けてリビングに入るとなにやら書類を見ていた三人が書類を見たまま返事をする。

「何見てんだ？」

俺はどつやら色々書きこんである書類を一枚手に取る。内容は暗部のものだった。

「成る程ね。俺が言っていた事してたのか。」

「そだよ〜。」「」

俺が昨日、今朝に言っていたことを早速実行しているようだ。

「でもね〜……………」

「どうした？」

俺が他の書類を見ていると香奈が所謂ゲンドウポーズをしながら溜め息をつく。

「武器が無いんだよね……………、私たち。」

「そうね。裏の仕事をしようにも武器がなけりや意味が無いわ。この家射撃訓練場があるけど得物がなけりや無用の長物よ。」

「そうですよう。」

どうやら武器が欲しいようだ。確かにそれはいるよな。バックアップ要員にしても第一線で戦う奴でも取り敢えず武器はいるよな。

「なんだ武器の心配か。ならば問題ない。」

俺はそういった後ありとあらゆる所から銃器を取り出す。ハンドガン、マシンガン、アサルトライフル、スナイパーライフル…あらゆる銃器を出す。中には妹達シスターズが使っていた対戦車ライフル、メタルイーターも目につく。

「……………あの？」

「ん？どうした？好きなを選んで良いんだぞ？他の奴には触らせませんがお前等は家族だからな。つくづく俺も家族には甘いよな。自

分の得物をやるなんて。」

はっはっはっ！！！なんて高笑いする俺。まあ正直武器にはなんの執着は無いがな。

「…………いや、家族と認めてくれるのも身内に甘いのも嬉しいんだけど…………。」

「なんだ煮え切らないな。不満があれば言ってみろ。お兄ちゃんが望みのものを取ってきてやる。」

何か言いたげな香奈にそういう。あれ？俺ってこんな性格だった？…………ああ、義理でも家族が嬉しかったんだな。

「……………どこからだしたの？それ……………」

「ウウンウン。」

香奈が言ったのは突飛なことでも奇異でも異常でもない普通な疑問だった。

「……………ん、服から、かな？暗器遣いは極めればこの領域まで到達できるのさ。」

俺の完成や技能、異常について言っても三人は理解できんだろうし何より俺が三人に嫌われたくない。折角できた家族なんだから。

「……………そういう事にしとくよ。それと私たち中三だからお兄ちゃんはないよ。」

香奈は俺には何かある事を見抜いて何も言わなかった。ごめんな、チキンな兄貴で。

「まあ劇的で良いじゃないか。それに年下はお兄ちゃんと呼ばれたものなのさ。」

「まあ良いけどさ、お兄ちゃん。」

「そうね、この人になんて言っても意味ないもの。一日過ごしただけで分かるわ。ね？お兄ちゃん。」

「私のお兄ちゃんはお兄ちゃんだけですよう。」

俺がそういうと三人は俺のことをお兄ちゃんと呼んでくれる。嬉し過ぎるぞ！

「あっ……、今日は客が来るんだった。資料は片付けといてくれ。武器は射撃訓練場の隣の武器庫にいれとくから自由に使ってくれ。欲しいのがあるなら好きにとっていきな。」

「そうなんだ。ならおもてなししないかね。」

「私は掃除する。」

「私は食材の下ごしらえをしてくるよ。」

俺が今し方思い出した事を言うと、三人は迅速にリビングの大テーブルの上の資料を片付けて、それぞれの得意分野をし始める。どうやら俺がいない間に決めていたようだ。香奈がオールラウンダーで小夜が掃除専門、奈美が料理専門だ。小夜は掃除機を押入から取出

し掃除する。引越しの荷物は既に片付け終わったようだ。そして奈美は俺が買ってきた食材をキッチンに持っていく。

「俺はコーヒーでも入れるか。」

俺がコーヒー好きとしてかアレイスターが世界中のコーヒーをワインや紅茶と共に大量に送り付けてきた。ワインセラーやらがあったから保存には困らないが……。

俺はコーヒー豆をいくつか選んで挽く。その後にコーヒーを淹れる。

「こっちは掃除終わったよ。」

「私も終わりました。」

俺が倉庫（コーヒー豆や茶葉が保存されている）からリビングに行くと小夜と奈美がそれぞれの持ち場から出てくる。キッチンからはいい匂いが漂ってくる。

「もう料理は出来たのか？掃除も……。」

「ええ、終了してるわ。」

「終わりましたよう。簡単だったからすぐに出来ちゃった。後は盛り付けだけ。」

今の時刻は6時半。ちょうどいい時間帯だ。しかし香奈も含めて三人はがちで凄い。正直料理は出来るが掃除やはからっきしだから俺。

ピンポン！

どうやら来たようだ。部屋番号はもうすでに教えてあるからな。

「入っていいぞー。」

俺はインターホンから四人にいい、鍵を開ける。さて楽しみだ。

.....

大分飛ばすが今は12時。もうすでに三人は眠っている。なぜ飛ばしたか？特に特筆すべき事が起きていないからだ。冒頭のフラグは駄フラグだと言うことだ。だが強いてあげるなら、三人の同居人に四人が驚いたり、（白井は訝しげだった。恐らくバンクで俺のことを調べたからだろう。妙に勘繰り深いからなあいつ。）奈美のカルボナーラがめっちゃめっちゃ旨かったり（AD堀くん風）ぐらいだ。

「明日から暫くは何もないな。『デパート雑貨稼業』の討伐の依頼でもこなすかな。」

俺は明日からの事を思い浮べながら床に着いた。

キャラ設定 (近衛戸隠編) (前書き)

言わずもがなキャラ設定です。まだ出て来ていない設定が有りますので見ないほうがよろしいです。専ら作者用なので。



## キャラ設定（近衛戸隠編）

名前：近衛戸隠このえとがくれ

能力：なし

異常：完成ジ・エンド

性別：男

容姿：一言で言って女顔。可愛い系所謂シヨタではなく綺麗系美人。……男なのにな。髪の毛はセミロングで黒色。

いつでも眠たそうに目を半目に閉じている。ヘッドホンを常に常備。性格：残酷非道で嘔吐き、殺人衝動無しでも罪悪感無しで人が殺せる。理由は身の上の欄で。しかし身内には甘く、三人の義妹は何よりも大切にする。天上天下唯我独尊という言葉がよく似合う。めざす人は哀川潤。

身の上：神様が日常の劇的を求めたときに被害にあつた哀れな主人公。遺跡の管理人の生体データと数千というナノマシンを元に創られたので聖人顔負けの身体能力を持つ。さらに遺跡の管理人の所謂クローンなので遺跡にアクセスできるので未来以外の全ての事象を閲覧できる。ナノマシンの力により脳内に無限のシナプスが出来ており演算速度は遺跡もバックアップに使うと、“ツリーダイアグラム”を越える。禁書の世界に跳ばされたときの身の上は空間移動能力者でチャイルドエラージャッジメント。風紀委員でありながら暗部所属という不安定な位置にいる。

異常：完成ジ・エンド

あらゆる異常、能力、技能を完成させる異常。完成されたそれらはオリジナルが十全に扱えるなら、完成は十二分以上で扱える。

獲得スキル

殺人衝動 完成により完成させた異常。全ての事象が殺人に結び付く異常だが、完成によりオン・オフが出来るようになる。しかし近衛自信殺人衝動の塊なのであっても無くても変わらない。

受信感応 完成により完成させた異常。人の感情や感覚、神経伝達、電子機器の電波などを電気信号に置き換えて感知することが出来る。正直下手なサイコメトリーより性格。オン・オフが出来ないが完成により範囲と受信内容を選択出来るようになった。

暗器遣い 技能の一種。身体中、服の何処にでも武器を隠している。その数は数千はくだらない。銃器から剣や鈍器、糸など多種多様の武器がある。因みに最も大きな武器は狼牙棒と対戦車ライフルのメタルイーター改（勝手に改造した。戦車を三台いっぺんに貫通できるが反動がデカ過ぎるため現在は近衛のみ使用可能。）

音遣い そのまんま。声や楽器の音により人の精神を操る。受信感応を平行して使えば効果は絶大。

骨格変化 そのまんま。骨格を意図的に外したり移動させて別人になります。正直これは異常認定でも可笑しくない精度。

声帯変化 声を変える。それだけ。

ピッキング 完成により指紋認証迄ならピッキング可能。網膜認証と静脈認証は無理。

認識阻害 意図的に人の視線を自分から別のもの、人に移させる。心理学の応用。

曲弦系 系による攻撃。ジグザグを思い浮べよう。

能力 大方の超能力を使える。特筆すべき事ではない。

魔術 テレスマ 天使の力を感じることが出来るので魔術を使える。テレスマ 神の存在を知り、神に創られたものなので、内包する魔力や天使の力は常軌を逸して、全知全能の神、ゼウスの加護がついている。また十萬三千冊の魔道書の知識と遺跡の知識のお陰で劣化宝具や劣化神具、霊装を創れる。さらに聖人の力はナノマシンの身体強化とゼウスの加護、  
完成によりフルパワーで使える。因みに本人は気が付いていない。

その他

愛車はZ?、描写には出てきてないがGT500、マツハ1、コブラ?。前世で無免許運転でしょっぴかれたが運転技術は一流。学園都市製の銃器は多数所持しているが、学園都市の外のある筋の人たちより買った銃の方が好き。学園都市の銃弾も使えるように改造はする。因みに一番好きな銃はS&W-M19（次元大介の愛銃）とCZ75。他にも多数所持。

幕間 暗部での活動と原作開始秒読み (前書き)

今回は本気でネタも思い付かず原作でも上条さんVS御坂の戦闘だけだったので介入する必要が無いため近衛くんの土台固めにしました。

読まなくてもさほど本編に影響は有りませんので悪しからず……。

## 幕間 暗部での活動と原作開始秒読み

7月19日。夏休み前日であり、原作開始の日でもある今日、俺のマンションの一室、射撃訓練場では銃声が鳴り響いていた。

「ふう……………」

俺は溜め息をつきながらヘッドホンとゴーグルの位置を直して、手に持つCZ75のマガジンを取り出し、腰にある空マガジンを取る。その中に学園都市製の銃弾ではなく、9ミリパラベラムを十五発装填して、マガジンをセットする。ダブルアクションなのでそのまま前方にある的に狙いを付けて引き金を引く。

バンツ！！カランカラン……………」

空薬狹が飛び出して床を跳ねる。

そのまま十四発を打ち込んで終了にする。俺は射撃訓練場から出てリビングに入る。現在の時刻は十時半。学校は既に終了している。まあ終業式だけだからな。昼飯には多少早い時間帯だ。俺がパソコンを開けると一件のメールが秘匿回線で届いていた。メールの相手は土御門。恐らく…………、いや十二分に仕事だろう。

「（メールの内容はと……………」

俺はメールを広げる。

From 土御門

件名：仕事

本文：学園都市内の“デパート雑貨稼業”と“マネージメント人材派遣”が合同で学園都市にデメリットな事を行っている。彼らのアジトを殲滅せよ。

俺はメールを見終わった後、今来ている服を確認する。暗器の数は数百、替えのきく量産品ばかりだ。ただメタルイーター改という特注品もなかには含まれている。

俺はそれを確認し終わった後に家の鍵を持ち、家から出る。因みに今回の仕事に三人はいない。朝から遊びにいつているのだ。

俺がエレベーターから降りるとマンションの前に一台のバンが止まっていた。中に入ると土御門と一人、女の構成員が座っていた。

「今回の仕事は楽だな。わざわざ死にいく奴らの背中を後押しするだけだからな。死神稼業ってな。」

俺の台詞に反応する奴はいなかった。

「つまんねーの。」

俺はそう呟きヘッドホンをつけて音楽を聴く。

.....

俺は雑貨稼業と人材派遣がいる一つのビルを見る。5階建てのビル全てが奴らのアジトだ。

「どうすんのよ、あれ。蛇大佐みたいにスニーキングでもするか？」

「蛇大佐？……まあいい。普通は色々と策を弄するんだが、今回はお前がいるからな。派手にいく。」

「おいおい、人任せかよ。」

「俺も戦う。」

俺は土御門と話ながら、ビルの図面を見る。

「一階がロビーに応接室、二階から五階まで全部に商品か。地下には……成る程車か。」

「ああ、ここは裏でも大手だからな。だがそれでアレイスターに目を付けられた。」

土御門が笑いながら言う。ホントこいつ裏と表の性格がちげーな。

「分かった。策もなしに突貫、てわけね。」

俺は手にメタルイーター改を取り出す。

「……………どっから出した……………」

「暗器遣いにその質問は無粋だよ。」

俺はメタルイーター改を構えてスコープを覗く。流石にスナイプは片手ではできんからな。今いる位置はビルから七百メートル離れた

ビルの屋上。俺がメタルイーターを出した時点で土御門は既に動きだしている。

「入り口の前に二人か。狙い打つぜ。」

パン！パン！

俺は片方に狙いをつけて引き金を引く。弾丸は音速を軽く越えて敵の頭に吸い込まれる。さらにもう一人を狙い打ち、土御門が堂々とは中にはいる。俺はメタルイーターを戻した後、太刀を二本取り出して、ボソソジャンプをする。土御門の横に降り立ち、一階の敵を切りにいく。

「な、何だお前ら………うわああああ。」

俺は早速出てきた雑魚を斬り、太刀を戻し、その手にマックイレブンを出し、乱射する。

ガガガガガガ！！

それにより俺の前にいた敵は一掃させる。土御門は他の部屋に入っていた。一階は土御門が一掃するだろうから俺は二階に行くか。

「さて、二階から上は武器が多いらしいから銃器は止めるか。」

俺はマックイレブンと太刀をしまい、両手に刃渡り五十センチの既製ナイフとは呼べないナイフを手を持つ。

「さあ、行くぜ。刺殺しにな。」



俺は手始めに一番自分に近い部屋の扉を開ける。中には五人敵がいたが全員首をかききり殺す。

「くつくつ、恨むなよ。恨むなら俺じゃなくてナイフを恨め。ナイフがお前等を殺したんだからな。」

俺は直ぐに他の部屋に入り、同じようにする。騒ぎを聞きつけ廊下に出てきた奴も三階から五階にいる奴も同じナイフで同じ場所をかききり殺す。終わった頃には辺りは死体の血と肉とよくわからない色をした液体と死臭によつて満たされていた。殲滅に掛かった時間は二十五分。

俺はくつくつとまた笑いだす。

「気持ち悪いにやー……………」

「ああ？別にこれくらい普通だろ？」

「普通じゃない気がするぜよ……………」

「にやーにやーうるせーな。斬り殺すぞ？」

そんな様子をみて言う土御門。さらにそれにナイフを突き付けながら、笑う俺。……………ホント荒んでんな、俺。殺人衝動きりわすれたか？

「それよりも車見に行こうぜ？掘り出し物があるかもしれん。」

俺は武器庫に転がっていたガトリングとロケットランチャーを服にしまい、他にも武器を見繕って服にしまう。ホント便利だ、暗器遣い。

「ああ、そうだな。」

土御門は俺に言われたからか、にやーにやー言うのを止めた。分かりやすっー！！

俺は苦笑しながら地下に向かう。

.....

地下の駐車場にあつた車は殆どが学園都市外のものだった。土御門は価値がわからんようだがこれはヤバイ。どうやって手に入れたんだ？あいつら。

「GT500にM-1（マツハ1）、F40か。マニア涇ものだな。」

「そんなに凄いのか？」

「F40に至つては億超え确实だな。」

「なっ.....！！」

土御門が予想外の値段に啞然とする。おもれー顔だな。

「まあ、これと武器は貰つていいよな？他のはやるからよ。」

「……………何も残っていないぞ。まあいいが……………」

土御門の許可が出たので、ここにある十台程の車を呼び出した構成員に運ばせる。武器は後で自分で運ぼうか。

「じゃあな、報酬はいらんから土御門で貰っとけ。」

「……………サンキュ。」

俺は土御門にそういった後、武器庫の武器を全て回収した後、ボンジャンプでマンションに戻る。

「硝煙くせえ……………」

俺はマンションにて初めて自分が硝煙臭い事に気付く。まあさつきまでマツクイレブン乱射してたからな。仕方がないっちゃあ仕方がない。

しかし血や肉片なんかは完璧ついていない。硝煙抜きにすれば先程まで殺人してたなんて誰も気付かないだろうな。

「……………人殺しなんて俺、変わったな。死んだら地獄も天国も嫌だな。続きがありや終われない。」

俺は殺人の罪悪感なんざ感じる人間じゃないからな。戯言だったら零崎確定だ。まあ、人間なんて脆いものだよな。わざわざ死ぬために産まれてきてんだから。

「……………今日の俺は饒舌と言うか、お喋りだな。読者サービスってか

「？」

俺は服から武器を全てだして、倉庫に入れる。実はここは俺たちの住んでいるフロアではない。俺の住んでるマンションは二十五階建てで最上階は全て俺の家。一万平米。有り得ない広さであるが、そこは学園都市クオリティと言うことだ。まあそんな家だから倉庫は広いわけだけどこその馬鹿のせいでコーヒーと紅茶で倉庫が溢れていて武器が収められない。だから下の階を全て買い取って武器庫や生活備品の予備の倉庫、射撃訓練場にしたわけだ。暗部に頼んでみたら一日足らずでこのクオリティ。暗部チートだわ。

俺は武器等を入れ終えたあと、二十五階に行き、シャワーを浴びるためバスルームに行く。

「はあ、前世では考えられん生活だよな。これ……………」

俺は服を脱ぎ洗濯機に入れてそう呟く。俺はバスルームに入り、早速シャワーを浴びる。

「……………それにしても腹へった……………」

俺は先程からくくく鳴っている腹を押さえる。そこ…！可愛い音だな……………、なんて思った奴出てこい！！メタルイーターでバラバラにしてやるよ…！

「……………シャワー浴び終わったら飯作るか。」

俺はそついいながらシャワーを止める。そしてバスタオルで身体を拭きながらバスルームを出る。

「何作るかな……………、ありあわせでいいな。」

俺は冷蔵庫のなかから野菜を取り出して野菜炒めを作り、炊飯ジャーからご飯をよそう。

「いただきます……………」。

俺は一人で食べ初めてテレビをつける。テレビではタリさんがゲストと喋っていた。

「はあ、今日は当麻と御坂の戦闘か。下手に止めると当麻とインデックスが会いませんでした、なんて展開になるからな。今日は家から出ないでおこう。」

俺は今日は家から出ない事を決意し、飯を食ったあと早速睡眠のため寝室に行く。昨日は銃の改造に忙しかったからな。眠たいんだ。今日のこの話はこれで終了だ。おやすみ。

## 炎の魔術師と魔女狩りの王（前書き）

はい、こんにちわ。戯言です。

今回から原作街道まっしぐらです。今回の話は若干エロありのものです。批判、絶賛、疑問何でも受けけるので、どんどん感想を送ってください。

## 炎の魔術師と魔女狩りの王

はい、毎度お馴染みの近衛戸隠だ。今日は7月20日。つまり原作開始日であり夏休みだ。今現在の時刻は1時半位。で俺はどこにいるかと言つと、

「私と一緒に地獄までついてきてくれる？」

とある高校の学生寮の屋上だ。下ではインデックスが清掃ロボットに帽子を吸い取られたと思い、右往左往している。馬鹿だな、あいつ。

「さて、と……………。インデックスの数少ない名言を聞いたところで家に帰るか……………」

俺はボソソジャンプを発動して第七学区の街並に出る。

……………

街を歩いていると、前方で、

「違つんやっつて、バニーはロリが似合つんやなくてロリがバニーに似合つんや。つまりロリは何着ても似合つんやー!」

「そつやっつてロリ最強説を建てるんじゃないぜよ。バニーという至

高の品がわからんなら死んだほうがいいぜよ。」

エセ関西弁とエセ土佐弁が往来の場でロリがなんちゃらと騒いでいた。あいつら補習じゃないのかよ……。こんなところで油売っていいのか？

「まあ、俺の知ったことじゃねーし、あいつらに絡んで俺まで馬鹿認定されたら目もあてらんねーな。此処は無視だ。」

信号が青なのに横断歩道も渡らさずぎゃーぎゃー騒いでいる馬鹿どもを尻目に俺は歩きだす。

「馬鹿だなあいつら……………」

最強は黒髪ロングの天真爛漫かキリツと凜という文字が似合う長髪ポニーテールか唯我独尊お姉さんだつこの。

俺も馬鹿の一人だった。と言うか自分の好みのタイプを言っていて、佐天とシグナム姐さんと哀川潤が出てきて焦った。三人中二人はフイクションだが、意外に多いな……………、俺の好み……………。

「まあ、神裂はパスだな。当麻にやろつ。」

俺はウンウン頷きながら、ヘッドホンをつけて音楽を流しながら歩く。歩いていると、見慣れた花飾りが前方を歩いていた。俺はそいつの背後に近づき、後ろから抱きつく。

「初春。」



「ひゃああああ！近衛さん！いきなり抱きつかないください！」

「いきなりじゃなけりゃいいのか？」

「そういつわけじゃ在りません！風紀委員呼びますよ！！」

初春に後ろから抱きつき、耳元で囁くと、初春は予想以上に怒りながら言う。……いや、おれ風紀委員だし。

「まあまあ、気にすんなって。ただ目についたから抱きついただけだ。他意はない。」

「なおさら質が悪いですよ……………」

初春はげんなりしながら言う。俺は初春の頭に手をおき撫でる。

「じゃあな、いい胸だったぜ！！」

「近衛さんの馬鹿ああア！！」

俺は初春のパンチを避けて、なっはっは、と笑いながらボソソジャンプで自宅に転移する。後には顔を赤くしはあはあ、と息をきらせている初春がいた。

……………

俺は家に戻ったあと直ぐに二十四階の射撃訓練場に行く。今日は暗部の仕事はねーからな。気楽だ。

「それにしても、詰め込みすぎてなにがなんだか分かんねーな。」

俺は射撃訓練場の横にある武器庫を見ながら呟く。剣も刀も銃も爆弾も何もかもがごちゃ混ぜに置いてある。

「整理するかな……。いや吹寄でなく……。」

「……………寒いな。」

俺は自分のオヤジギャグに自爆しながら武器に手を付ける。……………

…あれ？デジャヴ？

「はあ、萎える……………。今度にしよう……………。」

しかしそれも長続きしなくて、止めてしまっ。

「はあ……………暇だ。」

俺はそっぴいながら近くにあったパイソンを手に取り、武器庫を出る。その後射撃訓練場に入り、弾丸を確かめた後、ハンマーを起こして、的に狙いを定めて撃つ。

ダァン！！

銃声が鳴り響き、俺のからだ揺れる。

「やべえ、いいな……これ。」

予想外にいい銃だった。パイソンを見ながらニヤニヤ笑う俺。端からみたら変人だな。

「まあ、取り敢えずこれくらいにしとくか。」

一発撃ったあとに全ての弾を撃ち終えて射撃訓練場を出る。匂いを嗅いだら硝煙臭かったのでバスルームに向かう。

「さて、さくつとシャワー浴びて今日の夕方の為に備えるか。」

俺はそういいながらバスルームの戸を開ける。

「ふんふんふーん ああ……きもちよか……っ……た……。……  
……なんで？」

「……………わりい。」

そこには香奈が真っ裸の状態でした。……………死亡フラグKtKr。

「どうしたの……………、義理だからって家族はだめだよ……………」

「違っ……………！！誤解だ！！」

「この状況で誤解とは見苦しいです。」

さらには奈美と小夜まで表れて、ヤヴァイ状況に……………。死亡フラグ乱立だぜ！！

ジャキツ！！！

「その凶悪な銃はメタルイーター何処から出したんでせう？」

「戸隠お得意の暗器だよ。」

俺が冷や汗たらたらで引きつった笑いをしてると、後ろから香奈にメタルイーターを突き付けられる。

「（てか怒りで暗器遣いを修得しただと……！連邦のモビルスーツは化け物か……！）あの……、許してもらえたりとかは……。」  
俺は一縷の望みにかけてなんとかにこやかに爽やかに気に掛けないように笑う。

「ないに決まってるじゃん」

あっ……、死亡フラグ回収おつ……ブッン！！

……

「はっ……！！知らない……じゃなくて知ってる天井だ……。」

俺は自分のベッドで目が覚める。何故ベッドにいるかが甚だ疑問であるが、まあ気にしたらダメなんだろう。身体を起こすとふと左脇

腹が痛む。俺は何でか？と左脇腹を触ろうとして左手をベッドに付くと、

ふによん

と柔らかい手触りのものに手を置く。……………何故かイラッとする音だな。

「何だこれ？」

俺はそれが気になり、再度触る。

ふによふによ

「あつ……………うん……………ああ……………！」

「何で喘ぎ声か……………」

俺はその原因が気になり、左側の布団を捲る。

「ぶつ……………！！！！！！」

「あ、あん……………！戸隠え……………」

そこには顔を赤くし悶えている香奈がいた。しかも真っ裸で。よく見りゃ俺もパンツしか履いてなかった。

「（ちよつ……………！！俺の記憶が無い間になにがあった！！まさか俺は義理とはいえ香奈と……………。確かに香奈は可愛いが……………、って違う！！！！）」

俺は焦って自分のとシーツを見る。

「ん……………、ああ……………！」

「はう……………うう……………！」

しかしそんな時に背後と足元から声が聞こえる。

「ま、まさか……………！！！」

俺は一気に布団を取り払う。其処には真っ裸の奈美と、同じく真っ裸の小夜がいた。

「……………なんでさ……………。」

赤い弓兵の口癖を言ってしまったっても仕方がないだろう。真っ裸の女の子三人と寝ていたんだから。

「あはは……………、どつきり……………大成功…………………………ぐう。」

俺がガラにもなく顔を赤くしていると香奈が寝返りを打って寝言を言う。

……………どつきり？

「……………おい香奈……………。」

ギユウー！！

「イタタタタター！！何すん……………のよ……………。」

俺の目の前には怯えて涙目の香奈が。恐らく俺の形相と、頬をつねっている痛みによるものだろう。

「……………おい。……………お前は何をしているんだ？」

「えっと……………」

「……………答える。」

「寝起きどつきりです。……………てへっ」

俺が香奈に何でこんなことをしたのか聞くと香奈は汗だらだらながらも舌を出して可愛く言っ。

ブチン！！

「ちよっとお話しようか……………？」

俺の堪忍袋の尾が切れた。これは仕方ないだろう。俺は人を弄るのは好きだが弄られるのは嫌いなんだ。生粋のDSだからな。

「ちよっ……………！ちよっと待って！！あれは戸隠も悪くて……………」

「ああん？」

「……………何もありません……………」

俺はぐだぐだ言っていた香奈を黙らせて首根っこを掴んで部屋を出る。

「でも……。戸隠は家族には甘いんだよね？ならこんなのしないよね？」

香奈が一縷の望みをかけてくだいだ言い始める。俺はそれに冷たい見下げる目をして香奈を見る。

「家族に甘いという事は同時に家族に人一倍厳しいって事だよ。」

俺はニヤニヤ笑いながら言う。ぜってえ俺悪人の顔だ。もうすでに悪人だが。

「い、いやああああー!!」

「くっくっく……。」

そして俺のマンションに香奈の悲鳴が響き渡る。

.....

「で？反省したか？」

俺の目の前には正座している香奈と、後から起きて来た小夜と奈美が同じく正座している。因みに三人とも服は来ている。

「でも……。戸隠が……。気付かないで……。」



「ああん？」

「……………すみません。」

俺は香奈を漕んだ後、はあ、と短く溜め息をつく。

「まあ、俺も悪かったけど問答無用でメタルイーターで昏倒させた拳げ句、どつきりはダメだろうよ。」

「……………ごめんなさい。」

俺の言葉に香奈がシユンとする。俺はばつが悪くなりしがしと頭をかく。

「……………ああもう。家族なんだからこんな辛気臭い事は嫌だな！  
！もうやめようや。許してやるからよ。でも今度からはすんなよ。」

俺の言葉にはあーつと明るくなる。俺はその後時間を確認する。まだ四時のようだ。当麻VSステイルはまだだな。俺がまだ時間が有るのでテレビを見ようとソファに行こうとすると

「あの……………。」

香奈がへたりこんだまま俺の腕を掴む。……………なんか構図的に捨てられた女と自己中な男の昼ドラ見てるみたいだ。

「なんだ？」

「また今度……………、一緒に寝ていい？」

「……………ああ、いいぞ。」

香奈の言葉に一瞬思考がフリーズしかけた。……………いつの間にフラグを立てた？

「じゃあ私も。」

「私もですう。」

「ああ〜！！私だけなんだから！」

香奈の提案に二人も乗り、さっきまでの静かな空間は無くなり、何時も通りの明るい家になる。

「……………いいな、家族って。」

俺は不覚にもそうやって思ってしまった。恐らくこれが俺の本心で本性なんだろう。初めてアレイスターの事を尊敬したぜ。

「わかったわかった。三人とも寝てやるから。」

言い方が卑猥な響きを醸し出しているが他意はない。……………多分。

「女誑し。」

「変態。」

「節操なし。」

「ぐはっ!」

三人の争いを止めようとしたのにこの扱い。酷いんじゃないか？

「しゃーねーな。もう行くか……………」

俺はまるで掃除するからあっちに行ってなさいと奥さんから言われる奴みたいにかから出ていく。

「……………このストレス。ぜってえステイルで晴らしてやる。」

今ここにステイルを平和のために倒すと俺は誓った。( 只の八つ当たりとも言っ)

……………

「いたいた……………。おうおう、ホントに血塗れだ。神裂鬼だな。いくら“歩く教会”が有るからって……………、そーいや当麻が壊したんだな。あのラッキースケベめ、なかなかやるな。」

俺は当麻が帰ってくる少し前に当麻の住む学生寮に来てインデックスの様子を見ている。インデックスは背中をバツサリ斬られて虫の息だ。周りには清掃ロボ。インデックスゴミ扱いとは泣けるな。ステイルの姿は先程から魔力反応はあるが、姿自体が見えねー。まあ俺は奴らの正体知ってるからな。襲ってこないのは当たり前か。

「おつ、当麻が帰ってきたか。」

俺が今いる位置、屋上から下を覗くと当麻が呑気に歩きながら学生寮のエレベーターに乗るのが見えた。

「……………そろそろか。」

俺は原作介入しやすいように当麻が住んでいるフロアの二つ上の階にボソソジャンプする。

「……………はあ。」

帰ってくるなりインデックス（血塗れ）をみて溜め息をつく当麻。当麻には血は見えてないからな。そして今からそんな事気にならなくなるぐらい奇天烈な事が起こるぞ、と俺は心のなかで当麻に言うておく。間違っても今当麻の前に出るなんてしない。面白くないから。何事も劇的じゃねーとな。

「……………あ?……………」

当麻がインデックスが血塗れであることに気づき、素っ頓狂な声を上げる。

「（人死にが掛かっているのに落ち着いて劇的を望むなんてそれこそ奴ら（神）と同じだな）」

俺はそれを見て、自己嫌悪でくつくつと笑う。目の端では三機の清掃ロボがインデックスの血を掃除せんと動いている。まあその毒牙はインデックスの傷にもものびているがな。

「や、……………める。やめろっ！！くそ！！」

それを見て当麻が激昂し、清掃ロボを剥がす。あわやインデックスの傷に清掃ロボが行くことは無かった。当麻は清掃ロボを退けた後叫ぶ。……………なんか羨ましいな、なんて思ってしまっくらの叫びだった。

「何だよ、一体なんだよこれは！ふざけやがって、一体どこのどいつにやられたんだ、お前！」

「うん？僕達“魔術師”だけど？」

当麻の叫びに背後からステイルが何を言ってるんだお前、みたいな感じで話し掛ける。……………ステイルマジで哀れだ。汚れ役を否応なしにやらされるんだからな。

当麻はステイルの魔術師という別次元の代物に圧される。

「……………ここから漸く物語が始まる。」

俺は影で見ながらそう呟く。シニカルに笑いながらのその台詞はかなり悪役ぽかっただろうな。まあ実際俺は悪役なわけだけど。

俺は呟いた後ボソソジャンプでもっと二人の近くに行く。二人はまだ話しているようだ。

「神裂が斬ったって話は聞いたけど……………、まあ。血の跡がないから安心安心とは思ってたんだけどねえ。」

「……………嘘つけ。歩く教会が壊れたから、敢えて斬ったんじやねーかよ。」

清掃ロボを見ながらウンウン頷くステイルに馬鹿野郎と呟いて当麻の方を見る。

「……………、ばっかやろう。」

当麻はインデックスの方を俯いて、見て、呟く。

「ばっかやろうが!!」

そして当麻は叫ぶ。それは歓喜でも歓声でもない悲痛で感極まった叫びだった。それにステイル、勿論俺は圧倒された。

「なんで、だよ？」

当麻はそのまま怒気を孕んだ目でステイルを見る。

「何でだよ。俺は魔術なんてメルヘン信じらんねえしてめえらみてえな生き物は理解できねーよ。それでも正義と悪つてもんがあるんだろ？守る物とか、護る者があるんだろ……………？」

当麻の言葉にステイルの顔に影が一瞬射す。しかしそれも一瞬だけ。当麻は気付いていないようだった。俺は当麻の言葉に少し顔を俯かせる。頭に浮かんだのは三人と四人、さらには二人。誰かは確認するまでもないが俺はやはり三人が最初に頭に浮かんだ。

「（正義と悪か。それは一概には区別出来ないものだ。勇者と魔王がいて、普通は勇者の行いが世論に支持されて、“正義”になる。だが魔王側としてはそれは悪になり、魔王の行いは“正義”となる。正義と悪の違いは紙一重で決して反対語じゃない。）」

俺は正義と悪について考えたのちに当麻の方を見ながら、だが……、と呟く。今日も俺は饒舌のようだ。

「（当麻はその正義と悪を自分の固定観念に当てはめず、人には人の正義と悪があると言った。それを考えるのは誰だつてできる。だが言つて行動出来るのはほんの一握り。人の考えに流されず、自分の理念により行動する。だが清濁併せ持つて物事を見て、だ。」

俺はふうと溜め息をついた後にステイルと当麻を見やる。

「……………やつぱり当麻はすげえな。」

ただそれだけ俺は呟く。それしか言えない。

当麻は俺が長々と説明足れていた間にステイルを見る。いや睨む。

「こんな小さな女の子を、寄つてたかつて追い回して、血塗れにして。これだけのリアルを前に！テメエ、まだ自分の正義を語る事が出来んのかよ！！」

「だから、血塗れにしたのは僕じゃなくて神裂なんだけどね。」

「……………いや、そういう意味じゃねーよ。」

ステイルは全く悪怖れもなく、やれやれと首を横に振る。余りの様子に影で見ている俺が突っ込んでも仕方がない。

「（……………同罪だよ。なんて低俗な事は言わねーけどな。）」

俺は苦笑いしながら、ステイル達を見る。

「もつとも、血塗れだろうが血塗れじゃなかるうが、回収するのは回収するけどね。」

「かい、しゅう？」

どうやらインデックスの身の上、体質、魔道書、教会について話しているらしかった。

「……………使える連中に連れ去られる前にこうして僕達が保護しにやってきた、って訳さ。」

スタイルはもつともな事を言っているつもりらしかったが矛盾しているのに気が付いていない。回収と保護は扱いが違うぞ。方や人の方や“物だ”。あいつ分かっていつてんのか？

「（しよせんローラ・スチュアートの狗ということか。）」

俺は折角忠告してやったのに変わっていないスタイルに幻滅する……………。

「（まあ、それは嘘だけど。人はなかなか変われないからな。あの忠告だけで変わるとは思っていない。）」

俺はニヤニヤ笑いながらスタイルと当麻を見る。

「て めえ、何様だ!!!」

当麻はスタイルに叫ぶ。俺なら俺様って言うな。……………俺はフイアンマか……………。



「ステイル」マグヌスと名乗りたいところだけど、ここはFort  
is931と言っておこうかな？」

俺はステイルの背後にいるから顔はわからんがステイル、ぜってえ  
悪人顔してるな。

「魔法名だよ、聞き慣れないかな？僕達魔術師って生き物は、何で  
も魔術を使う時には真名を名乗ってはいけないぞうだ。古い因習だ  
から僕には理解が出来ないんだけどね。」

ステイルは（多分）ニヤニヤ笑っているだろう。

「（俺は魔法名知ってるが、当麻が知るわけないだろうよ。馬鹿じ  
やねーの？それに理解が出来ねーなら名乗んな。）」

俺はそんなステイルを小馬鹿にして、戦いのため準備をする。今現  
在当麻に能力が何かとかはばれていない。つまり、

「ディストーション・フィールドの出番か。」

俺は手にディストーション・フィールドを纏わせる。うまく正常に  
作動しているようだ。俺がそれを見たあとに当麻を見ると既に当麻  
は走りだしていた。

「普通なら馬鹿の極みだが、

……………当麻だからな。」

俺が今も変わらずニヤニヤ笑い、見るとステイルがタバコを捨てて、

「Kenaz (炎よ)」

詠唱を開始していた。タバコの軌跡にあわせて炎が空中で燃える。  
正直レベル5の発火能力者パイロキネシストのが凄いがな。

当麻はそれにすぐんで足が動かなくなる。ステイルは好機と見たか、詠唱を完成させる。

「Purisasz Naupiz Gebob (巨人に苦痛の贈り物を)」

ステイルは笑いながら灼熱の炎剣を当麻に振り下ろす。辺りは閃光と熱風で包まれる。

「(しっかしいつ聞いても厨二全開な詠唱だな……。)」

俺はニヤニヤ笑いながら言う。

「やりすぎたかな？」

ステイルがなんかほざいているが当麻はそんなんじゃやられねーな。

「ご苦労様、お疲れ様、残念だったね。ま、そんな程度じゃ千回やつても勝てないって事だよ。」

「誰が、何回やつても勝てねえって？」

ニヤニヤしていたステイルの肩がびくりと震える。そして炎が晴れると五体満足な当麻がそこに立っていた。当麻は自分の右手を見る。

「ったく。そうだよ、何をビビってやがんだ

インデックスの歩く教会をぶち壊したのだって、この右手じゃねー

か。」

当麻の震えはもうすでに無くなっていた。それどころかその目には強い意志が籠もっていた。

そして当麻はステイルに近づいていく。ステイルは明らかに狼狽している。

「（……だがステイルには切り札がある。）」

俺が周りを見渡すと、もうすでにこのフロアにルーンが印刷されたコピー用紙が大量に貼られていた。

そしてステイルは不敵に笑い詠唱を始める。正直顔には焦りが見えるし、汗だらだから正直様にはなっていないが。

「世界を構築する五大元素の一つ、偉大なる始まりの火よ

それは生命を育む恵みの光にして、邪悪を罰する裁きの光なり

それは穏やかな幸福を満たすと同時、冷たき闇を滅する凍える不幸なり

その名は炎、その役は剣。

顕現せよ、我が身を喰らいて力と為せ

ッ！！」

ステイルの詠唱のあとステイルの身体から黒き炎で出来た巨大なヒトガタが現れる。その名も“魔女狩りの王”イノケンティウスルーンを破壊するまで動き続ける。ステイル最強の魔術。それをステイルは繰り出してニヤニヤ笑いだす。ホントこいつは鬼畜だ。

「邪魔だ。」

それを当麻は右手で振り払う。イノケンティウスは当麻の右手によ

り四方八方に砕け散る。しかしステイルはまだ笑ったままだ。当麻も不審に思っているらしく一步前が出る。その瞬間飛び散った破片が集まり、またヒトガタをなす。

「さすがイノケンティウス。」

俺は陰から天井や壁に貼りつけてあるコピー用紙を見る。一つ一つから魔力が噴き出しているのが分かった。

戻ったイノケンティウスは両腕を十字架に変えて当麻を肉薄する。

当麻は寸での所で受け止めるが、如何せん相手はルーンを消し去る迄動き続けるエセ不死身。

「（当麻が打ち負けるな、あのままじゃ。）」

イノケンティウスは徐々に当麻を押ししていく。俺がそれを相も変わらず陰から見ていると、インデックスの顔が動く。

「（あの目、やっぱり機械みたいだ。……………自動書記ヨハネのペン正直生け簀かねえ。まあローラ自体がうぜえんだがな。）」

インデックスは当麻にルーンについて説明をしている。正直起伏の無い声色はかなり怖いものがある。まあインデックス自体に起伏が無いけどな（胸的な意味で）

俺が陰でクスクスと笑っているとインデックスの顔がぐるん！と此方を見た。確実に俺を見ている。

「（……………怖ええええ！！）」

幸いステイルと当麻は俺に気付いてない（ステイルは気付かない振

り。(がマジで怖かった。俺の心臓はバクバクと爆発しそうだった。

「(君の瞳に困憊。……………よりも君の瞳に混乱 だな……………。)」  
確実に俺の頭はいまので狂っただろう。証拠に変な事をさつきから  
ほざきまくっている。

「……………何時もの事か…………。」  
自分で言っていて悲しくなつたが流石にステイルが詠唱を始めた所で  
戦慄が走った。まあ実際は戦慄なんて走ってないのだけれど気分の  
問題だ。

「AshToAsh(灰は灰に)」

DustToDust(塵は塵に)

Squeamish Bloody Rood(吸血殺しの紅十  
字)!!」

ステイルの両手に炎の剣が出来る。俺はそれと同時にステイル  
の背後から当麻の背後にボソソジャンプする。ステイルはイノケン  
ティウスと拮抗している当麻に飛び掛かる。

「デイスティション・フィールド!!」

「えっ!?!」

俺はデイスティション・フィールドをイノケンティウスと当麻の間  
に展開する。当麻が後ろを振り向き、素っ頓狂な声を上げるが俺は

ニヤニヤ笑いながら空いている左手で、当麻に触れる。

「俺とインデックス両方を助けられる素晴らしい作戦を見付けてこい。」

「……………あぁっ!!」

当麻は俺の言葉で意図がわかったようで力強く頷く。ホントこいつは良い奴だ。

「じゃあな、上手く着地しろよ!!」

「ちよっ、おまっ!!」

俺は当麻を一階まで投げ飛ばす。それと同時にステイルの炎剣とイノケンティウスが触れて辺りに閃光と熱風を撒き散らした。

……………

「君はあの時の……………。やはり邪魔しにきたか。」

辺りの炎がイノケンティウスに戻り、煙が晴れたさきにはやれやれと顔を顰めたステイルがいた。

「当たり前だ。なんてったって俺等は友達なんだからよ。」

「友達か……。そのわりにはなんか酷い事をしたみたいけど？」  
俺はそれに相変わらず眠そうに目を半目に行っているがニヤニヤ笑いながらステイルに言う。

「あんなの戯れあいだよ。酷いの内にも入らん。それよりも酷いのはお前だろ？そいつのためにそいつを裏切ったんだからな。」

俺がインデックスを指差しながらそう言うとステイルは尚のこと顔を顰める。

「君は本当に何でも知っているし、ずけずけと人のプライバシーに入ってくるね。」

「てめえらみたいに悪党だからな。」

俺は未だニヤニヤ笑いながら言う。ステイルはホントに嫌そうだな。なんとって顔が形容しがたいほどひんまがっている。

「君みたいな化け物と一緒にしてほしくないね。」

「……化け物ねえ。いいなそれ。響きが。それにいいえて妙だ。俺もそうやって名乗ろうかな？」

最後の足掻きと俺を罵倒したが、残念ながら化け物の自覚はあるかな。逆に誉め言葉だ。「なんだ、俺ってまだ化け物程度なんだ……。」「てね。だからそんな程度俺は気にしない。気にもしない。」

「……………ホント君はあり得ない。奈落の様に底が見えない。」

スタイルははあ、と溜め息をついていたが俺にはそんな音耳に入らなかった。

「……………奈落か。いいなそれ。よっしゃ決定、大決定。誰がなんと言おうと全決だ！」

「なっ、何がだい？」

俺の余りにも豹変ぶりにスタイルの言葉が吃る。目も丸くしていて、正直間抜けだ。

「何がって俺の二つ名だ！！！」

「二つ名あ？」

スタイルが俺の言葉に素っ頓狂な声を上げる。

「そう、二つ名！！俺の二つ名は奈落だ！！！」  
ディアスボラ

俺が声高々にさういうとスタイルははあ、と溜め息をつく。因みにイノケンティウスはスタイルの傍に携わっている。

「……………君ってこんなキャラだったんだね。もっと不敵で策士だと思っていたよ。」

「俺はいつもこんなだ。」

俺がさういうと同時に、

シリシリシリ



と火災警報が鳴り響き、スプリンクラーが作動する。どうやらこの場面は原作と変わらないらしい。目の前ではイノケンティウスがじゅーじゅーと水を蒸発させている。

「さっき迄の短い時間の中で考えたにはなかなかいい作戦だね。だけど、こんな水じゃイノケンティウスは消せない。……………、ねえ。」

ステイルは俺……………ではなく俺の後ろにいる当麻に語り掛ける。

「確かにこんなんじゃ消せるなんて思っちゃいねーよ。」

「なら……………。」

「そのリアルには程遠いそいつは消せなくても紙なら消せるんじやねーのか？」

「つつ……………!!」

当麻の言葉にステイルは苦虫を噛み潰したかのような顔をするがそれも一瞬。また同じような笑顔になる。

「だがその紙はコピー用紙だ。水にはまず溶けないよ。」

ステイルは勝ち誇ったように笑うが俺は原作を知っているので左手にディスプレイ・フィールドを纏わす。

「確かにコピー用紙は溶けねーよ。」

だがインクは溶けるんじゃないか？」

当麻がそうだった瞬間、イノケンティウスのヒトガタが崩れはじめる。

「人んちの前にベタベタこんな貼ってんじゃないよ。」

そしてイノケンティウスがほぼ無くなり、それこそ欠片しか残っていなかった。

じゅー……………

しかしその欠片すらスプリンクラーの水により消える。

「イ、イノケンティウス……………？」

スタイルが突然の事に膝から崩れる。

「てめえの負けだ。魔術師。」

「イノケンティウス……………！！！」

当麻の言葉にまるで大事な人が死んだ時のように慟哭するスタイル。

「く、くそ……………！！！」

スタイルはいきなり立ち上がり親の敵を見るような目で此方を見る。スタイルはそのまま吠えるように詠唱する。その間に俺と当麻はアイコンタクトで確認し、同時にスタイルに駆け出す。

「AshToAsh DustToDust

SqueamishBloodyRoad！（灰は灰に、塵は塵に。吸血殺しの紅十字！）。」

しかしイノケンティウスどころか炎の剣すら生まれえない。ステイルが棒立ちしているところに当麻が左から俺が右から突貫する。

「っ……………！！！！」

「うおおおおお！！！！」

「ゲエエキガン！！フレアアア！！！！」

当麻の幻想殺しと俺のゲキガン・フレアがステイルの顔面に突き刺さる。正直デイストーション・フィールドは纏わせなくても良かったかな、とステイルに同情してしまうぐらい、ステイルは綺麗に錐揉しながら飛んでいく。こうして俺&当麻VSステイルは俺たちの勝利で終わった。

## 幻想御手と脱ぎ女（前書き）

今回は禁書のイベントが無いため、禁書に多少関係してくる幻想御手について書きました。でも暫らくは上条さんはお休みです。

## 幻想御手と脱ぎ女

「それじゃあ、行って来る。」

「……いつてらっしゃい。」「」「」

こんにちわ、毎度の如く近衛戸隠だ。今日は7月21日、時刻は9時半。今日は何があるかって？今日は禁書のイベントはないので、最近ほったらかしにしていた超電磁砲の方に介入して行きたいと思う。

ピロピロピロリン

「おっ………メールだ。」

携帯がなったので開けると、送信者は当麻だった。

「インデックスは魔術で傷が治った………、か。原作通り事は進んだか。」

メールをよかつたな、と返信する。まあ、気付いた方も居ただろうが実は昨日はスタイルとの戦闘後、当麻とともに小萌先生の所にいかなかった。理由はめんどくさかったから。当麻になんで寮にいたかと聞かれたときは焦ったが、なんとか誤魔化した。まあ、インデックスの傷が治って一安心だな。

「さて、初春と佐天と待ち合わせた所に行くか。」

俺は制服に暗器が入っているのを確認したあと、制服に腕章を着け

てボソソジャンプを発動する。

.....

「おつ、今日は水色のストライプか。」

「さ、佐天さあくん!!!!!!」

俺がジャンプした場所は修羅場.....、いや佐天が初春のスカートを捲った所だった。

「（ふむ、年相応のパンツでいいな。）」

俺はウンウンと頷きながら二人に近づく。手にはノートパソコンが入ったバックを持って。

「何やってんだよ佐天。」

「あつ、近衛。」

「近衛さん、こんにちわ。」

「.....。」

俺が声を掛けると、佐天はにやけたまま、初春は顔を赤くしたまま此方を見る。.....お前ら百合か？

「すまん、お楽しみだったところを。デリカシーが無かったな。でも忠告だけさせてくれ。白昼堂々その行為はいただけないな。」

俺がそう言い、頭を下げると二人はキョトンとする。

「?.....お楽しみつてスカート捲りのこと?」

「近衛さん！私はスカート捲られても嬉しくありませんよ!!」

「.....。 (忘れていた。こいつら中1だからこいつの話はまだ分かんねーだった。)」

俺が自分の言ったことに多少恥ずかしくなり、顔を手で覆っていると、初春がそういえば、と切り出す。

「そういえば、佐天さん。話って何ですか?」

「んふん。じゃじゃーん!!」

「音楽プレイヤーがどうした.....。」

実は待ち合わせというのも、佐天が見せたいものがあると言ってきたので集まっただけだ。十中十、幻想御手だろうが、今言つと不振がられるから話を合わせておく。

「それは後のお楽しみ。」

佐天はニコニコ笑いながら、御坂達がいるであろう。ファミレスに向かった。

「よう。久しぶりだな、御坂、白井。」

「あら、久しぶりね。」

「久しぶりですわね。今まで何をしてたんですの？いろいろあって大変でしたのよ。」

俺が三人のいる席に行き、御坂と白井に話し掛けると御坂からは普通の挨拶、白井からは嫌みが返ってくる。……………白井、ぜってえ俺の事嫌いだろ…………。

「ああ、グラビトン事件だろ？」

「あら？知っていましたの？」

「勿論。」

俺は佐天と一緒に席に座る。一番窓際で、俺の隣に佐天、その隣に脱ぎ女だ。俺はわざとらしいが脱ぎ女に話し掛ける。

「あれ？木山先生じゃん。」

「君は？私は君を知らないんだが？」



「ん？近衛、この人知ってるの？」

俺が話し掛けると、木山先生はキョトンと、御坂は興味ありげに聞いてくる。

「ああ、大脳生理学の権威で、元小学校教諭の都市伝説、脱ぎ女だろ？」

「……………」

「へえ、木山先生、小学校の先生だったんだ。」

俺がそう言つと、木山先生は不振げに御坂は意外そうに声を上げる。

「そつ、しかもチャイルドエラーのな。」

「つっ……………！！」

俺が最後に爆弾を落とすと木山先生は顔を思い切り顰める。

「君は……………、何を知っているんだ。」

「何焦つてんすか、木山先生。俺もチャイルドエラー何でね。それ位は知ってんすよ。」

木山先生が俺に凄んでくるから、俺は多少言葉をほのめかして言う。

「……………」

しかし、周りの四人は木山先生の剣幕より俺の事実のが気になったようだ。

「……………近衛。」

「なんだ、御坂。」

御坂が怖ず怖ずと聞いてくる。白井は三人程ショックを受けていないからやはり事実を知っていそつだ。

「あんたつて、チャイルドエラー……………なの？」

「そつだが？」

「……………。」

俺が何のことも無しに言うと、一気に三人のテンションが下がり、秀囲気が暗くなる。

「それがどうした？あの三人だつてチャイルドエラーだ。」

俺が言っているのは、香奈と小夜と奈美だ。その事実を知り、三人はますます暗くなる。

「……………ごめん。」

御坂が代表で謝ってくる。はあ、こいつは何も分かっていないのか、それとも馬鹿なのか。……………どちらも同じか。

「何謝つてんだよ。」

「えっ？」

「お前、それ嫌味なのか？俺は別に家族なんてどうでも良いんだよ。あいつら三人は血は繋がっちゃいねーが、ホントの家族みたいに大切だし、愛してる。お前、そんな幸せな奴に謝罪なんているのか？」

「つつ………！！！」

俺の言葉に御坂のみならず他の四人も啞然とする。

「それに俺にはお前もいる。いつもが劇的で楽しいさ。だから気にすんな。」

俺がニコツと笑いながら言うと、四人に笑顔が戻る。木山先生も少し嬉しそうだ。

「辛気臭い話はこれまでだ。取り敢えず、事件の話してたんだろ？」

「ええ、そうね。」

御坂が笑いながら言う。ここでまた謝ったら殴るつもりだったが、流石は常盤台、賢いな。

「さて、話が途切れたが、幻想御手の事で良いのか？」

「ええ、そうですの。」

俺がそう切り出すと、白井が相槌を打つ。

「未だどんな形でどのように使い、どのように効果をもたらすか分かっていないんだよね？」

「ええ、サンプルすら見つかっていませんから。検討もつきませんの。」

俺の問いに白井がはあ、と溜め息をつきながら辟易とした感じで答える。

「ああ、それなら……」ですから、もしも幻想御手を持つ方を保護する方針で風紀委員は動いていますの。」………。

それに佐天が音楽プレイヤーを出して自慢しようとするが、白井の言葉で動きが止まる。

「あれでしょ？幻想御手で能力レベルが簡単に上がるから………。」

「ええ、容易に犯罪に走る人がいますから全面的に保護ということに……。」

「確保・拘束の間違いじゃねーの？」

「建前ですわ。それと人聞きの悪いことを言わないでくださいまし。」

俺と御坂と白井の会話にますます固まる佐天。俺ってば鬼畜ね。

「どうした？佐天。」

「えっ！？な、何もないよ！あは、あははははは。」

俺が佐天に聞くと、佐天は苦笑いをしながら音楽プレイヤーを戻す。俺はニヤニヤ悪い笑みを浮かべながら佐天に聞く。

「な、なに？」

「もしかして……………、幻想御手持ってる口？」

「えっ？持っていますの？」

俺が佐天に話し掛けると、白井が興奮して詰め寄る。

「も、持っていないせんよ！な、なに言ってるんの近衛も白井さんも！  
！」

「……………そうですの。」

ちよつと虐めすぎたか余りの剣幕の佐天。白井もその剣幕に押されたか、それともガチで無いと思ったのか意気消沈しながら座る。

「まあ、取り敢えず見付けてみないことには始まら無いわね。」

「ええ、初春、近衛さん。明日の朝から調査ですわ。」

「わかりました。」

「りょーかい。」

御坂の言葉に便乗した白井に指示を出される。

「木山先生にも調査をお願いしたいのですが。」

今まで空気だった今回の事件の黒幕、木山先生に声をかける白井。

「ああ、私としてもこのような興味深い事例を大脳生理学者として調査させて貰いたいところだよ。」

「ありがとうございます。」

木山先生は此方をチラッと見ながら了承する。

「それじゃあ、明日から仕事ですので今日はお茶にしましょう。」

白井はその後そうやって行った後に店員さんにスイーツを注文する。因みに御坂は紅茶とチーズケーキ、初春が見るだけで胸焼けを起こしそうなくらい大きなパフェ、佐天が紅茶とティラミスで、俺と木山先生がコーヒーだ。

「そういえば……………」

「何すか？」

ふと、木山先生が俺の方を見ながら話し掛けてくる。

「君は、男の子らしい口調でしゃべっているが、実の所男なのか？女なのか？」

木山先生が聞いてきたのは俺の性別の事だった。

「…………やはりそれか。まさか口調が男でも女に間違われるのか。」

「俺ははあ、とため息を吐きうなだれる。しかし俺はいつも間違われるのでちよつとからかつてやるうか、と思った。俺は早速声帯変化で声を変える。」

「あら？どちらに見えるかしら？」

「『『『』』』……！！！！！！』』』』』」

俺が女口調で喋ると、木山先生以外の四人に戦慄が走った。……  
そこまで俺は女に見えるのか。

「ふむ、その口調と声だと女だな。すまない、間違えてしまった。」

「……………男です、俺は。」

木山先生の天然な発言に俺のメンタルに罅が入る。もしかしたら砕け散ってるかもしれない。そこまで俺に激震が走った。……………この人、原作より天然じゃないか？

「ほう、男だったのか。では先程の声は能力で造ったものなのか？  
科学者としてはその辺が興味深いんだが。」

「俺はテレポーターですよ。さっきのは技能で練習すりゃ誰だって使えますよ。構造的には喉、というか声帯の形を意図的に変えたり、ポリープを人工的に造って声をかえるんすよ。」

「ほう、それは凄いな。」

「……………誰でもは使えないと思うわよ。」

俺と木山先生が話しているところに御坂の突っ込み。まあ使える奴は少ないかもしれんがな。

「まあ、というわけで俺は男っすよ。」

「分かった。」

木山先生との会話が終わった丁度にコーヒーが届く。

「此方コーヒーで……………っうわっ！……………！」

ガシャンッ！！バシャッ！！

しかし、店員がミスリコーヒーカップが宙を舞い、木山先生の上着に中身が零れる。

「す、すみません！！！」

「いや、良いんだ。」

店員が謝るなか、木山先生は気にする事もなくおもむろに立ち上がる。

「脱げば良いんだから……………」

「脱くなっ！！！」

「やはり脱いだか……………それにでかい。」



「近衛さん！見ちゃダメです！！」

ガスッ！！

「ぎゃあああああ！！！！」

木山先生が想像のごとく上着を脱ぎはじめて下着姿になり、御坂が突っ込む。白井は頭を抱えて呆れて、佐天は顔を赤くして手で覆うようにするがその見事な肢体を指の間から見る。俺は顎に手を当てて何度も頷きながら木山先生の胸を見る。そして初春はテーブルを越えて俺に目潰しを繰り返す。

「あつ、あのお客様。」

「ああ、気にしないでいい。私の起伏の少ない身体を見て欲情する輩なんていない。」

店員の話もガン無視というか、その持ち前の天然さを爆発させる。

「（いやいや、木山さん見てみなよ周りの輩を。かなり見てますぜ。まあ俺も見ていますが。）」

「だから近衛は見ない！！」

ズシャッ！！

「ぎゃあああああ！！！！」

俺は目潰しから回復した後、性懲りもなく木山先生の素晴らしき胸

を見る。しかしそれを見兼ねた佐天からまた目潰しを食らう。

「ふむ、スカートも濡れているな。」

チィー……………

「だから脱ぐなっつうのー!!」

俺が目潰しで悶えている間に木山先生がスカートのチャックを下げる。しかし御坂によりそれは止められて上着も着せられる。なんて事をしてくれたんだ!!御坂!!

程なくしてお茶会も終了してお開きになる。空はもうすでに赤く染まっており、帰宅する生徒が目につく。

「それじゃあ先生。よろしくお願いします。」

「ああ、分かっているよ。」

御坂が木山先生に別れを告げた後、全員が帰る。

「それで？話ってなんすか。幻想御手製作者、木山春生先生？」

「やはり知っていたか。」

勿論俺は家に帰っていない。木山先生に呼び出されたからだ。

「ああ、貴方の教え子達であるチャイルドエラーが貴方の行った実験の失敗で謎の昏睡状態にあることも、それを救うための演算に使わせて貰おうとした“ツリーダイアグラム樹系図の製作者”の使用不許可も、その代

用にA I M拡散力場によるネットワーク構築の為の幻想御手を作ったことも。流石は大脳生理学の先生だ。普通は思いつかんよ。」

俺はそう口で言ったが、頭の中ではそれに似たものが乱立していた。ミサカネットワーク、一方通行の能力補助のチョーカー、そしてヒューズIIカザキリ、虚数学区・五行機関。似た事例、というか恐らく同じ代物はこの街には大量にある。

「という事は、君は幻想御手の構造も……。」

「ああ知っている。共感性による脳内回路の統合。アンタの脳回路をマザーコンピューターにする事で、ツリーダイアグラム並の演算を確立する……だろ？」

この街の超能力開発の方法は静脈にエスペリンを打って、イヤホンでリズムを刻む事により、独自の脳回路を構築する。だから魔術が使えないわけだが、これを利用して一人の人間の脳波を音楽のリズムにして共感性を利用してそれを聞いた人の脳回路をその人の脳回路に強引に変える。その代わり何百という人間の脳回路が同じになるわけだから、一人の人間に入ってくる情報量も何百になるから脳の容量を超えて負担が掛かり、昏睡してしまう訳だ。

「（まあ、俺は無限の回路を持つてるから使っても倒れないだろうな。）」

俺がそういうと木山先生はふっ、と笑う。

「君は何でも知っているんだな。」

「何でもは知らんよ。知っていることだけだ。」

「そう謙虚にならなくてもいいんだが。」

木山先生はまたふっ、と笑う。

「君は風紀委員なんだろう？私を捕まえるのか？」

木山先生は笑いながらそう言う。

「アンタは超能力開発を受けているからな、バンクに脳波の記録は残っている。あいつらが音楽ソフトを見つけたらそれでアンタの計画は終了だからな。いずれ捕まえるなら面白く劇的な方がいい。」

木山先生は俺の言葉に凄味ながら聞いてくる。

「つまり君は自分が面白くなりたいから、私の思いも踏み躪るのか。」

「まあ、俺は悪人だからな。アンタと同じだよ。」

「君とは一緒にはされたくないな。」

「……………残念。」

俺は肩をすくめながら、言う。

「まあ、一番の理由は物語が進まないからだ。アンタがここで捕まると物語が進まない。」

「……………何を言っているんだ？」

「ただの戯言だ。気にしなくていい。」

俺はそう切り上げた後、木山先生の方を見る。木山先生は顔に嫌悪を大量に貼りつけている。

「まあ、そういうわけだ。アンタを此処では捕まえない。というか捕まえたら、俺の立場も危ういんでな。まだ解明されていない物を完璧に解決したってな。皆に疑われかねん。それは嫌だからな。」

「君はとことん私の思いを踏み躪るな。」

「それが俺だからな。」

俺は木山先生にそういいながら、ボソソジャンプを発動させる準備をする。

「じゃあな、木山先生。また会えるといいな。」

「私は会いたくないな。」

「……………振られちゃった。」

俺は苦笑いしながらボソソジャンプを発動させて、マンションに戻る。

「心配しなくても、絶対合間見えるよ、木山先生?」

俺は悪人らしくくつくつ笑いながらマンションに入る。

## 幻想御手（前書き）

今回はあの偏光能力者の出番でした。近衛くんの介入によりただの噛ませ犬になりましたが気にしないでください。

因みに次回はこの続きで昼から夜の時間軸を書きます。上条さんは多分五話ほど出ないと思います。

## 幻想御手

「こんなにありますの？」

「あるだろうよ。幻想御手はそれだけの価値があるんだからな、無能力者にとってはな。」

今日は7月22日。時刻は8時頃。俺がいるのは第七学区、一七七支部だ。持っているものは初春が纏めた幻想御手の取引場所。

「このような事態になるなんて、悲しくありますわね。」

「まあ、無能力者にとっては缿りたい物なのさ。能力者っていうものになりたくてこの学園都市にやってきたんだからな。」

俺は資料を持ちながら、出入口に向かう。白井もそれに続く。

「そ、それ全部調べるんですか!？」

「ええ、これのどこかに手掛かりが有るんですから。」

「虱潰しに探せばなんとかなるさ。」

俺と白井はそう言う。初春は心配そうに言う。

「気を付けてくださいね。取引場所での暴力ぎたはよくあるみたいですから。」

「俺と白井がいるんだ。相当な使い手が来ない限りやられることは

有り得ん。」

「油断は禁物……、と言いたいところですけど、確かに私たちがやられることはなかなか無いと思いますわね。」

白井が俺の方を見ながら言う。まあ、なんとかなんだろ。

「じゃっ、行つて来る。」

「行つてきますわ。」

俺は初春に挨拶したあと出入口から外に出る。

.....

「此処が最後だな。」

「ええ、近々取り壊される予定の廃墟ですの。」

「不良の溜り場にはもつてこいだな。」

俺が今いるのは原作で佐天が襲われる場所。あの偏光能力者がいる場所だ。時刻は11時。もうそろそろお腹が空いてくる頃だ。

「貴方たちなんてすぐに警備員が来て拘束されるんだから!!」



「あんだとてめえ!!!」

俺が壁の上から廃墟を見ていると、偏光能力者と佐天の声が……  
なぜ挑発した佐天……。

「わたくし先に行かせてもらいますわ。」

「……………ホント、なんで常盤台コンビは素直になれないんだか。  
友達が大切なので、って。」

俺は苦笑いしながらも両手にトンファーを出す。

「俺は素直だぜ？佐天を傷付けたな！って。」

俺は殺気を出しまくりながら走る。この程度の距離ならボソソジャ  
ンプを発動するより早い。

「ジャツジメントですの！貴方たちを拘束いたしますわ。」

俺が近くまで行くと白井が既に不良どもと接触していた。

「おつとつと……………俺もジャツジメントなんでね、お前等を撲殺  
してやるよ。」

俺は急いで走ってきたため止まるときに多少よろけたがトンファー  
を構えながら、不良どもを挑発する。

「白井さん！近衛!!!」

「近衛さん？ ジャツジメントとして撲殺はどうかと……。それと……、それ、何処から出したんですの？」

佐天からは声援、白井からは疑問が飛んでくる。

「これは袖口から出したんだよ。」

俺が鉛で出来たトンファーを素振りしていると、不良から下品た声が飛びかう。……潰してやろうか。

「お前なんかじゃ俺たちは倒せねーよ。なんたって俺たちや強能力者（レベル3）なんだからよ。」

偏光能力者が笑うと、周りの奴らがゲラゲラと笑う。

プチン！

俺の血管がキレた。マジでうぜえな、俺はそう思いながら、神速で手下の一人に近づきトンファーで殴り飛ばす。鉛製のトンファーが顔面に当たった手下は鼻の骨を折りながらメートルは吹っ飛ぶ。

「ぎゃあああああ！！ いてえ！！ ギャン！！！」

「汚ねー声で鳴いてんじゃねーよ。咬み殺すぞ……。」「

俺はすぐにそれに近づき、手下の腹に足を振り下ろす。

「な、なにもんだお前！！ さっきのは能力か！？」「

そのいきなりの有様に残りの手下二人に偏光能力者も戦々恐々とす

る。

「残念、さっきのは純粹な身体能力だ。因みに俺は空間移動能力のレベル4な。補足としてあいつもレベル4の空間移動能力者だ。」

「レ、レベル4だと!！」

「わたくしをおまけみたいに言わないでくださいまし。」

俺が足下の手下を見下しながらそういつと手下たちには戦慄が走る。しかし偏光能力者はまだ余裕そうだ。

「わりいな白井。」

……さてと、こいつどうする？鉛のこれで顔を殴られたんだ。早く病院にいかねーとやべーぜ。まあ、そのついでに警備員も呼んでやるけど。」

俺がトンファーを示しながら言つと、手下たちは顔を引きつらせる。

「……………ごめん、忘れてたわ。お前等には一つしか選択肢がねえ。それは俺と白井に全員が伸される事だ。」

俺を怒らせたのがいけねーんだぜ？俺はドSなんだ。挑発は俺だけがしているもんだ。ど三流。」

俺が足下の手下の腹をぐりつと踏み躪りながら言つと、明らかに不良どもの顔に怒気が表れる。

「……………もつと穩便に進めれないんですの？佐天さんには逃げて

もらいましたけど。」

「戦いはいつでも劇的じゃねーと面白くねーぜ？挑発は戦いにおいて最高のスパイスだ。」

「……………はあ。」

白井がジト目で此方を見る。白井の言う通りもうすでに佐天の姿は無かった。白井が逃がしたらしい。

「てめえらやつちまえ！！」

俺が白井と話していると手下の二人が此方に走ってくる。

「白井、この二人は俺がやる。お前はあのレベル3をやってこい。」

「わかりましたわ。」

俺はトンファアを構えて言う。白井は俺の方を見た後、テレポートで偏光能力者の元に跳ぶ。

「さて、てめえらは咬み殺してやるよ。」

俺は前から来た男が出した発火能力を横っ飛びにかわした後、一気にそいつに詰め寄りトンファアで腹を二回殴る。

「ぐ、ぐう……………！！」

俺の攻撃に腹を押さえながら膝から崩れる手下A（因みに一番最初に倒した奴がB、未だの奴がCだ）。マジで雑魚いこいつら。

「しねええ！！！」

「後ろから攻撃するなら声は出さない方が……いいぜー！！」

バキンッ！！

「なっ……！！！」

発火能力者を倒した後、後ろから金属バットを振り下ろした手下C。既に気配は察知していたのでその金属バットをトンファーでへし折る……、を通り越してたたき斬る。

「死ぬのは……お前だ！！」

ドカツ！！

俺はバットを振り下ろそうとしたその隙だらけの身体にトンファーを横尻ぎに右脇腹に殴る。

「グワッ……！！！」

手下Cは左の方に錐搦しながら吹っ飛ぶ。

「はっ！！ざまあねえな。」

俺がそついいながら白井の方を見ると、偏光能力者に既にボロボロにされていた。

「はあ……、はあ……。」

「けっ！！レベル4がどうしたあ？」

感知した気配と一致しない、恐らく偏光で生み出した偶像が下品な笑みで白井を挑発する。

「くっ……………！！」

白井は最後の鉄針を跳ばすが、その軌道は全く違う方向に行く。そして、偏光能力者がローキックを繰り返す。が……………、

ガキン！！

「なっ……………！！なんで受け止められた!？」

俺がそれをトンファーで受け止める。ローキックは偏光で造ったフェイクで本当の蹴りはハイキック。

「（確かにこれはなかなか強いな。）」

俺は偏光能力を完成させて、偏光能力者に向き直る。

「どうやってフェイクを造ってんのか知らんが、お前のフェイクには実体が無いしな、それに本物の蹴りからは、風圧が来る。ちよつと武術を齧ってれば誰だって受けとめられるさ。」

「くっ……………！！」

偏光能力者は悔しそうに顔を歪める。

「さて、白井も満身創痍だし、戦略的撤退としますか。」

「えっ？まだわたくしは戦えますわ！」

「聞く耳もたん！」

なんかほざいている白井を無視して白井を所謂お姫様抱っこする。

「なっ！？恥ずかしいですの！！」

「気にすんな。お前が傷付くと心配する奴がいるんでね。まあ俺は心配しない奴だけだ。」

顔を赤くしてバタバタする白井にニコツと笑いながら言う。白井は尚も顔を赤くしているが表情にいつものお調子者が戻る。

「素直じゃないですね。」

「お前に言われたかねーよ。」

俺は白井と互いに笑いあつたあと偏光能力者の方を見る。

「そう言うわけで、鬼ごっこ洒落こもつか。リア充を追い掛け回す鬼として頑張ってくれ。」

俺は、かはは、と笑いながら偏光能力者を挑発する。

「て、てめえ！！」

「じゃあな！！」

俺は気さくに笑った後、廃墟にボソソジャンプする。

.....

「ふむ、こんな感じなのか。」

俺は白井を抱えたままビルの内部構造を把握する。後ろからはコツコツと足音がする。

「そろそろ近づくな。上に行くか。」

俺は二階から三階に跳ぶ。

「何をしていらして？わたしくしの予想ではるくな事ではないんですけど.....。」

「白井の想像どおりだと思っぜ？あの偏光能力者は普通にやっても倒せるけど、やっぱり倒し方は劇的に面白くなーと。」

俺がそういうと白井は俺の腕のなかで首を横にふりながら呆れる。

「呆れましたわ.....。敵を倒すにも面白さを求めるなんて。あの殿方も気の毒ですわね。」

「ホントは気の毒になってなんか無いんだろ？」



「まあ、建前で言ったままですわ。」

「お前もえげつないな。」

俺は白井に笑いかけながら言う。そしてまたコツコツと足音がしたので四階に跳ぶ。

「あの……………」

俺が四階に跳ぶと白井が珍しく顔を赤くしながら聞いてくる。

「これはいつまでするんですの?」

「こねって?」

「……………お姫様抱っこですわ。」

白井は顔を赤くして俯く。

「くくっ、これが終わるまでだよお姫様?傷が治っていないからな。」

「……………本音は?」

「弄るのが楽しいから。」

俺がニヤニヤ笑いながらそついつと白井はぶっ、と噴き出す。

「貴方は本当に不思議な殿方ですわ。いつも飄々としていますもの。」

「根なし草だからな。どれかにこだわる事が無いのぞ。」

「それは女でも？」

「さあな。」

「女たらし。」

白井と俺は互いに笑いあう。そうだ、と白井は切り出す。

「わたくしの事は黒子と読んでくださいまし。」

「あら、良いんだ？」

「ええ。」

白井はどうやら名前で呼ぶ事を許してくれたらしい。

「今まで俺のことを疑ってたんじゃないのか？」

「……………気付いてましたの？」

「勿論、お前が俺のことをバンクで調べていたこともな。」

「なぜ今まで黙っていたらしたの？」

「仕事仲間を疑うなんて俺らしくないからな。俺は器のでかい男だぜ。」

「自分でそう言う方はいらっしやりませんわ。」

「…………でも貴方は器の大きな方だと思えますわ。」

「ありがとよ、黒子。俺のことも戸隠と呼んでくれ。」

俺がそういうと黒子は目を丸くするが、すぐに笑いだす。

「ええ、戸隠。」

俺はくつくつと笑いながら相変わらず後ろからついてきている足音を聞いて、最上階まで跳ぶ。

「さて、これで鬼ごっこも終わりだ。」

「始まるのはパーティーとでも言いますの？」

「おっ、よくわかってんじゃない。」

俺は白井を降ろしながら言う。そこにあの偏光能力者が現れる。

「やっときたか、偏光能力者。」

「…………俺の能力分かっていたのか…………。」

「最初っからな。」

「…………俺等はまんまと掴まされたのか。」

「そういう事だ。」

俺はニヤニヤと笑いながらそう言う。

「さて、そろそろ問答も飽きてきたし終わりにするか。」

俺がそういつと黒子はビルの端っこに行く。

「じゃあな。哀れな偏光能力者？」

俺は空間移動で黒子の方の逆のビルの端に行く。そして、ビルの窓ガラスをどンドン柱に移動されていく。空間移動で移動した物体は移動した際にその場にあつたものを押し出してあらわれる。それを利用して柱を斬り倒していく。

ゴゴゴゴゴ！！！

「てめえら鬼だな！！」

「それが俺だから。」

「わたくしは一緒にして欲しくありませんわ。」

「つれない事を言うなよ。」

俺がそういつた瞬間、ビルが倒壊する。白井は一人、空間移動で離脱する。これは実は打ち合わせていたことなので気にしちゃいない。俺は気絶している偏光能力者を脇に抱えて、空間移動をせず、

「よっ、ほっ、はっ！！！」

落下する瓦礫を足掛かりにして瓦礫を飛んで移動する。そして地面につくと呆れた黒子がいた。

「……………人外ですの？あなた。」

「一回やってみただけだ、やろうと思えば誰だって出来る。」

「ジャッキー・チエンと貴方しか無理ですわ。」

「ジャッキー知ってるんだ。」

俺は苦笑いしながら偏光能力者を地面に……………落とす。

ドシャツ！！！！

「へぶつ！！！！」

落とされた偏光能力者は奇声を上げて、目を覚ます。俺はそいつの髪を掴み、顔を上げさせる。

「さて、幻想御手を出そうか。」

俺がにっこりと笑いながら言うと、偏光能力者は震えながら音楽プレイヤーを指差す。

「ありがとよ。」

俺がそういうと、偏光能力者は「来る、来る！！」とか「あ、ああ……………！！」とか奇声を上げながら昏睡する。

「さて、目当ての物も見つかったし、一七七支部に戻るか。」

「わたくしは警備員に報告してまいりますから、先に戻ってくださいまし。」

「なら待ってるよ。」

俺は音楽プレイヤーを持ちながら、空を見る。昼時の明るい空だった。

「物語は、終焉に向かう。」

俺はそっぴいなから目を閉じる。

後日談というか後書きのようなもの（前書き）

今回は駄文ですね。自分でもびっくりするぐらい……。

時系列としては原作第十話相当です。読まなくてもかなり話には変化がありませんが近衛が強くなります。

## 後日談といつか後書きのよつなも

「よし、ダウンロード完了しました。」

「ご苦労様ですわ、初春。」

今俺は一七七支部にいる。昼間のビル倒壊事件の後、昼飯をその辺のコンビニで買って初春、黒子と共に飯を食ってそして調査、というのが今までのあらずじだ。

「しかし、こんな音楽ソフトでホントに能力アップなんて出来るんですかねえ。」

「さあ？どうなんでしょう。少なくとも2レベルは上がる見たいですが。」

黒子と初春がパソコンの画面をしかめっ面で見ながら言う。

「はっ、これで能力アップして今まで白井さんに受けてきた仕打ちを……………！！ぐふふ。」

「初春、思考が打だ漏れですわよ？」

「はっ！…！」

急に初春が何かを思いついたと思ったたら急ににやけだす。

「やめとけ、昏睡してもいいんなら使えば良いが。」



「……………やめときます。」

俺の言葉に初春がテンションを下げる。

プリプリプリ

「はい、……………はい……………はい分かりましたの。」

ピッ！

俺がテンションの下がった初春の花飾りをプチプチと弄っていると黒子の携帯と言えない携帯に電話がかかる。

「街で学生が暴れている見たいですの。」

「出勤ですか？」

「ええ、残念ながら。」

どうやら風紀委員の仕事らしい。めんどくせえなおい。

「戸隠も、ですわよ。めんどくさいなんて言って逃げないでくださいまし。」

「はん、俺はパスだ……………、と言いたいところだけどしゃーねから行ってやるよ。」

「……………なぜそう上から目線なんですの。」

俺は黒子の言うことに賛同する。今回は能力者の暴動の検挙。つま

り数々の能力が飛び交うだろう。

「（これで完成させまくったら俺の力はさらに強固な物になる。贅になってもらうぜ、愚か者ども。くっくっくっ。」

「……………気持ち悪いですわ。」

俺は人知れずニヤニヤ声を出して笑っていたようだ。黒子の哀れみの視線がすごく痛い。

「そりゃ、エッチな事を考えていたらにやけてしまつのも仕方ないですよ。」

「そうですね。」

「……………おい、俺がいつ変態キャラになったんだよ。」

俺が相も変わらずにやけていると初春が調子乗った事を言いだす。その称号は土御門にでもくれてやれ。

「まあ、そんな事はどうでも良いですわ。戸隠、行きますわよ。」

「へーへー。」

変態の称号を付けられたことがどうでも良いと言われて不本意なんだが黒子の指示に従ってやる。

「いつてらっしゃ〜い。」

後には初春の間延びした甘ったるい声をかけられる。……………ちょっと

とイラストとした。

.....

俺は一七七支部から黒子と別れた後、報告にあった場所に向かう。  
そこには、

「おいおい、俺はレベル2の念動能力者だぜ。」

「俺はレベル2の風力能力者だ。痛い思いしたくねーなら金だしな。」

所詮レベル2程度で意気がっている馬鹿どもがひ弱そうな中学生にかつあげしていた。

「はあ、いつの時代の不良だよ。」

俺は二人の馬鹿が惜し気もなく出しているレベル2程度の能力を完成させながら腕章を着けてトンファーを出して近づく。

「おい！早くだせっ……風紀委員だ。おとなしくしろ、さもなければ  
咬み殺すぞ。」………「ああ？」

また中学生に詰め寄る不良1の台詞に言葉を重ねると、不良1は此方を不機嫌そうに見る。

「てめえなんか風紀委員かよ。俺等の敵じゃねーな！ギャハハ！」

不良2が俺をみて不愉快な笑い声を上げる。

「見た目で判断してんじゃねーよ、カスが。」

シュン！ガツ！

「げふうー！！」

俺は一瞬で不良2に近寄りトンファーで殴り飛ばす。不良2は五メートルは飛び、気絶する。

「て、てめえー！！ぎゃあああ！」

それを見て俺に炎弾を放とうとした不良1にも同様に近づき、腹を3発殴る。不良1はその場で膝から崩れおち気絶する。

「意気がってんじゃねーよ。虚像の能力なんざで。まあ俺は公的にぼこれるから逆にばっちこいな訳だけど。」

ゴキリ！ゴキツ！

俺は不良1、2の肩を両方とも外して、人間の骨格的に不可能な位置で手錠をかける。因みにひ弱そうな中学生は既に逃げた。

俺は警備員に連絡した後、次の暴動の元に行く。

……

次の場所は道路の真ん中。暴動の元の馬鹿は原付を空中に浮かせている。件の馬鹿の足元を見ると小さなクレーターが出来ていた。

「クレーターを見るかぎり重力操作系か。原付を浮かせているあたりレベル3だな。」

俺は早速、重力操作を完成させた後、馬鹿に一気に近づき、トンフアードで殴り飛ばす。重力操作で自分の周りを重くしていたようで3メートル程しか飛ばなかった。

原付は能力の効果が無くなったため宙から落ちる。俺は気絶した馬鹿を所謂亀甲縛りにした後、口にギャグボールを着けて、首に“私は大衆にこんな姿を見られて喜ぶ変態です。わたくしめをもっといじめてください”という看板を下げさせて、警備員に連絡する。

「くくっ、良い声で鳴かねーのは残念だが、劇的な姿が見れて満足だぜ。」

俺はついでに馬鹿の額に肉と書いてから次の馬鹿の元に飛ぶ。周りにいた野次馬はどん引きしていた。

……

俺が次の馬鹿の元についたときに最初に見たのは辺りが爆発によって焦げた壁やら、粉碎された木だった。

「おいおい、どこの馬鹿だよ。こんな劇的なことするやつ。」

「わたし、かな？」

俺が苦笑いしながら辺りを見回すと後ろから声がかかる。

「お前か。」

「うん、そつだよ？」

「なぜ疑問系。」

俺はトンファーを構えながら言う。馬鹿は俺の姿を改めて見ると、狂気に顔を歪ませる。

「風紀委員だ。お前をぶつ殺す。」

「あなた、柵川なんだ。」

「ああ、そつだが？」

俺がそういつてニヤニヤすると、あたりかまわず爆発する。

「なら、殺さないで。私の空間爆破で。」

エクスプロージョン

「おいおい、会話が成立してねーぞ。それにどこそその桃色シンデレカお前は。」

俺が尚も笑いながらそういうと、馬鹿は尚更狂気に顔を歪ませる。

「私、貴方が愛しいの。愛したいの。愛し合いたいの。だから……  
…殺しあおう？」

「……………ヤンデレは麦のんだけで十分だ。それに俺はヤンデレは守備範囲外だ。」

俺は馬鹿の後ろを瞬時に取り、トンファーをぶつけて昏睡させる。

「モブの癖によくしゃべったなこいつ。」

俺は別に女だからって遠慮も躊躇もしないから馬鹿の肩を外す。

「お前も馬鹿だねえ。虚像なんか使わねーで俺にそうやって迫ってれば愛したかもしねーのに。まあ戯言だけど。」

俺は警備員に連絡した後、今日の仕事が終わったので、一七七支部に戻る。

……………

「うーいー。終わったぜー。」

俺が部屋に入ると傷の手当てをしている初春とされている黒子がい

た。

「お帰りなさい。貴方は怪我などは無いみたいですね。」

「俺は最初っから最後まで全力全壊だからな。」

俺は黒子の方をニヤニヤ見ながら言う。

「字が違う気がしますわ。」

「別に間違っちゃいなーさ。」

俺は白井の隣に座り、机の上に置いてあったコーヒーを飲む。

「風紀委員としてそれはどうかと思いますけどねえ。……………はい、終わりましたよ白井さん。」

「お前にだけは言われたかねー。風紀委員の癖に戦闘能力皆無のお前に。」

俺がそう言うと初春は、はっ、と悲鳴をあげながらよよよと崩れ落ちる。そして机の上に置いてある音楽プレイヤーに手を伸ばす。

「……………これで能力アップして……………」

「やめとけっつうの。」

俺は音楽プレイヤーをトンファーで机ごと破壊して、出入口に向かう。



「その机の弁償代は初春に付けといてくれ。」

「そ、そんな横暴な……………！」

「分かりましたわ。」

「ええ！？白井さん！？」

俺は出入口から出て、そのままマンションにボンボンジャンプする。  
後には初春の絶叫だけが残った。

## 共感性（前書き）

今回は木山先生と近衛くんの会話の応酬を増やしてみました。

余談ですが、一昨日京セラドームに阪神VSヤクルトを見に行きました。ヤクルトファンの方には申し訳ないですけど、阪神が勝って嬉しいです。

## 共感性

やあ、毎度お馴染み近衛戸隠だ。何時ものような挨拶だが今日は7月24日、木山春生の逮捕と上条VS神裂のイベントがありとても忙しい日だ。俺は一七七支部に向かっている。

「おろ？御坂。」

「あ、近衛じゃない。どうしたの、こんなところで。風紀委員はいいの？」

俺は前方に御坂が見えたから話し掛ける。いつぞやの初春みたいに後ろから抱きつかない。ビリビリの餌食になるのは嫌だからな。その役目は当麻だけでいい。

「今から行くんだよ。お前も行くんだろ？一七七支部に。」

「そうよ。黒子が捜査が難航しているってね。まあ、ぶつちやけるとただ単に遊びに行くだけだけど。」

「ホントぶつちやけたな。」

俺は苦笑しながら言う。ふと街頭モニターを見ると、一一一が歌って踊っている映像が流れていた。

「こんなひと昔前の服を着て、明らかにアイドルですよ、って歌を歌っているのどこが良いか分かんねーな。」

「私もちよつと苦手かな？」

「御坂の場合、ゲコ太とかそんなファンシーキャラが歌っているのが良いんだろ？」

「なっ……！んな訳無いじゃない！！」

俺がニヤニヤしながら言うと御坂は顔を赤くして必死に弁解する。

……… 凶星だったのか。冗談で言ったはずなんだが。

「分かった分かった。冗談だ。」

俺がニヤニヤ笑いながら言うと、御坂はまだ顔を赤くしたままでいた。

「あんた絶対冗談じゃないでしょ。笑顔に悪意が塗れてるわよ。」

「知らんがな。俺は別にお前に冗談を言ったわけじゃない。お前をからかったただけだ。」

「悪意満々じゃない！尚更質悪いわよ！！」

御坂が額からパリパリと電撃を出しながら詰め寄ってくる。

「おいおい、こんな往来でバトルでもおっぱじめるのか？」

俺は周囲を見回しながら言う。俺たちが歩いているところは第七学区の中心部。勿論人通りは多いし、周辺には清掃ロボや街頭テレビなど電子機器。こんなところで御坂が電撃を繰り返したら、電子機器はショート確定。歩いている学生なら感電必至だ。俺はそんな危険な奴とはバトルなんかしたくない。めんどいから。

「まあ落ち着けて。お前は第一回にしてカミナリを放った初期のピカチュウか。」

「ピカチュウ？何よそれ。」

俺が御坂に分かりやすい例えを出すと（自殺行為とも言える）御坂は首を傾げる。

「（学園都市にはポケモンすらないのか……。）」

俺は一つ嘆息しながらコミュニケーションを取り出し、画像フォルダを開けてピカチュウの画像を探す。

「ほれ、これがピカチュウだ。」

「可愛いじゃない!!！」

「御坂に似てキュートだろ?」

「なっ……………!!！」

俺がピカチュウの画像を見せると興奮して俺のコミュニケーションを奪う。

「（……………子供か!!……………いやこいつの趣味は子供だったな。）」

俺は苦笑しながら御坂に上の様に言うと、御坂は顔を赤くしておのく。どうやら今日の俺のテンションはアメリカンな感じらしい。

「か、可愛いって……………。」

御坂は顔を赤くして俯く。……なんかこう、真面目な態度を取られるといじりたくなるな。

「ごめん、冗談だわ。」

「アンタはあああああ!!!」

俺が爆弾を投下すると、御坂はそれを打ち砕かんが如く雷撃を放つ。勿論それで清掃ロボやら電子機器が壊れる訳で、向こうから警備ロボが突撃してくる。

「やばっ、いざとなったら御坂を置いて逃げるけど流石にそれすらも面倒だから御坂もつれて逃げるか。」

「アンタ、ホントにムカつく事をずけずけ言っわね。」

「それが俺だから。まあ、面倒だから御坂もついでにテレポートするか。」

俺は御坂の手を取り、テレポートする。

「はあ、面倒な目にあつた……。」

「アンタが私をからかうからでしょ？自業自得よ。」

俺はテレポートで取り敢えず近くのビルの屋上に移動する。下では警備ロボが俺たちを探そうとろちよろして、清掃ロボは火花を出して故障、学生たちはいきなり壊れた携帯を片手に右往左往。……

……これなんてカオス。

「お前……………、確かにからかった俺は万が一にも悪いかもしれんが。」

「万が一どころか十全に悪いわよ。」

「それはお前の罪を棚に上げていい事じゃねーな。」

「……………それは、そうだけど。」

俺がそういつと御坂は顔を俯かせる。

「まあ、俺は別に気にしちやいなーな。どちらかというとな風紀委員に遅れて黒子に小言を言われる方が億倍面倒だ。」

「……………アンタってホント分からないわね。」

「それが俺だからな。根なし草なんだよ。」

俺がそういつと御坂は呆れたように笑いながらそういつてくる。

「まあ、取り敢えず早く一七七支部にいかんといけんのでな。」

「それもそうね。」

俺は未だ呆れた笑顔を顔に張りつけている御坂の手を取りテレポトする。

……………

「黒子、いるの?.....ギャツ!」

「お、お姉さま!それに戸隠もご機嫌麗しゅう。あは、あはは。」

「「きゆうつう.....」」

「黒子、お前鬼だろ。」

俺たちが一七七支部に着き、御坂がドアを開けると、上から初春が降ってきた。十中八九黒子が跳ばしたのだろう。マジ鬼だ。

「し、仕方ありませんの!お姉さまに傷だらけの身体を見せるなど.....」

「お前のペチャパイにどれだけ価値がある?」

「ああん?」

「ごめんなさい!貧乳も俺は愛せます!」

俺が黒子の一部貧相なところを見てニヤニヤ笑うと、黒子が鉄針を持って凄んでくる。マジ怖いです。

「.....セクハラですわよ。戸隠。」

「.....百合が何をほざくか。」

俺はそういったあと、ぐるりと部屋を見回し、最後に御坂と初春を見る。



「……………んで？これどうするわけ？」

「まだ起きそうには有りませんね。」

俺は初春と御坂を指差しながら言う。黒子はツンツンと御坂の頬をつつく。

「はっ！！今ならお姉さまにあんな事やこんなことを出来る！！これはまたとないチャンス……………」

「やめとけ黒子。電撃の餌食になりたくなかったらな。それに今のお前、こないだの初春みてーだぞ……………」

「そんなものお姉さまへの愛を考えたら……………！！それとわたくしの高貴な目論みを初春の下衆な計画と一緒にされては困りますわ。」

「短いいえパートナーをそんな風に言つなよ……………。それと目論見なら高貴も減つたくれもないぞ。」

俺はそういいながら三人を見る。初春と御坂は相変わらず気絶したまま、黒子は顔を赤くしてはあはあと息を荒げながら御坂に顔を近づける。

「ぎゃああああ……………！！」

「ん、うーん……………」

しかし黒子の目論みは直ぐに打ち砕かれる。御坂が白井に電撃を放つたからだ。無意識のうちに。

「……………起きるまでじっとしてる。」

「……………そうしてますわ。」

俺はそういつてコーヒーを淹れてデスクに座る。黒子は未だぶっ倒れている二人の主に頭を検査する。あの落ち方は酷かったからな。下手すれば頭蓋骨陥没は避けられん。俺は一つ溜め息をついてコーヒーを飲む。

……………

「それで？幻想御手がどのようにして能力を上げているかが分からないのよね。」

「ええ、木山先生にも聞きましたが音楽ソフトだけではどうしても無理だと……………」

あれから十五分程してから二人が目を覚ました。起きたときに多少いざこざがあったが、なんとか落ち着き今は幻想御手について話し合っている。

「まあ、テストメント“学習装置”がなけりや無理だわな。」

「木山先生もそう仰っていましたし。」

「そのテストメントって？」

俺は黒子にそういうと御坂が口を挟む。お前のクローンに使われている物だ、なんていえやしないな。

「テストメントってのは視覚、聴覚、味覚、知覚、嗅覚の五感に働き掛けて、能力開発をする特殊な装置さ。まず一般人はお目にかかれないな。」

「ふうん、そんなのが有るんだ。」

……でも幻想御手は聴覚だけだもんね……。

俺の言葉に御坂と黒子、初春は頷く。

ピーー！！！！

「あっ、お湯が……！！」

話が途切れたときに給湯室のヤカンが鳴る。それに初春が走っている。

「そういえば……、この前かき氷食べにいったときに言ってたことって何だっけ？」

「うーん……。食べ比べ？」

「いや、そっちじゃなく。」

その時に御坂がかき氷の時の話を引き合いに出す。俺はその時には残念ながいなかったが恐らく共感性の事だろう。

「「えーつと……………」。

「ああつ！！共感性！！」

「どうしたんですか？」

その数秒後唸っていた二人が答えにたどり着く。初春は給湯室にいていたみたいだから分からないみたいだ。

「（物語が終わりに近づいた。面白くなるな。）」

俺はそれを見てほくそ笑む。

「共感性ですわよ。共感性！！」

「共感性？」

黒子は興奮しているようだが初春は何のことか分からないようだ。俺はそれに口を挟む。

「共感性ってのは一つの感覚で複数の感覚を感応させる事だ。例えばかき氷を引き合いに出せば、赤いかき氷を見る、つまり視覚したときに赤ければ苺味を感じる味覚、冷たいと感じる触覚など複数感覚を感応することだ。」

「なるほど。」

「アンタって何でも知ってるわね。共感性やテストメント、普通は知らないわよ。」

「何でもは知らねーよ。知ってることだけだ。」

初春が納得し御坂が俺の肩を叩きながらそういつてくる。まあ悪い気はしないな。

「それでは木山先生に報告します！」

「よろしくお願いしますわ。」

俺の言葉を聞き、それを初春が木山先生に携帯で報告する。

「あの、木山先生。」

『ああ、どうした？』

「さっき幻想御手がどうやって能力アップしているのか推測したんですけど…。」

『ああ。』

「もしかしたら共感性を使ってるかも知れません。」

『……………共感性か。考えたことも無かったな。それは有り得るかも知れない。』

「ありがとうございます。」

『それなら調査にツリーダイアグラムを使えるだろう。』

「ええ！？ツリーダイアグラム！？あの、私もそちらにいても良いんですか？ツリーダイアグラムを使うところなんて見たことないので！」

『ああ、構わんよ。』

「ありがとうございます。それでは！」

『ああ。』

ピッ！

初春が電話を切る。どうやら電話の応酬を聞くかぎり原作通りに事が進むらしい。これは好都合だな。

「それでは私は木山先生の元に行ってきます！」

「気を付けてくださいまし。」

初春はツリーダイアグラムが楽しみらしく、すぐにリュックを背負って出入口に向かう。

「慌ただしいわね。」

「初春はプログラマーですから。天下のスーパーコンピューターを見て楽しみなんですよ。」

御坂は苦笑いしながら、黒子は呆れながら言う。しかし雰囲気はほのぼのとしている。

「（まあ、これから佐天が幻想御手を使って倒れて、初春が人質に取られるなんて思いもよらんだろつな。）」

俺はその様子を見ながらくつつくつつ笑う。

「ちよつと席外すな。」

「ええ。」

「どうしたんですの?」

「ちよつと野暮用だ。」

俺は席を立ち上がり二人に言う。二人は軽く了承してくれる。俺はそのまま部屋から出ていき、廊下の壁に背を預けて立つ。そして携帯を広げて、ある人間に電話をかける。

「私だが。」

「よう。木山先生。」

「……………君か。」

俺が電話を掛けた人間は木山先生。木山先生は俺の声を聞いた瞬間不機嫌そうな声色に帰る。

「いったいどうしたんだ?」

「なあに、もうすぐ物語が一段落するからさ、その挨拶だ。」

木山先生の不機嫌そうな声色とは逆に俺はニヤニヤ笑いながら明るい声色で話す。

『君は……、ホントに私を不愉快にさせる。』

木山先生は心底嫌そうに言う。俺は相変わらずの明るい陽気な声で言う。

「本当のことだろ？木山先生の目論みは共感性が此方にバレた時点で終了のお知らせが鳴り響いているよ。」

『だが……、バレる事は無かったかもしれない。』

木山先生は俺と会話がしたくないようで無理に話題を変える。

「こつちには常盤台の優秀な御方が二人もいるんでね。これでも遅い方さ。もしもバレ無かったとしても、俺がバラしてる。」

『君は……、生粋の悪人らしいな。』

「当たり前だ。悪人じゃなけりや劇的な生活はできんよ。」

『君は平和を生きるため善人になるより、劇的に生きるために悪人になったほうが良いというのか？』

「当たり前だろ？それにアンタのそれは前提からおかしい。平和を生きるため善人になる？善人ってのは聖人君子しか当てはまらない。世の中は偽善者で溢れているさ。そんな中途半端で善人気取って平和を歩むなら、悪人になって劇的に生きたほうがいい。悪人には際



限が無いからな。それに俺は偽善ぶって生きるのは嫌いだ。自分を騙しているからな。」

『君は……、ホントに変わっている。』

「誉め言葉として受け取っておくよ。」

俺はくつくつと笑い、木山先生に話す。

「それで？初春がそちらに向かったようだけど？初春は聡いからすぐに木山先生の目論みはバレると思うんだが、バレたらどうするの？」

『君は友達を心配しないのか？』

木山先生が俺にそういつてくる。

「俺は身内には甘いけど、それ以上に厳しいんさ。初春はあんななりだが風紀委員の端くれ。心配しないさ、信頼しているからな。」

俺がそういつと木山先生が息を呑む。

『……驚いたな、君からそんな言葉が出るなんて。てつきり「そんな事するわけないだろう」、と言いつと思つていた。君にも人間らしさは有るんだな。』

「失礼だな。俺は人間じゃないかも知れねーが身内は大切なんでね。」

俺は苦笑しながら木山先生に言う。

「さて、話は此迄だ。後は木山先生と戦っただけだな。楽しみにしているよ。」

『私は君とはもう二度と話したくないな。』

ガチャツ、ツー、ツー、ツー……

木山先生はそういったあと電話を一方的に切る。

「また振られたか……。」

俺は携帯を見てほくそ笑む。

「だがこれで物語は終演を迎える。楽しみだな。」

俺は一七七支部のノブに手を掛けて、中に入る。最初に聞こえてきたのは黒子の怒号だった。

「初春！……どういふ事ですよ！！初春！！」

「黒子、落ち着け。」

「あぁっ！……」

俺は黒子から携帯を取り上げる。

「で、どうした初春。落ち着いて話せよ。」

『づぐっ、ひぐっ……佐天さんがあ……佐天さんがあ……。』

「落ち着けて。」

『佐天さんがあ……。』

「落ち着けてっ！！」

『！！！！！！！』

俺が携帯で聞いても初春は泣きじゃくるばかり。俺は怒号で黙らせる。

「落ち着け……、な？残酷だがお前が今そこで泣いたからって何か変わるわけじゃない。ならそこでなに出るか考える。」

『……………はい。』

俺は優しく初春を促す。初春は少し落ち着いたようでは話しはじめる。

『佐天さんが……………幻想御手を使って……………、意識が無いんです。』

「状況は分かった。なら今の初春、お前なら何をすべきか分かるだろ。」

『はい。』

俺の言葉に初春の力のこもった返事が返ってくる。

『あの、ありがとうございます。それでは。』

初春はその後俺に礼を言った後に携帯を切る。

「はあ。」

俺は黒子の携帯を切り、デスクにもたれかかる。

「それで？どうなりましたの？」

黒子が俺から携帯を受け取り聞いてくる。

「佐天が幻想御手を使って意識不明になった。」

「「なっ……！」」

「初春が多分救急車を呼んだだろう。収容されるならあの病院だな。」

俺は携帯のGPSを開き、立ち上がる。

「取り敢えず様子を見に行くぞ。」

俺は二人を見ながら言う。

「ええ。(はい。)」

二人から返事が返ってきたところで俺たちは出入口から外に出た。物語が終わるのは後少しだ。

冥土返し(前書き)

遅れてすみません!!

今回はあの蛙顔が登場します。楽しみにしてください。

## 冥土返し

「ふう、ついたか。」

「はあ、はあ。近衛、早く!！」

「落ち着けて。」

7月24日、午前11時。俺たち三人はある病院に着いた。第七学区内にある総合病院で幻想御手の使用による昏睡者が全員収容されている。勿論、佐天もだ。

「取り敢えず俺は受付に佐天が何号室か聞いてくる。お前らはロビーで落ち着いてる。」

「……………うん。」

俺は黒子と御坂をロビーにおいて受付に向かう。

「すみません。」

「はい。」

「ここに運ばれた佐天涙子の病室は何号室ですか?」

「面会ですね。特別棟の702号室ですね。」

「ありがとうございます。」

俺は受付嬢に礼を言った後、御坂と黒子の元に向かう。

「どっっつて?」

「何処ですか?」

「……………マジお前ら落ち着けよ。」

俺は戻った瞬間掴み掛かってくる御坂と黒子を抑えて宥める。

「はあ……………、佐天は特別棟の702号室だ。」

「よし、行くわよ黒子!!」

「はい、お姉さま!!」

俺が病室番号を教えると、焦りながら二人で向かう。……………逆方向へ。

「はあ……………、マジで馬鹿。」

おーい、お前等そっちは逆だ!」

「えっ?」

「えっ?、じゃねーよ。もうお前等心配だわ。」

俺は逆方向に行く二人を呼び止めて、肩を掴んで引き摺っていく。

ズルズルズル……

「ちよつ、ちよつと！恥ずかしいんだけど……。」

「さつき迄のお前の方が百万倍恥ずかしいわ。……そんな目で睨むなよ。佐天の事が心配なんは分かってるから。」

俺は睨んでくる御坂を諭して特別棟に向かう。……常盤台コンビ  
つて曲者多すぎだろ。

……

俺たちは今、特別棟702号室の前にいる。

「失礼します。」

俺はその部屋に入る。中には幻想御手の使用者が8人いた。何人かは知っている顔だった。

「この発火能力者、幻想御手使用者だったんだ……。」

「眉毛事件の方も虚空爆破事件の方もですわ。」

「つまり、あの時点で物語が始まっていたわけだ。」

俺は発火能力者やらを見ながら言う。てか黒子……、眉毛事件で。



「ふうん、やはりと言うか分かってはいたが、流石にまともに面会できる雰囲気ではねーな。」

俺は色とりどりのチューブやケーブルで計器に繋がれた佐天を見る。

「そうね。……………出ましようか。」

「そうですね。」

御坂と黒子は暗い顔をしながら部屋を出ていく。

「友達思いだねー。それが偽善でも同情でも。お涙頂戴の物語としては最適だ。」

俺はもう一度佐天を見る……………、いや、見下しながら言う。

「まあ、お前のお陰で御坂が舞台上が上がってくる。そこは感謝してやるよ。俺は自分から過ちを犯した人間に同情も嫌悪もする高貴な感情は持ち合わせてないからな。」

俺はそう言って、いつもの半目の眠そうな顔に戻した後病室を出る。

「私、佐天さんがあそこまで追い詰められているなんて思ってもみなかった……………」

「お姉さま……………」

俺が病室から出て少し歩いたところにあるベンチに向かう。

「御坂、こんなところでうだうだするな。」

「近衛……………」

俺が御坂に声をかけると御坂は頭をあげる。

「お前がこんなところで悩んでたって何もかわらない。なら、やる事はなんだ？ 佐天を少しでも早く幻想御手の呪縛から解放してやることだろ？」

「近衛……………！！」

俺はニコツと笑いながら御坂に言う。御坂の顔に明るみが戻る。

「（嘘つきなのは前から分かってたが、先と後で全く言っている事が違うとはね。）」

俺は二人にばれないようにほくそ笑む。

「それじゃあ、行きましようか。」

「ちょっと待ってくれないかな？」

御坂がベンチから立ち上がり、歩きだそうとすると後ろから声をかけられる。

「えっ？」

……………リアルゲコ太！？」

「違いますわよ、お姉さま。」

「でもIDカードに蛙のシール貼ってあるとこ見ると、あながち認めてるかもな。言われなれてるだろうし。」

声をかけてきた人物は“冥土返し（ヘヴンスキャンセラー）”だった。マジで蛙顔だ。正確に言つと毒。

「まあ、君たちついてきなさい。あの患者たちについて話がある。」

「?????」

「まあ、先生が呼んでいるんですし行きましょう?」

「だな。」

冥土返しが手招きしながら歩く。俺たちは案内された部屋に入った。

「これを見てくれ。」

「これは?」

冥土返しの前にはパソコン。それには幾つか折れ線グラフが表されていた。

「患者の脳波パターンか。」

「よく分かったね。」

俺がそれを見て呟くと、冥土返しは驚いた声色でそっぴい此方を見

る。

「昔、これを研究している奴にあったことがあるからな。」

「そうなのかね。」

上のは勿論嘘。まあ、会ったことは無いが知識として知っている奴がいるからな。クリステイナーとか芳川桔梗とか、木山先生とか。

「まあ、取り敢えず彼の言う通りこれは幻想御手により昏睡した患者たちの脳波パターンな訳だが、本題はこれからだ。」

そういつて冥土返しはパソコンを軽く操作する。そうするとパソコンの幾つもの脳波パターンが重なり一つになる。

「見てのとおりグラフを重ねたんだが、見てみるとグラフは同じ脳波パターンを示しているのが分かるかな？」

「本当ですわね。」

冥土返しの言う通り、幾つもの脳波パターンのグラフがピタリとは言わないがほぼ重なっているのが見て取れた。

「つまり、幻想御手を使った人の脳波パターンは同じになっている……と言う事ですか？」

「正確に言えば、なっている、ではなく、された、と言ったほうが正解だね。」

御坂の言葉にやんわりと冥土返しが返答する。

「幻想御手を利用した人間の脳波パターンが同じにされる、と言う事はこの脳波パターンの人間が幻想御手の製作者だな。」

「……………君はつくづく聡いね。本当に中学生か？」

「アンタ、何回も言うようだけど何でも知っているのね。」

「何でもは知らねーさ。知っていることだけだ。何度も言うようだけど。それと俺はしがない中学生だ。」

俺がグラフを見ながらさういうと冥土返しはかなり驚いた顔で此方を見る。まあ、原作を知っているから何ていえないからな。

「彼の言う通り、この脳波パターンの元になったのはこの幻想御手の製作者だと考えられるね。」

「分かりました。その線で調査をします。」

冥土返しの言葉に白井がメモを取る。

「それでも、何で製作者は自分の脳波パターンなんて足のつく物を幻想御手に使ったんだろ？」

「そうしないといけなかったから、しかないな。」

「だろうね。患者も無理に脳波パターンを変えられたから、つまり超能力回路を無理に変えられたから脳が危険を感じて昏睡という行動をとらせただと思っね。」

御坂の問いは簡単で、だから一つしか答えの無いものだった。

「流石、冥土返しだな。そこまで分かるなんて。」

「冥土返し？」

「この人の異名だよ。」

俺が冥土返しにそういつと黒子が聞いてくる。

「君は……、僕の異名まで知っているのか。」

「その道の人にとっては超有名だぜ？死なない限り何でも治す、つてな。」

俺がほくそ笑むのと同時に冥土返しは訝しげに俺を見る。

「そうなんですの。」

「……まあ、そう呼ばれているね。」

話は戻るが、僕が出来るのは彼の言う通り患者を治すことだ。僕も出来る限りの事はするがまだ判断材料が少ない。それを見つけて、彼らを助けるのは君たちだ。やってくれるね？」

「ええ、勿論ですわ。」

冥土返しは無理に話を変える。まあ、あまり知られてはならない異名だからな。そしてあまり知られていないその異名を知っている俺

に対する牽制だろう。

「このデータは君たちに渡しておく。良い結果を期待しているよ。」

「ええ、任せてくださいまし。」

冥土返しはUSBメモリーを黒子に渡す。黒子はそれを受け取りポケットに入れる。

「それでは、有用な情報をありがとうございます。」

「ああ、それで多くの人が救われるのならね。」

黒子、俺、御坂は部屋の出入口に立ち、お礼を言う。

「それでは。」

そして黒子、御坂、俺の順に部屋を出る。

「……………アレイスター・クロウリー。」

「……………。」

それと同時にそういつて、ほほ笑みながら部屋を後にする。

「……………彼もあいつの駒なのか、それとも……………、あいつを変えてくれるものなのか……………」

俺たちが去った後に冥土返しの言葉が聞こえた気がした。

.....

「ねえ、黒子、近衛。話があるんだけど。」

「何ですか?」

「ああ、なんだ?」

「ちょっと.....ね?」

冥土返しの部屋から少し歩いたところで御坂が立ち止まり此方を見る。俺たちは少し言いずらそうな御坂の後について、屋上に行く。

.....

時刻はまだ一時半。空は青く澄み渡っていた。

「あのね、佐天さんのバッグについてる御守り、あるでしょ?」

「えっ?.....ああ、あれですよ。」

黒子が顎に人差し指を当てて、考える。

「あれがどうしたんだ?」



「あれね……………、お母さんに貰ったんだって。学園都市にくる前に。」

御坂は佐天といつかに話したことを話しだす。

「へえ、そんな事をお姉さまに。」

「科学の街にお守りとはなかなか素敵じゃないか。」

俺は二ヘラと黒子は少し考え込みながら言う。

「私ね、最初レベル1だったでしょ？私ってさ目の前にハードルがあると飛び越えたいくなるたちでしょ？」

「知らんがな。因みに俺は目の前にハードルがあったら、飛び越えず破壊するか、迂回するな。」

「貴方の事は聞いてませんわ。」

「話の腰を折るんじゃないのー!!」

「……………はい。」

俺は御坂の話のハードルの下りから口を挟む。でも、御坂は電撃を出して、黒子は鉄針を出して凄む。……………評判悪いな。

「まあ、話を戻すけど、私ってさっきも言った通りハードルがあると飛び越えたいくなるたちでしょ？だからがむしゃらに勉強して、能力開発してきたんだ。だから私は何時の間にもレベル5になっていた

「感じだから、私、能力にそれほどこだわりを持っていないんだよね。」

「傲慢だな。」

「うん、分かってる。」

「御坂にしてはなかなか静かだ。禁書では当麻にレベル5とかなんとか言ってたのに。」

「私ね、今回の事でわかったの。レベル5だって事はどっいつ事で、無能力者がどんな事を思っているのか。」

「お姉さま……………」

「まあ、それすらも傲慢だな。」

「えっ?」

俺の言葉に反応する御坂。

「同情は上のものから下のものにすればただの嫌味だ。逆もしかりだな。」

「アンタ……………」

「俺は同情も嫌悪もしねーよ。正直、個人の才能には努力は越えられないからな。なら俺はそいつの才能を見つけてやる。」

「アンタは教育者か……………」

俺は飄々とした感じでさういう。御坂は俺の答えに呆れたようで、はあ、と溜め息をついている。

「まあ、近衛の言う通り傲慢で同情しているかもしれない。その上で私は思ったの。」

御坂はそういいながらフェンスを掴み、此方を見る。

「友達を助けたいって。」

「お姉さま……………」

「はあ……………」

黒子がうつとりしながら御坂を見る。俺は手を肩の横にして、首を横にふる。やれやれ、と。

「だからさ、私も捜査に参加させて。」

「はあ、まあお姉さまがいれば捜査も捗りますしね。」

「それに御坂がいれば面白くなるしな。」

「やっぱり、アンタはそこなのね。」

御坂は俺の答えに目に見えるほど呆れる。

「それじゃあ、早速戻りましょう。」

「ああ。」

「ええ。」

黒子の号令に俺と御坂は返事をして屋上から出る。

## 事実（前書き）

今回はバトル成分多めです

稚拙な文ですが楽しんで貰えたら幸いです。

## 事実

「さて、犯人探しと洒落こもつか？」

「そうね。」

俺たち三人が一七七支部についたのは二時頃。そろそろ固法先輩が戻ってくるだろう。

「さて、脳波パターンを調べたいんですけども……………、何で調べましょう。」

「バンクで良いだろ？」

「初春以外、許可なしでは使えませんの。全く、こんな時に居ないなんて使えませんわね、初春。」

「……………ひでえ奴だな、お前。」

「貴方に言われたく有りませんわ。」

黒子がパソコンの前でウンウン唸っている。バンクを使えば一発即決で犯人確定なんだが、生憎バンクは許可制。特例の許可なしで使える初春は除くが、一般の風紀委員は支部長の許可とバンク使用申請を出して許可してもらわないと使えない。

「あら、どうしたの？」

「あつ、固法先輩……………。」

そろそろかと思って掛け時計をチラッと見ると、出入口から固法先輩が入ってくる。

「いや、幻想御手の有用な証拠が出てきましたね。それを調査するのにバンク使用許可がね、欲しいかな、と。」

俺は冥土返しから貰ったUSBメモリーをパソコンにさして、固法先輩に脳波パターンを見せながら病院での出来事を話す。

「それならバンクの使用許可も降りると思うわ。」

固法先輩は俺の話聞いた後、パソコンの前に座り、バンクの使用パスワードを打ち込む。

「バンクには能力開発をした学生は勿論、ここで働いている一般人や教員とかの情報がついているからね。」

固法先輩が話している横で、俺はパソコンが脳波パターンを洗い出しているのを見る。

「それにしても、どうして能力者は幻想御手を使うと同一の脳波パターンが刻み込まれるのかしら。」

「しかも脳波が同じになる程度で能力アップは出来ないでしょうし、さっぱり謎ですわ。」

御坂の問いに黒子が訝しげに言う。

「コンピューターだってただのソフトを組み込んだからって性能が上がるわけないけど。ネットワークに繋ぐならいざ知らず。」

「ネットワークに繋ぐだけでパソコンって性能が上がるんですか？」

「パソコン個々の性能が上がるわけじゃないけど、並列に繋ぐことで処理速度は上がるわ。」

御坂の問いに固法先輩はパソコンを見ながら言う。

「そうか、幻想御手を使って脳のネットワークを繋いでたんだ。」

……でもどうやって？私たちが使っている能力は謂わば様々なコンピューターの基本OSの様なもの。ネットワークなんて繋げないと思うんだけど。」

御坂は考え込みながら言う。

「確かに、コンピューターは基本OSが違うから基本的にはネットワークは繋がらないわ。けど私たちのパソコンがネットワークで繋がっているのはプロトコルがあるからでしょ？」

「成る程、幻想御手を媒介に使う事でネットワークが繋がるようにしているのね。だから脳波パターンが同じになる。」

「ええ、それであっていると思うわ。」

御坂と固法先輩がウンウンと首を縦に振っていると、黒子から質問が飛び出す。



「しかし……………、幻想御手はどのようにして脳のネットワークを構築しているんでしょう？」

「考えられるとしたら、エー……………」AIM拡散力場だ。……………えっ？」

黒子の質問に俺が答える。……………まあ、これくらいならなんとかなるレベルだ。

「何故そう思われますの？」

「勘に理由が必要か？」

「……………」

俺が何時ものごとくニヤニヤしながら言つと、黒子も何時ものごとく呆れる。……………何時ものごとく呆れるって結構ヤバくないか？

ピー……………

「終わったわね。」

「出たわね。えーっと……………」

えっ！？嘘……………」

「どっしたんですの？お姉さま……………」嘘でしょっ？」

「木山、春生……………か。」

俺たちの問答の後にパソコンがピーと電子音を出す。やはり出てきた人物は木山先生だった。まあ、こんなところで原作ブレイクをしていたら目もあてられないな。

「初春が！！」

「初春さんが……どうしたの？」

「初春さん、今木山先生の所に言ってるんです。」

「もう捕まってるだろうな。時間的に。」

固法先輩の質問に顔を暗くする二人。

「取り敢えず、警備員に連絡だな。木山春生の確保。人質あり、つて。序でに木山先生の研究所に入った場合、パソコンは触らないように、つて。」

「分かりましたわ。」

俺の言葉に黒子がいち早く復帰して口紅のような携帯を取り出してスリットを出して警備員に連絡する。

「なんでパソコンは触らないように、なの？」

「あの人のことだ。多分これを想定してパスワードを掛けてあるはずだ。パスワードなしでパソコンを起動すればデータが消えるような。だからデータを残すためにもな。」

「成る程ね。」

俺の言葉に御坂は納得したように首を縦に振る。

「それじゃあ、黒子はバックアップに回ってくれ。肩、怪我してんだろ？」

「しょうがないですわね。」

俺は耳に付けるタイプの無線を付ける。

「黒子は御坂、固法先輩は俺のバックアップをお願いします。回線はオープンにしておきますが。」

「分かったわ。」

俺はそっぴいなながら携帯を取り出す。固法先輩は耳に俺と同じ無線を付ける。

「俺は先行するから、御坂はタクシーかなんかで来てくれ。」

「了解。」

「じゃあな。」

俺はそう言った後レポートで屋上まで跳ぶ。俺はそこで一時的に無線を切り、コミュニケーションを開く。

「小夜。」

『何？お仕事？』

その電話の相手は近衛小夜。

……しかし、小夜。お仕事って、

「いちいち可愛いな、小夜は。流石俺の妹だ。」

『えへへ。』

「かーわーいーいー!!」

なんだか話が続かない気がするから割愛。

「取り敢えず、小夜。お仕事だ。仕事内容はA I M拡散力場研究所の木山春生の部屋のパソコンから幻想御手のデータを取ってくることだ。方法はどんなでもいいぞ。」

『蛇大佐みたいにスニークキングミッション?』

「そうだな。警備員がいるが暗部で訓練してるお前なら付け焼き刃でもなんとかなる。練習としてはもってこいだろ。」

俺が仕事内容を言うと小夜が少し興奮しながら行ってくる。こないだ外から取り寄せた、鋼歯車（メタル ア）なるものをやらせたら凄く興奮してたからな。

『一応、学園都市の警察機関を練習台なんて戸隠、なかなか恐れ多い。』

「あんなの教師に少し毛が生えた程度だ。気を付けるべきなのは学園都市製の最新火器だけだ。」

『分かった。取り敢えず頑張ってハッキングしてみるけど無理っぽ

そうだったらパチってく。』

「期待してるよ。武器はどれでも好きな奴持ってきな。」

『ありがとう。』

俺はコミュニケーションを閉じて無線の電源を付ける。上の会話からも分かるように小夜は実は凄腕ハッカーなのだ。初春には及ばんが。

『近衛くん、木山春生は車で第七学区内の高速道路を走ってるみたい。場所は携帯に送り続けるから。』

「了解。」

俺が再度コミュニケーションを広げると携帯にGPSで常に木山先生の車の位置が現れる。

『それと警備員が検問しているけど風紀委員の腕章を見せればなんとかなるわ。』

「（それまで警備員が残ってりゃな。）了解つす。」

『気をつけてね。』

固法先輩の心配の声を最後に俺は空間移動を発動する。

「さあて、俺の秘密が幾つかバレるかもな。」

俺はそういいながら移動をする。

「近衛くん、気をつけて。木山は能力を使用しているわ。しかも複数。警備員が壊滅するのも時間の問題ね。」

「複数の能力は予想してましたよ。何せあの人は幻想御手の元なんだからな。」

「そう、なら大丈夫ね。」

固法先輩の声を聞いた後に辺りを見回すと御坂が電撃でフェンスの電子キーを破壊しているのが見えた。

「そろそろ行くか。不甲斐ない警備員が壊滅しそうだし。」

俺はそういいながら移動をする。

シュン！！

「君には、いや君たちにはこの一万の脳を統べる私に勝てるかな？」

「勝てるかな、ですって？」

「勝てるじゃなくて、勝つんだよ。」

俺が空間移動で御坂の横に立つと木山先生が此方を見る。

「よお、木山先生。」

「……………やはり来たのか。」

「当たり前だろ？こんなおもしれーもの抜かせるかよ。」

俺は嫌悪感たつぷりな木山先生に挑発しながらトンファーを出す。

「やはり君の判断基準はそこなんだな。人の想いを踏み躪るのが本当に好きだな。」

「ドSだからな。」

俺がトンファーを眺めながら言うと、木山先生は興味なさそうに辺りを見回す。

「……………君が言伝したのかい？」

「何がだ？」

「警備員が出張ってくるのが早すぎる。それに私の研究所のパソコンも弄られていないようだからな。てつきり君が幻想御手の事について話したのかと思ったよ。」

「残念。これは常盤台コンビの実力だ。言っただろ？アンタの目論見は必ず消え失せる運命にあるって。」

「……………そう言えばそうだったな。」

俺と木山先生が話していると横から御坂が横やりを入れる。

「……………アンタ、どういうことよ。」

どうやら今の会話で御坂が何か気付いたらしい。勿論、初春も固法先輩も黒子もだ。

「……………あーあ、ばれちゃった。木山先生の所為で。」

「答えなさい！！」

俺が飄々とした感じで言うと、御坂は激昂し掴み掛かってくる。俺はそれをバツクステップで避ける。

「そんなにキレルなよ。」

まあどういう事が答えると、俺は幻想御手の原理も、佐天が幻想御手を手にしていた事も、使う事も、製作者も、どんな目的で造ったのかも知っていただけだ。」

『『『「なっ！！」「』『』』

御坂だけでなく、通信回線で聞いていた黒子も固法先輩も初春も驚いていた。……………まあ、当たり前だろうなあ。

「いつから知っていたの……………?」

「7月16日。銀行事件のときからだ。まあその時の俺の様子に黒子だけが疑ってたみたいだからな。気付かないのも無理はない。」



まるで聞きたくないものを聞くように御坂が聞いてくる。俺は相変わらずニヤニヤしているだろう顔をなぞる。

「どっという事、黒子……………」。

『あの時彼は、銀行が爆破される前に、「……………くるな……………」と呟いていたんですの……………」』

黒子がまるで失望したかのような声色で言う。

「“彼”とは他人行儀だな。黒子。」

『……………知りませんわ。』

俺が笑いながら言うと、黒子はドスのきいた声で言ってくる。酷いなあ。

「アンタ……………、何で言わなかったの？」

「あの時点で言ったら、変な目で見られるだろ？」

「アンタは……………、人を守ろうとか思わないの!？」

俺が悪怖れもなく言うと、御坂は此方を凄みながら叫ぶ。

「思わないね。」

「えっ……………?」

「なんで俺が世のため人のために働かなくちゃいけない?俺は今ま

でチャイルドエラーで蔑まれてきたんだ。なら、なんでそんな人間のために働かなくちゃいけないんだ？」

「……………それは……………」

俺の言葉に俯く御坂。まあ実はこの話はホント。此方の世界に跳ばされるまで俺は前の世界でいつも孤独だった。三歳のときに親が事故で死んだ。まあ、それはしょうがないと思った。運命だとね。俺はやはり親戚のところに行くのだが、忘れているかもしれないが俺は遺跡の管理人のクローン。力を抑えられていたとしても力の片鱗が合間見えた。三歳には見えない記憶力や洞察力、中学、高校で通うする頭脳。中学生程度なら相手を取れるくらいの身体能力。だから親戚一同に気味悪がられ、結局一人になった。元々ずれていた性格なので気にもしなかったが、この一件からだろうな、俺の性格が荒んだ物になったのは。もっともずっと一人だったので自分の性格が荒んでいる、異常なものだと気付いたのはこの世界に来てからだった。

「まあ、もつともそれすら建前だな。元々俺にはそんな高貴な考え方はねーんだよ、悪人だからな。ホントは楽しみたかったただけだな、物語を。」

「アンタは……………」

俺が、かははと笑いながら言うつと御坂は何かいいたそうにする。

「話はこれが終わってからにしよう。木山先生が退屈そうだ。俺も退屈だけ。」

「君の話は興味深かったよ。人はここまで落ちれるのかとね。」

「ほざけ。どの口が言うか。」

俺は片手のトンファーをCZ75に変えて発砲する。

パン！！

「あ、アンタ何を……！！！」

「戦いの前に無粋なカメラは必要ないだろ？破壊しただけだ。」

俺はCZ75を戻し、トンファーに変えて、警備員の方に瞬間で向かう。

ドオン！！

俺が警備員のところに向かうと、警備ロボが全て破壊される。まあ俺が壊したただけだな。

「さあ、舞台は整ったぜ。殺しあいを始めようか、木山先生？」

「私は誰も犠牲にはしたくないんだが。」

「能力使ってる奴には言われたかねーな。しかしおもしれー！！マールチスキル！！」

俺が木山先生の方を見た瞬間に風の刃が此方に向かってくる。

シュウウン！！

俺はそれを右に避けるが、

「私は演算速度が上がっているが、処理速度もあがっているんだ。」  
その先に風の刃が三枚此方に来る。

「甘いな、木山先生！！俺の能力を忘れてもらっちゃ困る。」

俺はそれを空間移動で後ろに跳び、警備員の一人を掴んで盾にする。

「普通に避ければよかつただろう？鬼か、君は……………」

……………おっと。」

「アンタの事を認めたわけじゃないけど今は手伝ってやるわ。」

木山先生がその後、能力行使に手を振ろうとしたところ御坂の電撃を放たれる。

「はん、認められるも認められないも関係ねーよ。俺の悪事は人を遠からず救うんだからな。不本意だが。」

俺はトンファーを構えて、避雷針らしきもので電撃を避けた木山先生に詰め寄る。

「君は本当に私を不愉快にさせる！！」

キュイン！チュドオオオン！！！！

「うおっと！！」

木山先生は地面に衝撃波を走らせて高架道路を破壊する。俺と御坂は自由落下を始めるが、御坂は電磁力で柱の鉄筋に磁力で介入し掴まる。俺は……………

「君は化け物か……………。」

めだかボックスの都城王土の様に柱に何もせずに直立に立つ。

「ただ足の指で捕まっているだけだ。訓練すれば誰だってできる。」

「君だけだと思っがな。」

俺は木山先生の言葉を流しながら、柱を下に歩いていく。

「まあ君は規格外だとしても、常盤台のお嬢様には拍子抜けだな。」

木山先生は俺には舌戦は無駄だと悟ったか御坂を挑発する。

「何ですって……………？確かに私は近衛みたいじゃないけど……………。」

ポコン！！

御坂は罫が入り、塊になった鉄筋コンクリートを磁力でジェンガの様に抜き取り、掴む。

「嘗められる道理は無いわ！！」

そしてそれを木山先生に向けて投げる。

「浅はかだな。」

しかし木山先生は発火能力の応用によって出来たライトセーバーで横風ぎに吹き飛ばす。

「あれ?!」

「私には勝てんよ、君は。」

上から御坂のほうけた声が聞こえたと思ったら、木山先生により柱から切り取られた石柱につかまったままの御坂が石柱とともに落ちてくる。……………あれ?直撃コース?

「うおっ!?!」

ドオン……………!?!

上から落ちてきた石柱を空間移動で避ける。もちろん御坂は助けていない。

「ゴホッ、ゴホッ!?!」

「哀れだな、御坂。」

俺は下で土煙により咳き込む御坂の横に立つ。

「五月蠅いわね。」

……………近衛はほつといて、なんで木山先生はこんなことをするんで

すか！！色んな人を犠牲にして！！」

「……………はあ、常盤台と言っても所詮世間知らずのお嬢様だな。その点では近衛とやらは褒められる。」

「何ですって……………！！」

御坂は俺をにらんだ後木山先生に叫ぶ。……………感情の起伏が激しい人間は苦手だな、俺は。当麻を除いて。

「なら聞くが、君たちが行っている能力開発。それが本当に安全で人道的なものだと思っっているのか？あれを行う上の連中はきつと何かを、能力開発に関する重要な何かを隠している。それが信頼の置けるものだと思っっているのか！」

「興味深い話っぱいけどアンタを倒してからゆっくり調べるわ！！」

木山先生の言葉に御坂は砂鉄で出来た槍のようなもので木山先生を襲う。俺はその間に柱から降りて、考える。

「（確かにアレイスターは色々と隠しているな。虚数学区・五行機関に体晶なんかは軽い方。能力開発はヒューズ「カザキリからエイワスを作るもののプロセスだからな。そんなものは一般には言えない。魔術の存在を肯定するようなものだからな。」

俺はクスクス笑いながら二人に近づく。因みに今は御坂が空き缶爆弾を爆撃したところだ。

「……………君は愚かだ。」

「どうよー!!」

御坂は木山先生の眩きも空間移動した空き缶爆弾に気付いてない。  
ホント愚かだ。

キュイイイイン!!

「なっ……………!!」

チユドオオオン!!!!!!

そして御坂は爆風と砂礫に埋もれて倒れ付す。木山先生は此方を見る。

「次は君だ。君も私を止めるんだろう?」

「何勘違いしてんだ?俺はもう十分だ。止める気もねーよ。」

俺は木山先生に飄々という。木山先生はそうか、と眩いて後ろを向き、歩きだす。

「けど、止められないとは言っていないぜ。」

「な、何!?!」

俺がそう言った瞬間に御坂が木山先生の腹部に抱き付く。

「何てっ たっ て御坂が止めるんだからな。」

「く、くそっ!?!?!」



木山先生は御坂を振りほどこうと能力で土の槍を造る。だが、

「遅い!!!」

御坂の方が早かった。

「ぐああああ!!!」

「ふう……………」

御坂の電撃が炸裂して木山先生が倒れ付す。物語はセカンドフェイズに移行した。

中間点 木山春生の記憶。学園都市の闇（前書き）

今回はA I Mバーストとの戦闘の中間点です。木山先生の記憶はとぎれとぎれですが書いてあります。楽しんでいただけると幸いです。

中間点 木山春生の記憶。学園都市の闇

「ふう。」

木山先生が御坂の電撃に気絶して、倒れるが御坂に抱えられる。

「鬼だな、御坂。」

「ホントの鬼に言われたくないわ。」

「鬼畜ってか？巧いねえ。」

「……………アンタに落ち込むって感情は無いのかしら。」

俺が自虐的に笑うと御坂が呆れる。

「これで終わり……………つつ！！！」

御坂が木山先生を地面に降ろそうとすると、脳裏に小学生らしき子どもたちが映る。

『木山先生！』

そして、春上衿衣だったかが探している枝先絆里が映り、木山先生の記憶が再生される。

木原幻生によりチャイルドエラーの小学校教諭をさせられた事。嫌々ながらも小学生と遊び、学び、ときにはからかわれたりしながらいつしかこの生活が楽しいと感じていたり。雨で濡れている女の子を家に招いて、チャイルドエラーの扱いを知る。お風呂すらまと

もに入れない。食べ物も乏しい。そんな生活である事。俺のチャイルドエラーであったとされる造られた過去の記録もそんな感じだった。そしてある日、木原幻生にある実験をするように命じられる。AIM拡散力場制御実験。その名の通りAIM拡散力場を制御出来るかどうかの実験。被験者は木山先生の教え子たちであるチャイルドエラーたち。枝先絆里の姿もある。

『不安か？』

『ううん、平気だよ！だって先生の実験何でしょ？全然大丈夫だよ！！』

木山先生の言葉に明るく答える枝先絆里。そして機械を頭につける枝先絆里。計器をつけてその部屋を出る。

次の記憶はその実験の失敗だった。子どもたちの制御が出来なくなり、木山先生は絶望する。助けに行こうと立ち上がるが横にいる木原幻生に止められる。

『いやいや、いいよ木山先生。』

『し、しかし……！』

『それよりも面白いデータが採れるんだ。皆はこれを秘密にするんだよ。』

木原幻生から喊口令が敷かれて木山先生は初めて気付く。この実験はブラフである事を。後に調べて明らかになるが、これは暴走能力の法則解析用誘爆実験の隠れ蓑にしか過ぎない事を。

木山先生が枝先絆里の所に行ったときには既に絆里は別の場所に収容されていた。もちろん他の子たちも。枝先絆里の寝ていたベッド

には血と血に塗れたカチユーシヤが残っていた。そして子どもたちは昏睡状態になり、行方もしれなくなる。そこで木山先生の記憶の再生は途切れた。

「あつ……………」

ドサツ……………」

御坂は木山先生を地面に落とす。木山先生はさっきの衝撃で目が覚めたようだ。御坂はもちろん、御坂のAIM拡散力場により記憶が周りに洩れたために初春にも記憶が流れて、悲痛な顔をしている。

「私の……………、記憶を見たのか……………」

「あ、ああ……………。ホントにあんな事が……………」

「あるんだよ。」

御坂の言葉に俺は過去の記録を独白する。

「俺だつてあそこ迄はされなかった。こんななりだからその手の男には人気でな。性的暴行は普通だったよ。俺はなんとか貞操を守り切ったが、女の子たちなんか一瞬で拘束されて一日中何十人も男たちにやられまくってたよ。薬を投与されて、目も死んでたな。普通のチャイルドエラー保護施設はそんな事は一切無いが、ちよつと度合いがかわるだけでこれだ。」

「アンタも……………」

俺がそういうと御坂が悲痛そうな目で見てくる。

「別に同情なんかいらぬな。されても意味がねーからな。俺の恨みが晴るわけじゃねーからな。元々恨みなんざないが。」

『しかし！バンクにそのような記述は………！』

俺がそういうと黒子が無線ごしに叫んでくる。

「馬鹿だなお前。チャイルドエラーの保護は学園都市上層部の直轄だぜ？俺のことも木山先生の事も全部上層部の人間の仕業さ。自分の研究欲、性欲を満たすためのな。上層部ならバンクの書き換えなら赤子の手を捻るようになれるさ。」

『そ……んな………。』

黒子の絶望が耳に聞こえる。まあそんなのどうでも良いが。

「なあ木山先生？」

「ああ、そうだな。」

ときに常盤台のお嬢様。」

「何よ。」

「23回、これは何の数字かわかるか？」

俺が木山先生に話し掛けると木山先生は少しして御坂を見る。

「何よ、それ。」

「私が子どもたちを助けるためのシミュレーションをするためにツリーダイアグラムの使用申請をした回数だよ。」

「なっ……………!!！」

「彼の言う通りあの実験は学園都市統括の実験だったのさ。その回数が物語っているよ。」

「警備員には言わなかったの!？」

木山先生の言葉に御坂は叫ぶ。木山先生は自嘲的に笑う。

「警備員だつて学園都市直轄の組織さ。私が何度実験の事を言つたつて相手にされなかつた。それどころかあの実験の情報さえもみ消されていたよ。」

「けど……………!!！」

御坂の言葉を遮り、木山先生は御坂を睨む。

「私は決意した。どんな手を使つても彼女達を救つて。彼の言い種では無いが私は悪人になつてもこれを止める訳には、

いかないんだ!!!!!!!!

……………ぐう!!！」

木山先生がそう叫んだ瞬間、木山先生がいきなり頭を押さえて苦し

みだす。

「ちよっ、ちよっと!!!」

御坂が駆け寄ろうとすると木山先生の背中から腕のような羽のような布のような、異形が現れる。そして、

『

!!!!!!!!!!』

「たい……………じ……………?」

AIMバースト、虚数学区・五行機関が現れる。物語はソードフェイズへ移行した。



## AIMバースト（前書き）

今回は殆どバトル一色です。まあ近衛くんが強すぎますが、その辺はご愛嬌。スルーしていただけると幸いです。会話が今回は相当稚拙ですのでご了承ください。

## A I Mバースト

「胎児……………?」

「残念ながらちげーよ。木山先生が生みの親だつて事は共通してるが。」

俺が軽口を叩いていると、

『

』

胎児が大口開けて何とも言えない叫び声をあげる。

「あれが胎児に見えるか？」

「……………見えないわね……………」

俺が指差すはA I Mバースト。今現在は半透明の身体にギョロギョロした赤い目。背中から異形を何本も出して身体を空中五メートル程度で浮かせている。頭には光ながら回る輪っか。見ようによつては天使にも見える。……………まあ天使なんだけどな、人工の。

「まあ、やべえよな。あれ。」

「そうね。」

俺がトンファアを構えるとA I Mバーストは此方を見る。

『

『………』

キュイイイイン！！ズゴオオオオオ！！！！

「うおっ！！！」

「ちいいい！！！」

そして木山先生が使ったものよりずっと強い衝撃波を繰り出す。土煙と砂礫、土砂が舞散り、吹き飛び此方に飛んでくる。

「てえええい！！！」

御坂はそれを避けて電撃をAIMバーストに繰り出す。

「！！！！！！！！！！」

それはAIMバーストの背中を抉る。

「なっ！！！」

しかしその抉られた部分から羽のような手が現れて、さらに

「大きくなつた……。」

ぼこぼこ音を立てて大きくなる。

「！！！！！！！！！！」

AIMバーストはいなくなきながら氷の塊を五つ造ってこちらに放つ。  
………つて五つ！？原作では四つだろ？

「てえええい!!」

御坂は電撃を上空に放ち四つ氷の塊を破壊する。

「一つそつちに行つた!!」

「じゃあねーな。」

……………蹴とばす!!!!」

俺は此方に飛んできた氷の塊を右回し蹴りで粉碎する。

「……………やっぱ、怪物ね。アンタ。」

「うるせーよ。」

俺はAIMバーストを見る。AIMバーストは明後日の方向を見て動きだす。

「ただ、理由も無く暴れているだけ?」

「見たいだな、胎児らしくな。質が悪すぎてどうしようもないが。」

俺がそういうと、高速道路から多数の弾丸がAIMバーストに降り注ぐ。警備員のものだろう。

「おい、御坂!!」

「な、何?」

「俺は警備員を援護してくる。お前は後ろの初春を守ってる。」

「えっ！ちょ、ちょっと！！」

俺は御坂にそう言った後高速道路までテレポートする。

「援護しにきたぜ、警備員。不本意だがな。」

「だ、誰じゃんよお前！危ないじゃんよ！」

俺がテレポートした場所は横泉川愛穂の隣だった。

ガシヤツ！！

「じゃんじゃんうるせーんだよ。黙ってみてろ。」

「なっ！！お前なものじゃん？」

「ただの中学生だ。」

俺はガトリング砲を脇に抱えて二台、手に持ち二台、計四台出してAIMバーストに向ける。

「ぶっ飛べ！！！！！」

ズガガガガガガガガ！！！！！！

『……………』

俺がガトリング砲をぶつ放すとAIMバーストの身体に多少しか傷はつけられないが動きが止めれる。

「ギャハハハハ！木山先生も楽しかったがお前はもっとおもしろー！！！！」

俺はうち切ったガトリング砲をその辺に捨てて、次にRPG 7を二台出して、

「爆碎しな！！化け物が！！」

一気に撃つ。

シューウウウン！！ドオオン！！

『！！！！！！！！』

それは頭に直撃して爆発するが、やはり多少傷がつくだけ。逆にAIMバーストを挑発したみたいで背中 of 異形の羽を振るってくる。

「あぶねーな。俺じゃなきゃ死んでたぜえ？ギャハハハハ！！」

俺は空間移動で避けた後、警備員の一人を空間移動でその射線上に移動させて身代わりにする。

「ぐああああ！！！！」

「ナイス！！」

俺は警備員を身代わりにした後に大太刀を四本出して、高速道路か

ら飛び出して異形の羽を切り裂く。

「脆いな。そんなんじゃ俺に勝てねーぜ？」

俺は空間移動で迫りくる異形の羽を避けて地面におりたつ。

「アンタ、どつから出したのよ。あの武器もその刀も。」

「これは大太刀だ、バカヤロー。」

俺は横にいた御坂に話し掛けた後いつの間にか初春を人質にしている木山先生を見る。

「木山先生。あれすげーな。名前付けるならAIMバーストか？」

「君はいつにもまして気分が高揚しているみたいだな。」

「そういうのはテンションが上がってるっついでいやー良いんだよ。」

俺はかははと笑い、AIMバーストを見る。

「AIM拡散力場が集合して出来た怪物。あれには実弾系統は効かねーな。」

「ああ、あれを止める方法は無い。幻想御手を使った能力者の負の感情を掴み取って動いている。」

「現に原子力発電所に向かってるしな。」

俺はAIMバーストから目を離して遠くにある原子力発電所を見る。

AIMバーストは俺という標的を見失い、原発へ動きだしている。

「ちょっとそれヤバイじゃない!!」

「ああ下手すりゃ学園都市が崩壊するな。」

俺は御坂の方を振り向いてニコツと笑う。

「俺は学園都市なんざ崩壊しても特に興味はない。だがなこんな俺にも守りてー奴はいるんだ。そんなかにはお前ら四人も入ってんだぜ?」

「……………。」

俺はあまのじゃくでもなく嘘はきでもなくそういう。まあ妹達に比べると優先度は落ちるが。

「それに木山先生はあれを止める方法が無いと言ったがそれはあれが何か知らねーからだ。」

「何?」

木山先生は訝しげに俺を見る。

「木山先生はあれを学会に発表しようとしてるみたいだが学園都市はあれを知っている。あれは虚数学区・五行機関だ。」

『『『『………はっ!?!』』』』

俺の言葉で二人はもちろん人質の初春や通信の二人も驚く。



「ちよ、ちよつと！！あれってただの都市伝説じゃないの？」

「ちげーよ。行くことは出来ねーが虚数学区・五行機関は実際にある。陽炎の街と呼ばれているな。学園都市上層部には重要なキーポイントなんだ。実態的にはAIM拡散力場の集合体。端的に言えば超能力の塊だ。あれの実態にそっくりだろ？」

御坂の言葉に俺はAIMバーストを指差す。

「それじゃ、どうやって倒すのよ。」

御坂はAIMバーストを見やり言う。

「あれは、いやあれらには共通点がある。まずはAIM拡散力場を制御するための核がある事。それを破砕すればAIM拡散力場を制御出来ず霧散する。」

「じゃあ、それを打ち抜けば良いのね！」

俺の言葉に御坂はコインを取り出して超電磁砲を撃とうとする。

「まあ待て。お前忘れたのか？あれには実弾系統は効かねーよ。超能力もな。あれはAIM拡散力場の集合体。実態があるように見せ掛けているもので実体は無いんだよ。それに核の位置も知らねーだろ？」

「ああ、そつか……………」。

「じゃあ倒す方法無いじゃん！！！」

俺の言葉でコインをポケットにしまい俺に突っ掛かってくる御坂。  
……………うぜえ。

「……………だから最後まで話を聞けつて。あれは虚数学区・五行機  
関だがあればには普通のもんじゃないやねーだろ？」

『ああ！！！！幻想御手ですわ！！』

「正解だ黒子。」

黒子が無線越しに叫ぶ。……………うるせーな。

「つまりあれは幻想御手の機能さえ破壊しちゃえば虚数学区・五行  
機関の機能はほぼ使えなくなる。」

「でもどうやって！！！」

御坂が俺の肩をガシッ！！と掴みぐわんぐわん振り出す。

「ちよっ……………！おまつ……………！止めろ……………！あう……………！

やめろっつってんだろ！！！！」

「うわっ！！！」

俺の怒声にびっくりして仰け反る御坂。俺は御坂をスルーして初春  
と木山先生を見る。

「という訳で、木山先生。あれを学会に発表しようとしても無駄だ。  
初春を放せ。アンタが初春に渡した幻想御手のアンインストールデ

「タが必要なんだ。」

「……………君は何でも知っているんだな。わかった。離そう。」

「何でもは知らねーよ。知ってることだけだ。」

俺はいつものやり取りをした後に初春を見る。

「初春。」

「……………。」

「お前は俺の事を失望して絶望して軽蔑しているかも知れない。」

「……………。」

「だが、俺の家族、親友、そしてお前らを助けたいんだ。救いた  
んだ佐天を。だから、お前の力を貸してくれ。」

俺がそういうと今まで俯いていた初春は顔を上げる。

「あくまでも学園都市を救うためとは言わないんですね。」

「……………けどそんな事言われたら断れませんよ。」

「当たり前だ。」

それに言っただろ？俺の行動はいずれも人を救うんだ。不本意だがな。

「

「そんな事言うヒーローはいませんよ。」

「俺は悪人だからな。」

初春は最後には笑ってくれた。俺は最後に警備員の黄泉川を見る。

「聞いてたる？俺等の話。」

「荒唐無稽だが信じない訳にはいかないじゃんよ。」

「よくできました。フー訳で協力してほしいんだが？」

「分かったじゃん。」

「ありがとよ、残念美人さん。」

俺はニカツと笑った後、全員を一気に高速道路の上まで転移させる。

「なっ！！アンタ空間移動能力者じゃないの!?!」

「わりーな。ありや嘘だ。俺は“↑ウポイント座標移動”だ。レベルはかわらんが。」

俺がニヘラと笑いながら言つと全員が、はあ……、とため息をつく。黄泉川も会ったばかりなのにため息をついてやがる。……なんだ？俺はため息量産器か？

「まあそんな事はいい。緊急事態だからな。」

「そうね。」

俺の言葉に御坂が頷く。AIMバーストは俺たちに興味を無くしたのか原発へ動き出す。

「まず俺と御坂がAIMバーストの足止め。」

「分かったわ。」

御坂が頷き、電撃をバチバチ出す。こえーよバカ。

「次に初春と木山先生。初春と木山先生はアンインストールデータを街中に流せるように準備してくれ。……………協力してくれますよね？木山先生。」

「ああ、仕方ないな。」

木山先生は渋々頷く。

「最後に、えー、警備員の……………。」

「黄泉川愛穂だ。」

「て、鉄装綴里です！！」

「ありがとうございます。黄泉川さんと鉄装さんは初春と木山先生を護衛してください。」

「わかってるじゃんよ。」

「は、はい！！」

最後に警備員の二人に言った後、俺は御坂を見る。

「よし、行くぞー！」

俺は御坂の座標を移動させる。俺は空間移動で地面に降り立つ。場所  
所はAIMバーストの目の前。俺は釘バットを取り出す。

「なんで釘バット？」

「これはかの有名な“シームレスバイアス愚神礼賛”だ。」

「何ですって！！」

「……………って知らないわよ。」

「ナイスのり突っ込み。」

俺はバイアスを肩に引っ提げて、言う。

「これはオール鉛で出来てんだよ無垢のな。なかの芯まで鉛だぜ。」

「アンタってやっぱ規格外。」

「うるせーな、行くぞ。」

「はいはい、分かってるわよ。」

俺は御坂にそう言った後釘バットを上段に構える。走る途中に円を描くように振り回し、遠心力でスピードを上げていく。そして、

「ギャハハハハ！死んじまいなあ。」

俺はAIMバーストの頭らしき位置まで跳び、バイアスを振り下ろす。

「!!!!!!!!!!!!!!」

それで一気によろけたAIMバーストに御坂の電撃が走る。俺の方にも余計に……………。

「俺ってば最強ね。」

しかしあぶねーだろ御坂。俺じゃなきゃ死んでたぜ。」

「アンタなら死なないでしょ？」

「信頼してくれたんだ。やっさしー！！」

俺は空間移動（端から見りゃ座標移動）で電撃を避けてからポーズを決める。

「!!!!!!!!!!!!!!」

今の攻撃で頭にきたのかAIMバーストが奇声を上げて、異形の羽を使い、光弾を造りだす。

「（光力操作系か、いただいとくか。）」

俺はそれを完成させて、釘バットを振り回す。

『!!!!!!!!!!!!!!』

AIMバーストはそれを俺に発射する。俺はそれを、

「でえええりゃああ!!」

空にかつ飛ばす。それは空を舞い上がった後に爆発して、スタングレネードの様に光と音を撒き散らす。

「たーまやー!!」

「はぁ……………」

俺の規格外さ（もう認める）に再三ため息をつく御坂。もう認めろよな。

「ため息ついてる暇なんてねーぞ。俺らがやらなきゃ230万人が死ぬんだからな。俺はどうでも良いが。」

「アンタってほんと天邪鬼よね。」

俺はバイアスで異形の羽を吹き飛ばし、御坂は電撃で身体を攻撃していく。自然と前衛と後衛が出来上がっていた。

「天邪鬼じゃねーよ。無関心で無頓着で極悪なだけだ。」

「自分で自虐するレベルじゃないきがするんだけど？」



「事実だ。気にしちゃいねーよ。」

俺はバイアスを振り回し羽を吹き飛ばす。

「埒があかねーな。出したくなかったんだがな、出すか。」

ジャコッー！

「何をよ……………、アンタそれメタルイーターよね……………？」

「そうだが？知ってたのか御坂。」

俺がバイアスの代わりに出したのはメタルイーター。取り敢えず二丁出しといた。

「アンタ、だってそれ。学園都市の最新兵器じゃない！！」

「元になった奴はただの対物ライフルだぜ？そのまんまで良いものをフルオートに戦車すら吹き飛ばせる威力。使える人間が限られてくる改悪品だ。」

「それでもよ！！そんな物騒なものなんで持つてるのよ！！」

「家にあつたからだが？」

「嘘だつー！！」

御坂はレのセリフを口走る。そんなに俺が嘘つきに見えるかよ。そのうち鋸かなんかでやられるんじゃないか？……………サーシャとキャラが被ってるから作者が……………（自主規制）

ゴホンッ！！なんか口走ってしまったな。取り敢えず俺はメタルイーターを片手で持ち、構える。

ドオン！ドオン！ドオン！ドオン！

俺はガンダムがビームライフルを構えるように持ち、放つ。それはAIMバーストの身体を貫き、空に上がっていく。

□

！！！！！！！！！！

「ちっ！！対戦車ライフルじゃ無理だな。連射すつか。」

「アンタその衝撃耐えられんの？警備員しか知らない特殊な体術じゃないと衝撃を殺せないって。」

「博識だな御坂。」

……………けど俺は、規格外だ。」

「……………自分で言っちゃうんだ……………」

御坂はうなだれて地面に手をつく。所謂orzポーズだ。女の子がそんなことしちゃいけません！俺的にはばっちこいだがな。

「まあ、御坂がうなだれているのはどうでも良いがあれを攻撃してくれ。」

「……………そうね。近衛を殺すのは後で出来るしね。」

「……………なんか空気が不穏なんだが。」

俺は多少御坂にビクビクしながらメタルイーターを先程の様に構える。

ドオン！ドオン！ドオン！ドオン！ドオン！ドオン！ドオン！

一秒にこれだけはうちはなたれた。俺的にはこれで多少はダメージを食らってくれると嬉しいんだが、生憎初春のアンインストールデーははまだ街に流れていない。AIMバーストは弾丸をもともせず動き出す。

「やべえ、御坂ー!!」

「えっ!?!……………きゃあ!?!」

御坂は可愛らしい声をあげながらAIMバーストに捕まり空中に持ち上げられる。AIMバーストの羽が細く触手のようになり、御坂の内太ももや腹、胸、腕にからんでいるさまは……………

「……………なかなかエロいな。御坂も女ということか。」

「アンタって人はー!!!!」

御坂は、種運命のあの人みたいな叫びをあげながら全力と思われる電撃を放つ。

「うお!!あぶねーじゃねーか!?!」

「五月蠅いわね!?!」

………「ちよ、きゃああー!!」

御坂の電撃によりAIMバーストが黒焦げになる。そのため触手の支えが無くなつた御坂が落ちてくる。

「ふう、助ける義理はねーが、なかなか良いものを見せてもらったから助けてやったよ。」

「……………変態。」

まあ、そんな事はいいわ。」

俺と御坂はAIMバーストを見る。黒焦げになつたそれは再生する気配が無い。微かに街の方から音楽が流れてくる。どうやらアンインストールは成功したようだ。

「原発ギリギリ。なんとかなつたわね。……………っ!!」

「……………幻想御手使用者の感情か。」

それによりAIM拡散力が崩れ初めてAIMバーストに内包された負の感情が流れてくる。野球の大会で能力者のピッチャーに負けて大敗した奴。能力が使えないばかりに虐められた奴。削板軍覇のすごいパンチを見て自分の前の壁の高さを見せ付けられ、挫折した奴。そんな奴らの感情が流れてくる。正直……………うぜえ。

「てめえらは……………独りよがりで崩弱でうざくて自己中で他力本願で屑で糞で間抜けで、そして何より馬鹿だ。」

「だけど、過ちを冒したってやり直せる。始められる。」

俺の言葉に御坂が続ける。そんな事は望んじやいねーんだが。

「だから始めよ。昔の自分を反省して、乗り越えて、糧にして、教訓にして。だから今は楽にしてあげる。」

御坂は微笑みながら、コインを指で打ち上げる。

「だから今は!!!」

そしてそれを音速の三倍で撃ちだす。超電磁砲は真つすぐとAIMバーストの頭に吸い込まれ、出てきたときには核を捕えて、破壊する。

『!!!!!!!!!!!!!!』

AIMバーストは叫び声をあげながら頭から崩れた。

「これで一段落だな。次はテレスティーナか？アイテムか？」

俺はそういつて、高速道路の方に向かった。

## 能力、人物紹介（前書き）

ネタバレ含みます。

因みに近衛くんのレベル6の概念は学園都市の神なる計算式がどうたらこうたらではなく、あくまでも人間の脳で起こせる最大限の事象と言う風になっています。まあ魔術を併用したら神の領域になります。

## 能力、人物紹介

### ・人物紹介

名前：近衛香奈

設定：チャイルドエラーの少女。中学三年生で学校には通っていない。雑貨稼業の売春の商品として吊されていたのを戸隠に助けて貰う。曲がりなりにも裏を知ってしまったため戸隠の部下として暗部に所属。グループの構成員になる予定。

・少し赤みがかかった銀髪でロングに伸ばしてそのまんま。容姿にも外国人の血が出ており、実は祖父だった人がイギリス人。家の家計が苦しくなり学園都市に捨てられた。普通の保護施設に通っていたが拉致されて売春の商品になる。

・今は戸籍を新たにアレイスターが作り近衛の性を名乗っている。家事全般が出来るオールマイティーで知識としては高校程度の学力がある。

・学園都市の能力開発を受けていないのと祖父が魔術師であったことから魔術が多少使える。戦闘能力が皆無で裏方に回ることが多い。

・性格は大らかで明るく中学三年には見えないお姉さんな一面もある。実は戸隠に可愛い妹と呼ばれて内心嬉しかったりする。

・戸隠の事が気になっている。裸を見られたからと、裸でどつきりを仕掛けるくらい。

名前：近衛小夜

設定：チャイルドエラーの少女。中学三年生で学校には通っていない。雑貨稼業の売春の商品として吊されていたのを戸隠に助けて貰う。曲がりなりにも裏を知ってしまったため戸隠の部下として香奈と同様に暗部に所属。グループの構成員になる予定。

・紺色の髪の色。首の辺りから燕の尻尾のように細く二股にわかれている。長さは腰まで。純日本人で、親は父親の方が遊び人で母親と小夜を残して逃げたため母親はやむなく学園都市に小夜を預ける事に。香奈と同じく拉致されて売春の商品になる。

・今は戸籍を新たにアレイスターが作り近衛の性を名乗っている。掃除、洗濯が得意で汚れを一切見逃さない。初春ほどではないが一流のハッキングの腕がある。一七七支部の守護神ゴルキーパーに会いたいが実は出会っている。（初春なので）

・能力開発は受けていないが近接戦闘の才能があったのでCQCやガン⇨カタ等を体得する。ハンドガンやナイフを使い狡猾に事を進める。スネークが憧れ。

・性格は大人びたクーデレではなく、幼児的なクーデレ。舌足らずな喋り方でいつも近衛を惑わせている。可愛いと戸隠に言われると思いい切り顔を綻ばせる。男性では戸隠と一方通行しか触れられない。

・戸隠の事をホントの兄弟のように思っており、恋愛感情はない。



名前：近衛奈美

設定：チャイルドエラーの少女。中学三年生で学校には通っていない。雑貨稼業の売春の商品として吊されていたのを戸隠に助けて貰う。曲がりなりにも裏を知ってしまったため戸隠の部下として香奈、小夜同様に暗部に所属。グループの構成員になる予定。

・茶髪のセミロングで触角のような髪の毛が前髪に二本生えている。日本人で、親が両方とも死去しており親戚が遺産を掠めたため、学園都市に預けられた。普通の保護施設に通っていたが拉致されて売春の商品になる。

・今は戸籍を新たにアレイスターが作り近衛の性を名乗っている。料理が出来て、学力は年相応しかない。

・派手な武器が好きで、メタルイーターを初めとしてハンマーや鈍ショーテル等の変り者を使う。突撃して破壊し尽くすのが好きな意外に性格破綻者。

・性格はぼわぼわとおっとりしていて、オリキャラで戸隠を除いて元になったキャラがいる。舞織の喋り方に匂宮兄妹の性格とかなり危ない。戦闘時には戸隠のように笑いながら戦う。

・戸隠の事は兄以上、つまり男として見ているところがあるが、天然ゆえ気付いていない。

## 能力紹介

・発火能力

手から火球を出す。レベル5でメラゾーマ級の火球が作れる。完成によりレベル6程度になっており、一都市を壊滅させる程の火球を出す。温度が高すぎて既にプラズマになっちゃってたりする。ゼットンを思い出してくれれば良いと思います。

・発電能力

言わずとした能力。レベル5の性能は皆さん知っていらっしやるでしょう。レベル6ではピカチュウのボルテッカーのような事が出来る。御坂は超電磁砲を分間6発しか撃てないが、戸隠は一辺に指の数だけ撃てる。しかもノーチャージで。ギガデインは余裕だったりする。

・偏光能力

噛ませの不良が使っていた能力。レベル6では完璧に像を外して、別の像を使役できる。しかも動きを光の動きで別のものに出来る。

・風力能力

佐天が幻想御手で発言した能力。レベル6では完璧に不可視のかまいたちを造ったり風速30？/秒級のハリケーンを起こせる。風の流れのなかに風の刃を幾つも飛ばしている。ドラクエネタが多いがバグクロスを思い出してほしい。

・土木操作

オリジナルの能力。在り来たりだが土系能力のハイエンド。鍊金や土壌操作は勿論、植物系も操れる。レベル6では地割れや地震を起こしたり、土の槍で攻撃できる。さらに心理学を応用することで、木や土を移動、変化をさせて人の意識をそらしたり、感覚を変えることが出来る。

#### ・空間爆破

エクスプロージョン、ただ一言で表せれる。レベル6では空間を破壊してその空間に有るものの存在を消す。能力者に対してはAIM拡散力場により阻害されて不完全に存在を消す程度。

#### ・光力操作

空間内にある光の粒子や波を操る。光の波長を変えることにより、可視光線から紫外線、赤外線、放射線、線、X線等を作れる。光の流れを変えたりすることで光の羽を作る。熱量を造ることも可能で、V2ガンダムやデステイニーの光の翼みたいな。また赤外線で光のスフィアを使ったクレイモアのようなものが造れたり、暗視ゴーグルが不要になる。

#### ・空間移動

言わずとした黒子の能力。三次元を十一次元に捉えて空間を移動させる。空間移動したものは移動した場所の物を押し退けて現れる。恐らくボソンジャンプのように別次元を通っていると思われる。レベル6なら多分空間をねじまげてアヴァロンのように別次元に身を隠すことも可能であろう。

#### ・座標移動

言わずとしたシヨタ姉さん、結標さんの能力。空間移動とは違い三次元内で二次関数のグラフの座標を移動させるような感じ。自分の身体を跳ばすのは計算式が難しく使えば吐き気がするので空間移動のように自由に跳ばせないが、物に触れないで場所を動かせる。さらに距離も段違いで、数キロメートル単位で跳ばせる。重さも乗用車でも跳ばせるし、建物のワンフロアをまるごと移動させることも可能。

## 神裂火織（前書き）

今回はご指摘にあったようなチート全開なバトルにしてみました。  
近衛くんの悪人が鳴りをひそめてバトルマニアが出てきてしまいました。  
………両立って難しい……。

## 神裂火織

「やっと終わった。」

「長かったわね。」

俺は警備員の車の後ろを見ながら言う。俺たちの目線の先には木山先生がいる。

「……君たち。」

「どうしたよ、木山先生。」

「何ですか？」

「私は彼女たちを救うのを諦めない。またこのような事件を引き起こすかも知れない。」

「警備員さん、この人犯行予告してますよ。逮捕しちゃってください。」

「もう逮捕してるじゃんよ……。」

木山先生が話し掛けてきたと思ったら笑顔で犯行予告をしてくる。危険だ……。

「話がそれだな。私はあの子達を諦めるつもりはない。だからまた私が次にこんなことをしたら君たちで止めてくれないか？」

「……………Mなのか？」

「アンタは黙ってなさい。」

御坂に手を出されて、しびしび黙る。

「分かったわ。その時は相手してやるわ。」

「……………御坂はSなのか。」

「お前は黙ってる！！」

御坂が爛々とした目で木山先生を見る。木山先生は多少引き気味だったが、笑顔で護送車に乗る。

「……………事件は一段落ついたな。俺の話は今度にしよう。もう疲れた。」

「……………そうね。それに佐天さんのお見舞いに行かなくちゃならないし。」

俺が御坂の方を見ると、黒子も既に此方に来ていた。俺は未だ惘然としている黒子に無言で無線機を手渡してテレポートする。今日は神裂との戦闘があるからな。

「前哨戦は終わった。チュートリアルは終わった。長いプロローグも終わった。今からようやく物語が始まるな。」

俺はボソソジャンプを行い、マンションまで跳ぶ。

.....  
時間は一気に四時間飛んで午後八時。俺は手袋を装着して第七学区のあるビルの上にいた。

「大方の場所は分かっていたがなにぶん街並がどこも似ている……。戦闘場所が分らん。」

俺は指を小刻みに動かす。すると人が不自然にいなくなる場所があった。

「.....見つけた。当麻待ってるよ。」

俺は今まで操っていた曲弦糸を回収して、その場所に向かう。人払いのルーンのかけられている場所へ。

「見つけた.....。神裂。」

俺が向かうと既に神裂は臨戦態勢。当麻も手を突き出していた。

「貴方は.....。」

「戸隠！？何で此処に！！」

俺が近づくと当麻も神裂も此方に気付く。

「当麻。お前はインデックスのところに行ってこい。俺がこいつの相手をする。」

「なっ！？そんなことできるわけ……早く行け。」……戸隠。

当麻が何か言っているが無視だ。ここで当麻にボロボロになられても困る。ドラゴン・ブレスのときには万全の状態でもらわないと。

「分かった。だが無茶するなよ。」

「お前に言われたかない。」

俺の剣幕に気付いた当麻はこの場から立ち去る。俺は右手を見ながら言う。

「神裂、アンタの信念とやらを聞いてやるよ。」

「私の名をどこで知ったか知りませんが邪魔をするようなら容赦しません。」

俺は右手を再度見る。この場には俺と神裂しかいない。つまり全力で相手とれるわけだ。

「それでは………行きます!!」

神裂は七天七刀を振るい、七閃を繰り出す。七本のワイヤーは七方向から迫りくるが俺はサイドステップ、バックステップで全て避ける。



「そんな攻撃じゃ俺は倒せねーよ。でやああああー!!」

俺は手にレベル3程度の火の玉を出す。それを投げ付けるが、神裂は楽々と避ける。

「貴方も小手調べなんて似合わない事をせず戦えば良いものを。」

「ならそうするぜ。ギャハハハハハ!!」

俺は神裂の挑発に先程のものと同じくらいの火の玉を無数に空中に出し応える。

「これは避けられるか!!」

俺はそれを高速で次々と撃ちだす。辺りは火の海になるが、ビュン!という音ですべて掻き消える。

「避けられませんが防ぐ事は出来ません。」

神裂は七天七刀を振り抜いた無傷の状態で立っていた。

「そうかい……………。なら防げない程度なら?」

俺は光力操作で造った二枚の翼で空中に躍り出て、直径七百メートル程の火球を出す。

「それは……………防げませんね。」

「そうか、なら死ね。」

俺はそれを神裂に投げつける。既に六千度を超えてプラズマ化しており、空気に触れるたびゴウゴウと音を立てる。そんな音が鳴り響いても二人しかこの場にいない。人払いのルーンって便利だな。

ゴゴゴゴゴゴゴ！！！！！

火球は地面につくと音を立てて、地面を溶かしていく。俺が火球を意図的に消すと、爆心地はぐじゅぐじゅと音を立てて溶け続ける。

「……………なんだ。生きてんじゃん。」

俺が爆心地から少し離れた場所を見ると、神裂が憮然とした様子でビルの上で立っていた。

「あの程度のスピードなら防ぐ迄もなく避けられます。」

「そうかい。なら第二ラウンドと行こうぜ。」

神裂が降りてきた所で俺は火ではなく雷を出す。

「能力は一人一つでは？」

「俺は規格外何でね。行くぞー！」

神裂の質問を軽く受け流して、俺は雷の槍を撃ち出す。

「こんなものは！！」

神裂はそれを右に避ける。

「気いぬいてんじゃねーよ!」

「なっ!」

俺はそれに身体能力だけで近づき、手に纏わせた雷を神裂の腹に突き出す。

「がっ!!ぐうう……………!!」

神裂の腹に触れた時点で一気に雷を解放して神裂に電撃を放つ。神裂は一瞬引きつった顔をするが、すぐに七天七刀で殴ってくる。

「さすが聖人。すげえ身体能力だ。」

「その聖人を押している貴方はもはや化け物ですね。さすが奈落。」

「その二つ名知っていたのか。」

「ええ、勿論!」

神裂は初めて興奮したかのように七閃を放ってくる。俺は光の翼で不規則に飛び狙いを付けさせない。

「そろそろ勝負に出るぜ。飽きてきたんでな。」

「あまり言めないで欲しいですね。」

俺は地面に降り立ち、土木操作であらゆる場所に避雷針のようなものをつなげる。俺は地面に降り立ち、土木操作であらゆる場所に避雷針のようなものを錬金で造る。

「そいつは電気を引き寄せて一定量電気が溜まるとあらゆる場所に放射するようになってる。」

「……………」

「黙るか。ならば!!」

俺は電撃を上空から放つ。十億ボルト以上の電撃が避雷針のようなものに引き寄せられ溜まる。

チュウウウン!!

そして飽和量を越えた避雷針のようなものから全方向に電撃が放たれる。電力に耐え切れず避雷針のようなものは次々と爆散していく。しかし神裂を中心として電撃の檻が出来上がる。周りのビルの窓や街灯なんかを破壊していくが、アレイスターに任せりゃ何とかかなん

チュウウウン……………。

電撃が止み、辺りは煙に包まれる。街灯等の電気系統が破壊されたため月明かりのみが辺りを示すものになるが、俺は月明かりを赤外線線の波長に変えて、周りを見る。

「おいおい、お前のがよっぱど化け物だぜ……………。ワイヤー使って空中に逃げるなんてよ。しかも避雷針の近くに。」

赤外線センサーに引っ掛かった人物は未だに無傷だった。ビルの屋上にある避雷針まで逃げていたらしい。流石学園都市製の商品、ものともしてなかった。

「運のゲームにも必勝なのか？ 聖人って。エミヤくんが羨ましが  
るな。……………いや、この世界じゃ当麻だな。」

俺はビルから飛び降りてきた神裂を見ながらニヤニヤ笑う。神裂は  
初めて鞘から刀を抜く。

「おお、刀を抜いたか。唯閃でも使うのか？」

「いえ、本気のほの字すら見せていない貴方にそれは無駄でしょう。  
ならばこの七天七刀で戦うのみ。」

神裂は刀を構えて、此方に駆け出す。聖人らしく音速を超えてくる  
が、俺は光の翼を一对増やして、それをも越えるスピードで夜空に  
躍り出る。デイストーション・フィールドで全面に半円状の膜をは  
り、空気抵抗を防ぎ、重力操作で急旋速、急旋回のGを軽くして人  
間の動きを超越する。

「やはり避けましたか。しかしその避け方は斜め上方向に意外です  
ね。」

「その例え超キュートだな。抱き締めたくなるぜえ。」

「だ、抱き……………！！！！」

「隙ありい！！」

「なっ！！騙したなああ！！」

俺は俺の抱き締めたくなる発言に顔を赤くして身を振る。俺はその

際にディスプレイ・フィールドを展開したまま、上空から突撃する。神裂は恥ではなく怒りで顔を赤くする。

……………ズギユウウウウン!!!

俺は刀を構えている神裂に上空から突撃する。初速から音速を越えているため空気を裂く音が後から聞こえてくる。

「くうううう……………!!」

神裂はそれを受けとめず、過剰とも言えるほど俺の攻撃の射線上から離れる。

……………ズガガガガガガ!!

すると辺りの壁という壁が、物が俺の飛んでいる高さの物を中心に破壊されていく。実は突撃の際に俺の身体の両側面に音速にも耐える特製のブレードを造っていた。皆さんは“地盤<sup>アース</sup>破砕”という戦術兵器を原作十四巻で見たことがあるだろう。あれは秒速七キロという速さで飛ぶ爆撃機に搭載されていた兵器で、空気抵抗により何千度となったブレードに数グラムの砂鉄を振りまくことで、気体状になった高温の鉄のブレードにより地面を破壊していくものだ。謳い文句が“砂鉄数キロでユーラシア大陸を切り裂く”という恐ろしい物だ。

何が言いたいかと言うと、高速移動しているブレードは空気の渦やら刃やらを生み出しているのだ。それも速度が高ければ高いほど高威力の。だから件の神裂は俺のブレードから発する無数の空気の渦や刃を感じ取り、俺から異常な程遠くに逃げたのだ。

「よくあれを避けたな。聖人の勘ってやつか？それとも本能？」

「はあ……………、はあ……………！」

俺が空中で姿勢を立て直し、地面にゆっくりと降りると、服という服に。身体という身体に切り傷が出来ていた。息もあがり、満身創痍だった。

「もう止めようぜ、女教皇。」

「……………。」

俺は光の翼を消して地面に降り立ち、トンファーを出す。

「友達を裏切って、仲間を裏切って、ローラの狗として生きるのに何の意味がある。」

「……………くっ！！！」

俺の言葉に激情し俺の襟元を掴みあげる。

「そうか、そうだったな。アンタにとって天草式は庇護対象だったな。」

「……………お前に何がわかる！！私は聖人として生まれた以上彼らを護らないといけないんだ！！！」

「自惚れるなよ、女教皇。」

「……………っ！！！！！」

俺は掴みあげられてもなお声を出す。

「アンタは傲慢だ。そして自惚れ屋でもある。」

「貴様に……何がわかる!!」

「分からねーさ。」

「えっ……………?」

俺の言葉に疑問の言葉をあげる神裂。

「分からねーけど、天草式の事は知らねーけどアンタは傲慢だ。何？護るべき対象？誰がそんな事決めたんだ。」

「……………。」

「アンタは聖人君子にでもなったつもりか？仲間なら普通は助け合  
うもん何じゃねーの？一方的に護るんじゃない。」

「あっ……………。」

呻き声を上げて俺を落とす神裂。俺は地面に降りた後にニヤニヤ笑  
いで神裂を見る。

「まあ俺は、んな事はしねーけど悪人なんでね。」

「あなたは……………。」

俺の言葉に感嘆が薄れたのかジト目で俺を見る。



「かはは、そんな目でみんじゃねーよ。実際今回の戦いは当麻を助ける理由もあったけど、アンタと戦いたかったのが一番の理由だからな。」

「……………バトルマニアが。」

「んな事言つなよ。照れるだろ?」

俺はくつくつと笑い、それで、と切り出す。

「アンタは友と任務、どちらが大切だ?俺は専ら任務だ。当麻以外。」

「あなたの解答は大体予測できていました。」

「ふうん、それで?アンタは?」

「私は、……………友です。」

神裂は一拍おいて、友と答える。俺はその解答に頷いて言う。

「よし、分かった。インデックスの記憶を消さずに命を助ける方法を教えてやる。」

「ホントですか?」

「あ、ああホントだ。しかしこれはステイルには内緒だ。正攻法だが裏技だ。黙っていた方がいい。」

俺は神裂の余りの剣幕に少し仰け反る。

「分かりました。」

「よし、なら教えてやる。だが方法は教えられない。だから記憶を消さないでいい理由を教えてやる。」

「……………分かりました。」

神裂は俺の解答に少し不服そうだが渋々了解する。これは致し方ない。当麻の力が必要なんだからな。

「なら言うぞ？まず俺はインデックスと同じ完全記憶能力者だ。」

「……………えっ？」

「まあ取り敢えず話すな？俺は十三年間一度も記憶を消したことはない。」

「……………記憶を消さなくてもあの子は死なない。」

「そつだ。」

俺の言葉に膝から崩れる神裂。顔は涙で汚れている。

「アンタに理由を教えてもいいが、ステイルがないからめんどくさいしな。それに今のアンタに教えたところで何も変わらない。だから記憶を消すべき7月27日にインデックスの所に来い。理由も全て話してやる。」

俺は返答が返つてこない神裂を見て、抱えて路地の人目のつかない所に移動する。人払いのルーンが切れかけてきたのだ。あんな爆撃の中心地、しかも道路のと真ん中にいたら神裂はどうでもいいが、一緒にいる俺まで変人認定されてしまう。それはごめんだ。

「じゃあな、神裂。」

俺は未だに泣いている神裂を一瞥したあと、ボソソジャンプでマンションに跳んだ。

## 首輪（前書き）

はい、今回はほとんど裏のパートです。相変わらず近衛の悪人は鳴りを潜めていますですが楽しんで貰えると幸いです。

P.S

ローラの口調って難しい……………。

## 首輪

「はあ、此処にローラ・スチュアートがいるわけだな。」

俺の目の前には聖ジョージ大聖堂。イギリス清教の総本山。俺には縁も縁もないと思ってたんだが。

「これも俺の暇潰しの為だ。犠牲になってもらうよ、イギリス清教さん。」

俺はそういつて幾重にも張られた多重結界を遺跡の知識と演算で一時的に破り、中にはいる。

「アレイスターもよく許してくれたな、こんなこと。」

俺は歩きながら、学園都市での出来事を思い出す。

.....

## 回想

7月25日、俺はある場所にいた。中は暗く、計器や用途の分からない機械、ケーブルが所狭しと存在し、部屋の真ん中には生体ポッドがある。お分りかもしれないがアレイスターに会いに来たのだ。

「近衛か……。どうしたんだ今日は。仕事の依頼は無かったはずだが。」

「仕事がなけりゃ此処に来ちゃ行けねーのか？」

俺は男の様な女の様などにかく不愉快な声を受け流し、笑いながら言う。

「普通は仕事でも来ないのだがな。私事で来られて付けられては目も当てられないしな。」

「仕事と私事をかけたのか？任意なら言ってやるよ。つまんねーってな。」

俺のニヤニヤした顔を見て、あくまでも無表情で此方を見るアレイスター。

「別に他意は無いのだが。お前に言っても焼け石に水、暖簾に腕押し。意味が無いのだろうな。」

「よく分かってんじゃん。俺を動かしたかったら、傑作のアメリカンジョークを用意しておけ。」

「お前はそれでも私の思い通りには動かないだろうな。それも私の計画だが。」

それと私はアメリカンジョークは好かない。生憎だがな。」

俺の言葉に相変わらず不愉快な声で話すアレイスター。

「残念だが、俺はどの世界にも属さない外れた人間だ。物語にも筋書きにも運命にも、勿論お前の台本にも左右はされねーよ。」

「何時だったかお前が言っていたジェイルオルタナティブとバックノズルだったか？登場人物は代替が可能で、運命は必ず降り掛かる。」

俺はアレイスターの言葉に、ああ、と相づちを打つ。

「あれは俺が好きな小説の作者が書いたフィクションだ。だが俺はそれを信じている。何時だって運命は必然で、物語は人生だからな。」

「お前はたまによくわからないことを言う。だがそれにはお前も含まれているのでは？」

「確かにな。もしかしたらこの会話だって誰かが書いた小説のシナリオの一部かも知れねーしな。」

俺はくつくつと笑い、アレイスターを見る。

「そついや俺はそんな哲学じみた傑作を話に来たわけじゃねーんだ。アレイスター、変な話吹っかけんなよな。」

「私に言われてもな。それに話しはじめたのはお前だ。」

俺がニヤニヤ笑いながらわざとらしく、いや実際わざとなんだけだな、言つとアレイスターは相変わらず無表情で言う。

「かはは、そうかもな。だが話を膨らませたのはアンタだぜ？」

「仮にも私が話を膨らませたかも知れないが私の所為にされては困るな。私は仮にも学園都市統括理事長なんだが。」

「アンタは代替不可能な人間だからな、これぐらいにしといてやるよ。」

俺はアレイスターに近づき本題を話す。

「さて、本題だが。まず昨日の女教皇との戦いでの損害をアンタに付けといた。」

「……………あれでも馬鹿にならない金額なんだが。それに統括理事会を納得させるのも簡単では無いのだ。」

「アンタにとって代替の利く物なんだろう？目障りになったら俺が消してやるよ。」

「あれらはまだ利用価値がある。消されては困るな。」

「今消すとは言ってない。消していいなら今すぐ殺ってくるが？」

「話が変わっているぞ？早く本題を話せ。私も暇ではないのだ。」

俺がおちゃらけて言うとアレイスターは多少凄んでくる。おー怖っ。

「はいはい、分かったよ。今から言うよ。俺がロンドンに行くのを許可しろ。詳しく言うとローラ・スチュアートに会つのを許可しろ、だな。」



俺がそういうとアレイスターは珍しく溜め息をつく。……………水中で  
どうやってため息してんだろ……………。

「学園都市の破壊や多重能力の露見、暗部組織の存在の暴露に虚数  
学区・五行機関の存在の断言。お前が起こした問題の被害は意外と  
重いんだが。」

「でも計画で進んだのもあつたら？プラマイゼロだろ？」

「マイナスのが大きいな。それに私だけの権限ではそれは許されな  
いな。学園都市統括理事会の承認が必要だ。」

「嘘つけ。代替可能な奴らの言葉なんかアンタは聞かねーだろ。あ  
んな計画してるくせに。」

俺が笑いながら言うとアレイスターは、ふっ、と笑い此方を見直す。

「確かにな。それにお前は私の計画の人柱だ。ローラに合っておく  
のもいいだろう。」

「かはは、流石アレイスター。よく分かってんじゃねーか。」

「話は終わったな。」

「ああ、それじゃ早速言質も取れたことだから行ってくるよ。超音  
速旅客機をチャーターしといてくれ。」

俺はアレイスターに言った後、第二三学区にボソソジャンプする。

……  
第二三学区についた俺は受付けにパスポートを見せて、超音速旅客機に乗り込む。

「マツハ5を越えるのは知っているがどんなもんか……。」

俺はシートに座り、シートベルトをつける。30分ぐらいしたあとに旅客機が発進する。

「これは……、そこまでGはねーよな。当麻が弱かっただけか？」

俺は平気な顔をして周りを見る。席には俺しか座っておらず、眼下にはもうユーラシア大陸が広がっていた。

「はえーな。フランスまで一時間は伊達じゃないと言っことか。」

既にロシアのまんなかあたりを飛んでいる超音速旅客機のシートを叩きながら言う。

「楽しみだな……、イギリス。」

俺はそっぴいなながら窓から外を見た。窓には触れないがな、摩擦で熱いから。

.....

「此処がイギリス。曇り空はやはりデフォルトか。」

俺は空港から出て、イギリスの街並を見ていた。マジで二階建バスが走っていて、公衆電話が多かった。道路は石畳で家と家の間が狭かった。全体的に古めかしいし、学園都市では見れない光景だな。

「あれがビックベン……。魔術的要因やら効果があるのか？」

俺は右手にある巨大時計台、ビックベンを見ながらつぶやく。

「おっと観光に来たんじゃなかったな。聖ジョージ大聖堂に行かないやな。」

俺は直ぐにそこを後にする。

回想終了

そして現在に至るわけだ。俺が聖ジョージ大聖堂の多重結界を外して中にはいると中からシスターが出てくる。

「侵入者か。出ていってもらおう。」

「モブに台詞は勿体ねーよ。」

「何だと……………、ガッ!」

俺は迎撃してきたシスターをトンファーで昏倒させたあと、認識障害の異常を使い、大聖堂の中にはいる。

「ローラは確か最奥に居るはずだったな。」

「あら、私を探しけるのかしら。」

「アークピショップ最大主教……………。」

「ローラで良いわ。」

俺が大聖堂の中をうろろしていると後ろから声がかかる。見ると目当ての人間、ローラ・スチュアートが立っていた。身の丈以上の金髪をなびかせて悠然と立っているその様は、成る程最大主教の名にふさわしいと思った。

「認識障害をかけていたはずなんだが。」

「あまり私を嘗めたるのは止してほしいわね。」

俺は苦笑いしながら認識障害をとく。

「これも年の功か。」

「婦人に歳の話とは、流石アレイスターの手の先のものたるわね。」

俺がそう呟くとローラは呆れながら言う。

「まあ、良いわ。立ち話程では無いのだろうにつぎ、部屋に招きたるわ。」

「……………ありがとうよ。」

ローラは微笑みながら身体を翻す。俺はその後についていく。……隙がねーな、話にも立ち振舞いにも。流石最大主教。

……………

「それで？何をしに来たるのかしら？アレイスターの手の先のものよ。」

「その前に、なんで俺がアレイスターの知り合いだって知ってんだ？」

「アレイスターから連絡があつたのよ。私の所の人間が行く、とな。あなたの容姿も聞きたるから、すぐにわかったわ。」

俺がローラに聞くと、ローラはクスクス笑いながら言う。

「……………俺の容姿はなんと？」

「綺麗系の女顔と聞いておったわ。だがそれだけではわからぬわ、と申したらこの大聖堂の多重結界を糸も簡単に破るとききもつしてね。そなたの気配の薄さも相まってよくわかりたるわ。」

「……………アレイスター、帰ったらマジで殺す。」

俺がローラの話聞いてアレイスターを殺すのを決めているとローラは笑いを止めて此方を見る。

「それで、アレイスターの手の先のものよ……………近衛だ。」……………近衛か、騎士の最高位の名を冠するなだな。」

俺がローラに名字を教えると感心しながら俺をじろじろと見てくる。

「別にそんな意味はねーよ。」

「そうか、ならば話を戻したるな。なぜ近衛はかのような場所に來たるのだ？」

俺が辟易しながら言うとローラは相変わらず笑いながら言う。

「探り合いは止めてくれ、冷や汗が出る。」

「どの口が言いけるのだ。汗もかかねで。」

「そうかもな。」

ローラは相変わらずニヤニヤ笑い此方を見る。俺ははあ、と溜め息をついてローラを見る。

「ローラ、いや最大主教。インデックスの首輪を外せ。」

「ほう、首輪、とな。何の話か。」

「アンタがインデックスに仕掛けた術式だよ。一年に一度記憶を消さなくては命を奪う術式。首輪とは、なかなかネーミングセンスがあるじゃねーか。」

「何の話かわからぬな。」

「とぼけてんじゃねーよ。」

俺が苛立ちながら言うとローラはふう、と溜め息をつく。

「ふむ、確かにあれは私が仕掛けた物たるが、解こうにも何分解き方がわからぬのでな。」

「なら、解くから許可をしろ。」

俺がそう言うとローラは再度溜め息をつく。

「それが私に何の得が有るといふのだ？」

「俺がイギリス清教に入ってる。」

「……………」

俺が言うとローラは少し驚いたように顔を歪める。

「それに得が？」

「ああ、すげー得があるぜ。何てったって俺は十万三千冊の魔道書を記憶している多重能力者だからな。」

「……………真か？」

「ああ。アレイスターが証人だ。此処で写生してみせてもいいぜ？」

「いや、信じるにつきそれは止めていただく。」

俺がペンと紙を持って言うのとローラは多少汗をかきながら断つてくる。……………何故だ？

「そうか、なら好都合。イギリス清教に入ってやるからインデックスの首輪を外せ。」

「わかりたるわ。インデックスの首輪を外すのを許可しよう。」

「よし、決まりだな。俺はイギリス清教の一員になって、インデックスの首輪を外す。」

「ええ。」

「なら俺は帰る。此処にはいつか来るよ。」

「土御門によろしく」と。

「良しなに。」

俺はローラの言質が取れたので大聖堂から出た。今現在の俺の立ち



位置は暗部、アレイスターの人柱、風紀委員、イギリス清教徒か。  
愉しくなってきたな。俺はそう思いながら空港に移動した。

兵器の申し子（前書き）

今回はオリキャラが出ましたが、なかなかハズレたいかれた人間です

感想お願いしますね。

## 兵器の申し子

今日は7月26日。今現在、ある場所に向かっている。暗部の仕事で。事の発端は昨日イギリスから帰ったあとからだった。

## 回想

昨日イギリスから帰ったあとアレイスターにグチグチと嫌味を言っ  
てマンションに帰ると、秘匿回線であるIFS対応ノートパソコン  
に匿名で暗部の仕事が出来ていた。内容はある研究所からデータを奪  
取する事。その研究所とは第十学区戦略兵器開発研究所。在り来た  
りな名前だが、この世界の法律や学園都市の法律に違反する兵器を  
開発している事から目を付けられたらしい。恐らく仕事依頼者はア  
レイスター。嫌味のお返しに暗部の仕事とはなかなか粋な奴じゃね  
ーか。

「全くイギリスから帰ってきたそうそうこれかよ。しかも期日が7  
月26日の夕方までってもう一日ねーよ。」

俺は乱暴にパソコンを閉じたあと、マンションの自室からリビング  
に行く。リビングでは奈美がキッチンカウンターで紅茶を啜りなが  
ら、雑誌を見ていて、香奈と小夜がソファに座り、バラエティー  
番組を見ていた。

「あ、お帰り〜。イギリスどうだった？」

「どうもこうもねーよ。ただ最大主教に会ってきただけだからな。」

因みにお土産はない。」

「ちえー、楽しみにしてたのにな。」

「また今度行くからそんな時は買ってきてやるよ。」

俺がリビングに入ると香奈が手を上げながら言ってくる。俺は香奈が座っているソファアの反対側に座り、いつの間にか奈美が持ってきたコーヒを啜りながら言う。………うん、旨い。

「あー、イギリス清教のトップだっけ。あの人もう五十越えているんですよ?」

「ええっ!?マジで!?!」

「小夜が言っていましたよ。」

「うん、ホント。」

俺がバラエティー番組を見ている端で三人娘がローラの預かり知らぬ所で歳の話をしていた。

「まあ、そんな事はどうでもいいんだ。実はアレイスターから仕事が入った。」

「へえ、なに関係?」

「科学サイドの暗部だ。」

「また雑貨稼業の掃討?」

「違う。データの奪取と施設破壊だ。」

俺が話をすると三人娘はローラの歳の話なんか興味無くなったのか、奈美までソファアーに座り仕事の顔になり話を聞いてくる。

「何処で何の？」

「第十学区戦略兵器開発研究所の戦略兵器のデータだ。」

「ふうん。あそこは良くも悪くも有名だからね。」

小夜が自分のノートパソコンを持ってきて俺に聞いてくる。ハッキングをするためだろう。

香奈は仕事のターゲットを聞き、思慮深く言う。

「あそこはかなり不当な研究してるみたい。学園都市も学園都市だけど此処は酷すぎる。バイオハザードに規定以上の戦略兵器。うまいければ学園都市だって占領できる。」

小夜がその研究所のデータベースにハッキングした結果を画面に映す。第三層まである警戒レベルのうち一層迄しかハッキング出来なかったみたいだが、そこですら並んでいるデータははっきり言って異常だった。

「人間の身体を機械にした人造兵器に、細菌による身体能力の増強遺伝子操作による新人類の創造。なかなかおもしろーこととしてんじやん。既に戦略兵器の域を抜けてやがるし。」

「他にもいっぱいあるけど、どれもこれも研究を統括しているのは

ただ一人。その名は散鯨火彌子<sup>さんくわんかやい</sup>。かなりのマッドサイエンティストだよ。」

「へえ、若いな。」

そのデータの中には研究者のデータも入っており、一際目についたのが小夜が示したその人物、散鯨火彌子だった。快活明朗、余りにも若々しいその姿は正直マッドには見えない。

「うん、まだ弱冠十九歳。でもその才能は凶り知れない。」

「ふうん、だが面白い事には変わりねーな。研究所にいるのもただ面白そうだからなんてな。俺と趣味が合いそうだ。」

俺はくつくつと笑いながらそのパソコンの画面を見る。

「じゃあ戸隠さん。この人は殺さないんですかあ？」

「ああ、こいつには俺についてきてもらう。俺の快樂、暇潰しの為にも。そろそろ既存の兵器じゃ物足りなくなってきたからな。」

俺は手のなかでナイフを弄び、ニヤニヤ笑っている奈美に言う。

「ちえー、この人バラせばそこそこ面白いと思っただのになあ。」

奈美は少し不満げに呟いて紅茶のおかわりを入れて飲む。

「そんな事言っつてことはこの仕事受けるんだ。」

「ああ、アレイスターからの指示にはデータの奪取と施設の破壊し

かねーからな。好き勝手出来る。暇潰しには持って来いだ。」

俺は香奈の言葉にニヤニヤ笑いながら言う。

「でも気をつけて、戸隠。あそこ警備に暗部の組織を一つ雇ったみたいだから。」

「へえ、なんて奴ら？」

「アイテム。」

小夜がパソコンを見せながら言うてきた奴らの名前に思わず顔がにやける。

「かは、かはは！こいつらが来るのかよ！！面白くなってきたじゃねーか！！」

俺はパソコンの画面に映る四人の人物を見ながら言う。こりゃ大きな原作ブレイクだな。二人ぐらい殺しとくか？

「アイテム。暗部組織の監視を受け持っている暗部。リーダーは麦野沈理。レベル5の“マルチタウナー原子崩壊”。他レベル4相当が二人に不明が一人。構成員が十五人。暗部組織としては強大な方よ。」

パソコンの画面を見ながら香奈が言う。若干顔が不安そうだ。

「大丈夫だこれぐらい。」

俺はニコツと笑い三人に向き直る。

「お前等にも今回は仕事を手伝ってもらうからな。まず小夜は施設の警備システムの掌握。香奈が指揮官制。そして奈美がアイテム四人以外の構成員と散鯨火彌子以外の研究員の掃討だ。」

俺がそういうと三人は顔を綻ばせる。俺も自然と顔がにやけている。最高の暇潰しが出来たからな。アレイスター様様だ。

「ついで、小夜は引き続きデータ収集。香奈は無線での指示と作戦を建てといてくれ。奈美は俺と潜入だ。」

俺はそういつて耳につける無線機を着けてリビングを出る。奈美も一緒についてきている。

「さて、作戦開始だ。」

俺はそのあと、少し仮眠をして第十学区に轉移した。

回想終了

そして俺は奈美と第十学区戦略兵器開発研究所に来たわけだ。

「んじゃまあ、戦況は随時無線で知らせるって事で。」

「それぐらいわかってますよう。でもいっぱい暴れてもいいんでしょ？」



「ああ、存分に暴れる。」

「はあい。」

俺はそういつて研究所に入っていく奈美の後ろ姿を見ながら、時計を見る。香奈のたてた作戦どおり事が進めば五分後に潜入だ。香奈のたてた作戦は簡単。奈美に派手に陽動してもらってその間に俺がアイテム四人を壊滅させて、散鯊火彌子を説得。説得に応じた場合は保護。応じなかった場合は施設ごと言葉通り破壊だ。どちらにしてもおもしれーのはかわりない。俺は頭に施設の見取り図を思い浮べたあとに腕時計を見る。五分たったので早速潜入する。

「はあ、派手にやったな奈美。すげえぜ。」

一階のロビーは血に塗れており、辺りは死体だらけ。見るも無残に穴だらけだ。

「（ガトリング持ってたからな、あいつ。）」

俺は死体を蹴飛ばしながら、目についた研究室に向かう。

「おうおう、すげーなこれ。バイハかよ。」

部屋に入ると、そこは体育館程の大きさを生体ポッドが所狭しと並んでいた。生体ポッドの中には子どもの死体が多数浮いていた。これもチャイルドエラーだろう。

「何々？ “薬剤投与による肉体的限界突破実験”か。成功例は無し。次期の実験で成功体が出来なければ計画凍結予定。……これには大した研究データはねーな。」

俺は奈美の戦闘の余波による震動を感じながら部屋にプラスチック爆弾を仕掛けて出る。

「じゃあな。」

俺はスイッチを押して、部屋を爆破する。爆発音がしても相変わらず俺には敵が来ない。陽動は成功しているみたいだ。

「次の部屋いくか。」

俺は地下一階に続く階段を降りて、研究室に入る。

「成る程、衛星軌道上からの高出力レーザー爆撃ね。メント・モリかよ。」

次の研究室のデータはツリダイアグラムを応用した衛星技術による太陽光収束レーザー爆撃の研究だった。

「これは興味深いな。理論も独創的だ。ますます面白くなってきたな、散鯨火彌子。」

俺は情報記録デバイスと俺の頭にデータをコピーしたあと部屋のパソコンを爆破する。

「これでもまだまだ第二層か。」

俺は別の部屋に入り込む。中は先程一階で見た生体ポッドが複数あり、中に入っている物は人間と動植物のハーフだった。

「動植物の遺伝子情報挿入による人類の進化促成計画ね。まんまなネーミングだが、分かりやすくいいいな。」

俺は一つの生体ポッドに入っているものを見る。下半身が大蛇の間。検体名はナーガ。

「こんなもんでもいいが、アレイスターに命じられているからな、破壊させてもらう。」

俺は各所にプラスチック爆弾を設置して、部屋を出て爆破する。データはコピー済みだ。

「さて、下には何があるのやら。面白くなってきたな。かはは！」

俺は地下二階に続く階段を見る。下に降りると辺りにはやはり死体が転がっていた。

「この部屋が次か。」

俺が部屋に入るとそこには一人人間がいた。

「誰や？うちの研究邪魔するアホは。」

「邪魔はしてねーよ、散鯊火彌子。」

その人物こそが散鯊火彌子だった。彼女は部屋のパソコンに向かい、相変わらずキーボードを打っている。

「此処まで来たっちゆうことはうちの研究見てきたんやろ？どやった？」

「ああ、傑作だよあれは。面白すぎる。」

「……………うちが言えた義理や無いけど、君には良心は残ってないんか？」

俺がかはは、と笑いながら言つと散鯨火は初めて俺を見る。しかし言葉に反して顔はにやけている。

「良心？そんなもんはねーよ。てかそれなに？そんな偽善はいらねーよ、あれには。」

「へえ、つー事は君はあれを見て何も思わなかったんかい。」

「おもしれーとは思ったね。だがその程度だ。あれはそういう運命を辿っただけだ。」

俺がそういうと散鯨火はくつくつと笑う。

「君おもしろいなー。名前は？」

「近衛戸隠だ。」

「近衛か、うん。覚えてたわ。」

俺が笑いながら言つと散鯨火も笑う。

「散鯨火彌子に覚えてもらえて光栄だ。」

俺が笑いながら言つと散鯨火は少し俺を値踏みして見る。

「そんな前置きはええ。早よ本題話しーな。」

「分かった。言おう。単刀直入に俺についてこい。アンタの人柄、才能、技術、どれをとっても面白い。」

「それはプロポーズかいな。」

俺は再度散鯨火を見る。

「いや、違うが、俺の力になれと言ってんだ。」

「それはうちに得はあるんかいな。」

散鯨火はニヤニヤ笑いながら俺を見る。俺もニヤニヤ笑い散鯨火を見る。

「もちろんある。今よりも面白いものを見せてやる。」

「へえ……………、どんな……………。」

……………多重能力かいな。うちでも作れへんかった。」

散鯨火は俺を見て驚きの余り仰け反る。俺は身体に電気を纏わせ、右手に炎、左手に風を発生させる。

「ああ、俺はアンタにこの力を解析させてやる。俺もまだ把握し切れていないからな。その代わり……………、」

「うちの力を貸せ……………、やる？」

俺がそういうと散鯨火は俺のセリフにセリフを被せて笑う。

「よく分かってんじゃない。」

「いや、あそこまで言われたらきづかんほうが可笑しいやろ。」

「そうかもな。」

俺が笑うと散鯨火はニヤニヤ笑う。

「分かった。ついてってやるわ。うちもアンタが気に入ったしな。」

散鯨火は席を立ち、俺の前に立つ。

「これ、この研究所の今いるフロアよりも下の階層のデータや。」

「ありがとよ。」

俺はIFSで香奈に散鯨火が降った旨を伝えて、散鯨火が渡してきた情報記録デバイスを受け取る。

「それじゃあアンタは外にいてくれ。俺の身内が迎えに来てるはずだ。」

「了解したわ。帰ったら、いっぱいHな事しよな？」

「遠慮しとく。」

俺は散鯨火のジョークを受け流して散鯨火を研究所の外に転移させる。

『散鯨火彌子の回収終了。奈美がアイテム構成員の掃討を数分で終わらせます。すぐにアイテム四人を潰してください。』

「……………探す必要が無くなったみたいだ。」

『えっ?』

その後に香奈から無線で指示が飛ぶが下から砲撃らしきものが飛んでくる。おそらくメルトダウンーだろう。

「今すぐ潰してくる。」

『了解しました。』

俺は香奈に連絡したあと砲撃で穴のあいた所から下に降りる。下には広い空間が広がっていた。恐らく大型兵器の開発ドッグだろう。その場所には四人の人間がいた。

ドオオオオン!!!!!!

「かはは、殺し合おうぜ。アイテム。」

俺はニヤニヤ笑いながら四人を見る。

アイテムはいつか滅びゆくもの(前書き)

今回からはオリ展開多数です。今回はそこそこ後の話に係り  
きます。

楽しんでいただければ幸いです。



## アイテムはいつか滅びゆくもの

俺が落ちてきたのは地下四階相当の開発ドッグ。機材やら鉄骨やらなんやらがあたりそこらじゅうにあり正直ちよつと楽しい。

「アンタらがアイテムだな？」

「そうだけど……。お前は？」

俺がアイテムのリーダーである麦野を見ながら言つと、麦野はヤンデレではなく普通の口調で話す。

「俺？俺はただのしがない暗部構成員さ。」

俺が肩口に手を持っていきやれやれとする。その後俺が麦野を見た瞬間、俺の真横を光線が通り、後ろの鉄骨が数メートル程ぶつ飛ぶ。

「嘘つかないで欲しいんだけどさー。ただの構成員は此処まで来れないでしょ。」

眼前には手を翳した原子崩し。能力を浴びた鉄骨は半ばから折れて、真つ二つ。地面は光線の射線にそつて深く抉れている。

「はぁん、やっぱすぐばれるもんなんだな身分詐称つて。」

「そんなのは超どうでもいいです。早く名前教えろつて。」

俺がはぁ、とわざとらしく笑いながら言つと絹旗最愛がはん、と偉そうに笑いながら言つ。

「黙れよ雑魚。“暗闇の五月計画”の落ちこぼれが。」

「……………超ムカつくんですけど。」

俺は絹旗を嘲笑しながら言う。絹旗は明らかな嫌悪に顔を歪ませる。

「まあ、落ちこぼれはお前だけじゃねーよなこのアイテムって組織体晶使わねーと能力が使えなかったり、自分の能力に身体が追い付かず全力出せなかったり、単に能力レベルが低かったり。そんな奴の寄せ集めだろ。一人じゃ何も出来ねーから群れる馬鹿共だ。」

俺は相変わらずアイテムを挑発する。

ヂュウウウウウーン！！

その挑発の返事に返ってきたのは先程より火力の高い原子崩しだった。

「おいおい、そんなに切れんなよ原子崩し。アンタはそんな玉じゃねーだろ。」

俺はそれを放ったであろう麦野をみて笑う。原子崩しは先程より俺に近い場所を通っていったが俺は微かに避けて、余波を防ぐ。

「お前、ぶち殺し決定ね。」

「マジばねえ……………」

その後に麦野が麦ノンになり、顔面大会のおもしろ顔に豹変する。

「死ね」

「んな、笑顔で死刑宣告かよ。死神も真っ青だな。」

その後に麦野が俺に原子崩しを放ってくる。それは俺に真っ直ぐに飛んでくるが、

「なーんてね。馬鹿正直に狙ってんじゃねーよ。」

俺は光の翼を四枚出し、重力操作で重力を軽くして宙に舞い上がる。

「原子崩しねえ。もらつとこ。」

「ぶつぶつ言ってんじゃねーよ、ボケがああ!!」

チュウウウウウン!!

俺が空中で停滞していると麦野が原子崩しを放つ。

「だーかーらー、そんな落ちこぼれの攻撃食らわねーよ。」

俺はそれを急旋速で一気にドッグの天井まで飛んで、

「ゴッド、フィンガー!! てね。」

手に発火能力によるプラズマを纏わせて一気に天井を溶解させ地下三階に出る。

「おい!!! 滝壺オ!!! あのファツン野郎のAIMを追いやがれ

「!!狙撃する。」

「……無理。あの人はAIMが発せられてない。」

「どっついつ事ですか?」

「どっついつ事だよ。」

俺はそのまま三階の廊下を一気に突き抜け、床に穴を先程のプラズマで開けて、馬鹿正直に固まっている奴らの後ろに躍り出る。因みに此迄の速さはデイストーション・フィールドの防御により光の速さの四割程でている。

「なっ……………!!」

「死ね、粕野郎。」

俺は右手に雷を纏わせ、光の翼を唸らせて一気に麦野に近づく。

「ガアアアアアアア!!!!」

「余りキレると命短くなるぜ。」

そしてそれを麦野の腹に突き付けて放電する。原子崩しと言えど女聖人のようにこの状況で反撃はしてこない。

「ギャハハハ、弱すぎんぞアイテム!!!」

「……………結局アンタの目的ってなんなの?私らに喧嘩売るなんて。」

俺は麦野から離れて、宙に停滞する。麦野は息も絶え絶えだが、此方を睨む眼力は衰えていない。

「こんな圧倒的で圧倒的な場面でその質問とは、肝が据わってるなあ、フレンダ。」

「……………今でもなんであなたが私たちの事を超知ってるのか疑問なんですけど。」

俺がフレンダを見て笑うと、麦野を抱えた絹旗が此方をにらんで言う。

「ギャハハハ！気分がいいから二人とも質問に答えてやるよ。まず絹旗のだが、単に俺がお前等より強いからだ。学園都市統括理事長の知り合いだしな。」

「あなたが私たちより超強いのは認めます。」

俺は絹旗を見ながら笑う。絹旗は溜め息を一つ吐き、多重能力者見たいですし、と繋げる。

「ふうんよくわかってんじゃない。」

俺は素直に絹旗を見直して、フレンダを見る。

「次にお前の質問だが、まず最初にこの研究所のデータを盗むように依頼があったから邪魔なお前等を潰しに来た。もう一つは、暇潰しだよ！！ギャハハハ！」

「ひ、暇潰し！？」

俺は笑いながらそういつて光の翼を唸らせて俺の強襲の理由に驚いている、フレンドダを肉薄する。

「くっ……………!!」

光の四割の速さで飛んだにも関わらずフレンドダはそれを避けてみせる。

「なかなかやんじゃねーか。ならこれは……………、どうかな？」

俺はそのまま急浮上してフレンドダを見下ろす。フレンドダはスカートのうちからロケット砲を取り出して俺に照準を合わせる。

「なっ!!その能力!!」

しかしフレンドダはそのロケット砲を落としてしまう。俺はフレンドダが驚く理由、先程完成させた原子崩しを発動させていた。

「そう、これは原子崩し。だがこれはそこの落ちこぼれと違って、全力だぜ？」

俺はそれをドッグの隅に積み上げられていた鉄骨の塊に放つ。それは鉄骨を楽々と粉碎し、跡形もなく消し去る。

「冥土の土産に俺の能力を教えてやる。」

「えっ……………」

俺の発言にフレンドダが嗚咽を洩らす。

「俺の能力は、完成って名前だ。相手の能力をパクって使えるようにするんだが、ただのコピーとは違う。」

俺は光の翼を消して、地面に降り立つ。四人は相変わらず固まってそこにいる。

「コピーしたオリジナルが能力を十分に使えるとしたら、コピーした俺は十全に使える。」

「……………どういう事？」

俺の言葉に滝壺が聞いてくる。

「つまりコピー元がレベル1だろうがレベル5であろうが俺はコピーしちまえばお前等じゃ絶対に届かねーレベル6の能力を使えるってわけだ。しかも複数な。」

俺がそういった後、フレンダのみならず絹旗にさえ顔に絶望の色が見えはじめる。

「まあ、というわけで俺の暇潰しのために無様に死んでくれ。」

俺がニヤニヤ笑いながらフレンダと絹旗を見ると、右から光線が飛んできてる。

「おっと。」

俺はそれを光の翼を展開して、空中に行くことで避ける。俺のいた場所は深く抉れていて、多分あそこにいたら流石の俺も死んでいた。

「なんのつもりだ？ 麦野沈理。」

俺がフレンドと話しているときに右手に移動していた麦野を見る。  
麦野は相変わらず顔芸を披露している。

「何のつもりもなんもねーんだよ。てめーを殺すだけだ。」

「……………へえ、おもしれーなお前。」

俺は俺の話聞いてもまだ戦意を喪失せず、逆に殺気を溢れさせている麦野を見る。

「おい、絹旗ア、フレンドア！ あいつをぶち殺すぞ。」

「は、はいい……………！」

麦野はフレンドと絹旗を呼び出して、東京ドームよりも大きい大型戦略兵器開発ドッグの機材の近くに行く。

「おーおー、戦う気ですかあ？ その気なら俺はおまえらを絶望させてやるよ。」

俺は笑いながら光の翼をはためかせてガンダムも真つ青な拳動を起こす。

「さあて一方的な殺戮ゲームの始まりだ。」

「調子のってんじゃないぞ、こらあー！！」



俺が光の翼をはためかせてふらふらしていると麦野から原子崩しが放たれる。

「かはは、事実だろーが。」

俺は笑いながら手に野球ボール程の大きさの火球を出す。それは既にデフォルトされたプラズマになり、俺の手のひらで青白く光っている。

「死にな。」

俺はそれを四人に投げる。それは音速を越えて四人のいるところの真ん中に着弾し、大爆発を起こす。

「かは、これくらいじゃ終わらねーよな麦野。」

俺が笑いながら空中で下を見ていると、フレンドが俺から見て右方向に、絹旗が左方向に、麦野が滝壺を抱えて後ろに下がる。

「友情ごっこかぁ？まあそれに乗るのも悪くねーな。」

俺は光の翼をはためかせて左方向に飛ぶ。

「ええ！？まさかの最愛ちゃんですか！？超予想外なんですけど！  
！麦ノンにいけよ麦ノンに！！！」

「いやー、少女をいたぶるのって楽しいんだよね。」

「超最低です！！！」

俺が狙いを定めたのは絹旗最愛。オフエンシフアーマー“窒素装甲”がどんなもんか気になったからという安直な理由だがこれは外せない。

「はあん、そんな口聞いていいのか？落ちこぼれ！！」

俺は絹旗に向かって電撃を放つ。しかしそれは窒素の壁に阻まれて霧散する。

「超不愉快ですが、ちゃんと相手します！」

絹旗は俺が能力を放ってタイムラグがあると思ったのが、鉄骨を窒素で支えて投げてる。

ギョオオオオオオ！！！！

「へっ！？」

「誰が複数同時に能力行使が出来ないなんて言った？」

俺はそれを風力操作で竜巻を発生させてズタズタに引き裂く。

「さあて、少女をいたぶっても何も感慨はねーが面白そうだから殴るか。」

俺はつらつらと意味の無い言葉を並べて自分の前面と握った右手にデイストーション・フィールドを纏わせて光の翼をはためかせて音速を軽く出す。

「ゲエキガン・フレアああああ！！！！」

ギイイイイイン！！！！

「くっ！！！」

俺はそのまま右手を振り抜き、絹旗を殴る。それは窒素の装甲と拮抗するが、徐々に俺のフィールドが装甲を剥がしていく。

「なんだか超ヤバい展開しか想像できないんですけど！！！」

「概ね間違いではないな。」

バキン！！

「きゃあああああ！！！」

ついに装甲が耐え切れなくなり、窒素装甲が破壊される。絹旗は勢いが殺されたとしても仮にも聖人を凌駕する力。窒素装甲がない絹旗は普通の女の子。吹っ飛ばされて地面を二、三地面をホップする。

「ゴホッ！！ゴホッ！！！」

どうやら地面にあたる瞬間に窒素装甲を展開していたらしく、背中を丸めて咳き込む割りには傷の少ない絹旗を上から見下ろす。

パチン！！パチパチ！！

俺はそのまま不規則に指パチンでリズムを刻む。久しぶりに登場した音遣いの技能だ。

「あ、あれ！！能力が超使えないです。」

俺の刻んだりズムは脳に直接作用して神経伝達系やシナプスを狂わせて機能低下に追いやる。能力が使用不可になるのはもちろん、判断能力や動体視力、反射神経、感覚神経が機能低下する。俺は絹旗の横に降り立ち、横っ腹を蹴る。

「がはっ！！！」

背中を丸めて、手と膝をついていた絹旗は仰向けになって倒れる。俺は絹旗の上に馬乗りになり手を絹旗の頭の上で固定する。

「な、何をするんですか！！！」

絹旗は俺の下で暴れているが能力が使えなければただの女の子。俺の力には勝てない。

「お前、俺についてこい。」

「えっ……………」

俺は絹旗の顔に顔を近付けてそう呟く。絹旗の判断能力が低下している今、音遣いを使わなくても精神操作は楽勝でできる。俺はさらに受信感応の異常を平行で使い、絹旗の身体をまさぐり、さらに判断能力低下に追い込んでいく。

「お前をもっと強くしてやる。」

「……………」

絹旗は俺の眼前で顔を赤くして茫然としている。身体のあらゆる神経を刺激してさらに心のうちにある強さへの渴望や、多少ある俺を気にする心を外に持ち出して、仕上げにする。

「俺には、お前が必要だ。」

「……………はい。」

最後の一言に顔を赤くしたまま、絹旗が降る。原作でもそこそこキーマンになっていた絹旗を手に入れる事は物語を確変させるのには必要だ。

「（俺ってマジ狐さんみてーだな。）」

俺は下で顔を赤くしてもじもじしてキャラ崩壊全開の絹旗を見る。

「（こいつの価値はまだ駒だが、そのうち守りたい奴になるのかねえ。まっ、戯言だな。）」

俺は自分の中で自己完結した後に絹旗の上からどき、絹旗の手を取り立ち上がらせる。

「これからは俺等は仲間だ。」

「はい。」

俺の言葉に嬉しそうにはにかむ絹旗。俺は内心と外面の違いに嘲笑する。マジで悪人だ、俺。

「とりあえず今のお前は能力が使えない状態だ。俺の家に転送する

から休んでろ。」

「はい。」

俺の言葉に嬉しそうに笑う絹旗。キャラ変えすぎた？

「じゃあ後で話し合いだ。」

「分かりました。」

俺がボソソジャンプによりマンションに転送するまで、絹旗は終始笑顔だった。

「ふう……。仲間ごっこも友情ごっこも疲れるな。まあ好意を、しかも熱烈なものを抱いてるんなら駒として使うのには申し分ないな。ピンチの時に都合よく駆け付けければ忠誠心はさらに上がるだろうし。」

俺はくつくつ笑いながら、未だに仕掛けてこないフレндаと麦野を思い浮べる。

「十五巻であいつらはどのみち壊滅するし、キーマンの滝壺がいるからな。殺すのは無しにしよう。半殺し決定。」

俺は刀を二本とりだし、肩に担ぐ。

「次はフレндаだ。」

俺は次の標的を決めたところで光の翼をはためかせて音速を越えて飛ぶ。

鬼の形（前書き）

なぜこうなった！！！！！

シリアスなんざ書くきなかったのに！！無双して俺TUEEEEE  
をするつもりだったのに！！

感想よろしくお願いします。

## 鬼の形

さて前回と同じく第十学区戦略兵器開発研究所の地下四階相当の場所にある開発ドッグ。東京ドームよりも大きいこの場所で俺はある人間を探していた。

「うおっと。」

性格にはあらゆる方向から飛んでくる銃弾やミサイルを避けながらフレンドという人物を探していた。また面倒な奴だな。足ぐらい斬つとくか。

「はあん。鬼さんこちらって奴か。乗るのもめんどくさくなる程のほのぼのさだな。」

俺は相変わらず飛んでくるミサイルを相変わらずのつまらない問答を言いながら避ける。

「さあて、そろそろ疲れてきたし、お仕舞いにするか。」

俺は前方から飛んできたミサイルを光の翼で叩き落とす。

「みーつけた。鬼ごっこも終わりだぜ、フレンド。」

「……………逃げてても結局こうなるんじゃない。」

俺がさながら天使のごとく翼をはためかせて地に着地すると件のフレンドは半ば諦め顔で俺を見る。



「……………絹旗が結局アイテムから抜けちゃったし、私もアンタに降ろつかしら。」

その後、フレンドは武器を落として降参するように手を上げる。俺はそれを見てフレンドに近づく。

ズギユウウウウン!!!

「えっ……………?」

「なあに裏切ってただよフレンドア。」

その瞬間麦野の原子崩しがフレンドに襲い掛かる。

「あーぶねーなー。殺す気かよ。」

俺はディストーション・フィールドを前面に展開して原子崩しの余波を防ぐ。

「あ……………ああ……………」

「あーあ、こりゃ本格的にアイテム壊滅フラグか?」

しかしフレンドの能力は凡そお世辞にも高いとは言えない。麦野の原子崩しを防ぐ術もなく下半身が丸々吹っ飛んだ。跡形もなく、微塵もなく。

「おいおい、仲間が裏切ったからって毎度毎度殺してちゃ勝てる試合も勝てなくなっちゃうぜ。まあ、所詮お仲間ごっこのお前等にや無理な話だが。」

俺は鼻で笑いながら麦野に言う。足元には白目を向いて足の無い杜撰な切り口から五臓六腑をぶちまけて死んでいるフレンドが。こりゃ冥土返しでも無理だな。

「うるさいよ。」

麦野はあくまでもフレンドは気に掛ける気は無いらしく、目も向けない。

「はぁん、お仲間ごっこもイレギュラーがありゃ簡単に瓦解するもんだ。悲しいねえ。」

俺はフレンドの死体をゲシゲシ蹴りながら言う。……………原作でもファンが多かったみたいーだし体細胞クローンでも作るっかな。散鯨火もいるし。

「うるさいっつてんだろっが!!」

「……………そんなキレるなよ。カルシウム足りてないんじゃない?」

俺の嘲笑が気に入らなかつたのかフレンドごと俺を丸ごと消し去りそうな原子崩しの壁が迫りくる。

「こりゃ、ディストーション・フィールドでもきついな。」

俺は改めて垣間見た麦野の本気にまさしく同威力の原子崩しをぶち当てる。

「はあん、学園都市第四位も伊達じゃねーな。だけど枠に捉われたまんまじゃ俺には勝てねーわ。残念ながら。」

「はあ……………、はあ……………」

俺はフレンドの体細胞のサンプル、つまり髪の毛を数本と、受信感応の応用によりフレンドの記憶を記録としてデータ化して頭の中に保存する。シスターズ妹達みたいに素体ベースが出来りや記録を散鯨火に用意してもらう学習装置テストメントて入れりやフレンド二号は出来上がるだろう。……………  
…作る意味が有るか無いかは別で。

「（くは、此処までくりや悪人なんて括れる人格じゃなくなってきたな。俺様つてば魔王だろ。フィアンマなんて目じゃねーな。）」

俺は内心も外面も大爆笑して麦野を見る。どうやら出力をミスったらしく麦野の左腕がごっそり根元から無くなっていた。……………原作の前倒ししてるみてーだ。

「麦野、お前にもう勝ち目はねーって。無駄なあがきは止めようぜ。」

「……………。」

麦野はそんな満身創痍、死屍累々な中、俺に原子崩しを放とうとする。

「情けは無用よ。お前に全力を放って私も死ぬ。」

「ハイハイ、ヤンデレ乙。」

俺は麦野の足掻きに特に感慨もないのでフレンドの死体をプラズマ火球で焼き尽くす。そろそろ臭いがきつくなってきたし。腸をべろんべろん辺りにぶちまけてるし。

「お前はいちいちむかつくわね。」

「それが俺ですから。」

ああそつだ。最期が一番哀れで、無様で、惨めで、それでいて綺麗なお前は結構素敵だと思うぜ。」

「……………ありがと。」

俺は最後に前後の会話の相互もなく取り留めもなく関係のない事と言って笑う。麦野はいきなりの展開についていけてなかったが、高校生らしい笑顔を此方に向ける。

「じゃあ、滝壺と絹旗を宜しくね。」

「……………。」

そしておもいきりの笑顔のまま俺に原子崩しを放つ麦野。その反動でボロボロと崩れていく麦野の身体を見ながら俺は原子崩しをデイストーション・フィールドで受け切った。

「……………はあん。最期の最期にまさか良心に訴えかけてくる精神攻撃とは、あいつ多重能力者じゃねーの？」

俺は麦野の自爆攻撃の余波で扇状に抉られた地面を見る。……………正  
確にはその先にいる人物を見る。

「滝壺理后……………」

「……………あなたはわるくないよ。だって私たちは滅びゆく存在  
だから。いつかは死ぬんだから。」

「別に悪いとは思っちゃいねーよ。ただめんどくせー、と思っただ  
けだ。」

その人物、滝壺理后は悟り切った顔で俺を覗き見る。

「……………あなた、名前は？」

「近衛、近衛戸隠だ。」

「このえ……………。うん、このえ。」

滝壺は覗き見る体制から普通の姿勢になる。そのまま半開きの眠た  
そうな目で俺の名前を反芻する。

「ねえ、このえ。私はこのえの役に立てる？」

「いきなりなんだよ。」

滝壺は俺の目を見ながらそんな事を言ってくる。

「……………わたしはあなたの言うとおり落ちこぼれかもしれない。でも、  
アイテムが潰れた以上私に残された道は戦いしかない。」

その言葉は既に消えたはずの心をなぜか彷彿させた。なぜか滝壺には同情も嫌悪も感慨もなく、大切に思える要素があった。

「……………別に戦う以外の選択肢も有るんじゃないか？」

「わたしは体晶実験のサンプルとしては貴重。学園都市上層部に狙われる。」

滝壺は特に感慨もなく相変わらず眠たそうな目のまま俺を見る。

「はぁん、まあ確かに体晶実験の、しかも生きているサンプルは貴重かもしれないがそれがいなくなっただって学園都市はかわらねーよ。例えば、俺が死んだって、世界が劇的に変わらねーのと同じようにな。」

「……………でもわたしには暗部しかない。」

滝壺はそれでも揺るぎなく戦うことを選んだ。

「そんな事はねーぜ。」

「……………えっ？」

俺は柄にもなく滝壺を見つめながら言う。

「何も戦うだけが人生じゃねーよ。俺みたい悪人じゃねー限りなお前は暗部に関わった、それは同時に足が洗えないところまで来たってわけだ。だけど戦わない暗部だって有る。そこでもいいんじゃないか？」

「でも、わたしは人を殺した。それは揺るがないし、許されるものじゃない。」

滝壺の言う通りな所もある。だが納得出来ないところもある。これが浜面の気持ちで、一方通行が打ち止めを守りたいと思った気持ちだと感じた。

「（こんなの知りたくなかったな。俺は今の悪人のままで良かった。家族愛以外の心地よい気持ちなんかいららない、恋心なんていらねー。」

俺は心のなかで多少の葛藤があつた。だが、俺はこんなところじゃ止まれない。俺の欲望のためにも、渴望のためにも、この感情は捨てる。

「なら、俺のための駒になれ。俺に従うなら身の安全は確保してやる。」

「……………わかった。」

言つて後悔したかもしれないなんて後悔すら捨てる。俺は俺の合理のため、自己の渴望のため生きる。

「（俺、なんか変わつちまったな。人の事に何も思わないのは変わらないが、新たに感情ができた気がする。」

俺の渴望は消えない。欲望は消えない。主張も合理も感情も考えも変わらないし、消えない。だけど何か変わった気がする。俺はそれに一抔の不安を感じたが気にせず、滝壺を連れて外に転移した。

「滝壺も絹旗同様マンションに送る。話は俺が戻ってからだ。」

「……分かった。」

俺は研究所の外に出た後、滝壺に言う。滝壺は軽くうなずいた後、俺を見る。

「じゃあな。」

俺は滝壺を一瞥した後手をかざしてマンションにボソソジャンプさせる。

「さあて研究所を破壊するか。」

俺は研究所の方を見て、手を向ける。研究所は散鯨火のデータを見て、全九フロア有ることが分かった。それを全て統括していたのがあの関西弁少女なところが驚きだ。

「データを見るかぎり、あの地下四階のドックはアースブレードとかの正規の品を造ってたみてーだな。潰せといった学園都市が一枚噛んでいるなんて傑作だな。」

俺は散鯨火に貰ったデータは全て記録として、脳内のナノマシンシ



ナプスに保存してある。中には、これ役に立つのか？と甚だ疑問になる品が多数あったが、見ていて結構楽しかった。遺跡にて未来の事象にアクセスできない俺は既成の品しか造ることが出来ないからだろう。

「さて、フロアを一つずつディストーション・フィールドで包んだから爆破しても警備員には知られないだろう。」

俺はディストーション・ブロックなるものを各フロアに造り、爆破による効果を最大限引き上げれるようにした。爆発のエネルギーが一切外に漏れないため、有り得ない時間と熱量で施設の破壊が可能になるのだ。

「んじゃまあ、運命に則った哀れな作品（実験動物）たち。さようならだ。」

俺は各フロアに設置した俺の暗器であるあらゆる爆弾という爆弾を電撃を遠隔操作して起爆させる。さらにはプラズマ火球を中に転移させて投下しさらに破壊していく。結局、二分程で第十学区戦略兵器開発研究所は更地になった。

「腹減ったな。アレイスターに報告したら、すぐ家帰る。修羅場になってる気がするが。」

俺はディストーション・フィールドを解除した後、ディストーション・フィールドの副作用、空腹に腹を押さえて敷地から出る。さっきから耳で何故かノイズを流している無線機を火球で破壊する。：

.....嫌な予想しかないからな。

.....

「ああ、近衛か。」

「ようアレイスター。終わらせてきたぜ。」

俺が来た場所はアレイスターの住みか。時刻は一時。

俺はボソソジャンプでソファアを転移させて座る。

「余計な物は置かないで欲しいんだが。」

「知らねーよ。イギリスから帰って早々依頼してくる馬鹿には言われたかねーな。」

俺はニヤニヤ笑いながらソファアで足を組みアレイスターを見る。

「それはお前が勝手な事をするからだろうに。イギリス清教徒になるなど。」

「別にお前の計画には支障はねーはずだが？」

俺の言葉にアレイスターは密かに眉をひそめる。

「まあ、お前の規格外の動きにはもう慣れた。」

「そりゃどつとも。」

「だが今回の事は正直予想外だ。」

アレイスターは少し呆れた後、俺を凄む。

「まさかアイテムがこの時期に壊滅するなどとはな。原子崩し、レベル3の死亡はあまりにも本筋から外れすぎる。」

「だが、絹旗と滝壺は生きています？二人がいりゃ、別に支障はないだろう？」

俺が笑いながら言うと、アレイスターは逆さになったまま首を横に振り話す。

「ああ、確かに支障はない。替わりはいくらでもある。ブロック、スクール、メンバー、そしてお前と土御門による新たな暗部組織、グループ。まだ無事な暗部組織はある。」

「ドラゴンを忘れてるぜ、アレイスター。」

「……………ああ、そうだな。」

アレイスターは少し気まずそうに言葉をきる。

「だが、一つイレギュラーが発生した。」

「はあん？なにがだ……………「お前の事だ。」……………どういう事だそれ。」

アレイスターは相変わらず不愉快な声で不可解な事を口走る。俺は何も変わっていない。

「本当にそういえるのか？」

「……………」

だが、アレイスターの言葉に俺は黙ってしまった。黙らざるを得なかった。アレイスターは少しあきれ気味に続ける。

「確かにお前の本質は変わっていない。自分の欲望のために犠牲を厭わない、何よりも楽しさを求めるその貪欲さは。だが、お前にとって今日覚めてはいけない感情が生まれた、発生した。」

「……………なにが言いたい。」

アレイスターは無表情のまま俺を見る。

「お前に“愛”と言う感情が生まれたことだ。お前には運命に則って出来た家族がいた。それは血が繋がっていない家族でも、家族愛によりつながった。だが、」

アレイスターはそこで言葉をきる。

「お前に家族ではなく他人を愛すると言う感情が芽生えた。欺瞞でもなく、偽善でもなく、詐称でもなく、上辺だけでなく。」

「……………」

「黙るか。いや黙らざるを得ないだろうな。運命であること、物語の一端であろうと散々人を弄んだお前には芽生えてはならないものだからな。」

「……………それが、どうした。」

アレイスターに言われたことには確信があった。それも確固たるものが。殺してもいい代替のきく絹旗の生存。滝壺に対する家族愛ではない違う感情の芽生え。それは心の内で、俺の決断を鈍らせた。

「それは、私としては余りにも面白くないのだよ。鬼であるお前に人間の感情が生まれるなど。それに私の計画に対する支障が大きすぎる。」

アレイスターの言葉は重く俺にのしかかった。人を愛さない、愛せない鬼。人を見れば殺す鬼。人があれば自分のため利用する鬼。その鬼である俺に愛が芽生えるのは真理として有り得ない。有り得てはならない。

「それぐらい分かっている。」

「だがお前には出来た。出来てしまった。」

アレイスターは忌避しているのだろう。俺が、鬼が他人のために動けばどのような損害になるのかを。それは余りにもおぞましく恐ろしい。

「私にとってはそれは不安要素で、不快要素で、不穏要素なんだ。」

アレイスターははっきりとげげと俺に言う。だが俺は……………それぐらい言われなくても知っている。

「かは、かは……………」

「何を笑っている。」

だから笑わずにはいられなかった。

「かにはははははは！！それぐらいわかってるっつーの。俺に愛がどれだけ不自然かをな。だがな、俺は俺だ。この感情は甘んじて受け止めて、俺の一部にする。青鬼だって、零崎だって人を愛したんだ。俺が愛さない通りはない。」

俺はこの感情を自分の物にする。今までだって、自分中心で生きてきた。今さら愛がどうとかで変わる俺じゃない。

「……………そうか。私の見当違いのようだ。」

アレイスターは諦めて目を閉じて首を横に振る。

「ありがとよ。アレイスター。」

「私は礼を言われるのは苦手なんだ。恨み言はなんとも無いんだがね。」

「それは俺も同じだ。」

俺はアレイスターと話したのちにソファアールからたちソファアールをマンションにボソソジャンプしたあとにアレイスターを見る。

「じゃあな。アンタの計画が成就するといいな、アレイスター。」

「心許ないことを。」

俺はアレイスターにそう言った後、絹旗と滝壺が待っている、修羅場であるうマンションに跳んだ。俺は鬼には変わり無いが、何故か人の心を持つ鬼になった。……………本質は変わらないがな。

俺は少し微笑んで、今日の依頼を完遂させた。

後日談というか後書きのよつなもの2 (前書き)

……… わかった。何も言わないでくれ。俺にはほのぼのは似合わないんだ。だから何もいわないでくれええ!!!



## 後日談というか後書きのよつなもの2

「ただいま。」

「……………」おかえり〜。」「……………」

「……………」。

俺がアレイスターの元からマンションに帰り、ドアを開けて中に入ると六人程の声が聞こえてくる。……………異様なほど明るい声で嫌な予想しかしないこの状況、俺は玄関からリビングに入る。リビングでは異様なほどニコニコした五人がソファアで向かい合ってたっていた。

「戸隠さん」

「な、なんだ……………」？」

俺がリビングに入った瞬間、紫色の憎悪とも言つべきオーラを纏った奈美が俺に枝下かかってくる。

「おかえりなさい」

「あ、ああ。ただいま……………」。

……………取り敢えずその笑顔にそぐわない包丁は離そうか。」

「……………」ちっ。」

しかしその手にはよく研がれた包丁が。まるで俺を突き刺さんが如く、俺の腰にまわされた奈美の手腕に掴まれている。

「何故に舌打ち。」

「自分で考えてほしいのですよう。」

俺に指摘された奈美は、舌打ちしながら包丁を落とす。しかし俺の身体にまわされた腕の力は増すばかり。下から覗かれる奈美の顔は悪戯っぽく笑っていた。

「考えるから、少し退いてくれ。」

「ちえ〜。」

俺は奈美の肩に手をおいて身体から離す。奈美は存外気に入らなそうに座っていたソファアに座る。

「いやあ、まさかこんなハーレム量産人間やとわうちも予想つかんかったわ。」

「止めてくれ。あいつらは家族だ。」

俺はそれを見て、はあ、と一つ溜め息を吐き、散鯨火が座っているソファアの横に立つ。散鯨火は先程の奈美以上に意地悪そうにニヤニヤ笑い、俺を見る。

「いややわ〜。うちもいつかは近衛っちの毒牙にかけられてしまっんやろか。」

「はいはい、ワロスワロス。」

「……………あのな、うちも女の子やねん。その態度は結構傷つくわ。」

俺を見て、顔を赤く染めて自分の身体を腕で抱いて身を振る散鯨火。俺は冷静にそれを受け流したが、内心冷や汗たらたらだった。……………なんか俺等のやり取りを見てナイフを振り回している馬鹿が一人いたから。

「てか、近衛っちってなんだ。」

「えっ？あだ名やけど？」

「……………止めてくれ。俺が本物のエッチに聞こえるから……………」

近衛っち このエッチ

……………戯言だった。

「分かったわ。止めといたる。んならとがっちやね。」

俺の切実なるお願いに散鯨火はけらけらと笑いながら俺の肩を叩く。……………酔っ払ったオヤジかよ。

「まあ、それでいい。」

俺はもうなんだか散鯨火は言っても聞かない子認定をしてあったの

でくだくだ言わないことにする。

「それで……………」

俺は今まで空気だった絹旗と滝壺を見る。

「お前等はどつする？」

聞いて勝手な事だ、と思ったがそれが俺だから気にしない。

「……………わたしは言った通りあなたの駒になる。」

「私は近衛さんの役に立てたら超何でもいいです。」

しかし絹旗と滝壺は、何を三人娘と話したのか、俺についてくることにノリノリのようだった。まあ都合だからいいんだが。

「そうか。」

俺はそう呟き、散鯨火を見る。

「散鯨火、滝壺の身体に溜まった体晶と、その副作用を取り除けるか？」

俺の発言に今までの俺を見てきた三人娘は心底びっくりしたよう目で目を見開く。

「うちを誰やと思ってんねや。第十学区戦略兵器開発研究所のチームリーダーやで？体晶実験なんかごまんとしたからな。施設さえありゃなんだって出来るわ。」

「かはは、そうだな。そうだったな。なら頼むぞ散鯨火。いざとなつて戦えない奴はいらないからな。」

「……………ありがとうこのえ。」

「気にするな。」

俺は散鯨火の発言に笑う。そこに今まで啞然としていた三人娘が聞いてくる。

「あ、あの……………」

「うん？どうした？」

「今までの傍若無人、唯我独尊、人をただの物としか見ない戸隠さんはどこにいったんですか？」

「……………それはどういう意味だ。」

聞いてきた事は至極失礼な事だった。おまえらの発言の方が傍若無人だよ。

「だって今までの戸隠じゃあ、他人を思いやるなんてしなかったじゃん。」

「まあ、確かにな。」

俺は香奈の言葉に神妙に頷く。

「でも俺は身内には甘いんだぜ？それに愛が増えたって何ら変じやない。」

「あ、愛っ！？」

俺が香奈の顔を見ながら言うと、香奈は顔を赤くして仰け反る。ニヤニヤ此方を見ている散鯨火以外も顔を赤くしている。俺はそんな奴らに言う。

「兄弟愛、姉妹愛、家族愛、今までの俺は家族、身内には甘かった。愛していた。それが俺の行動理念の根本、概念だからな。」

俺はそこで言葉を切り、絹旗と滝壺を見る。

「それにただの愛が加わってはいけねーのか？」

俺の発言に三人娘はハツとなるがそれも一瞬、不安そうに俯く。俺はそれに近づき、抱きながら言う。

「安心しろ。お前等の事を邪魔だなんて言つてねー。いらぬ言わぬ。それとも人を愛する鬼は嫌いか？」

抱き締められながら三人娘は首を横に振る。涙を少し浮かべている様は少し萌える。

「違うの、私たちが知っている戸隠がいなくなっちゃう気がして。」

三人娘の発言に俺は少し固まるが、すぐに笑う。

「お前等超可愛いよ！愛らしすぎる！！このまま抱き締めたままで

いてーよ。もうその上までいつちやうかあー!!」

「……………?!?……………!!?」

ちよつとまってー!!その上つてなに!?!」

俺に抱き締められたまま顔を赤くして腕の中で暴れる香奈。俺はパツと腕をとき三人娘を見る。

「かにははははははははははは!!冗談だ!!」

さて、こんな俺はおまえらの知らない俺か?」

俺の冗談発言に香奈が殴りかかろうとするが、すぐに小さく縮こまる。

「心配しなくても、おまえらの知らない俺には俺自身ちゃんちゃら可笑しくなるつもりはねーよ。お前らの言う、傍若無人で唯我独尊で面白いこと、殺戮大好きスタンスな俺は未来永劫変わらないよ。」

俺はそんな三人娘の頭を撫でながら、笑う。

「そう、だよな。戸隠はずっと変わらないよね。」

香奈もニツと笑う。実は出会って一、二週間程しかたっていないが俺たちは家族みたい、いや家族だった。

「当たり前だ!!面白いこと、劇的無くして物語は歩めんよ。」

俺は三人娘から離れてソファーに座る。改まって六人を見ると六人

とも俺を見る。俺らしくねーが設定では身内に甘い性格だからな。これもご愛敬だ。

「という感じで、俺は家族とそしてその三人が愛しくなりました。そこでお前等はこの俺についてきてくれるか？」

俺は三人娘と散鯨火、絹旗、滝壺を見て言う。六人は少し口を開けて惚けるが、すぐにわらう。

「あつたり前よー!!」

「もち。」

「当たり前ですよ。」

「こないおもしろい奴逃したら、人生損するわ。」

「超当然です。」

「……………うん、ついてく。」

六人は俺に微笑む。俺ってばこんな苦手なんだよな、友情とか愛情とか。けど、この知らなかった感情はとても心地よかった。いままで知らなかった分。

「はは、俺って鬼なのになあ。」

「鬼だつて愛ぐらい有りますよう。ほら、青鬼とか零崎とか!」

俺が天井見ながら言うと、奈美がまんま俺がアレイスターに言った



ことを言う。

「ははは、そうだな。」

俺は奈美を見て笑う。俺はこの時本物の愛を知った気がした。本物の愛なんて無いかもしれないが、誰が何と言おうとこれを守りたい、護りたい。

.....

さて、先程までの友情の確かめ合いは終了し俺は、リビングのソファの上に寝そべり雑誌を見ている散鯨火を見る。因みに奈美は料理の下ごしらえ、香奈は滝壺と絹旗を連れて射撃訓練場。小夜は倉庫でコーヒーや紅茶の整理をしている。

「散鯨火。」

「うん？なんやとがっち。……………はっ！！ついにうちとチュウしてくれるんやな！」

「黙れ馬鹿野郎。ついにもなにもねーよ。」

「冗談やん それでとがっちどうしたん？」

散鯨火は俺が声をかけた瞬間、目をキラキラさせて俺ににじり寄ってくる。レッサーみたいな奴だな。

「いや、散鯨火「彌子でええよ?」……彌子は曲がりなりに科学者だろ?開発が出来なかつたら、不満だと思つてさ。」

「いやー、別にうちはとがつちと居ればええんやけど、まあうちも科学者の端くれ。研究、開発はしときたいな。」

彌子はうーんと人差し指を顎に指して唸る。

「そうか。」

「なんや?用意してくれるんか?」

俺がウンウンと頷いていると、彌子はキラキラした目で俺に近づいてくる。

「ああ、そろそろ資料室とか、図書館的なもの、色々な作業部屋が欲しかったしな。彌子がそこにいてくれりゃ大分、俺等の武装も強くなるだろっしな。」

実は、仕事で使う資料や、俺が遺跡から引き出した情報が蓄まりすぎてIFS対応デスクトップパソコンやノートパソコン、紙媒体のデータや、書籍が増えてきたのだ。魔力を一切出さずに書いた、魔力が内包されていない魔道書も日に日に増えてきていて、書庫に入りきらない状態なのだ。

「ふうん、そりゃ嬉しいなあ。うちとしても楽しいことが出来りゃ万々歳やしな。」

「なら、造るか。広さとしてはどれくらいいるんだ?」

彌子はかなりうつとりした目を虚空に漂わせている。俺はメモを取り出して彌子に聞く。

「うーん、そうやな〜……………。バイオテクノロジーは特に手えだす気はないんよな。統括理事会に言われて造つとっただけやし。先ずは約束のどがっちの能力測るための施設やな。」

「広さ的には学校のグラウンドくらいいるな。地下に造るか。機材は？」

俺はメモに大方のサイズ等を書く。

「材料があればうちが造るからな〜。既成の奴は使わん主義やねん。」

「それなら“雑貨稼業”に頼めば何とかなるな。」

俺はメモに雑貨稼業の居場所と必要なものを書き記す。

「後は銃とかナイフとかの携行武器に、ロケランとか、戦略兵器は造るつもりはないけど、戦術兵器、つまりAI搭載の戦車や戦闘機造るための開発ドック。それに医療室やな。そんだけありゃあ十分よ。」

「ふむ、それなら新しい家を探した方が良いな。」

俺はメモにさらに新居探しと書き記す。しかし、それに反論したのは持ってたの他、彌子だった。

「いや、うちのためにそんなお引越しなんて、けつたいな事せへんくつてええんよ?!」

「どうしたのー?」

彌子は普段のけたけたした笑いを不安そうな顔に歪めておろおろしている。そこに香奈、小夜、奈美、絹旗、滝壺が戻ってくる。

「いやさ、彌子が自分のためなんかで引越しなんか嫌だ、なんて言ってるぞ。」

「いや!!普通やる!!」

俺がけらけらと笑いながら五人に言つと彌子は叫びながら俺につっこむ。……おお関西本場のツッコミか。

「良いんじゃない?お金いっぱい有るし。」

「そろそろ倉庫がいっぱいになってきた頃。施設拡張も出来ないし、良いと思う。」

「私もキッチンが手狭になってきたので、変わりたいですねえ。」

「……………皆さんブルジョワなんですね。」

「…わたしたちは新参者だから口出できないし。」

五人は特に引越しには反対意見は無いらしい。というか逆に引越しバッチこいな姿勢だ。

「なっ?」

「うう……、そこまで言われたら反対できへんやん。」

彌子はうなだれながら、了承する。

「そんじゃあさ、お家探さないと。」

「第七学区内の高級住宅街が良いと思う。」

「ならアレイスターに頼んで色々揃えて貰いませよー。」

「アレイスターって、誰です?」

「学園都市統括理事長。」

「マジっ!?!?」

彌子がうなだれている間にもうすでに家探しを始めている。てか、アレイスターの名前を軽々しく出すなよ……。

「はいはい、取り敢えず黙れ。」

「ねえねえ、戸隠。これとこれどっちがいい?」

「黙れつつつてんだろ。」

俺が手を叩きながら五人に近づくと、香奈が二枚のチラシを持って近づいてくる。俺は香奈の頭にチョップする。

「まず引越しは決まった。アレイスターにも話は取り付ける。だが、工事やら器材搬入やらで早くても二週間、長くて一ヶ月かかる。それ迄待つてろ。」

「あう〜……。ちょっと痛かったんだけど。」

俺が五人に言うと、香奈は頭を押さえて涙目でさらに上目遣いで俺を見る。

「残念ながら、俺に妹萌という特殊属性はない。」

「……………どちらかという姉萌じゃないかな。」

俺の言葉になんかうなだれる香奈がいたが正直どうでもいい。

「さて、アレイスターは滞空回線で聞いているだろうから多分動いているだろうな。人の頼みを断れない奴だから。」

何故か同学区内にある、窓のない建物から、卑怯だぞ、と聞こえた気がしたが無視だ無視。

「んじゃ、奈美。飯作ってくれ。」

「はい。今日は鯖のみそ煮と味噌汁、ほうれん草のお浸し、肉じやが、ご飯と日本食で攻めてみました。」

「……………簡単ゆえに実力がわかる料理。これは楽しみ。」

「滝壺って超グルメなキャラだったですか。」

なんだか三人娘がまた一組増えて一段と騒がしくなった気がする。  
まあ、楽しいからいいが。

## 新たな住まいと竜王の殺息（前書き）

お久しぶりです戯言です。今回、投稿が遅れてしまいましたみませんでした。テストや宿題、体育祭、文化祭の練習で忙しかったんです。

それではどうぞ



## 新たな住まいと竜王の殺息

本日7月27日、午前九時。上条当麻の記憶消失という重要なイベントがあり、当麻の記憶を消すか消さないか迷っている瀬戸際、俺は、

「これはどうしますー?」

「それは玄関先に。」

「分かりましたー!!」

引越業者（暗部の構成員）と共に、ある邸宅に引っ越しをしていた。

「……………アレキスター殺す。くくっ……………」

俺はリアルにナイフを握りながら笑う。こうなったのには理由があった。

## 回想

あの後皆とリビングで奈美の淹れた紅茶を呑みながらテレビを見て談笑していると、携帯が振動する。

「どうしたの?女?」

「あ、いや、当麻からメールだ。……別に女じゃない。」

「ふうん、なら良いんだけど。」

俺が香奈にメール相手を言ったのに他意はない。決して香奈がナイフを握って此方を凝視していたからではない。決して……………。

「ええっと、インデックスの記憶消去リミットが一日きったか。」

「あれ？インデックスって子の首輪解除（フラグを立てるため）にイギリスに行ったんじゃないの？首輪解除しなかったんだ。」

副音声がなんだか怖いのです。言外に女たらしと言われているようである……………。

「まあ、あれを外すためにイギリスに行ったは良いものの、最大主教は外し方を知らない。だから首輪を外すかわりにイギリス清教徒になってきた。」

「自分の愉悦のために？」

「当たり前だろ？引つ掻き回すものが多けりゃ多いほど物語は確変されていくからな。」

「ふうん。まあ、私も楽しくなるから良いんだけどね。」

俺と香奈がひとしきり笑うと、また携帯に電話がかかる。

「はい、近衛だが。」

『ああ、私だ、私。』

「……オレオレ詐欺はお断わりです。」

『アレイスターだ。全く私をオレオレ詐欺など低俗なものに間違えるでない。』

その電話の相手はアレイスター・クロウリー。不愉快な声が耳に流れるのは気分が悪い。

「てめえが悪いんだろう。横着してねーで名前いえ馬鹿。それで？俺の香奈とのスーパーイチャイチャタイムを邪魔するこの電話はなんだ？」

『ああ、今から話そう。』

俺が改めて携帯をコツコツ叩いて聞くとアレイスターは、ふふふと笑って勿体ぶる。……………うぜえ。

「さっさとしゃがれ。」

『ああ、そうだな。』

第七学区の十万平米三階建て、テニスコート二つにバスケットコート一つがついた庭、地下にグラウンド程の広さがある能力測定場に、最大レンジ2・5キロメートルの射撃訓練場、東京ドーム二つ分はゆうに入る開発ドック、空き部屋十万平米が地下五階から七階迄で拡張可能、中性子爆弾にたえうる地下シェルターあり、さらに

ツリーダイアグラム並みのスーパーコンピューターが五つある完全冷房制御室、紙媒体データ保管資料室、蔵書五十万冊の図書室に一秒で十桁の暗証番号がランダムで変わる強化セラミック製の扉付厳重図書保管室、武器庫にワインセラー、倉庫がついた邸宅があるんだが。どうだ？」

「……………」

アレイスターの用件はあまりにも長すぎて思考回路が一時断裂（実際はナノマシンシナプスは断裂しても他のシナプスがカバーに回したかと思った）

「（は？邸宅？）」

アレイスターの言葉のなかには先程まで話していた内容があった。

『どうした？不満か？』

「……………いやいやちょっと待て、Be Quiet!!……………じやねーこれ黙れじやねーか、えっとシャラップ!!……………これも黙れじやねーか!!!!」

ゆえに電話で話しているにも関わらず意味不明な事を叫んでしまった。……………黒歴史が増えた……………。

『なんだ不満なのか。』

「いや待て、ちょっと待て。なんでアレイスターそんな邸宅を？」

『何、お前が滞空回線で私に言ったもんだから、高級住宅にあった邸宅をベースに改造して造ったのだ。』

「……………話していた時からまだ30分しかたつてないんだが？」

そう、引っ越しの話をしていた時から30分しかたつていない。どう考えたってこのスピードはあり得ない。

「どうやって30分で造つたんだよ。」

『暗部構成員を総動員して造つた。』

……………チートすぎね？

「……………そんな事のために暗部全員使つたのかよ。」

『ふむ、そんな事、と言われる筋合いは無いのだが。』

「ああ、俺が悪かった、悪かったよ。」

『分かってもらえればよい。』

アレイスターはふうむ、と溜め息をついて話しはじめる。

『それで、どうする？』

「どうするもこうするも用意してもらえたんなら住むよ。」

俺はアレイスターにそういう。

「んで？いつ行けばいい訳？」

『明日だな。引越業者（暗部の構成員）には明日引っ越しすると言ったからな。』

「……………アンタやっぱ馬鹿じゃないの？」

明日ってどういう事だよ。急過ぎじゃね？

『知らん。』

「……………わーったよ。明日引っ越しする。工賃は幾らだ？」

アレイスターの有無を言わせない言いざまに俺は諦めてアレイスターに嫌々言う。

『ふむ、払ってくれるのか。そうだな、邸宅が二億、工賃が一億二千万、機材代三億で、六億二千万だな。』

「学園都市って儲かってんじゃないのか？もうちょいまけるよ。」

俺がアレイスターに脅すように言うと、アレイスターは気にも止めず言う。

『生憎だがこの邸宅はどこかの大学の試作モデルハウスではなく学園都市の私財なものでな。言い方をかえれば私のものなのだよ。だから儲け云々ではなく、一般の法律に基づいて払ってもらわなければならぬのだ。』

「はあん、成る程な。なら仕方ねえ。」

『わかってもらえて良かった。』

アレイスターは口振りとは裏腹に淡々と話す。その後、アレイスターは言う。

『その程度だ、用件は。』

「あっそ、なら切るな。」

アレイスターはやはり淡々と不愉快な声色でいい、電話を切る。

「どうしたのー？」

「明日お引越した。」

「はあ？」

俺が電話を切り、腰に手を当てて嘆息しているとソファアに座った香奈が身を乗り出して聞いてくる。俺が電話の内容を言うと、香奈は顔を顰めて、ソファアの上でうなだれる。

「……………急過ぎ……………」

「アレイスターに言ってくれ。」

そして俺と香奈は二人揃ってはあ、とうなだれる。

回想終了

というわけでお引越しなわけだ。マジでアレイスター死ぬ。

「はぁん、アレイスターが推すだけある。」

現在俺がいるのは一階のリビング。はつきり言って広すぎる。五十帖で三階まで吹き抜けで太陽光の入射角やらガラスの透明度なんかを計算する事で自然の光をリビングに通用している。リモコンボタソ一つでガラスからすりガラスにする事も可能で、さらに防弾ガラスという徹底ぶりだ。

「これで二億は安いな。流石学園都市。価格破壊が凄まじい。」

俺はリビングの真ん中付近にあるソファーに座る。テレビはやはりと言うべきか液晶テレビで無駄に八十インチ。その前にゲーム機がこじんまりと置かれているのがシュールだ。

「はわー……。システムキッチンがあ、包丁があ、お鍋があ。」

「奈美……………」

ソファーの丁度対局に位置するキッチンでは奈美が包丁に頼摺りしながらうつとりしている。キッチンは彼女の独壇場だから何も言うつもりは無かったが、一つ言わせてくれ。……………危ないぞ、と。

「うおー！…！こっちは超スクリーンが有りますよ！…！」



「……………こつちにはジェットバス。ブルジョワもここまでくるとはなはだしい。」

リビングから出たホールを挟んだ向こうから最愛と理後の叫び声（最愛のみ）が聞こえる。

「……………騒ぎすぎだろ。」

俺は二人の様子に呆れながら、玄関前のエントランスホールから二階に上がる。

「俺の部屋が階段から一番手前、そこから香奈、小夜、奈美、彌子、最愛、理后と並んでいるわけだな。」

俺は廊下に立ち、自分の部屋の扉を見ながら言う。ホテルのように廊下の両側に交互に並んでいるドアを見て、俺は反対側を見る。

「んで、こつから下を見れるわけだ。」

そこは吹き抜けに面するところでバルコニーのようになっていた。やはりここでも光の云々が出張ってきて、廊下には普通に光が射す。天井の照明も最小限になっている。

「三階は書斎やらだったな。」

俺は階段からつえを見て一階に行く。階段の横にあるエレベーターを見て、ひとまずまた嘆息する。

「維持費どんだけかかるんだ？」

結構切実だった。

「当麻の記憶の事でいっばいなのに何で俺がこんなに頭を痛めにや  
いかん……………」

俺はエレベーターに乗り込み、地下一階に向かう。

地下一階は主に保管や保存を目的としているようで、ワインセラー  
では小夜がせつせと整理をしていた。俺はそれを一瞥して、武器庫  
や資料室をのぞいたあと、図書館に行く。

「ほお……………、これは凄い。」

ゆうに五メートルはあるうかという天井につかんばかりの本棚が綺  
麗に並んでいた。なんだか、リリカルなのはの無限書庫を見ている  
みたいだった。検索用の端末も種別、用途にわかれているようで、  
二十台ほど並んでいる。さらにその奥には、MADE IN 散鯨  
火とタグの貼られた自動書籍回収搬送整理ロボが十台置いてあった。  
形としては、高所にも適したフォークリフトみたいな感じ。

「……………あれが魔道書用の嚴重図書保管室だな。」

遠く離れた場所に、黒塗りの両開きのドアがあった。その横には、  
モニターと英数、カタカナのキーが並べてある。一秒ごとに電子音  
を響かせており、赤くランプが灯っている。

カチカチカチカチカチ……………

俺が十桁の暗証番号を打つ。すると少し長く電子音をならせてラン  
プが緑になり、扉が開く。因みに暗証番号は“IWMA225カラ

TG”。もうすでに暗証番号は変わっているだろうから無駄な数列だ。異常たる俺にしか開けられない扉だ。

「はぁん、耐魔術の術式が所狭しと張られているな。」

そこは見るものが見れば、異様なものが広がっている。具体的には、バチカン市国の多重結界のようになっていた。虹色に淡く光る目に見えるほどの結界は不気味に蠢く。

「まさしく俺にしか入れない部屋だな。」

今入る用事はないので俺は扉から出る。扉は重々しい音を立ててしまる。横の端末のランプが緑から赤に変わり、またしても電子音となる。

「地下二階はフロア全部スパコンだったか。」

俺は図書館から出て、エレベーターに乗り、下に行く。

「こりやまたすげーなおい。施設だけなら学園都市の公立学校余裕で抜くぞ?」

俺の眼前にはスパコン五台。冷房により室温は十五度に設定されていて少し寒い。スパコンの前にはこじんまりとしたデスクとIFS対応パソコン。ここも俺にしか使えないらしい。

「ふう。後の下のフロアは今度いきゃ良いか。そろそろ当麻に記憶の事を明かさないと不味い。」

俺が時計を見ると既に五時。原作の時間まで後三時間。俺はボソソ

ジャンプで第七学区の小萌先生がいるアパートに跳んだ。

…描写がイマイチだったので補足すると、めだかボックスの時計塔を思い浮べてもらえたら良いと思います。

.....

俺は小萌先生の住んでいるぼろっちいアパートのある部屋の前にいた。表札には、月詠の文字。俺はその部屋のドアノブに手を掛ける。鍵は掛かってないらしく、ガチャリと簡単に戸は開く。

「くそっ!!」

中では当麻が高校の教科書を引っ張りだして何かを一心不乱に調べていた。横で寝ているインデックスは大粒の珠の汗を顔中に張り付かせて動悸が激しい。どうやら神裂の似合わない宣告の後のようだ。

「くそっ!!くそっ!!何処にもねえ!!何にもねえ!!」

「何がだ?当麻。」

「.....戸隠。」

俺が部屋に入ると当麻は心底驚いた様子で俺を見る。俺は当麻の元に向かい、机の上に置いてある教科書を見る。

「脳科学系の教科書か……。それも記憶の分野……。誰か記憶喪失なのか？」

「っ……………！！！」

俺は教科書片手に当麻を見る。当麻は畳の上に膝立ちで座り、手を握り締めて下唇を噛む。簡潔に言うと悔しがっていた。

「その反応を見る限り凶星……………、と言うより正解と言ったところか。」

「……………ああ、メールで言った通りインデックスの記憶消去がもう時期な。」

「成る程な。」

俺はぺたんんと座り込んだ当麻を見る。顔を青くして震えている様は見られてねー。

「当麻、ちよつといいか？」

「……………なんだ？」

「インデックスは完全記憶能力者何だよな？」

「ああ、そうだが……………。それが？」

俺は当麻に尋ねながらインデックスの頭の傍に屈んでインデックスの髪の毛を撫でる。汗のせいで髪の毛がまとわりつく。古来より手には不思議な力があり、手当と言っ言葉が有るように、他者に手を

当てられると不思議と気が楽になるといわれている。……………まあインデックスの場合、首輪のお陰でこの状態だから意味はないが。

「当麻、知ってるか？完全記憶能力者は記憶した日毎の思い出や、知識で脳が圧迫される事はないってこと。」

「……………えっ？」

当麻が素っ頓狂な声を上げるが俺は構わず口を開く。

「完全記憶能力者、一般人に限らず脳の構造は同じだ。脳は複数の部位に分かれて機能している。名称は知らないが、知識の記憶、思い出の記憶などと分かれていてさらに、脳の記憶容量は百四十年分は有るとされている。」

「……………どういう事だよ。」

俺の独白に当麻は頭上にはてなマークを浮かべて聞いてくる。

「つまりだ。いくら本を何万冊覚えようと、それは知識の記憶なだけで、思い出の記憶には関係ないという事だ。だから今のインデックスのように思い出の記憶を消す必要は無いんだ。」

「……………うそ……………だろ？」

当麻は俺の言葉に悲しそうな悲痛な面持ちでインデックスにすがりよる。しかしインデックスはそれには反応せず、さらに動悸を激しくしている。

「うそじゃねーよ。第一完全記憶能力者と一般人は脳の構造は基本

同じだ。人間は実際一度見た物は忘れねえ。つまり、完全記憶能力者と一般人の違いは、どれだけ記憶の引き出しを効率よく出せるかだ。……まあシナプスは常に死に続けてさらに増殖しない。だから記憶はじきに消えるんだがな。」

俺は、ふっ、と笑い当麻を見る。当麻は目を丸くして此方を見ている。

……仲間にしてあげますか？

……そんなアイコンがあらわれた気がした。

「……どうしたんだ？難しかったか？」

「……中坊に同情されながら言われるとこんなに腹立つんだな。」

「おいおい、逆ギレは止めてくれよ。それで？理解したのか？」

俺の嘲りに当麻はうざったそうに此方を見るが、インデックスのこともあってか口には出さなかった。

「ああ、理解した。………………だけど、ならインデックスは何で記憶を消さなくちゃいけねーんだよ！……！」

「落ち着け。」

当麻は俺を見たあと俺に掴み掛かろうとする。俺は当麻の頭を押さえつけてそれを防ぐ。

「……ああすまない。」

「そう思ってたんなら最初っからしてほしいんだがな。」

俺は勢い余って抱き付いた当麻を退かして、呆れて見る。

「それで、インデックスの事なんだが……………」。

俺はインデックスの十万三千冊の魔道書のこと、ローラが着けた首輪の事、その理由、自動書記の事を話した。当麻は肩を震わせて下を見る。

「そんな……………、勝手な事があるかよ!!」

当麻の言い分はもつともだろう。だがしかし、それは個人の理想論であり、組織の現実論ではない。組織は存在概念に理由がある。ネセサリウスなら暴走した魔術師の殲滅。他にも、オルレアン騎士団、神の右席、様々あるが、やはり完全ではない人間の組織なので様々な思想が渦巻いている。信仰の坩堝だ。だからこそ自分の都合で、組織の利潤で強者を弾圧する。それがインデックスだっただけだ。インデックスは組織を裏切ったり、組織から拉致されたときの応急措置として首輪を付けられただけだ。それは揺るがない。

「それが組織というものだ。」

俺は当麻を見ずに、インデックスを見やる。そろそろ神裂、ステイルがくる頃だろう。俺はインデックスの頭に手を当てて扉を見る。

「タイムリミットです。」

ちょうど俺が扉を見た瞬間に神裂、ステイルが部屋に入ってくる。



「記憶を消さずにあの子……………、インデックスを助ける方法は見  
つかりましたか？」

神裂は当麻に尋ねる。インデックスから神裂を見た瞬間に俺は神裂  
と目が合う。

「……………あなたは。」

「よう、神裂。お仕事お疲れさまだ。」

嫌悪感……………、いや真偽感を顔に張りつけた神裂に俺はあくまでも  
朗らかに笑顔で挨拶する。神裂、ステイルは俺の態度に一瞬……………  
…、どころか常に顔を引きつけて身体を仰け反って俺から二歩分  
後ろに下がる。

「（そんなに俺って爽やか合わないんだな。）」

頑張つて半目を開いてにこやかに挨拶したというのにこれは酷かつ  
た。俺は頭にかけたもはやデフォルトとも言える描写にも徹底的に  
出てこないヘッドホンのプラグ端子を弄りながら、久方ぶりのニヤ  
ニヤ顔を張りつけて二人ににじり寄る。

「なあに下がってんだよ先輩？」

「……………はあ？」

「ああすまない。まだ見せてなかったな。」

俺の発言に顔を酷く歪ませる神裂。俺はズボンポケットに入ってい  
る三枚の紙を取り出して、神裂に渡す。三枚とも羊皮紙なので嵩張

ってうざかった。

「何ですか？これは。」

「イギリス清教徒になった事の有無がかかれた紙と、この仕事の辞令、そして首輪解除の許可証だ。」

俺が渡した羊皮紙は三枚。辞令と紹介文、そしてローラのあのうざい日本語でかかれた首輪についての説明と付けた理由のかかれた書類だ。

「……………！！これは！！！」

神裂とステイルは三枚目の羊皮紙、首輪についてを見た瞬間、顔を驚愕の色に染め上げる。神裂に至っては感極まって涙が目に浮かんでいた。

「あの子の……………記憶を……………消さずに済む……………」

「ああ。」

神裂、ステイルがあまりにも展開に俺の辞令やらを気にせず泣き崩れる。

「まあ、感動の涙は最後までとっとけ。それと今からは俺の管轄だ。口出しはしないでもらう。」

俺は書状を持って膝立ちで泣いている神裂にそういって、ステイルにローラの二枚目の書状を見るように言う。

「ローラからこの仕事は俺がするように言われた。最大主教からの命令だ。逆らうなよ?」

「……………ああ、分かっている。」

ステイルは書状を持ったまま俺に懽然とした表情で返事をする。

「さて、当麻。」

「なんだ?」

俺はステイルから目を外し、当麻を見る。当麻の右手を指差し、見ながら言う。

「首輪は魔術的要因により出来ているものだ。お前のその手なら破壊できる。」

「それで、インデックスは記憶を消さなくて済むんだな。」

「ああ、当たり前だ。記憶消失による延命がその首輪の本性だからな。」

ヘッドホンを頭から首に掛けなおして俺は当麻に少し近寄る。

「場所はどこだ?」

「喉の奥だ。首輪は元来首に掛けるものだからな。」

当麻は自分の右手を見て言う。俺の返答を聞いた当麻はインデックスを、詳しく言えばインデックスの首を見る。当麻には鎖でがんじ

がらめにされている首が見えているかもな。優しい奴だから。

「だが、首輪を外せば自動書記が発動するだろう。こないだのあのハイライトの消えた目をして喋っていた様だ。十万三千冊の魔道書を駆使して魔術を放ってくるな。」

「俺がそんな事に臆すると思ってるのか？」俺の忠告、いや脅しだな。その脅しに当麻は目を据えて俺を真っすぐに見る。

「……………そうだった、そうだったな。お前はそんな些細なことでとまる奴じゃねーからな。」

「ああ、やっとわかったかこのやるー。」

俺は目を伏せてそういう。当麻はニカツと笑いながら俺の肩を叩く。

「さあ、と言う事で首輪壊しちゃいなよ。」

「ああ、行くぜ！」

そして当麻は俺の変なノリに触発されてハイテンションのままインデックスの喉に手を突っ込んだ。

「……………首輪への不正な干渉を確認。禁書目録第十章二十七項から第十一章三十二項までを起動。不正干渉者、上条当麻及び近衛戸隠を敵対者として攻撃目標に登録します。上条当麻の右手と近衛戸隠の異常なるテレズマを考慮し、使用術式を“ドラゴン・プレス竜王の殺息”とし、術式展開を始めます。」

「……………さあ、来いよ。魔神さんよ。」

当麻が首輪の一部を破壊した瞬間、今まで珠の汗を顔中に浮かべていたインデックスの目が開き、むくりと起きる。その目からはハイライトが消えていて、目の奥に自動書記の術式が見え隠れしている。そして、

「ドラゴン・ブレス “竜王の殺息”を発動し、敵対者、上条当麻と近衛戸隠を粉碎します。」

ギョオオオオオオオ!!!

インデックスの目の前に直径二メートル程の魔方陣と、部屋中に小さな魔方陣数十が展開されて、妖しく光り、“ドラゴン・ブレス 竜王の殺息”が俺たち目がけて放たれた。

## 禁書目録（前書き）

お久しぶりです。戯言です。

まずは更新遅れて済みません！！リアルで文化祭、体育祭と忙しく、打ち上げやその他もろもろでなかなか更新出来ませんでした。

しかも今回、スランプのせいか中身がすっかすかで矛盾、穴だらけ。しかも話が飛ばし飛ばしなので分かりにくいかもしれません。その点はご了承ください。

PS

最近ボカロにハマっています。カラオケで歌っていた人がいたので

## 禁書目録

ギユオオオオオオ!!!

その音とともに禁書目録から“ドラゴン・ブレス竜王の殺息”が俺たち目がけて放たれる。卑しく、妖しく、不敵に光るその光線は干渉者たる俺たちを破壊せんばかりに地面を抉り、空間を引き裂き食い干切り、然程禁書目録から遠くない位置にいる俺たちに到達しようとしていた。

しようとしていた”。

キイイイイイイン!

「うおおおお!!!」

それは勢いを殺さないまま当麻の右手に吸い込まれるようにぶつかり、そして当麻と拮抗した。ガラスが割れるような音を立てて、一瞬消えかけた光線は、辺りで妖しく光る術式により魔力がこめられ続けて当麻の右手を揺らす。

「……………幻想殺しによる拮抗は予想の範囲内で有ることにより、事前用意した禁書目録第十一章三十二項から第二十七項迄を参照し、術式を強化します。」

しかし幻想殺しによる拮抗は禁書目録により崩れる事になる。禁書目録が瞳孔の開き切った目で当麻を見やるあと、あくまでも事務的に言葉を紡いだ。それに心は無いが意味はある。禁書目録たる意味、禁書目録であるための価値である十万三千冊の魔道書は禁書目録により使役される。甘んじて“ドラゴン・ブレス竜王の殺息”などと言う術式は無くとも、ドラゴン・ブレスは禁書目録により十万三千冊の魔道書から造

られたオリジナル術式。強化のしようはいくらでもある。

「……………ほう。流石禁書目録。厨二病全開だから術式が派手だ。」

「感心してないでお前もなんかしゃがれ!!」

「やだ。」

当麻がなんか喚いている気がするが一言で拒絶。わざわざむぞむぞとドラゴン・ブレスに突っ込んで自爆なんかは嫌だからな。痛いを通り越して消滅しそっだし。

「ちよっ、おまつ！それでも友達か!!」

「ふっ…、愚問だな。当たり前だろうに。」

「なら、助けるー!!いや、助けてくださいませ!!」

右手でドラゴン・ブレスを受けとめながら後ろを見る当麻に何を言ってるんだと言つ風に肩を竦める俺。

「お願いだから手伝ってくれ!!」

「痛い嫌いだからやだ。それにお前の必死の姿……………ぶっ……………おもれーし。」

「NOOOOO!!!!この鬼畜野郎があああ!!」

「最高の誉め言葉をありがとう。」



だが世の中は何時でも無情に不幸に廻り続けている。そうそれは、幻想殺しでも、普通の人間でも変わらない、いや変わらない。“人生はプラスマイナスゼロ”と言う人間がいるが、それは傲慢だ。なんたってこの言葉の主は必ず人生はプラスだから。プラス側の人間の言葉なんて聞いていたら耳が死ぬ。リア充モゲロ。こんな言葉の乱立だ。しかし俺を含めて一部は違う。人外の強さ。有り得ない知能。そして傍観者足りえるその器量と野望。俺は自分は勿論、他人世界ですらも革変出来る力を持っている。ならばそれを使わないのは勿体ない。使えないのはただのチキンだ。

さて、ここまでの俺のありがたーいお言葉の乱立、定義は特に今の状況を憂いての物ではない。況してや俺の本心でもない。事実無根をただただ戯言めいて言ってみただけだ。俺の中では今はスパー濡衣タイムなのだ。心すら黒くクロくくろく塗り潰された俺は上機嫌。自分でも意味がわからない程自分に酔っていた。

「……………戸隠。」

だから何故だろう。自分の行動が理解できない。

「……………なんで……………、お前……………。」

理解できない、いや理解は出来ていた。

「……………なんで……………。」

ただ理解したくなかった。

「……………なんで。」

俺の心内環境に一つ産まれた感情。家族愛、親愛、姉妹愛、兄弟愛に肩を並べるほどの信条、心情。

「……………なんで!!」

俺自身求めていたかもしれない。いや、求めざるを得なかった感情。そんな不確定事項に俺は突き動かされた。なんたってその感情は…

……………、

「なんでお前は俺なんかのために笑いながら自分を犠牲に出来る！  
!?!?!」

「……………さあな、わかんねーよ。」

初めて確信した。本物の友情だから。何が発端か、何が切っ掛けか分からないその感情。今の俺は眠そうに無愛想に無表情でいるのか、それとも似合わない笑顔を浮かべて微笑んでいるのかは分からない。だが確信できた。俺は当麻が愉悦、利益、損得関係なしに友達で居たいという事。

「ただの俺の気紛れじゃね？」

俺はドラゴン・ブレスに呑まれながら、恐らく笑顔を浮かべる。当麻は悲痛な顔をしているが、生憎と俺は最強だ。

「故に簡単に死んでたまるかよ。まだまだ序章の序章。長い長いプロローグの途中なんだぜ。俺は欲求不満なんだ。この俺を愉しませろ！禁書目録！！」

俺が手を翳すと、今までのモノより遥かに分厚い不可視の壁があらわれる。それは、ディストーション・フィールドは俺を包むように球状に広がり、ドラゴン・ブレスと拮抗する。そして……………、

ズギユウウウウン！！！！

ドラゴン・ブレスは俺が更に展開したパラボラアンテナのような形をしたディストーション・フィールドにより徐々に上方に移動していき、最終的に小萌先生宅、築二十年は経っていきそうなポロアパートの天井を打ち砕き、天へと駆ける。

「……………戸隠……………、お前……………。」

「バーカ。俺が簡単に死ぬかよ。過小評価し過ぎだぜ、俺の事。どれだけ過大評価しても事足りない俺をな。」





俺はデビルかつけえー盾を粉碎すべく拳にディストーション・フィールドを纏わせて力に任せて押しまくる。

「はっはー！！壊れる壊れる壊れるおお！！！！」

ピシッピシッピシッ！！

俺の攻撃により禁書目録のシールドに罅が入っていく。俺はどんどん力を籠めて禁書目録のシールドを破壊していく。

「はああああ！！！！！！」

パリーン！！

俺の似合いもしない雄叫びによりシールドを粉碎する。禁書目録はその衝撃で身体を大きく仰け反らせる。

「当麻あ！！今だ！！首輪を破壊しろ！！」

「お、おう！！！！」

仰け反る禁書目録は今現在隙だらけ。首輪を破壊するには持つてこい。俺の合図とともに当麻は足がもつれながらも禁書目録に向かって駆ける。

「ウオオオオオオ！！！！」

当麻が雄叫びと共に禁書目録の口内に右手を突っ込む。構図だけ見てりや変な性癖を持つバカップルにしか見えない。……………リア充モゲロ。

キイイイイイン!!!

「よっしやあ!」

そここうするうちに当麻が無事に禁書目録の首輪を破壊する。禁書目録も自動書記を解除したらしく、目のハイライトが戻り表情が人間味を帯びる。しかし幸か不幸か、いやどちらかという不幸の部類に入るだろう事象が発生する。自動書記が解けたことにより、ドラゴン・ブレスの術式の余波……、白い純白の羽根がユラユラと降りてくる。それ一枚で人を軽く吹き飛ばせる程の威力を内包した羽根。天使の羽根のようでその実態悪魔の尻尾であるそれを俺はポーンと上を見て落ちてくるのを眺めていた。

「あれは……!!!」

「ステイル、どうしたのですか?」

「神裂!!!悠長にしている暇は無い!!!あれはドラゴン・ブレスの余波、あれ一枚で人を消し飛ばせる程の魔力を内包しているんだ!」

「なっ……!!!」

俺の後ろでは神裂とステイルがおののいて当麻を助けようと動く。件の当麻は眠るインデックスの上で膝立ちになり、惚けている。

「当麻には悪いが記憶は消去させてもらう。」

俺が見ているのはある一枚の羽根。それは当麻の頭に直撃しようと

する。

「……………じゃあな。」

俺の眩きと共に当麻の頭に羽根が当たり、当麻は衝撃でインデックスを護るように庇いながら倒れ付す。これで長い長いプロローグが終了した。



幻想は傳くて（前書き）

お久しぶりです戯言です。まずは最初に更新遅れてごめんなさい！  
！！最近スランプ気味なんです。……………図々しいですね、すみません。

さて久しぶりに携帯を開けて、小説の情報を見たんですが……………

PV八十万強

ユニーク七万越え

お気に入り登録数一千ぴつたり

……………

……………

……………

幻想なのか……………？これは幻想なのか！！！！

すみません。取り乱しました。

というわけで、PVが百万越えたら番外編をしたいと思えます。何か希望があればどんどん言ってください。

最後になりましたが、今までこんな駄文を読んだけいただきありがとうございます。この結果は一重に皆さんの応援があったものです。これからもどうぞ御贔屓にお願いします。

## 幻想は傳くて

「ふん。つまらないな。」

禁書目録との戦闘から少したち、俺は第七学区総合病院の集中治療室の前の廊下で腕を組みヘッドホンから流れる音楽を聞きながら目を瞑る。聴いているのは悪ノ娘。悪逆非道ね、俺なら自ら肅清に参加して燃やし尽くすな。

「何がだい？」

「なに、過去の自分に対して言ったことだ。」

「そう、か。」

俺はそう言いながら、集中治療室の扉を見る。当麻が此処にいない状況は非常につまらない。俺が安息できる場所の一つである当麻が記憶喪失なのは、いくら物語が面白くなくても、俺自身面白くない。まあそんな憂いは意味がないのは重々承知だ。俺は溜め息をつきながらソファで眠るインデックス、目を瞑り廊下の壁に背を預けた女剣士、そしてタバコを取り出し火を点けようとするニコチン中毒神父（あえていおう。こいつは14歳だ。）を見る。………シューール過ぎるぜ。神裂は煙たがりインデックスの眠るソファに移る。

「おい、ステイル。ここは病院だ。禁煙なんだぜ？」

「へえ、そうなんだ。」

「それとここは日本だ。タバコは二十歳になってからだ。」

「それは知らないな。」

「郷に行つては郷に従え。日本の諺だ。俺的に慮るの次に好きな言葉だ。というわけでタバコは没収だ。」

だから俺は適当に口実つけてステイルからタバコを没収しようとする。なんとか暇潰しくらいにはなると思うからな。

「嫌だね。何故僕がこんな東方の辺境の島国の法律に従わないといけないんだい？」

「……………」

お前の国も十分島国じゃん。俺たちからみたらイギリスも東方の国だ。てかイギリスでも十四歳の喫煙は法律に引っかけかんじゃね？

「……………分かった。ならば俺がたーいお話をしてやろう。」

「へえ、なんだい？」

俺は手を肩口まで持つていき半ば呆れながら息をつく。ステイルはタバコから手を離し、ケースに戻す。

「副流煙つて知ってるか？」

「副流煙？」

「そう副流煙だ。」

「知らないな。」

俺がステイルに話すのは副流煙について。愛しの魔神が危険と感じたとき、こいつはどんな反応をするんだろうな。

「知らないのか。なら教えてやる。副流煙ってのは簡単に言えばタバコの燃えている方から出ている煙だ。フィルターから出る煙は主流煙だ。」

「ふむ。」

「それで副流煙ってのは主流煙とは違い、フィルターを通らない煙だ。フィルターはタバコの有害物質を取りのぞいている。しかし副流煙はフィルターを通らない。つまり自分が吸っている煙より副流煙のが有害度は高い。そして副流煙は自分には害は及ぼさない。他人に被害を出す。例えば……………、インデックスとか。」

「なっ……………!!」

俺の最後の言葉にタバコと俺を交互に見るステイル。目は見開いていて正直滑稽だ。

「タバコはマジで危険なんだぜ？有害物質の数は数千程度。例を挙げると、ニコチン、タール、一酸化炭素、青酸カリ、亜硫酸ガス、ポロニウムといった放射線物質等々。効力が強いまま辺りに垂れ流し。それってどうなんだろうな？」

「……………ステイル。」

俺がニヤニヤ笑いながら見る横で、いつの間にか目を開いた神裂がステイルを非難した目で見る。

「別に自分が吸う分には良いんだぜ？ だけど周りの人間も考慮しろってことだ。実際俺はタバコは嫌いだ。」

「……………分かったよ。」

ステイルはその視線に居たたまれなくなったのか、タバコのケースを握り潰す。わざわざ握り潰す必要はねーのに律儀だねえ。

「かはは。まあ愛しのお姫さまを傷つけたくなけりゃ精々自分の行いを正すべきだな。」

「ああ、分かっているよ。」

俺の忠告に相変わらず右手でタバコのケースを破壊しながら俺を見る。ソファーでは神裂が慈愛の表情を浮かべながら膝枕しているインデックスの髪の毛を撫でる。インデックスと神裂達は案外軋轢もなく、和解している。俺の尽力によりイギリス清教の本質を見たらしく、原作でステイル達に向いていた嫌悪感はローラに向いている。はっ、ローラさまあ。

「しかし……………、あの子の記憶消去が魔術によるモノだったとは……………。よく君は知っていたね。」

「おいおい、此処は脳を開発して超能力を発現させる場所だぜ？ 脳についてはある程度知識は有るんだよ。それに俺は知識だけなら禁書目録と同程度がそれ以上。首輪の存在なんか一発即決でわかるっつーの。」

俺の言葉にステイルは苦笑いしながら俺を見下ろす。

「ははは、これは凄いルーキーがイギリス清教に入ったもんだ。」

「かはは、宜しく頼むぜ？先輩？」

俺はそんな苦笑いを顔に張りつけたステイルを見て、大口開けて笑う。正直めんどくさい奴らだと思っていたが、なかなかどうして楽しくやれそうだった。主に俺がいじる側で。

「君に先輩と言われると不思議な気分になるね。」

「なに？独占欲かあ？それとも征服欲？俺にBL要素はねーぜ？インデックスちゃんの情操教育には宜しくないな。なあ？ロリコン魔術師。」

「……………ステイル。」

「ちよつと待つてくれ！！君は僕をどんなキャラにしたいんだ！？それに神裂も少し待つてくれ！！君は長年僕と仕事してきたよね！？僕がそんな人間じゃない事も分かるはずだ！ルーキーの言葉を信じるのか?!」

ステイルが激しく狼狽しながら俺を指差し、神裂に詰め寄る。だが神裂はあくまでも冷静に、冷たい目でステイルを見る。

「彼はこの娘を救ってくれました。彼には恩があり私自身信頼しています。ですから近寄らないでください、変態。」

「そ、そんな……………神裂。」

「かはは！！ざまあないな、ステイル！！」

神裂のまさかの裏切りに愕然とし、ステイルは膝から崩れおちおちする。

「君は……………、鬼畜か……………」

「かはは！！最高の誉め言葉をありがとう！！」

「……………君には一生勝てない気がするよ。」

俺がそんなステイルを上から見下し見ていると、ステイルが恨めしそうに睨み叱責する。俺はそれをニヤニヤと笑いながら受けとめる。ステイルは一つ溜め息をついた後、よいしょとオヤジ臭く呟きながら立ち上がる。

「お礼を言うのが遅くなったけど、あの娘を助けてくれてありがとう。此れからも宜しく頼むよ。」

ステイルは似合いもしない微笑みを浮かべて俺に右手を差し伸べてくる。

「ああ、宜しくしてやるよ。インデックスは運命に則り勝手に助かったただけだ。当麻という代償はあったがな。」

それを握り返しながらステイルにニヤニヤ笑いながら言う。ああ、一つ言うのを忘れていたぜ。

「一つ忠告だ……………、あの娘なんて他人行儀な呼び方じゃなくて、インデックスって呼んでやれよ？魔神の為の守人さん。」



「……………ああ、善処するよ。」

俺の言葉に苦笑いを浮かべながら髪の毛を撫でるステイル。その時、後ろの集中治療室の治療中という電灯がフツと消えて、あのカエル顔の医者が出てくる。

「これはこれは独特な面会者だね。」

「軽口なんて叩いてんじゃねーよ。」

「それは済まないね、近衛くん。」

カエル顔の医者、冥土返しは人の良さそうな笑みを浮かべて手に付けていたゴム手袋を外す。

「さて、そこのお三方。ちょっとこっちに来てほしいんだが。」

そのまま俺たちを呼び出して自分はさっさと面会室まで歩いていく。

「……………行くか。」

「ああ、そうだね。」

俺はステイルと目を合わせた後、冥土返しが歩いていった方向に歩を進めた。

「ちょっと待ってください!!!」

すると、後ろから神裂の声が上がる。疑問に思い、後ろを見ると、膝枕しているインデックスが落ちないように中腰になったまま此方

に左手で、待ってのポーズをする神裂が。……………物凄い滑稽なんだけど。

「んだよ神裂。折角テンション上げてゴーゴーしようと思ったのによ。雰囲気台無しだぜ。」

「雰囲気なんて今はどうでも良いんです！！私にもお礼をさせてください！！」

俺の軽いため息に神裂は声を張り上げて俺に礼をしようとする。

「ふーん、あつそ。」

「物凄くどうでも良さそう!?!」

まあ正直神裂に礼を言われてもステイル同様あまり感慨深くないし、どうでも良いんだが……………、神裂は何をトチ狂ったのかわかなわなと肩を震わせている。マジおもしろい。

「どうでも言いが決まってるだろう。正直俺には実害は無かったわけだし、そこそこ戦闘も楽しめてメリットばかり。正直礼を言われる云われが判らないね。」

俺がそういうと、神裂は目を丸くした後、真剣な表情で俺を見やる。

「あなたはそうかも知れませんが、私には譲れないものがあるんです。」

「それは女教皇としての使命か?」

「いいえ、私の本心、魂に誓ったものです。」

神裂があまりの剣幕で言うもんだから、多少かまをかけてそれが欺瞞か、真実かを見てみたんだが……、熱いねえ、そして正直うざりたい。

「しゃーねーな。その礼くらいは受け取ってやるよ。」

「……はい!!」

だからうざりたいものは早急に消すべきだ。受けとめて有耶無耶にする。そこで話を終わらせる。……俺って天の邪鬼なのか? いや、ただ単にそんな性格なだけだ。

「それで?話はそれだけか?」

俺が神裂に聞くと、神裂は首を横に振るう。

「いいえ、まだ有ります。」

「なんだまだ有るのかよ。さっさと要件を話してくれ。正直めんどくさい。」

「……はあ、まだ一日ほどしか話してませんが、その返答が貴方らしいと思えてしまうのは何故でしょうね。」

「それが俺クオリティー。」

「褒めてませんよ。」

俺の答えに呆れ半分の表情で笑う神裂。なかなかどうして可愛いじゃないか。

「それで？話したいのはなんだ？」

「いえ、私も彼の前に行きたいのですが……………」

神裂はそこで言葉を切り、下を見て自分が身体を押えている眠るインデックスを見る。ああ、成る程。

「インデックスをどうすれば良いのか分からないんだな。」

「ええ。恥ずかしながら一般的な知識を兼ね備えていませんので。」

俺がインデックスを見ながら言うと、神裂は顔を赤くして八二カミながら俺を見る。……………家族一人追加……………。悪い、冗談だ。

「ふうん、置いとけば良いんじゃない？まがりなりにも一年は記憶がないまま逃げてたんだから。」

「その返答はなかなか痛いですね。」

「……………心が？」

「ええ……………」

「……………」

俺にはわからんな、その気持ち。罪悪感なんざ有り得ない気持ちは

それこそ兼ね備えていない。家族は大切だが、俺よりも早く死んでいく。ナノマシンの俺には寿命なんて概念も老いなんて道理もない。奴がその証拠だ。だから感情は棄てるべきだったんだが、やはりそこは未熟な人間。割り切れない。棄てきれない。あの頃孤独だった俺には。

「まあ、そんな問答には意味が無い。お前らが片付けるべき問題だ。部外者の俺には口の挟めんことさ。」

今まで好き勝手介入して、ぐちゃぐちゃに物語を掻き回してきたお前が何を言う、という感じだが生憎あれは口から出任せ、戯言にすぎん。

「ええ……………、後日キチンと話をします。」

「そうしときな。」

俺はそういつて辺りを見回す。看護師を見つけてインデックスを見てもらわねーと。

「おっ、はっけーん」

俺が見つけたのは近くの休憩所で雑誌なんかの片付けやら、PHSなんかで指示をしている“巨乳”のお姉さん。もう一度言おう、“巨乳”のお姉さんだ。もろ好みだが、名前が出ない辺りモブだな。残念。

「すみません。」

「はい、何でしょう。」

俺がその人に声をかけると笑顔で対応してくれる。うん、いいな。

「連れの……………」

「?????」

そこで一瞬止まった。看護師さんが不思議そうな目で見ているが、俺は気にならない。というか気にできない。

「（インデックスと神裂の関係って何て言おう……………。）」

疑問が頭の中を駆け巡る。なんでただの友達と言わなかったか。それはあいつらの格好にある。片やインデックスは幼女のシスター、片や神裂は二メートルは有ろうかという刀を帯刀した剣士。パツとみ、神裂がインデックスを襲っているようにしか見えない。ステイルが大男なのと俺たちがいた場所が薄暗い物陰というのもそれを際立たせている。基本俺が看護師さんと神裂達が勘違いし合っているのを傍観して楽しむのはいいが、俺まで共犯者に間違われると厄介でうざりたい。どうしたものか……………。

「（……………ああ、子供ってことにしよう。）」

結果、神裂とインデックスは親子という風にした。正直神裂は十八じゃなくて、人妻レベルに見える……………、「ビュン!!!!」……………、ワイヤーが一本、看護師さんに気付かれないほどの早さで俺の頬を掠めた。……………これは止めどころ。俺も至近距離にくるまで気付けなかったし。次やられたら避けられる自身が無い……………。

「（親子はダメ。ならもう俺が担ぐか。）」

結局、俺がインデックスを背負って行くことに自己完結した。看護師さんに何言っても死亡フラグな気がするし。

「すみません……。どうやら連れの事は問題ないみたいなんです。お呼び立てしてすみません。」

「?????.....はあ。それではお大事に。」

看護師さんは終始訳が分からないといった様子でその場を後にした。.....チッ、なんで俺がこんな貧乏クジ引かなきゃならんだ.....。後でステイル締める。

「ふう。」

「どうでした？」

「.....。」

戻っていくと、いい笑顔をした神裂が詰め寄ってくる。原作の時よりに年について気にしすぎじゃないか？

「どうしました？」

「.....どうもこうもある前にその手をかけた七天七刀を納刀してくれ。流石にこの距離は避けきれない。」

俺の悲痛に近い声に、意も介さずニコニコ笑顔で七天七刀の柄を握り締めていく。病院の一角、薄暗い廊下で一寸先は闇、先の見えない硬直が続いていた。

「……………鬼畜。」

シューインー!!

「ちいいいいい!!!!」

しかしそれは俺の一言により崩壊する。神裂の七天七刀が煌めき、俺の喉元を狙う。

「(二メートル近い長さなのに、横薙に振るって壁に傷がつかないって……………!!!!空間でも超越してるのかよ!!!!)」

俺の脳内では戯言が乱立して犇めき合っていたが、それは神裂の預かり知らぬところ。既に二撃目の準備、つまり刀を引いて、風ごうとしている。

「ちょ、おま!!!!ここ病院だから!!公共施設だから!!」

いくら俺は死なないと言っても、やはり痛いものは痛いのだ。痛覚を意図的に無くす事も出来るが、如何せん、それではつまらないのである。

「他に知られないように殺せば問題ありません。」

「黒いいいいいい!!!!!!」

そんな問答はこの現実を憂いての物じゃないと信じたい。決して現実逃避で、ウダウダと何でもない事を問答しているんじゃない。…

……………決して(泣)



「神裂！！インデックスがどうなっても良いのか！！！」

「くっ……………！流石悪人、やることがズルい……………」

だから俺は逃げるため、神裂の刀の軌道に眠るインデックスを配置した。簡単に言えば、盾にしたのである。余りにも面白くなく、綺麗じゃないのでやりたくなかったのだが。まあ、ステイルを盾にするよりは安全だろう。

「……………はっ！しまった！！ステイルを盾にしたほうがステイル的にも俺的にも美味しいじゃん！！！！安全なんか考えるんじゃないかった……………、俺、一生の不覚……………！！！」

「ちょっと待て！！！君は僕を亡き者にしたいというのか！？」

ステイルが何か喚いて俺に詰め寄ってくる。神裂は相変わらず攻めあぐねていて、刀を空中に漂わせている。

「……………」

「……………」

「……………」

しばしの硬直。それが解けたのは、

「君たち、病院で暴れるのは止めてくれるかな？まあ、怪我人が出たほうが病院側としては嬉しいんだけど、体裁ってものがね？」

俺たちを見兼ねて戻ってきた冥土返しのお陰だったりする。……  
神裂に年の話はしないでおう。

「さて、何だか色々あったみたいだけど話をさせてもらうよ。」

その後、冥土返しの介入によって第一次病院大戦は終了し、俺がインデックスを背負い冥土返しの案内のもと面会室に来た。面会室で俺とステイルは、冥土返しと向き合うようにソファアームに座る。神裂は部屋の脇にある、少し小さめのベンチに腰掛けてインデックスを膝枕している。

「ああ、さつさとしてくれ。」

「……相変わらず図々しいね。それに始めてあったときより随分と尖っている。以前は刃潰した刀だったのに、今は何物も切り落とす、切り裂きジャックみたいだ。」

「そんな戯言は止める、時間の無駄だ。それと二つツツコム事がある。」

「なんだい？」

「まず一つは刃潰した刀でも使い手によれば物は切れる。二つ目は刀と切り裂きジャックは別物だ。対比のモノではない。上手いこ

と言ったつもりか。」

「はは、それはすまないね。と冥土返しはさも当然のように軽々しく謝罪する。反省の色は見えないようだ。まあ、反省なんて意味の無い口約束何ぞいらないんだがな。」

「それで？どうでもいい話をしに態々と来たわけじゃないんだ。率直に簡潔に完結に話をしろ。」

「ああ、分かっているよ。」

俺の苛々とした口調に、あくまでも面倒くさそうに笑いながら、此方を見る冥土返し。

「簡潔に言おう。彼、上条当麻は記憶喪失だ。」

その口から出たのは分かり切っていた事で、原作どおりで、運命で、そして俺からしたら面白くともない只残酷な結果だった。

閑話……………、まああれからの少しの進展。(前書き)

お久しぶりです戯言です。

スランプ抜け出せぬまま結局二週間近く放置してしまったわけですが……………、何だか凄く申し訳ないです。

さて、そんな自己嫌悪は次回の早期更新のための糧にして……………この次の回で、超電磁砲と今回ので少し出た伏線を回収した後に番外らしきものをします。初めての事なので出来たらご助力お願いします。

閑話……………、まああれからの少しの進展。

さて、前回に続き俺は冥土返しと向き合いながら面会室のソファに座っているわけだが、

「（ち、沈黙がうぜえ……………）」

冥土返しが沈痛な面持ちで、上条当麻は記憶喪失だ、なんて言うもんだから、ステイル、神裂が黙り込んでうざったいっただらありゃしない。

「はあん、それが？」

「……………僕は君の返答にびっくりだよ。」

冥土返しはやれやれ、と呟きながら移動し夜の学園都市を窓から見る。

「別にびっくりはしねーさ。俺が望むべくした事なんだからよ。」

「へえ、随分不毛だね。一人の人間の記憶を消すのに何の意味があるというのだい？」

その冥土返しの後ろ姿に、いつもの調子で声をかける。前回の当麻を慕う気持ちは消えては無いが、あそこまでひどいものじゃなくなつた。やはり俺はいくら友情、愛が積まれたって俺らしい。当麻の記憶喪失にはなんら感傷はない。

「意味ならあるさ。俺の楽しみが増えるのと、当麻の力の抑制だ。」

俺はこういつたが、実際当麻の幻想殺しが弱まっているとは感じられない。だが、いつかあらわれるであろう左方のテッラは、劇中で当麻は記憶喪失により幻想殺しが発展していない事をほのめかすような発言をしている。実際問題、アレイスターの計画には少なからず当麻の幻想殺しが必要となる。幻想殺しが弱まっているならばこれは好都合。物語が面白くなる。

「彼の力、ね。正直に彼は優秀な生徒とは言えない。彼から記憶を奪うところでメリットなんて感じられないんだが。」

「あいつの能力は超能力じゃねーよ、どっちかって言うと原石に近いものがあるな。」

「へえ、それは興味深いな。」

冥土返しが珍しくマッドな笑みを浮かべて、虚空を見る。なにこの医者、こわい。

「おいおい、間違っても解剖なんかするんじゃないぞ？あいつは俺のだちなんだからよ。」

「間違っても記憶を自分の愉悦のために消すことは友達のすることじゃないだろうけどね。」

「それはそれ、これはこれだ。」

俺はそついいながら傍らに座るスタイルを見る。

あはは、すっげえ怖い顔してるわ。触らぬ神に祟りなしてね、俺

が見ているのに怒りで気付いていないならこのままにしておくか。俺は無神論者だから神なんて信じちゃいないがな……………、戯言だよ。

「そんな事で片付けてしまう君の感性を疑うよ。きっと君の将来は殺伐としているだろうね。」

「はっはーん、それは間違いだ。俺の将来どころか今の生活ですら殺伐だよ。きっと俺の死因は世界を敵に回して、一斉に蹂躪される凄惨死だろうよ。」

「それは戯言だろう？君が世界なんて小さなくりのモノに殺されるなんて想像がつかないな。それと凄惨死なんて死因は無いと思うよ。」

「造語だよ。」

俺はそういいながら、窓辺にいる冥土返しを見る。冥土返しは肩を震わせて外を見ている。多分笑ってんだだろうな。

「まあ、まあまあ。凄惨死なんて死因が無けりゃ俺は一生死なねーよ。」

「いや？そつでもないと思うよ？」

ああん？俺が死ぬ？有り得ないことを申すんじゃないやねーよ冥土返し。

「そんな怖い目をしないでくれ。呪い殺されそつだ。」

「俺の目を見続けると石化します。」

「ゴーゴンかね、君は。」

冥土返しが呆れたように、肩を竦めて俺たちの方を見る。

「君はきつと女の子に後ろから刺されて死ぬね。」

「おいおい、おいおい。振り返って神妙な顔して言うことはただの戯言か？俺は女たらしじゃねーぜ？」

冥土返しのやるー、俺を女たらしにしてなにご楽しいというのだ。全く、人の不幸を嘲り笑いやがって、最低だな。まあ、俺が言えた義理ではないが。

「いいや、君のことはアレイスターから色々と聞いているよ？六人もの美少女を囲ってハーレム造っているらしいじゃないか。」

ニヤニヤと人が悪そうに笑う冥土返し。……………アレイスターに殺意が沸くのは何回目だろう。あの窓無しビルに核弾頭打ち込んでやりたいわ。

「ああ、はいはい。あいつらの事ね？アレイスターの奴、不必要に話盛りやがって……………。ったく面倒ったりやありやしねー。」

「ふうん……………。それじゃあ、別にハーレムを造っている訳じゃないんだね？」

「ああ、そのハゲ頭に誓おう。」

「……………複雑な心境だね。」



随分と安堵したような溜め息をつく冥土返しに多少の疑惑が出る。なぜにこいつは俺のハーレム話に気があるんだ？羨ましいのか？そうなのか？

「?????.....ああ、なんで僕がそんなにハーレムについて言及しているのかって顔だね？」

そんなハゲ頭はおれの視線に気が付いたらしく、俺の前にコーヒーを差出しながら見てくる。俺は目の前に出されたインスタントと思われるコーヒークップを手に取り一口啜る。.....うげ、砂糖入ってやがる.....。まじい.....。これもアレイスターの差し金か？

「ああ、本題は一向に話さず俺のことを探るように質問してくる禿げに、警戒しないなんて愚か者のする事だ。さっさと用件をいいやがれ。」

「ふむ.....、実はね散鯨火彌子についてなんだがね。随分と変わったなあ.....、と思ってるね。」

.....これは予想外。冥土返しが彌子の事を知っていたとは。随分と楽しい事になりそうじゃないか。

「はあん？」

「いやね、三年前に見た頃より極端に印象が変わっているようだからね。アレイスターの話によれば。」

「あいつが？快活明朗、元気の塊としか言えないような関西弁娘がか？」

「ああ、三年前に見たときは目に光が無かったからね。随分と曇っていたから。」

「へえ、それは知らなかったな。三年前といたらあいつが十六のときか？」

彌子は現在十九だから多分そうのはずだ。

「ああ、そうだね。彼女が十六の頃か、つい最近の事のように思えるよ。」

成る程ねえ。あの冥土返しが神妙な顔をするあたり、相当深刻な事だろうな。面白い事ならズケズケと人の心ぐらい蹂躪するぐらい容易い事だが、しかしこれは家族の彌子についての話だ。家族には甘い俺にとってやはり家族を自分のために悲しませるのは相当心にくるものがある。まあ、家に帰ったら家族会議はするか。

「ふうん……………、そうかい。」

「おや？聞かないのかい？散鯨火彌子の過去について。」

「俺をただの節操無しだとは思うなよ。俺にとって彌子は家族だ。家族を悲しませる事は一番俺がやっちゃいけないことだ。」

俺の言葉に冥土返しおろか、ステイル、神裂からもほう、と驚嘆の音が聞こえる。……………俺を何だと思っているんだ。

「へえ、ただの鬼畜人畜野郎かと思っていただけ、違うみたいだね。」

「よし、表出る。その減らず口のトンファーで潰してやる。」

「ふうん、そんな装備で大丈夫なのかい？」

「大丈夫だ、問題ない。」

……………何故にエ シャダイ。おっとふざけている場合じゃないな。忘れていかもだが、俺たちは当麻の容態を聞きに来たんだ。イーノックなんて今はどうでも良いんだ。

「おい、冥土返し！！忘れていたが当麻の容態をさつさと話せ！！」

「その口調は忘れていた側の口調じゃないね。それに記憶喪失の友達の容態を聞くのを忘れるなんて君たちは本当に友達か？」

「そんなものは知らん！！今はテンションが高いんだ！！」

「……………よし、君にはいい精神科医と脳外科医を紹介してあげよう。なに、僕でよければ脳の手術ぐらいしてあげるけど、命の保障はないね。」

冥土返しが呆れて首を横に振っている。なんなんだ貴様は！！素晴らしくうざったいな。殺してやるうか！！

「精神科医なんざどうでもいい！当麻の容態を教えろ！！」



ファーに座る。横でステイルがげんがりしている気がするが、こころは気にしたら負けなのである。

「漸く話せる様になったね。」

「一重に俺の尽力があつたお陰だな。」

「……………話をこれ以上止めないでほしいね。」

冥土返しが話を進め、俺がそれを茶化し、ステイルがジョーの如く真っ白になる。

「わりいわりい。愉しくつてさ。」

「はいはい、分かったから話をさせてくれないかね？」

「ちえ、対応が冷たいぞこの野郎。俺はもっと話したいんだ。」

「……………さっき上条の容体をしつこく話せと言っていたのは誰だよ。」

ステイルがはあ、と溜め息をつく。というより何だか、しょうがないな、と言つ何処か納得したような、呆れたようなニュアンスが含まれている気がする。まあ、実際問題含まれているに違いないんだけど

「さて……………、どこの俺様野郎のせいで時間を凄く喰ったけど、話をしよう。」

「そうだね、それがいい。」

ちょい待ち冥土返し。いつどこで誰が俺に俺様野郎なんていったよ。言い掛かり付けてんじゃねーよくそが。

「……………うぜえ。聞くき失せたわ。どうせ脳の記憶中枢が精神的ショックではなく外的要因によつて焼き切れてるつて言いたいんだろ？仕組みも原理も何もかもあらまは知ってるから、外に出るわ。ステイル達にはお前が懇切丁寧に隅々まで説明しとけ。」

キレたもうキレた。なんなのこいつら俺の事ズケズケ言いやがつて俺は人を陥れるのは好きだけど、逆をやられるのは大っ嫌いなDOS野郎なんだよ。あれ以上口開いて戯言つらつら言つんだつたら、デザートイーグルロン中突つ込んで滅茶苦茶に発砲してやる。冥土返しとステイルが目を見開いて俺を見ているが、そんなの知らん。俺はやっぱ人に指示されず自由気ままに自己中に生きた方がしようにあっている。

「ちょっ、ちょっど……………！」

「じゃあな。当麻の部屋に行つてから俺、帰るわ。」

冥土返しが俺を引き留めようとするが生憎俺は最悪な自己中野郎。人がどう思おうが知つたこつちや無い。俺は俺の道を行くんでね。人の指図は受けないよー。

「ばいびー。」

俺はそのままソファを立ち上がりドアを開けて廊下に出る。周りを見回しても流石に時間帯も時間帯。十二時以降に慌ただしく動く奴も、その原因になるであろう奴も空気を読んで静かにしているらしい。看護師さんもナースセンターにいるのか見当たらないし、電

灯も動くのに支障が無い程度に心細く点々としているだけ。非常に寂しく、冷たい空間が続いていた。

「……………さて、どうしたもののか。」

啖呵を切って出てきたはいいものの実際に当麻の部屋に行く予定などなく、手持ちぶさただ。しかしそんな余りにも静かな空間にIFSの着信音が響き渡り俺の退屈は失せる。

「はいはいつと、何方ですか？」

『何方ですか？……………じゃないわよ！！！！』

「ああー、香奈さん？どうしたんでせう？何か問題でも？」

電話の応答に元気よく、いや俺に心底五月蠹く怒鳴り散らしたのは香奈だった。今いる場所では後ろの壁を挟んだ向こう側にいるであろうバカどもに話し声が聞こえる可能性があるので、憩いの場的な場所を事前に見繕っていたので其方に向かう。

『どうしたんでせう？……………じゃないわよー！！！！アンタどこにいらんのよ！！！！』

わお。あまりの怒りで俺への呼称が戸隠からアンタにかわっていらつしゃる。そんなに怒り心頭になるような事をした覚えは無いんだが。

「今か？今は御坂とホテルでいいムードになっているぞ？」

故に少し嘘ついてからかってみたくなった。いやだってそんな若気

の至りって結構無くない？実際俺がしてるし。

『なっ！！！！！！！アンタ、私の預かり知らぬところで何やってんのよー！！！！！！！！！！』

「……………だあー、うるせえ。」

コツコツとリノリウムの廊下が俺が歩くたびにその冷たい色合いに相当する、冷たい音を廊下に反響させる。そんな中でもう電車の騒音レベルの叫び声を電話ごしに上げている香奈。そんなものを耳に当てるほどバカではない俺はIFSを耳から出来るだけ遠ざけようと腕を目一杯に伸ばす。それでもやはり五月蠅い香奈の声を聞くと電話を切りたくなるのは摂理だろう。

「……………あのさあ。用がないんなら切っても良いか？今凄いい忙しいからさ。主に腰的な意味で。」

『ちよつと待って。今ナニしてんの？』

「うん……………？ああ今は歩いている。いやー歩き疲れて腰が痛いんだよ。」

もう流石にネタバラししないとネタがマンネリ化するからなあ。しつこいのは正直嫌いなんだ。

『……………もしかして今そこに電撃姫は？』

「居るわけねーじゃん。バツカじゃねーのｗｗｗｗ」



数瞬後………

『馬鹿は………おまえだあああああああ………!!!!!!!!!!』

キーン……!

「うるせ………!!!!!!!!!!」

香奈の絶叫とも言える叫び声が冷たい空間を支配した。俺は病院では静かに、なんてお触れをなにそれ美味しいの?バりに無視して全力全壊で受話器に向かって叫ぶ。

『アンタが、紛らわしい事言うからだろうが!!!!!!!!!!』

「紛らわしいつつつか、大方嘘だな。」

『五月蠅いわ!!!!!!尚更たち悪いわ!!!!!!しゃしゃるな!!!!!!』

「どつどつ、落ち着け。」

『私は馬ちゃうわ………!!!!!!!!!!』

「馬鹿だけに?」

『上手くない!!!!!!』

怒り心頭のせいかいつの間にか関西弁になっている香奈を少し宥めながら内心大爆笑な俺。まさか少しばかりからかうだけでここ迄怒るとは思わなかった。まあ、多少わかっているながら怒るように誘導したんだがな。愉しそうだし。

「ははは、んで？何のようだ？」

俺の確認に香奈はああー、と少し恥ずかしそうに語尾を小さく窄める。

『……………ただ……………ちょっと心配だったの……………。なかなか帰ってこないから。皆は大丈夫だって言うんだけど、やっぱり……………お兄ちゃんだし……………。』

「……………。」

これは驚いた。まさか香奈が俺に対してデレるとは……………まあ、香奈はお姉さん属性と言うべきものを持っているからな。しかしこれは妹属性か？いや今は香奈がデレた事に驚嘆すべきだろう。

『あの……………？どうしたの？』

おっと少し黙りすぎたようだ。

「いや何、少し嬉しかったんだよ。その心配が。」

『えっ？』

「家族って感じがするだろ？」

『ふふ、一つ訂正。』

「なんだ？」

『家族って感じじゃなくて、家族なんだよ。』

俺と香奈はなにか見えない大きな力で結び付けられたような気がした。それは、小夜しかり奈美しかり最愛しかり理后しかり、そしてくらい過去が有るといふ彌小しかり。皆に繋がったような気がする。

「おいおい……………、二週間で何処の家族よりも強固な結び付きを作った家族って、小説かよ。」

『でも事実でもあるよ？』

「ふふん、そうだな。」

そこで俺と香奈は大いに笑った。それこそ天を穿つ程の大声で。どうやら俺は、家族に対しては凄く甘くなるらしい。

……………

「それで？用件はそれだけじゃないんだろ？」

『うん。勿論そうだよ。』

俺は憩いの場的な場所に着いたあと、ベンチに腰掛けて香奈に話し掛ける。

『イギリス清教と学園都市統括理事長から打診があつてね。今すぐこの事件に対する状況を報告しろってさ。』

「……………」

あれ？家族云々よりそつちのが重要じゃね？何、家族団欒しちやつてんだよ。

『ん？どうしたの？』

「いやなに、君の残念な頭に絶望してるんだよ。」

『じゃにおー！！』

「ああもう！！可愛いなあ！！！！」

何だか話が脱線しそうな予感。

『か、かわいい……………？！！』

「うん。纯真無垢な子供を見てる感じというか、怖いもの見たさ的な、ちよつとアホの子を生暖かく見守っている感じの可愛さだよ。」

『……………途中から不名誉なものにすりかわった気がする。じゃなくて……結局今からどうするの?』

「ああー……………、当麻の様子を見てから家に帰るわ。」

『りょーかい。……………』

あ、そうそう。もう一つ用件があったんだ。』

俺が電話を切ろうとしたときに香奈から待ったがかかる。何事？

「なんだ?」

『なんかね、ちょっと古くさいお嬢様言葉を喋る常盤台中の女の子と、バチバチ音をたてながら怒鳴る同じく常盤台の女の子と、戸隠と同中の女の子二人の四人から、“何時になったら話すんだ!!!”だってさ。どうやってうちの家電調べたんだろ。あれかな、これが巷で噂のヤンデ』

プツッ!……ツ、ツ、ツ……………

いやな予感がしたから香奈との電話を切ってしまった。あれか?あれなのか?電撃姫と空間移動能力者と幻想御手と守護神に目を付けられたのか?てかうちの家電ね番号調べたのってどう考えたって初春だろ?んなちんけな事に無駄な才能発揮すんじゃねーよ!!!なんだよ、あの時の機の修理代をツケられたのを恨んでるのか?ていうか、死亡フラグビンビンじゃねーか!!!

「はあ……………、アレキスターにローラにあの四人娘の相手をこれからしなくちゃいけないのか……………、はあ……………鬱だ。」

俺はこれから待ち受けているだろつめんどくさい事に頭を悩ませていた。

## 死神は鳴く（前書き）

はい、お久しぶりです戯言です。今回のお話は戸隠能力暴露会です。しかし今分かったんですが、「この話、こんなに長くなって良くね？」と。

まあ、そんな事は置いといて、今回、戸隠くんの運命の転機があります。……そしてオリキャラも?!!

まあ、取り敢えず楽しんで頂ければ幸いです。因みにタイトルは話に関係ないです。

## 死神は鳴く

「失礼しましたー。」

香奈との電話を終了した後、当麻の様子を見に行った。病院の規則ではこの時間帯の面会はルール違反だが、そんなのしつたこつちやない。ばれなきゃ良いんだよ、ばれなきゃ。

「さあて、家に帰るか。」

俺はすぐにボソソジャンプを発動させ、粒子を撒き散らしながら転位した。

.....

家に帰り、地下にあるスパコンからイギリスとアレイスターに事後報告をした。イギリス側からの返答は原作と同様、インデックスを上条当麻の側に付けさせて様子見。正直当麻を利用する気満々な返答だ。何が様子見だよローラ。この狸め。

そしてアレイスターからの返答も様子見。上条当麻の記憶喪失のことやインデックスの学園都市での戸籍はアレイスターが用意するらしい。俺の手間が省けてラッキーとか思っていたら、報告書の最後のほうにこれからの上条当麻の動向に関して、多角スパイらしく動き回れとのこと。俺本位で動いていいらしいが、これじゃあ体のい



い監視係である。凄いいんどくさそうなんだけど。だって当麻「不幸だろ？トラブルに巻き込まれる率100%だぜ？そのたびに巻き込まれたら過労で死ねると思う。」

「ああ、もういいや。明日はあの四人娘にコツテリ絞られた後、彌子についての家族会議があるから疲れんだろう。さっさと寝るか。」

俺は先行きが不安になったが適当に託けて寝ることにした。やっぱり人間の三大欲求で一番最強なのは睡眠欲だと思っるのは俺だけだろうか。

「まあ良いか。」

俺はそのまま地下を後にして、二階にある自分の部屋へと移動した。

.....

そして7月29日である。現在の時刻は午前8時。昨日黒子から指示と言う名の脅しにより、一七七支部に集合時間に呈示された時間は午前11時。どうやら固法先輩の都合と、午後から遊びに行くことを踏まえての時間らしい。正直早く起きすぎてしまった感が有るので、未だ寝ているであろう六人に気付かれないようにボソソジャンプを使い、第七学区の大通りから少し外れた路地裏に降り立つ。

「おろろ？AIMに不自然な流れと結合があるな.....。春上衿衣の事件ってこんな時期だったか？もうちょい後だと思っていたん

だが……………」

そのまま歩こうとした時に奇妙な感覚を覚えた。AIM拡散力場に強引に介入するような、不思議な感覚。春上衿衣のテレパスによって引き起こされたものだ。今だに地震が起きていないところを見るとまだまだ事態は深刻ではないらしい。まあ最初っからこの事件に首を突っ込む気はさらさら無いんだけどな。

「んー……………」。目下の目標はキャパティシダウンのデータ採取とスキルアウトの掃討だな。テレステイナーについては……………、まあ御坂が何とかしてくれるだろう。」

俺は路地裏から出た後に、大通りを見渡す。ふと上を見上げると高層ビルに取り付けられている巨大なモニターが目につく。……………どっかで見たことがあるような……………。

「ああ！！御坂がファンシーな水着で馬鹿みたいにはしゃいでいる映像が流れたモニターだ。いやー見たかった御坂のバカップリ。まあ他に見る価値の有るものは少なそうだ。貧乳だし。」

「だあれが貧乳かー！！！！！！」

「痛っ！！」

そう呟いた瞬間、後ろから何者かの蹴らしきものが飛んできて俺に当たる。まあ十中八九御坂だろうが。

「んだよ。何すんだよ。」

「何すんだよ、じゃないわよ！！何でアンタがそそそそ、その事知

「つてんのよー!!」

「吃ってるし。」

「見てたんだよ、丁度ここで。当麻と。……何だ、恥ずかしかったのか？」

「当たり前よ!!……それで? 今日この辺にいるって事は……」

顔を赤くした御坂はその表情を一転、険しいものにする。

「ああ、あの木山事件（俺命名）の時の事を補完しに来たんだよ。てか、てめえらが呼んだんだろうがよ。わざわざ初春に家電の番号をハッキングさせてまで。」

「なあんだばれてたのかあ。アンタならドタキャンぐらいするんじゃないかと思ってたけど。」

ケロツと表情を気の抜けたものにする御坂。どちらかというと安堵に近い。まあ、あんな事があつたばかりだから信用されていないのは重々承知しているが。

「ふうん。そ、なら行くか。」

「ええ、着いたらコツテリとお説教してあげるんだから。」

「……………何をだよ。」

俺の号令とともに俺たちは一七七支部に向けて歩みはじめた。

.....

「さて、キリキリ話してもらいますわよ。」

「.....だから何をだよ。」

一七七支部に着くと、初春、佐天、白井、固法先輩がソファアに憚然と座っていた。俺は必然的に片方のソファアに一人で座り、御坂は四人の座っているコの字のソファアに座る。それから上の会話に戻るのだ。

「何をって、あなたがいつ頃どのような手段で幻想御手を手に入れたのか。さらには他の疑問点ですわ。」

何を言っているんだ、と言いたげなキョトンとした顔で俺を見る。他の四人も同じ顔をしている。何か？俺が悪いのか？

「因みに他の疑問点とはたくさん有りますので覚悟しててくださいまし。」

「.....答えられる範囲ならな。」

ドSな笑みで俺を見下す黒子。おお怖い。

「ええ、それで良いですわ。」

そういつてソファアに座りなおし、ガラステーブルに置いてあった資料を手取る。どうやら尋問の内容が書いてあるらしい。……  
ゆづに十枚ぐらい有るんだけど……、まさか全部？

……（ここから会話が多くなります）……

「まずはあなたの正体ですわ。」

「正体……とな？」

「ええ、そうですね。貴方の情報量や中学生らしからぬ知識や経験。そして……貴方のA I M 拡散力場が私に作用していないところを見ると、貴方が只者では無いと思いますわ。」

俺の身体が一瞬固まる。……こいつ、聡いな。まさか俺が能力者じゃないと気付くとは。

「黒子、どういう事？」

御坂は黒子の最後の言葉の意味が分からないらしくはてなマークを頭上に浮かべている。他の四人に関しても同様だ。

「お姉さま、簡単な事ですわ。私とデータ上戸隠は同じ能力者。A

IMも放出しているのは同様ですわ。そしてAIMは同じ能力者の能力を阻害するという特性を持っていますの。」

「あっ！つまり、普通は黒子の能力は戸隠のAIMに阻まれて効きにくいはずなのに……………」

「ええ、彼に能力行使をしても阻まれるどころか普通に他の方と同様に効きますの。つまりこれから、戸隠は空間移動系とは別の能力……………」

「もしくは多重能力者の可能性がありますわ。」

黒子の発言に全員が静まる。……………さすが黒子だ。まさかここまで自力でたどり着くとはな。

「だが、それだけでは確証にはいたらんよ。それはお前の感覚によるものだ。気のせいかもしれない。」

「ええ、わたくしもそう思いましたわ。だけどまだ理由はありますの。貴方が只者では無いという理由が。」

「ほう？それは？」

俺が挑発しながら言うと、黒子は無言で数枚の資料を渡してくる。それには俺が持っていた銃器のデータが載っていた。……………まずったな。これは。

「貴方が持っていた銃器の数々と貴方の全身を撮った写真から貴方の身体中に物理的に無理なほど隠された武器の数々を纏めた資料ですの。」

「『鋼鉄破り（メタルイーター）』にF2000、学園都市の規格

の物でない口径の弾丸に学園都市ではお目にかかれないような古い銃、ガトリング砲、ロケットランチャー。十分に貴方がただの一学生で無いことが証明できるわね。こんなおびただし量の銃器を用意するならバックボーンがいるわね。それもいいなさいよ。」

黒子と固法先輩の言葉に頷く三人。どうやら話さなくてはならないらしい。だけどこいつらには言わなくちゃいけないことがある。

「ああ、分かった。そこまで証拠があがっているなら白状せざるをえねえ。」

「では……………」

「まあ待て。」

「……………」

黒子が身を乗り出してくるのを手で制する。ジト目で見られたがやはりこれは確認しなくちゃならない。

「お前たちに一つ聞く。今から話すことは荒唐無稽で馬鹿らしいかもしれない。だがこれを聞いた瞬間、お前たちは人死があり血を血で洗うような醜い学園都市の闇に足を突っ込むことになる。いや、ズブズブと身体全体を学園都市の闇に委ねる事になる。争いは絶えないし、敵に殺される可能性も自分が敵を殺す可能性もある。それこそ地獄と形容できる世界だ。俺も出来るだけお前たちをフォローしていくつもりだが自分の力でしか自分は守れない。それでも良いなら聞きな。強制はしない。一介の中学生には酷な話だ。」

俺の言葉に佐天と初春は席を立とうとするが、押し止まり座りなお

す。

「怖いもの見たさなら止めとけ。木山に關してもお前たちは何ら責任はない。無理に聞こうとしなくていい。」

「……………」

俺の珍しい優しげで尚且つ残酷な言葉に五人は黙る。しかし、その後には決意を固めた目で俺を無言で射ぬくように見る。

「はあ……………、後悔しても知らねーぞ……………？」

「後悔なんてしないわ。」

俺は御坂の言葉に再度ため息をつき、紙を取り出す。メモ帳程度の大きさで枚数は百枚程だ。

「固法先輩。黒のサインペン貸してもらえます？」

「？……………ええ、良いけど。」

固法先輩は席を立ち、自分のデスクに戻り、筆箱からサインペンを取り出し、俺に差し出してくる。

「はい。……………何に使うの？」

「ありがとうございます。これはちょっと小細工のために使っんすよ。」

俺はそれを受け取り、紙に次々とある記号を書いていく。脳内のあ



る魔道書に記されている人払いのルーンだ。

「何書いてるの?」

「お前たちの知らない未知の世界の技術だ。」

「?????」

御坂が馬鹿みたいに頭上にはてなマークを浮かべているが無視だ。

俺は五十枚人払いのルーンを記した後、残り五十枚に盗聴防止のルーンを記す。

「よし、出来た。」

俺はそれを左手に持つ。

「今から監視カメラの電源を切ってくるから待っていてくれ。話をするには少々邪魔だからな。」

俺は支部の脇にあるサーバールームに行き、監視カメラの電源をオフにする。

「よし。……………それじゃ今から話をするが、今からすることについては質問は後にしてくれよ。」

俺は五人の返答を聞く前に紙を中にばらまく。紙は一瞬空中に停滞した後、一人であらゆる壁という壁、床という床、天井に張り付く。五人は目を真ん丸にしているが、俺の忠告どおり黙っていられた。

「さて準備は終わった。話を始めようか。」

人払いと盗聴防止が正常に作動しているのを確認し、俺はソファーにすわる。黒子はそれを確認し資料を再度手に取る。

「ええ、それでは……………」。  
「まずあなたは何者ですか？」

「俺は……………、そうだな肩書きを並べると、学園都市暗部の構成員、風紀委員、イギリス清教の清教徒、学園都市統括理事長の駒つて所か？裏と表の世界のどちらにも所属している多角スパイって奴だな。」

「……………えっと。」

「話が突飛すぎて何が何だか……………」。

頭を傾げて困惑そうな顔つきになる佐天と初春。黒子は神妙な顔つきのまま口を開く。

「学園都市暗部とイギリス清教徒について、詳しく教えて下さいまし。」

「そうだな。学園都市暗部って言うのは、学園都市統括理事会の直轄の下、様々な裏の仕事を処理していく部隊だ。大方は四人程度でチームを組んで動いているな。俺はチームはまだ組んでいないけど、仕事は違法な取引をしている業者の掃討や、要人の警護もしくは暗殺、違法研究所の破壊など、凡そ人殺しが関わる仕事をこなしている。イギリス清教徒はまんまイギリス清教の神父みたいな物だ。因みにイギリス清教はイギリスの聖ジョージ大聖堂を総本山におく十

字教三大宗派の一つだ。」

「……………大体分かりましたわ。」

「ちょっと待って！！！」

黒子が資料に目を通し、次の質問をしようとした時に御坂から待ったがかかる。

「アンタ……………人を殺した事が有るの？」

「お姉さま！！！！！」

「だつて！！！」

「いや、黒子。止めなくていい。」

御坂の問いは正直空気を読めていなかった。何故なら今の話で俺が人殺しの経験が有ると分かるのだ。御坂以外四人はそれを分かりながら最悪の解答に触れたくないあまりそれについては言及しなかった。しかし御坂は違う。こいつはいちいち正義感の強い奴だ。人殺しはやはり許せないものなのだろう。

「さて御坂。俺が人を殺した事が有るか、だつたな。」

「……………ええ。」

「あるがどうした？」

だからそれに抗いたくなるのは俺の性格の所以だろう。

「あるがどうした、って……………！！アンタは何も思わないの！！」  
「？？」

「思わないね。」

「えっ……………」

俺の回答に驚きのあまり言葉を漏らす御坂。

「そんなに予想外の事では無いと思うが？まあ、俺の過去と能力を知ったらさっきの発言は的を得ていると思うが。」

「だけど……………！！」

「それについても後で話してやるよ。」

「……………」

御坂はまだ憤っているが俺の言葉に頷きソファーに座る。

「さて……………、どこまで質問したか？」

「学園都市暗部とイギリス清教徒についてまでよ。」

「そうですね。では次の質問に参りますわ。」

黒子は資料に目を通した後俺の方を見る。

「貴方の能力について、お聞きしますわ。」

「俺の能力か……………」

「ええ……………」

正直返答に困る。黒子の質問は恐らくAIMの下りにて判断した結果の物だろう。だから完成を異常としてか能力として扱うか迷う。最善は専ら能力として扱う方だろう。

「俺の能力は……………、ない。」

「……………えっ?」「……………」

だがやはり此処ではこれについて隠しきるのは難しい。俺の体内のナノマシンについては言わなくていいだろうが、完成という異常については話しても良いと思う。

「……………もう一度言ってもらっていい?」

固法先輩がおずおずと俺に聞いてくる。

「ええ。俺には超能力はありません。超能力開発もしてませんし。」

それに俺はあつぴらげに返答する。それに五人はカチンと固まったが、一番最初に復活した黒子を取り乱しながらも聞いてくる。

「それでは……………、貴方の今までの能力は?」

「今から話す。」

黒子にそう言った後に一息を吐いて、五人を見る。そして口を開く。

「まずは異常アブノーマルについて知ってもらおう。」

「アブノーマル？」

黒子が疑問を口にして小首を傾げる。

「ああ、異常だ。」

「それは如何なるもので？」

「あまり良くは知らないのだが、その人間の性格や感情が他の人より高かったり、破綻していたり、異常だったりするものだ。」

俺の説明に実物を見たことが無いせいか、実感が沸かないようだ。

「まあ、分からねーよないきなり言われたって。」

「ええ……………、理解しようとするだけでも何処か近しいところで考えがストップしまして……………」

黒子以下四人も苦笑いを浮かべている。まあしょうがないわな。凡人にその上位のものを理解しようなんて。天使と会話するようなものだ。

「それが凡人と異常の違いというところだな。」

「そうだな、分かりやすいものを一つ実演してやろうか？」

「ええ、お願いしますわ。」

黒子は考えるのを諦めたようで、首を左右に捻る。

「よしきた。……………あ、ミスった。」

俺は今になって分かりやすく実演出来るものが無いことに気が付いた。だって今使える異常は、完成と殺人衝動と、受信感応だけだ。しょうがない、遺跡にアクセスして言葉の重みくらいはインストールするのだろうか。

「どうしたんですの？」

「いや何、少々順序をミスっただけだ。今からしてやるよ。」

俺は黒子と会話している間に言葉の重みをインストールし終える。やはり頭を断裂せんばかりの痛みには耐え難いがなんとか顔に出さずにインストール出来た。

「それじゃあやるぞ？あぁ苦情は後にしてくれよ？」

俺は御坂達の返答を聞く前に口を開く。只一言《跪け。》と。

「……………ぐっ！」

「なっ……………！……！」

「あわわ！……！」

「……キャツ!!」

「……………くっ!!」

俺の一言、《跪け。》に一斉に臣下の体勢、片膝立ちをする五人。因みに上から御坂、黒子、佐天、初春、固法先輩である。

「……………ぐぬぬぬ!!」

「まあ、これが“言葉の重み”って奴だ。只これは異常の副産物に過ぎない。これの本質である異常は自分の神経電気、それも命令系統の静電気を他の人間に作用させるというものだ。」

俺はそういいながら、五人への命令を消す。

「……………くっ!!……………うう……………はあはあ……………。な、何なのよそれ!!反則じゃない!!」

「全然逆らえませんでした……………。」

「……………お姉様に同等に効果があるということは、電気系の能力では無さそうですね……………。」

命令から解放された五人は、苦しそうに息を吐きながらソファ―に座る。

「まあ、これが異常ってモノの片鱗だ。これでもまだまだ序の口だけだな。」



「……………何ていうか……………」

「人知を越えていますわね……………」

「超能力者が何を言うか……………」

俺は、はあ、とため息つきながらソファーに座る。

「これ以外にも異常は多く有る。殺人衝動、禁欲、受信感応、反射神経等々が俺の知っているものだ。因みに異常は一人一つな？」

「ものものしい物が多いのですが……………」

俺が例を挙げると、黒子が口を開く。

「受信感応と反射神経の意味が余り分からないのですが……………」

「そうだな。受信感応は人間の神経伝達に使われる電気をさっきの異常とは逆に異常に感じ取るって物だ。反射神経はほぼ、いや完全に無意識に一般人よりも高い反射神経を作用させている物だな。御坂の雷撃ですら目を瞑りながら避けれる自身が有るぞ？」

「はあ……………凄いのね。その異常ってのは。危なげなものも有るみたいだけど。」

黒子がメモをとる横で、御坂が感心したように首を縦に振る。すると初春が何かを思い出したのか、俺を見る。

「あれ？でも近衛さんは空間移動をしていましたよね？どう考えてもさっきの異常じゃ不可能な気がするんですけど……………」。

「あ、確かに……………」。

初春の言葉に佐天も同意のようで、したりげに首を振る。

「と言う事は戸隠は先ほどの異常とは別の物を持っているのですか？」

黒子がジト目で俺を見る。……………はあ、言や良いんだる言や。

「ああ、俺の異常は別にある。それも今まであげた物のなかでも飛びつきりのがな。」

「それは……………？」

黒子が慎重に俺の顔を覗き込みながら聞く。

「“完成”<sup>ジ・エンド</sup>って奴だ。」

「……………ジ……………エンド。」

「ああ、完成<sup>かんせい</sup>と書いて、読みがジ・エンド、だ。」

俺は捕捉すると同時に間髪入れず口を開く。

「完成は異常の一種だ。だがその効果はある意味異常の天敵と言っても過言ではない。」

「どんなモノなの？」

「完成は異常を際限なく再現できる。いや、再現じゃないな。最早自分のモノにしてしまふ。それも、オリジナルよりも強力に使い熟せる。」

「……………それはどんな異常でもですか？」

黒子が怪訝そうに俺を見るのも無理もない。只でさえ人知を越えた存在である異常をさらに強力に、無数に使い熟せる異常が有るのだから。それは超能力に於いての多重能力者の様に、本来実現しては為らないものなかもしれない。だから黒子は恐れたのだらう。その存在に。

「ああ、どんな異常でもだ。因みに凡人の大成した武術や芸術、技能や知識だって何でもかんでも自分のモノにできる。オリジナルが異常を十分に使えるなら、俺は十全に使えるのだよ。」

「……………マジで？」

「マジだ。……………と言うか女の子が、マジ、とか言うもんじゃ有りませんよ、御坂さん家の美琴さん？」

「あの殺人衝動とか、反射神経とか強そうなもの！？」

「無視かよ……………。つてか、なんで御坂はそんなに目がキラキラしてんだよ……………」

「アンタ私と勝負なさい！！！！」

……はあ。バトルジャンキーここに極り。まさかまさか勝負を持ちかけられるとは思わなかった。いや、何処かで、ああ面倒ごとになりそうだとは勘ぐっていたが、現実にはしたくなかったんだろう、何処か忘却の彼方へ放ってしまっていたらしい。当麻じゃないけど、

「……………はあ。不幸だ……………」

何て言ってしまった。こんな俺はやはり解せないところがあるけど、面白くない厄介事なんて俺にとっては鬼門にしかない。

「お姉さま、まだ話は終わっていませんわよ？」

「でもだつて……………!!」

「それにお姉さま。こんなことを言うのはわたくしの教義に反しています……………」

黒子はそんな御坂を諫めつつ、苦虫を噛んだかのような顔で一度言葉を切る。

「恐らく、いえ絶対にお姉さまは愚かこの学園都市の能力者は戸隠には勝てませんわ。」

「……………えっ？」

黒子は悔しそくに唇を噛む。恐らく自分が尊敬する先輩が負けるなんてビジョンは余りにも想像し難いものなのだろう。だからこそ俺に対しての黒子の仮定が当て嵌まるとき、御坂が容易に負けるビジョンしか思い浮かばなかったのが心苦しかったって事か。しかし俺

はそれを余所に内心穏やかではなかった。黒子の顔は悔しそうではあるが、何処か悟ったような表情でもあった。恐らく俺の完成ジ・エンドの完成範囲が異常に留まらないことを仮定したのだろう。

「ちょ、ちょっと白井さん！！どういう事ですか！！私たちは愚かレベル5である御坂さんが負けるなんて……………！！！」

「そうですよ！！いくら近衛が人知を越えた力を持っているからって……………」

やはりと言っては何だが、初春と佐天は裏切り者の俺よりも自分達を救ってくれた御坂に加担するらしい。まあ俺としちゃあどうだって良いことではあるんだけどな。

「……………黒子、理由を言っただけ……………」

御坂はどうやら事の真相に気付いたらしく、黒子に説明を求める。黒子はそれに頷いて俺の方を、そして四人を見る。

「戸隠は超能力開発はしてませんが、超能力は恐らく使えます。」

「……………えっ？それって……………」

黒子の言葉に初春は理解が追いつかないらしく、目を回している。固法先輩は黒子の説明に事の真相に気付いたらしい。

「簡単な話だ。完成可能な異常の中に、超能力が入ってるってだけだ。」

「……………やはりそうでしたか。」

俺がしたり顔で言うと、黒子は忌々しい物を見る目で俺を見る。止めてくれよ、俺はMじゃないぜ？

「ああ。……………しかしよく気が付いたな。さすが黒子って所か。」

「えっと……………、どういう事で？」

佐天と初春はなぜ超能力が異常に含まれていると分かったのかわからないらしい。

「つまりですわね、例えば今まで戸隠が使ってきた空間移動が異常ならば、それと超能力の空間移動が違う事を証明すれば良いんですの。それこそAIMが無いことでも。」

「だけど、近衛くんはわざわざ異常を引っ張りだしてまで、私たちに異常を見せ付けた。面白い事以外の面倒事をとにかく嫌う近衛くんにはこんなことは天地が引つ繰り返つても遠慮したいものだわ。」

「けど、近衛はわざわざそうやって回り道をした。こういうところから、今まで近衛が使ってきた空間移動は異常を証明するに事足りない存在であるということ。つまりその空間移動は超能力開発によって生み出されたものか、異常の中に超能力が含まれている事での能力かって事。」

黒子、固法先輩、御坂の説明に初春と佐天は漸く気が付いたらしい。

「だけど、近衛さんは能力開発は行っていない。だから必然的に後者になるわけですね。」

「そう。……………最も戸隠が嘘をついていなければの話ですけど。」

黒子がジト目で俺を見てくる。……………俺って信用ないか？……………有るわけねーか、はっはっはっ！

「そう、まさにそうだよ。不確定事項が多々あったが……………、まあよく気が付いたもんだ。及第点くらいはやろう。」

「……………何故に上から目線。」

「お姉さま、面倒くさいですから突っ込まないほうが良いですよ。」

「よく分かってるのね戸隠の事。……………あっ、もしかしてアンタ戸隠の事……………」

「冗談は止してくださいまし。」

「……………アンタえぐいわね。近衛がさめざめと泣いてるわよ。」

なんだか不必要に虐められている気がするんだけど泣いていいよね？でも僕負けない！！……………おえ。

「こ、近衛さん！！大丈夫ですよ！！確かに近衛さんは自分勝手人間としてはやはり壊れていて褒められたものじゃないですけど、それもやっぱり近衛さんの魅力ですよ！！魅力有りますよ？てかそれしか魅力有りません！！」

「初春さん……………、それ褒めてる？」

「うー、褒められているとは思えないけど……………、初春好きだー！……スカート捲らせろー！」

「きゃー！……！」

「何セクハラしてんのよー！……！」

「良いぞー！！やっちゃえー！！てか私も捲るー！……！」

「何やっちゃってんですか佐天さああん！……！」

「……………はあ。」

最後の固法先輩のため息が嫌に耳に残った。苦労人だねー固法先輩。まあ苦労させているのは俺だけど、くっくっくっ！！

「何かいったかしら？」

「なーんも。」

閑話休題



「さて、なんだか有耶無耶になっちったけど取り敢えず俺の完成は超能力も対象になる。能力さえ見ちまえばレベル1だろうがレベル5だろうが、レベル6にすることが出来る。」

「有耶無耶にしたのは誰よ……………」

俺たちはあのカオスから抜け出し、息を整え、服を整えてソファーに座りなおした。因みに初春の顔は未だ赤く、“男の人にあんな事やこんな事された……………。お嫁にいけない……………”とまあ涙誘う哀れな姿になっているが、余り触れないでおこう。

「……………お姉さま、今はふざけている場合じゃ有りませんの……………」

「えっ？ちよっ何よ！！いきなり真面目な顔にならないでよね！」

そんな中、やはりと言っては何だがこの中で一番洞察力が高い黒子は俺の台詞のなかでおかしな点を見つけたらしい。

「真面目な顔にもなりますわ。今、この学園都市の根幹を揺るがすいえ、引っ繰り返すような事態に直面しているのですもの。」

「流石黒子と言ったところか。」

「褒めても何もでませんわ。貴方からは大量に溢れるでしょうけど。」

黒子は、男が思わず見惚れそうな妖艶な笑みを浮かべる。まあ残念

ながら俺はいつもあの六人と暮らしているせいかそこまで見惚れることはない。と言うか黒子、胸残念だし。そんなんじゃ欲情しねーよ。固法先輩なら大歓迎だけどね。

「……………なんだか軽く馬鹿に去れた気がしますけど、今は良いですわ。」

それで、完成したものがレベルアップするのは分かります。しかし貴方はそれがレベル6にまで上り詰めると言った。それは本当ですか？

「ああ、俺の能力は全てレベル6だ。だけどこのレベル6は能力の威力が大幅にあがるだけで、この学園都市の（建前の）理念である神上の許に達するための神の計算ではないぞ？暫定的にレベル6と名乗っているだけだ。」

黒子は少し考えた後、口を開く。御坂は未だに黙ったままだ。

「それはどのくらいの威力何ですか？」

「おお、初春が質問とは……………。明日槍でも降るんじゃない？」

「私を何だと思っているんですかー！！！！」

「はいはい、落ち着こうねー。またスカート捲っちゃうよー？」

「佐天さんはどっちの味方なんですかー！！！！」

「私？私はパンツの味方だよ。」

何だか俺の目の前で、セクハラ発言連発の羞恥すらない女子中学生

が一人いるんだけど……。おお！！あと少しで秘境が……………！

「見ないでください！！！！」

「見るな！！！！」

グシャ……………！！

……………御坂と初春のダブルパンチ、効いたぜ。目が見えねーよ。

「はいはい、収集がつかないからくだらない事で争わない！！」

「私のスカート捲りはくだらない事ですか！！！！」

「下らないですわね。」

「ガーン（ ; ！！！！」

目が復活したときに最初に見たのは風紀委員の二人に冷たくあしらわれてスカート捲りされても最早反応しない、いや反応できない初春だった。最初は嬉々として捲りまくっていた佐天ですらあまりに憐れで慰めているくらいだ。

「……………あちらの事はほっといて。」

「黒子もそうですけど、固法先輩も大概ですよね。」

「……………私もちょっと悪いと思っているわよ。」

「……………それでもちよつとか。」

「何かいったかしら？」

固法先輩がジト目で見てくるが気にしない。

「それで？威力はどれくらいなの？」

「まあ、そうすつねえ。実際問題神の領域なんて到達しようなんておこがましいにも程が有るんでねえ。発火能力なら精々この学園都市を焦土にかせたら良いほうじゃないですかね？発電能力ならレールガン分間一発打てる程度だけ。」

「……………十分凄いんだけど……………」

「所詮贗作だからな。威力と性能が増してるだけだよ。因みに俺よりも強い奴は大量にこの世界にいるぜ？」

フィアンマとか、フィアンマとか、フィアンマとか……………。遺跡に死ぬ時に発売されてなかった禁書二十二巻が更新されてたから閲覧したけど、あれ？当麻しか倒せなくね？って思っちゃったもん。相手が強ければさらに強くなるとか何処の野菜人だよ。俺の完成にも限度が有るんだぜ？俺は精々理后と家族が護れたらいいや。まさか結末があんなになるとは思わなかったしね！。計画の大幅な変更が必要か？麦ノンもいねえし。殺すのは間違いだったか？最悪理后の体晶取り覗きも見送りか？まあ、俺がレベル5にしてやりや良いんだけど……………。ウジウジ悩んでも無駄だな。俺は家族とこの五人と当麻とインデックスが護って、この世界を面白可笑しくぐちゃぐちゃにできりゃ良いしね。魔術Sideと事を構えるつもりもないしね。

「……………それでもよ。はあ、もうこんな時間じゃない。この続きは後日で良いわ。今から遊びに行くし。」

御坂がため息をつきながら、時間を見ると、既に午後一時。やっと解放かよ。

「そうか。ならさよならだな。」

「そうなの？何か用事でもあるの？」

「ああ、あるよ。てめえらに話した事を裏で手回ししなくちゃいけないんだよ。お前ら、今頃かもしれないけどいつでも殺される立場にいるんだぜ？俺を殺そうとする奴らによって。たつくさんいるんだからよ。てめえらが力をつけるまで少しでも数を減らさないといけないんだよ。」

「……………なんかごめん。」

「何、只の自己満足だ。ただ忘れてくれるなよ、お前らがいくら俺のことを嫌っても俺はてめえらが好きなんだからよ。」

『……………』

全員顔を真っ赤にして黙りだった。俺はそれを見やり、外にでる。

「アレイスターとローラは正直に言う信用できないが、まあ、利害は一致しているから裏切られる事は余り無いはずだ。でもエイワスが出てきたら、死ぬるな。いくら会話ができるからって。フィアンマは当麻に任せよう。アックアも然り。他の魔術結社とか暗部は

無双すればいけるかな？家の防備とか、あの五人の訓練もしねーとな。……………やることが多すぎるぜ……………」

俺は最後にそう呟きながらボソソジャンプで転位した。

……………

……………三人称視点……………

とある荘厳な神聖な雰囲気があふれる、イタリア内にある一つの小さな国、まあ簡単に言えばバチカン市国な訳だが、そこのある広場に三人の人影があった。

「それで？貴様は俺様に協力するというのはだ？」

「もう。さっきから言ってるじゃないですかあ。何回言わせる

気ですかあ？」

「この者が新たなる神の右席の一人か？」

「実際は俺様の保有戦力だがな？」

その人物は、一人はスーツ姿の茶色の髪をした傲慢そうな人間。一人はがたいの良い傭兵のような格好をしている人間。そして最後の一人は異様だった。目は死んだ魚のように濁り、その存在自体が既にまがましいオーラを放っており、それに似合わず水色の髪の毛を長く無造作に伸ばして人形のような儂げな容姿をしている少女であつた。

「……………ふむ、我には関係のないことであるがな。」

「アックアさん酷いですよう。シクシク……………」

「……………本心で悲しまぬ涙に意味はない。」

「あはははは！！！！ばれちゃいましたあ！！そうですもんね？アックアさんの魔法名はその涙の意味を変えるものでもんね！一本取られたなあ！！！」

「……………。」

どうやら神の右席への新たな仲間を紹介しているらしいが、その場の空気は最低だった。遂に傭兵のような格好をした人間は無表情で去ってしまう程に。最もその空気を作ったのはこの儂げな少女だが。

「程々にしておけよ？」





”と神様に貰った“破壊”ディストラクションで破壊し憑くしてやるよ！……！！……！！ぎ  
や は  
は は は は ……！！……！！……！！”

そして彼女は広場を破壊し尽くしてその場をたった。

幕間 裏の現状 (前書き)

はい、今回は戸隠の行動によって起こった皺をどのように補完されていくか、と言う物語です。

そして今回は他の二次創作では滅多にお目にかかれないキャラクターを出してみました。賛否両論あると思いますが楽しんでもらえる幸いです。

因みに二人目のトリッパーはしばらくでません。存在だけで名前も決めてないですから。……………すみません

## 幕間 裏の現状

………三人称視点………

「あの男は危険だ！！！即刻排除せねば！！！！！」

7月29日の午後一時ごろ。丁度戸隠が風紀委員一七七支部から自宅に転移した頃、ある暗い部屋で十二人の男女が円卓に座り、会議をしていた。彼らこそが学園都市の貿易、司法、行政、軍事を一手に担うもの達学園都市統括理事会だ。

「奴は！！！！近衛戸隠はアイテムを面白半分に潰し、その内の我々の計画のキーマンである滝壺理后を拉致した！！！！さらには虚数学区・五行機関などの最重要気密に関しても公言している！！！！学園都市にとってこれは害悪である！！！！」

先程、大声で叫びながら机を叩いていた男（本編では一度も出てこなかったモブ、仮にAとしておこう）は円卓に座る自分以外の十一人を食って掛かるように睨み付ける。

そう、今回開かれているこの会議は緊急の物で、議題は我らが主人公の近衛戸隠についてである。

「ふむ、確かに奴の行動に関しては少々目を瞑れぬ物があるな。」

「ええ、そうですね。」

それに賛同を唱えたのは、常に駆動鎧パワードスーツを着込んでいる男、潮岸とモブキャラBである。

「確かに彼の行動は少々目に余る。」

「少々どころではないぞ！！奴のお陰で各方面から歪みがでている！！計画の遅れが生じているのだぞ！！！！！！」

「それは確かに困りますね。私の出世街道に傷が付く。」

先程のモブキャラAはさらにヒートアップして大声を張り上げている。その横ではトマスⅡプラチナバーグがシニカルに笑いながら、モブキャラAを見やる。

「今はそんな話をしている場合ではないでしょうか？」

「平和主義の貴方には分からないでしょうね。会議に前向きでないものは帰って頂きたい。」

「……………権力争いのクズ共が。私には原石の子達の研究が有るんだぞ。」

トマスⅡプラチナバーグを叱責したのは親舟最中、モブキャラAに陰口を叩いたのは貝積継敏である。彼女等は特に利権争いなどには参加しない、土御門曰く善人である。

「私としては別に構わないのだがな。奴もまた計画の人柱でも有るのだよ。」

そして今回の会議にはサウンドオンリーだがアレイスター・クロウ

リーも参加している。

「学園都市統括理事長!!! 貴方は事の重大さを理解しておられるのですか!!! 一大事なのですぞこれは!!! 学園都市の存続の危機なのです!!!」

モブキャラAはアレイスターに喚いて突っ掛かる。しかしアレイスターにとってはこの会議は取るに足らないもの。所詮代替が利くものたちの言葉である。話は殆ど受け流していた。

「だが、私たちの最終目的であるレベル6の創造は出来ているのだろうか? ならばそれで良くはないか?」

「我らが保有する暗部が一つ消され、さらには一般にも暗部の正体がばれかけている可能性がある!!!」

モブキャラCが事も無げに言うのに、さっきから喚いてばかりのモブキャラAがなお一層大声を張り上げる。彼には野望があった。あのアイテムを赤子の手を捻るように殺した近衛戸隠を自分の保有する暗部によって殺す事により、自分の地位を確固たる物にするという物が。現に近衛戸隠は学園都市の計画を片っ端から破壊している謂わば逆賊。さらには暫定的ではあるが世界初のレベル6でもある。戸隠を殺す事が出来れば彼のこの理事会での発言権は大いに増すだろう。さらには六人の美女、散袋火彌子のおまけつきでも有る。

「ふむ、では近衛戸隠の行動を裏付けるものは有るのか?」

「うっ……………!!!それは……………」

しかし、それはアレイスターにとっては些末な計画である。いつでも替えの利く人間の戯言に気をかける必要はないのだ。

実際、モブキャラAは近衛戸隠の犯行を裏付けるものは所有していない。アイテムの事件は、“アイテム”の情報の食い違いと言うようにアレイスターに操作されており、全面的にアイテムが悪い事での不慮の事故というふうになっているし、禁書目録の事件は学園都市内に侵入した侵入者を撃退したという事になっている。アレイスターと戸隠は巧妙に自分達の犯行を揉み消しているのである。

「（それに……………、今は戸隠を殺すなど悠長なことはいっていらねんしな。」

アレイスターが今一番気に掛けている事は突然バチカン辺りに現れたまがまがしい気配の正体である。さもすればエイワスですら消してしまいそうな存在に珍しく恐怖を覚えているのだ。あの“異常”<sup>アブノーマル</sup>には“異常”<sup>アブノーマル</sup>をけしかけないといけない。つまり戸隠は計画のために殺せない存在なのだ。

「……………もう良いです！！！」

アレイスターから思う通りの返答が得ることが出来ず、さらには自分の計画を脅かす程の窮地に至ったモブキャラAは会議室から出ていく。それにともない他の十人も会議室から出ていき、その会議室には潮岸とモニターのアレイスターのみが残った。

「良いのか？理事長。」

「別に構わん。所詮代替が利くものだ。」

「くつくつく……………。そうだったな理事長。貴様はそんな人物だ。」

「  
駆動鎧は暗闇で不気味に上下に動き、SOUND ONLYと表示されたモニターを見る。」

「しかし覚えておけよ。代替品も時としてなかなかやるものだ。せいぜい寝首をかかれんようにな。ドラゴンも然りだが。」

潮岸はそれだけ言うと部屋を去っていった。残されたモニターはただただ無音だった。

……………モブキャラA……………

「くそっ、くそっ、くそっ！！！！！！！！」

私は焦っていた。ただ単に計画が順調に進まない事に。うまくいけば絶対的な地位と、金と、おまけに美女六人が手に入る。

「私は！！！！私は！！！！！！」

あの日、学園都市統括理事会の一人に選ばれたときは小踊りしたものだ。嬉しくてなんでもうまくいく気がした。だが現実はこうも違った。あの親舟最中よりも発言権は低く、誰よりも低く見られていた。そして聞いてしまった。私たちは代替の利く存在で有るということ。

「こんなところで燻る私ではない!!!!!!」

そんな時に転機が現れた。近衛戸隠というカモだ。学園都市統括理事会でも騒然の元となり騒乱を起こしている輩。どんな手を使ってアイテムを潰したのか分からないが、所詮はただの中学生、小童だ。尻尾は掴めなかったが、奴を倒した後に証拠は造ればいい。

「だが私の保有戦力ではやはり心許ないな。奴の行動に反感する奴もいるはずだ。」

しかしやはり準備は必要だ。一週間は必要だろう。見ておれよ、近衛戸隠。私の出世の礎にしてやる。

..... 貝積継敏 .....

貝積はあの会議からいち早く抜けて第七学区の高級住宅街の一つの



豪邸の前に立っていた。表札は貝積だが、現在家のなかにいるのは  
高校生の女の子、貝積のブレインである雲川芹亜である。

「ああ、遅かったね。会議が長引いたのか？どうせ不毛なものだろ  
うけど。」

「いやなにこれでも早いほうであるさ。しかしとんだ無駄足だった。」

貝積が豪邸内の完全防音室に行くと、黒い髪の毛の見た目麗しい女  
の子が、何も映し出されていない三百インチのディスプレイを思案  
顔で眺めながらソファーに座っていた。彼女こそが雲川芹亜である。

「へえ、それはご足労なこと。」

雲川は特に興味がなさそうに素っ気なく言い放つと、手元にあった  
紅茶を一口飲む。貝積はそれに少しげんなりしながらも口を開く。

「ブレインである君に相談したいことがある。君の指示を仰ぎたい  
ものがある。」

「原石のこと？」

「ああ。」

貝積のいきなりの提案に雲川は少し息を呑むが、微笑を浮かべて貝  
積に向き直る。

「どんな事かしら？」

「近衛戸隠に原石の子らについての事で協力体制を敷きたい。彼との交渉役になつてくれないか？」

貝積の言葉に再度息を呑み、目を丸くする雲川。その後険しい表情になる。

「交渉役になるのはいいけど、彼は正直難しいかもしれないけど。」

「君にしては随分と慎重というか弱気だな。」

貝積はやや不満げに雲川を見る。当たり前であろう。貝積にとっては近衛戸隠は自分の理想に近づいたためのキーマンになり得る存在だ。能力開発を受けずに、暫定レベル6の能力をいくつも使いこなす。それだけで原石の子供達を救う手立てになり得るのに、さらには奇代の科学者と言われる散袋火彌子もいる。この二人の力さえ有れば自分の理想は現実のものになり得る。そう、原石の子供達を全員救うという理想が。故に彼は自分のブレインが弱気なのが気に食わないのだろう。

「慎重にもなるさ。奴は正直何を考えているか分からない。狡猾な計算を立てて事を進めることもあれば、行き当たりばつたりのときもある。此方の思う方向には確実に進まないんだけど。それに奴は無類の面白いもの好きとも言える。今回の事を彼が気に入るかどうかがネックなんだけど。」

「……………だが……………!!」

雲川の言葉に詰め寄りそうになる貝積。この人間は良くも悪くも善人なのだ。

「……………だけど、やらないとは言っていない。さつきも言ったが奴は計算が効かない。それは逆に私たちの方に転機が舞い降りる可能性もある。だからやるよ。精々お前のブレインとしてよい結果にしてくれるよ。」

「……………ありがとう。」

「ふん。どうやら私はお前に毒されてきたようだ。随分と甘い考えになったもんだよ。」

しかし雲川は不敵に笑い貝積に微笑む。どうやら雲川も万更でもないようだ。

「だけどこれからは用事があってね。一週間は予定が取れないんだけど。」

「ああ、構わない。その間、私は近衛戸隠の居場所を探ろう。」

貝積はそう呟き、部屋を出ていき、雲川も紅茶を飲み干した後不敵に笑いながら部屋を出た。

こうして戸隠の預かり知らぬところで三つ巴の抗争が始まるつとし

ていた。

幕間2 戸隠家の事情 (前書き)

今回も幕間ですね。

お家強化と戸隠の葛藤をテーマにしていますが、読めば読むほど内容が薄く感じる……。

取り敢えず楽しんでいただければ幸いです

## 幕間2 戸隠家の事情

「ただいまー。」

俺がそういつて家に入った時には返事は返ってこなかった。

「……………ありや？いねーのか？」

俺はリビング、部屋、キッチンと廻ってみたが、そこに六人の姿は無かった。

「靴は有るからなあ。いないはずは無いんだが。」

地下へ続く階段を降りながら呟く。

「おっ、いたいた。」

結局地下四階のラボに六人全員がいた。勿論彌子もおり、明るい笑顔振りまいていた。

「いよーっす。」

「ああ、おかえりー。」

俺が何かパソコンのディスプレイを見ながら背をまるめさせている六人の後ろから声をかけると、香奈がいち早く気付き、後ろを振り返り手を挙げる。

「なあにしてんだ？」

「うん？ああ、戸隠は知らないんだっただね。」

「？……………何の話だ。」

香奈はノートパソコンの一つを手にして、ディスプレイを見せてくる。

「アレイスターから報告があったの。学園都市統括理事会の一人が戸隠を始末しようとしてるって。」

「……………ほう。命知らずなこった。お仕置きしないと。」

俺はノートパソコンのディスプレイを睨み付けながらニヤリと笑う。こりゃ、その理事会の一人をお仕置きしないとイケないらしい。

「うん。それはしないといけないけど、この家って防衛システムが最低限しかないでしょ？」

「ああ。」

「だからね、彌子ちゃんに頼んで自立型の迎撃ロボットとか造ってもらおうかと思ってるの。」

そういつて香奈はウインクをする。……………香奈もなかなか暗部の仕事に形に付いてきたらしい。

「へえ、そりゃご苦労なこった。しかし良い判断だ。偉いぞ？」

「えへへ……………、私のほうがお姉さん何だけどな。」

俺が香奈の頭を撫でてやると香奈は顔を赤らめながら気まずそうに笑う。……可愛いじゃん。

でも、どうやら彌子に過去の事を聞くことは後日になりそうだ。

「俺にとつちや可愛い妹だよ。………何だこれ？」

俺がノートパソコンを操作しスクロールさせていると、報告書の最後に隠しファイルが有ることに気付いた。

「アレイスターの悪戯か？」

俺はそのパスワードを解くためにキーを叩く。五人も作業を止めて此方を見ていた。

「おっ………、開いた開いた。」

「なんてなんて〜？」

俺の横に奈美が近づいてきて腕に抱きつく。うん、ラッキー。

「えつとだな………、」

………悪い。席を外すわ。奈美も離れてくれ。」

「………えつ、………うん………。」

俺はそれを見て固まった。背中から汗がでる。背筋が凍る。悪寒がする。何もかもが自暴自棄になってしまいそんな錯覚に陥った。



「（やはりさつき感じ取った気配は“異常”か“過負荷”だったか。）」

俺は家に帰る数十分前に微かだが同類とも異端ともとれる気配を感じ取っていた。そのときは然程気にはいかなかったが、アレイスターからの隠しファイルを見た瞬間、確信に至った。二人目のトリッパーが現われたと。

「（大方神が送り込んできた奴だろう。劇的を渴望する奴らにとっては俺一人の変化じゃ満足しなかつたんだろう。俺が予想するに送り込まれた奴は俺の対極に位置する奴、つまり“過負荷”だろう。」

……くそつ！！想定するに一番最悪な事態だぞ！！送るなら精々天使にしるよな！！！」

俺は内心神に悪態をつきながら、思考する。恐らく俺が“完成”ジ・エンドだから、相手として選ばれるなら、神の性格上、俺の知りうる限り最低の“過負荷”マクナスの“大嘘憑き（オールフィクション）”だろう。そして、アレイスターの報告に有るなら、奴さんはバチカン市国に現われたらしい。つまりローマ正教に組している可能性が高い。と言うより、利用か、潜入だろう、大嘘憑きの過負荷は。

「何も考えてない場合もあるけどな、俺みたいに……、くくつ。」

俺は一人笑いながらノートパソコンを見る。アレイスターは俺を過負荷に相对させるようだ。まあ、賢い選択だろう。超能力者でも凡人でも暗部でも、過負荷を相手取れば、無事では済まない。悪戯に兵を減らすだけだ。一国の統治者、教育者としては正しいな。俺一

人で学園都市全員が犠牲にならなくて済むのだから。

「しっかし、“大嘘憑き（オールフィクション）”だと勝てるかどうかわからんぞ？なんせ奴は過負荷。勝敗なんて関係ない奴だからな。」

俺は少々ナーバスになりながら廊下の壁に背を預け、天井を見る。

「だが……………！」

おとなしく殺される俺じゃ無いのね。」

そう、俺は自分勝手に自己中で、そして家族愛に満ちていると自負している。六人が殺されないためにも、ここで弱気になっただけはない。

「俺は殺しきってやるよ。いくら不可能だと思われても。なんせ、

家族の長兄なんだから。妹たちのためにも負けてられないよな。」

俺は折れかけていた心を奮い立たせて、立ち上がる。さあ、これから本格的に動くぞ。

「（まず奴がローマ正教に組していると仮定するなら、奴が出てくるのは、猟犬部隊のときか第三次世界大戦のときだろう。今から対策を立てても間に合うかどうかかわからんが、取り敢えずは目下の対

策であるこの家の警備態勢の強化と、理事会の人間の始末、超電磁砲のテレスティーナ編を終了させねーとな。」

俺はこれからやることを再確認して、ラボに入る。

「……………あつ、戸隠……………、何があつたかはいつか話してね？」

「ああ、悪いな。心配かけた。」

俺がラボに入ると香奈を始めとして五人が心配そうな顔で俺を見た。だがそこには決意が見えた気がした。……………本当に出来た妹たちだよ。下手な同情よりよっぽど嬉しい。

「さて、なんだか話を切ってしまったていた見たいだな。どこまで進んだんだ？」

「えつとなー、自立型の兵器を造るんはええんやけど、従来の奴じやおもろないよなーゆーて話してたんや。」

俺が彌子の横に立って、いくつも並んでいるディスプレイを見た。どうやら従来の暴徒鎮圧用の警備ロボの設計図らしいものが3Dで映っていた。

「なるほどな、ならこんなん造ってくれないか。」

「どれどれ……………？」

……………名前はオートマトンか。可愛い名前の割りに性格は鬼畜やな。」

煮詰まっているらしい彌子に俺はノートパソコンを使って、地下三階にあるIFSを介して遺跡にアクセスして、ガンダム00のセカンドシーズンに出てきた殺戮兵器のオートマトンのデータを入力して彌子に見せる。彌子はスペックとプログラムを見て、顔を引きつらせる。

「まあ、でも出来やん事はないよ？これなら学園都市の警備ロボを応用すれば出来るやろうし。5メートルとちよつとでかいのがネットクヤね。」

しかし彌子はすぐに真面目な顔に戻り、画面を見つめながら考察を加える。

「出来ればメタルイーターと磁力射出砲も付けたいし、アハト・アハト位の衝撃は耐えられるようにして欲しいんだが。」

「うげ……！アハト・アハトって列車砲やん。出来やん事もないけど到底一週間じゃ造れへんよ？メタルイーターと磁力射出砲は専用機としてプログラムと機構を変えれば出来やん事もないよ？でも前者は十メートル越えは確実やね。」

「勿論どんな大きなものにしてもらつても時間が掛かっても構わない。まあ、取り敢えず最低ラインまで造り上げてくれたら良いんだ。これからについての対策だからな。」

俺の無謀な要求に本格的に引きつった顔をするが、自身有りげに俺出来ると言っ。

「分かったわ。後はうちの前まで設計してた蜘蛛型補給ロボとの連携を可能にすればなかなかええ無人部隊が出来上がるよ？」

「……………なにこの人たち怖い。」

香奈の呟きが聞こえた気がしたが今は無視だ。

「さて、後は戦車と戦闘ヘリだな。」

「うん、まあ対人戦やったらさっきまでの奴にうちと戸隠が組むAIを載せればやばい性能になると思うけど?」

「いや、AIはこっちのスパコンに載せよう。鹵獲でもされて情報が流れたらたまったもんじゃない。簡単なOSで良いだろう。無線かなんかで指示を飛ばして。」

「脳みそはこっちで嚴重に守るんやな?」

彌子はニヤニヤと笑いながら次々とキーを打ち込んでいく。

「そうだ。それが安全だろうしな。AIは後で小夜も含めて組もうか。」

「せやね。他に必要なんはある?」

彌子が此方を見ながら言う。

「そうだな。地下三階の余っているスペースを遠隔操作やバックアップのための作戦司令室に改装しよう。スパコンもあるしちょうど良いだろう?」

「せやねえ。……………。」

彌子に返答すると彌子は少し思案顔になる。

「…………… あんさあ、どうしてもええ事なんやけどスパコンって名前的になんか味気なくない？なんか名前つけよーよ。」

「…………… どうでも良いが……………。 ふむ、確かにな。」

「…………… ホント超どうしても良いですね。」

彌子の提案は画期的だった。ふむ、名前か。…………… マギとかじゃありきたりだしな。

…………… そうだな。

「ミームル、なんてどうだ？」

「ああ、ええね。それでけっこういい。」

即断即決だった。

「まあ、スパコンの名前はミームルで良いとして、こんなのも造れるか？」

「名前はバグ。人を感知すればチェーンソーで切り刻みに行く対人兵器かあ、どうやって浮かせるかが問題やけど、それさえクリアしたら行けると思うよ？」

俺はノートパソコンをさらに操作してF91に出てきたバグの設計図を見せる。彌子は多少渋る素振りを見せたがなんとか造ってもらえそうだ。

「ならこれで外の警護はオツケーだな。後は家のなかか。」

「うん、それは現状から変えることはないと思うけどねえ？」

話はこれで終了となった。中の改装や兵器開発は香奈、奈美、最愛、理后、彌子が担当になり、俺と小夜はそのまま地下三階のミーミルのもとに行つて、無人ロボットのAIとOSを組に行つた。

## 大切な思い（前書き）

今回は科学のみの戦いの話です。いろいろ無茶ぶりやこじつけな  
かが多かったり、戸隠君の台詞が臭すぎて恥ずかしかったです。

てか、今回でブレイン編を終わらせるつもりだったのに終わらな  
かった……………



## 大切な思い

あれから一週間。三日後に吸血鬼事件（俺命名）を控えた8月5日の午前9時、俺は家の地下三階を改装した司令部で警備態勢の最終チェックをしていた。恐らく俺の見解なら今日、理事会の侵攻があるはずだからだ。準備諸々を含めて一週間、どうやら敵さんはそこまで無能ではないようだ。

「だけど俺にしちゃあどんだけ有能でも無能でも異常じゃなけりや敵じゃない。」

「何かいったー？」

「何も。」

香奈に独り言を聞かれそうになったが、そこまで気にしてはいけな

「ノーマルオートマトン五十機、バグ八十機、メタリイーター搭載オートマトンが三十機、磁力射出砲搭載オートマトンが三十機、アハト・アハトが一機、蜘蛛型補給ロボが四十機か。最低ラインはどうにか脱したな。」

俺はミームルに直接繋がられたディスプレイを見ていた。そこには俺が彌子に造るよう依頼したロボットが映っていた。それぞれはドックから自分で移動して、地下一階の地上射出カタパルトにて隊列を組んでいる。

「しっかし凄いな彌子。一週間でこれだけ造り上げるなんて。」

「元から設計図はあったしなあ。この家に取り付けた製造ラインもちよちよいと弄れば流用可能やったし。材料がたらんのと、バグが難しかったのが一番時間とったかも。」

彌子は事も無げに言うが、やはりこいつは天才だった。と言うより異常に近い存在かもしれない。たった一週間で俺の要求を全て遣り遂げたんだから。俺が感心しているときに、誰か来客があったようだ。外に取り付けた監視カメラに映っているのは老人と、当麻の学校の制服を来ている女子高生だ。

「そうか……………。小夜は彌子と一緒にAIとOSの最終チェックをしていてくれ。来客だ。」

「知っている人？」

「ああ。」

俺が司令部から出ていこうとすると小夜が心配の色を浮かべた顔で俺を見上げている。俺はそれに微笑みながら頭を撫でる。

「学園都市統括理事会の一人、貝積継敏と、そのブレインである雲川芹亜だ。土御門曰く善人だ。」

俺はにやけながら小夜に言った後、司令部を出てエレベーターに乗る。

ピンポン！！

俺がエレベーターでエントランスホールに出ると、ちょうど呼び鈴が鳴る。

「はいよー。」

俺が玄関を開けると、やはりといっては何だが雲川芹亜と貝積継敏だった。

「いらっしやいませ、雲川芹亜さん、貝積継敏さん？」

「……………やはり知っていたか。」

俺がニコニコと自称人のいい笑顔を浮かべると老人、貝積継敏は顔に警戒の色を滲ませながら俺を見る。

「ええ、土御門から聞いていたので。さあ、立ち話もなんですし御上がり下さい。」

俺は慣れない敬語を駆使して玄関の両扉の片方を内側に開けて、ホテルのベルボーイの様に二人を招き入れる。

「奈美、二人分の紅茶とお茶請けを出してくれ。戸棚に有るはずだ。」

「はあい。」

俺は二人にスリッパを出して、リビングの戸を開ける。その近くの壁に掛けてあるリモコンを手取る。そのボタンを幾つか押す。すると、吹き抜けの天窗とリビングの窓に防弾仕様の窓ガラスがさ

らに一枚増やされて、さらに外からは中の様子が見れないガラスに変わり、カーテンが自動で幕を引き、人間の耳には聞こえないような盗聴防止の妨害電波が流れる。勿論この部屋は防音仕様だ。全部 MADE IN 散袋火だ。安全性はどのメーカーより高いだろう。

「凄いわね。」

「アンタが住んでいる、と言うより仕事でいる家もこんなもんだろ  
うよ。」

「……………」

俺の言葉に雲川先輩が睨んできているが、見た目麗しい先輩が睨んだところで可愛いだけである。いやあ、眼福、眼福。

「さて、其方に座ってください。」

「ああ、失礼するよ。」

「……………」

俺はそのまま二人をソファに座るように勧める。二人は俺とは逆の位置にある一人用ソファにそれぞれ腰掛ける。

「……………」

「ああ、ありがとう。」

「いえいえ、因みに毒は入ってませんよう？」

「……………」

タイミングを見計らって奈美がダーズリンとロールケーキを持ってくる。……………しかし奈美、その言い方は毒を入れていると言っているようなものだぞ。ほら、二人も飲もうとしていた紅茶を置いてあるじゃないか。

「あはは、冗談ですよ。」

「……………冗談に聞こえないんだけど。」

奈美がお盆を抱えながら器用にわたわたと手を振る。

「まあ、毒は入ってないですよ。勿論カップの縁にも毒は塗ってません。」

「……………あなたもあなたよね？」

俺はわざと口を付けようとした部分を躲すようにティーカップを回して紅茶を飲む。その様子に雲川先輩はげんなりした様子で紅茶を飲む。……………勿論毒なんて入れてませんよ？この二人は殺しても意味ないんで、ええ。

「しつつかし、お二人さんも命知らずというか、用心知らずというか、考えなしなんです。ただの一介の暗部構成員に接触するなんて、剩れ家に来るなんて、変な誤解を生みますよ？」

「……………いきなりフランクになったな。」

私たちも重々承知だ。危険と分かかっていてもやらねばならない事があるのですね。」

俺が二人に紅茶を飲みながら言うと、貝積が見当違いな事を言う。

「何を見当違いな事を……………。別に俺はアンタらが死のうが、俺が死のうが関係ないし興味ないの。単に俺の家族が危険にあわないか心配なだけ。アンタの身の上なんか案じてなんかいないっすよ？正直今ここでアンタら殺して、アンタらがここに来たという事実をもみ消しても良いんですから。俺的に。」

「……………噂どおりの人間ね、近衛戸隠。どんな人間よりも家族思いな鬼。随分矛盾してると思ってたけど……………、納得ね、あなたを見ていると。」

貝積は黙りこくって神妙な顔つきをしているが、雲川先輩は俺を見てしたりげに頷きながら紅茶をすする。案外豪胆な人間だ。

「誉め言葉をありがとう、雲川先輩。」

俺はロールケーキをフォークで小さく切り分けて口に運ぶ。

「それで？今日はどうされたんです？何か用件があつてここまで来たんでしよう？」

「ええ、そうなんだけど……………、貴方の敬語は気持ち悪いわ。容姿にはあつてるけど、生理的にダメなんだけど。」

「……………ひっでーなおい。」

俺がニコニコ笑顔で接待してやったのになんだその生理的に無理つてのは！……しかも容姿にはあうって俺が女顔って言いたいのか！

!!

「折角綺麗でイケメンなのにオーラが駄目になってしまってるわ。」

「まあまあ……………、それで？用件は聞いてくれるかね？」

雲川先輩が毒を吐いたのを貝積が諫めて俺に向き直る。

「……………その前に、やらなくちゃいけないことが有るんですよね。」

「?????……………やらなくちゃいけないことって……………。」

俺は外の様子を伺いながら言う。貝積が疑問符を浮かべているが、今の俺には関係なかった。どうやら……………仕掛けてきたみたいだ。

ドオオオオン!!!!

「なっ……………!!!!」

「……………来たか。」

「戸隠さん!!!!」

「分かっている!!!!」

窓に何かがあたり爆発した。多分ロケットランチャーの類だろう、閃光が部屋の中を満たす。しかし散袋火クオリティの防弾ガラスに

は傷は付けられなかったらしい。

「な、何が……！！！」

「事情は後で言います。奈美！！二人を地下三階に連れていけ！！」

「ええ？！あそこは機密レベルが高いところですよ！！！」

貝積と雲川先輩が狼狽えるなか、俺は奈美に二人を司令室に連れていく様に指示する。

「その二人は信用に足る！！二人に死なれたら今の時点ではダメリットのが大きい。」

「わ、分かりました！！戸隠さんは？」

「屋上に行って狙撃する。オートマトンの性能チェックもしないといけないからな。奈美も今回は待機だ。」

俺は奈美に指示を飛ばしたあとに、外を確認する。最初の攻撃はどつやら牽制だったようで敵さんに動きはない。

「しかし、白昼堂々と市街地戦とは……、馬鹿だな敵さんは。」

恐らく、理事会の馬鹿に従っているのは馬鹿が保有する暗部と、外から雇われた傭兵だろう。こんな無茶、普通は出来ねーよ。

「さて、敵さんの数は？」

「はい、火器を持った人間が五十内、二十が駆動鎧着用、学園都市製の戦車が二台、装甲車が三台に、何だか用途不明のトラックが



一台。正直制圧戦を想定した戦力では無いわね。馬鹿なのかしら敵さんは。』

俺は全ての窓ガラスのシャッターが閉まったのを確認して、耳に無線機を付ける。

「自衛隊の軍事訓練が出来るほど庭が広がって幸いしたな。相手をぼこるのが楽になりそうだ。ご近所に迷惑が掛からないだろうし。」

『迷惑つつつか家の周り森じゃん。精々自然破壊が関の山よ。』

俺は通信先の香奈と軽口を叩きながら階段を駆け上がり、屋上でいる。屋上には既に、陸地用に改造したアハト・アハトが鎮座しており、その脇にはメタルイーター搭載オートマトンが四台、地上に向けて銃口を光らせている。………端から見たらガンタンクみたいですごくシユールだが。

「そうだな。まあ、用心する事に越したことはない。ディストーション・フィールドをこの家の周りに張る。」

『それじゃあ、こっちはオートマトン達を発進させるね?』

「ああ。」

俺は通信機をきり、手を虚空に突き出して、

「ディストーション・フィールド展開。」

家の敷地の周りにディストーション・フィールドを張る。これで敵の攻撃も、味方の攻撃も外には漏れなくなった。

「さてさて、ロボットどもの戦いさまで観察しますか。」

俺は眼下の地面の下からせりあがってくるオートマトン達を見ながらほくそ笑む。

.....

ドオオオオン!!!

二度目の爆音で敵さんの侵攻が始まった。余裕綽々な足取りで侵攻する敵さんは既に庭の三分の一まで来ている。奴らが使っている戦車なら余裕で弾が届く距離だが、射ってこないのは舐めているからだろう。

「蹴散らせ。」

しかし俺の一言で戦況は一転する。

ズガガガガガガガガガカ!!!

ノーマルオートマトンが四本足に付いている車輪を滑らせながら、胴体と足の連結部分に付いているガトリング砲を発射する。五メートルと巨大なオートマトン五十機に及ぶ一方的な蹂躪は敵にとって恐怖でしかない。余分な知能を外付けにしているオートマトンは無

駄なものが無く、装甲が分厚い。下手な銃器は無駄だし、意味をなさない。これはある意味予想外な結果だった。いい意味で。

「磁力射出砲とメタルイーターで駆動鎧を破壊しろ。」

『はいはい。』

さっきから耳障りな甲高い音が聞こえる中、奈美の声だけははっきりと聞こえた。

「……………この音はキャパティシーダウンの音か。俺が能力を使うのを知って持ってきたんだろうが、生憎と今回は能力は使わないし、効きもしない。」

俺がニヤニヤと慌てふためく駆動鎧共を見ていると、四機のオートマトンがキュイン……………と音を立てて車輪を走らせて徐々に態勢を落としていく。次にモノアイカメラとは真逆、つまり後部の装甲を開いて、地面に支えの足を出してその先を地面に突き立てて、先っぽについた釘を屋上に差して固定する。そして本体の頭部についたメタルイーターを地面の駆動鎧に向け、モノアイカメラで狙いをつける。そして、

ドガガガガガガカ！！

メタルイーターを四機揃って連射する。下にいるオートマトンからも連射されているので、眼下の駆動鎧の装甲が次々凹み、貫かれていく。

「ふははははは！ー！見る！ー！敵がゴミのようだ！ー！ー！」

『実際ゴミだよ。後片付けめんどくさいよ。』

『でも、近衛さん。そこってそんなに駆動鎧は小さく見えないと思うんですけど。』

奈美つつさい。こづいづいのは気分なんだよ。

「粗方片付いたな。バグで一気に掃討しろ。」

『りょーかいやー。』

俺は戦局が此方に傾きつぱなしなのを確認して、一気に終わらせるために、バグを発進させる。バグや他のロボットは太陽光とバッテリーの電気をエネルギーにしており、さらには俺たち家族の生体データをインストールしてあるので俺たち家族を襲うことはない。そしてバグは流石に反重力とかは使えないので、チェインソーを付けている円盤の上下部にブースターを付けている。早い話、ファンネルに似ているかもしれない。だからオートマトンの行動時間はゆうに三ヶ月を越えるが、バグのみ三時間しか使えない。だからこんな掃討戦か奇襲にしか使えないのだ。

ガコン！ー！ー！

彌子の気の抜けた声とともに屋上の床の一部がせりあがり、



「香奈、全オートマトン、バグ、スパイダー（蜘蛛型補給ロボット）を帰還させる。」

『……………分かった。全機帰還させる。けど、』

俺の言葉に香奈は静かに言葉を紡ぐ。

『必ず、私たちの知ってる戸隠で帰ってきてね……………。私、もう家族を失うのは嫌だよ。』

「……………。」

俺の昂奮が醒め止んだ。いや、俺と同化した。香奈に気付かされた。みんなに気付かされた。

「（全く俺のバカ。妹を悲しませるなんて兄のすることじゃねーだろ。忘れるところだったぜ。俺は確かに殺人が好きだ。三度の飯より好きだ。だけど……………、）」

「わりいーな香奈。どうやらお前たちを悲しませてしまったようだ。兄失格だな。」

『うつん、私こそ勝手な事いってごめん。』

「いや、勝手な事じゃねーよ。何たって俺はお前らの兄だ。妹の要望に応えるのが当たり前だろ？」

「（……………）けど家族のが好きだ。もう殺人の数億倍。面白い事より好きだ。全く俺のバカ。自分の事なんて二の次、家族第一だろ？こんな事も分からないなんて俺も腑抜けたな。」

俺は再度、刀を握り締める。さつきと違い、自分の愉悦を満たすためじゃなく、家族を守るために握る。

「行って来る。香奈、奈美、小夜、彌子、最愛、理后、俺はお前らが大好きだ。」

『『『頑張って。』』』

『うちのには愛してるって言うて欲しかったなあ。』

『戸隠さん、死亡フラグバリバリですよ。』

『もうちよつと真面目に返せんのかお前ら二人は………………。…………。私も大好きだよ。』

俺は死亡フラグを建てるつもりもないし、正直こんなルーチンワークにシリアスになる必要はない。て言うか言ってて恥ずかしかった。でも、それ以上にそうやって六人に言っておきたかった。

「そんじゃまあ行くぜ。殺人鬼様のお通りだ。」

俺はそういつて屋上からジャンプした。

結論から言うと楽勝に勝てた。死亡フラグの、し、の字がでる迄もなく勝てた。というか呆気ない。物足りないといったところか。消化不良も甚だしい。本当に傭兵かよ、と行ってしまった。

「はぁ……………、まあキャパティシーダウンとポロポロだが駆動鎧を手に入れられただけまだマシか。」

傭兵部隊と暗部を駆逐して、死体処理をアレイスターに委任して、俺は一息ついた。相変わらずの眠そうな目をしているであろう俺の顔をなぞりながら、俺は背を預けているトラックを見る。無骨な黒光りした二トントラックの中身は開けてビックリよくわからん機材だらけだ。その機材にはプラグが刺さっており、その先では彌子と小夜がノートパソコンを操作していた。

「ふうん、能力行使の演算を阻害する音波ねえ。うちなら2日で造れるよこなん。」

「彌子も大概だと思うのは私だけかな？」

「大丈夫だ小夜。俺もそう思った。」

どうやら解析が一通り済んだ用で彌子が息を一つ吐く。しかしその顔は達成感ではなくつまらなげな倦怠感で満ち満ちていた。

「うーん、でもうちやったらこれを能力者が気付かないうちに演算が出来ないようにする超音波にする事も出来るんよ？まして、こん



なおつきい機材なんか使わんくつても使えるようなな？」

「それはお前に限った事だ。普通そこに至るまで何年も掛かるだろうよ。」

彌子のこの開発力はやはり異常なんじゃないだろうか。 “ファクトリー 創造開発” とでも名付けるか？ 正直現実になると洒落にならないのでやめておく。 言霊って怖いよ？ 名前は記号じゃなくてそのものの存在の概念だから、不用意に俺が異常として名前なんか付けたら、マジで概念に従って異常になっちまう。

「あはは、うちなんかまだまだやえ？ これしきのことてびびってたらこの世の中生きてけへんよ。」

「お前の周りにはどれだけ魑魅魍魎が魅扈してんだよ。」

「嘘やで？ うちに勝てる科学者なんてこの学園都市と言えど数えるくらいしかおらんのちゃうかな？ 木原一家くらいちゃう？」

彌子がけらけらと笑いながらノートパソコンを閉じて立ち上がる。小夜はオートマトンと適当に戯れていた。

「木原一家ねえ。木原幻生と木原数多くらいしか知らねーな。」

「幻生つちゆうたら、実の孫を体晶実験に使った奴やんな？ どのアレイスターやねん！！ っつて、思わへん？」

「……………」

彌子の発言は色々とまずい気がする。あれだろ？ お前が言いたいのは

は性魔術と錬金術を実験してたアレイスターでこの学園都市のアレイスターじゃねーよな。あれ？同一人物だっけ。まあいいや。

「後は木原数多やね。数多は“ハウンドドッグ 獵犬部隊”のトップで、一方通行の能力開発もしてるから、厄介やな。

科学者としても、組織のトップとしても、さらには格闘家としても優秀やから困るよな。」

彌子はけらけらと笑いながら小夜が上に乗っているオートマトンを横からこ突く。オートマトンはキュツ、キュイと音を立てて辺りを見るくると見回す。何だか本物の生き物みたいで愛嬌があったりする。さつきまで傭兵を惨殺していた物とは思えない。

「確かにな。だけど数多は科学者と言うよりも、白衣を着たヤクザにしか見えないのはお約束だと思う。」

「あの顔面刺青やな？人識も真つ青や。」

「……………彌子ちゃんがネタに走るのが理解できない。」

小夜がはあ、とため息をつきながらオートマトンからゆっくりと降りる。オートマトンはラクダのように足を折り畳んで小夜を安全な位置に誘導する。……………こいつ本当に生物にしか見えない。

因みに余談だが、うちの女連中は彌子の事を彌子ちゃんと呼んでいる。

「あはは、それがうちの生き甲斐の一つやからなあ。

そーいえば、木原一家と言えば、テレスティーナが何か企んどるみたいやに？うちとしては企みは正直どうでもいいんやけど、そのデータだけ採ってきて欲しいんや。」

「……………つまり言いたいことは？」

「テレスティーナの所に潜入してでもデータ採ってきて？あつこガード堅くてハッキングすんの面倒やねん。可愛い妹の頼みやと思うて行ってきてえな」

彌子がやんわりとした笑顔で俺を上目遣いに見てくる。OH……………、クラっときたぜ。外見恋姫の馬超に似ている彌子は関西弁と親しみ易さのギャップで愛らしくなってしまう。意志のあるキリツとした顔でありながら、いつもニコニコ、ニコニコ快活明朗に笑っているのは正直俺の精神衛生上宜しくない。そのまま唇奪ってベッドインしてしまいそうになる。

「ああん！とがっちゃったら、うち、何時でもばっちこいなんよ！！」

「本気じゃないのに言うんじゃない。俺は男として嬉しいが、お前の事も思っているんだぜ？」

「……………冗談じゃないんやけどな。」

何か彌子がぼそぼそ呟いた後、顔を赤くして「やんっ！！」なんて嬌声をあげたり、小夜がその光景をみて頬を膨れさせていたけど、気にしな〜い。

「まあ、多分風紀委員でその事件に関する事を捜査するはずだからそんな時にはくっつけてきてやるよ。」

「ありがと〜な。うちとがっちの事大好きや！！」

「はいはい、俺も好きだよ。」

「なんか投げ遣りやなあ。まあ納得いけへんけど、頼むな？」

俺が風紀委員の腕章を見せながらニヤリと笑うと、彌子が俺の腕に抱きつきながら腕に頬摺りをする。

「まあ、今はお待ちになっているお客さまのが先だけだな。」

俺は屋敷を目指して歩を進めた。

## 宝石への第一歩（前書き）

やべえ……………、くそ短い……………。

こんなの投稿出来たものじゃないけど閑話みたいなモノに思っ  
ててください。

因みに今回でブレイン編は終了です。

……………何で前回は終了出来なかったんだろっ。

## 寶石への第一歩

「さて、何か馬鹿共が邪魔した所為で有耶無耶になっちまったが、話の続きをしようか。」

あの後俺は邸の地下三階で事の顛末を見ていた雲川先輩と貝積をリビングに再度呼び出していた。貝積と雲川先輩は何か事情を知っているらしい思案顔をしているが、貝積は学園都市統括理事会の一人。あの馬鹿の話一度耳にしていた可能性がある。まあ、それは俺に頼みごとをしに来た時点でさして問題のある事象にはなっていないけど。

「ああ、有り難う。それと同じ学園都市統括理事会の一員として彼の行いが軽率であった事を詫びたい。済まない。」

俺の目の前の老人は、俺の言葉に何処か刺が有ると感じたのか、頭を下げて謝罪してくる。

「いや、別にアンタの所為じゃねーからアンタが謝罪するのは筋違いだ。現に俺はこの件について満足してるぜ？合法に殺人出来たし、警備ロボの性能もチェック出来た。俺としてはこの結果は万々歳だ。」

「そうかね。しかし奴も愚かな事をしたものだ。わざわざ虎の住まう巢に己から踏み入れたのだからな。そしてそこにいたのは虎どころではなく鬼であったわけだ。」

「はっ！！巧い事言うじゃねーかじいさん。その包み隠さない物言いには共感を憶えるぜ。まあでも、虎穴に入らずんば虎兇を得ずっ

て言う諺もあるんだ。あの馬鹿にも為すべきことのためにもやらねばならない事があったのさ。俺は興味もねーけど。」

俺は言葉の通り、馬鹿にはさして興味はなかった。関心も嫌悪も感じなかった。

「私にはそうは見えなかったがな。奴には大義も理念も思想もなかったように見える。君のことをただの踏み台としか思っていないかったさ。」

「ふうん、そう聞くとウザく思えるな。殺しておくか。」

横にいた奈美が貝積と俺の会話を聞いて、嬉々としてナイフを取出し、家を飛び出そうとしたのを防ぎながら再度淹れなおした紅茶を飲む。

「私たちとしてはあまり殺されてしまうと政務に支障がでるから止めてほしいんだが。」

「いや、これは決定事項だ。覆りはしない。」

「……………そうかね。」

貝積はこの話を切るつもりなのか素っ気なく返事を返して、ドツとソファーに座り込む。その後、雲川先輩にアイコンタクトして話を促す。雲川先輩はそれに応えて立ち上がる。

「先ずは私たちの命を助けていただきありがとうございます。地下で見ていたけど、素晴らしい戦力ね。」

「いや、礼には及ばねーよ。ロボットの称賛は彌子に言っただけ。造ったのは彌子だからな。」

「奇代の科学者、兵器の申し子と呼ばれる散袋火彌子ね。そんなビッグネームがいるなど、貴方の力量が計り知れないわ。」

雲川先輩はそのまま恭しく一礼した後、ソファに座る。その顔は俺にたいして言葉を考えている感じだった。

「そんな本心じゃねー称賛は余り嬉しくねーな。」

「……………あくまでも先程のは貴方のご機嫌とりではなく、間違いなく本心なんです。私ら然らぬ緊張をしているみたいね。」

「はあ、そうか。」

俺を見ながら紅茶を飲む雲川先輩。絵になって、似合っている。

「ええ、そうよ。」

それじゃあ、話をさせて頂きます。」

雲川先輩はティーカップを置いた後に俺を見つめながら口を開く。

「私たちはある計画の元動いています。それが先ほど話していた原石の子達、こちらで言うところの少し才能のある子達を保護し、その才能を研究し、子供達に安全に暮らしてもらおうと言うものです。」

「はあ、成る程な。土御門が善人と言うわけだ。」

俺は雲川先輩の言葉を聞いて喉がなる。うん、凄く傲慢だな。まあ



好感はもてるけど。

「それで？俺にその話をしてなにがあるんだい？」

「貴方も薄々感付いているでしょうに。」

「くつくつくつ……………、まあ気付いてないといったら嘘になるが、  
アンタ自身が言わねーと意味ねーんじゃねーの？」

雲川先輩は姿勢を正して、俺を見る。

「ええ、そうね。なら言わせてもらっけど……………、  
貴方の力と、散袋火彌子の頭脳を貸してほしいわ、私たちの計画に。」

「……………。」

俺は雲川先輩の真剣な顔と目を見て、何故だか変な気分になった。  
と言うより、何か俺らしくない感情、あの時理后と最愛に感じた気  
持ちに似たもの。愛すると言うよりも偽善に似た感情。

「（正義……………、俺の正義は一の大切なものの為に九を殺す悪とも言  
える所業。それはそれは愚かで歪んだ感情。俺が唯一自分らしいと  
言える物。俺を形成する物質。うん……………、それに原石を入れる  
のも……………」

悪くない。」

「どうしたの？」

「いやなに……………」

ああ、俺の解答は決まった。即断即決速攻が俺の信念。ぐだぐた悩むのは俺らしくない。  
雲川先輩の目を見る、見やる。

「原石を磨いて綺麗な宝石にしたいと思ってね。」

「それって……………」

ああ、俺は……………」

「アンタらに協力してやろう。それが運命ならな。人の運命を造るのも悪くない。」

新たな楽しみを得た気がした。

## 設定資料集（前書き）

今回は作者が設定を忘れないようにと思い、書いた資料集です。話は進みませんが、飛ばして頂いてもよいです。設定は作者が情弱なせいで薄い内容となっています

## 設定資料集

### オリジナル兵器紹介

#### オートマトン

- ・全長：五メートル
- ・質量：二百キログラム
- ・武装：ガトリング砲、グレネードランチャー、スタングレネード
- ・説明

・ガンダム00セカンドシーズンにてアロウズの殲滅、制圧、虐殺用に登場した無人兵器。オリジナルのものを戸隠風に改造した。二メートル程の六角柱のチタン製の本体に四本の蜘蛛の足を模したボディ同様チタン製の足を持つ。エネルギーは本体に積んだバッテリーに本体の上底に搭載したソーラーパネルにより発電した電気。バッテリーの性能は3ヶ月行動できる程度。

・頭脳に当たるOSやAIは最低限の物を積んでいるだけで指令や行動の取捨選択等の思考などは全て近衛邸のミーミルから秘匿回線で電波により送られてくる。因みに電波の届く範囲が近衛邸の敷地内だけなのでそれを越える行動を起こすことは滅多にない。

・AI等の嵩張るモノを全てミーミルに委任したお陰で、余分なものが少なくなり、只でさえ硬かった装甲が更に硬くなった。

・指令などの電波が妨害されたり電波が届かない位置にいった場合

はその座標をミームに知らせて全てのデータを抹消後、自爆して粉々になる。

・移動方法は脚による四足歩行か、脚のなかに内蔵された車輪を出すことによる高速走行の二種類。高速走行の際、バッテリーの消費が激しく、戦闘しながらだと正味三日程しか持たない。時速百五十キロで移動し、銃弾を避けながら縦横無尽に移動しまわる。

・オートマトンは本体の前方にあるカメラによって、人のみを認識し人のみ攻撃する。認識方法はサーモグラフィ、赤外線等から、人のみが発する電波や赤外線を感知する方法等。因みに近衛一家のデータは登録されているのでそれを攻撃する事はない。

・武装はガトリング砲一門にグレネードランチャー、スタングレネード。搭載量はガトリングの弾が一万発、グレネードが二十、スタングレネードが二十。搭載場所はガトリングが本体と脚の結合部分、グレネード、スタングレネードは一つの脚にザクのように四個ずつ、計八個付けられている。

### 試作オートマトン

- ・全長…二メートル
- ・質量…百キログラム
- ・武装…なし
- ・説明

彌子がオートマトンを理解するために造った試作品。武装は無く、学園都市の警備ロボを流用しただけのもの。戦力的にカウント出来ないくらい低スペック。

## メタルイーター搭載オートマトン

- ・全長：六・五メートル
  - ・質量：三百キログラム
  - ・武装：メタルイーター、グレネードランチャー
- ・説明

・基本のスペックはオートマトンと変わらない。しかしメタルイーターを打つ際の特異な体術を模すためには電波による指令では細かな指示をコマ単位で送れないため、そのデータとAIを積んだため、オートマトンより装甲が若干薄い。更にメタルイーターの反動に耐えるためオートマトンより少し大きい。

・メタルイーターを打つ際は姿勢を低くして、本体の中に内蔵されている支柱を地面に刺すことにより反動に耐える。

・狙撃など遠距離攻撃をするためモノアイカメラの性能はオートマトンより高く、射程距離は四キロメートル。

・武装はメタルイーターとグレネードランチャー。メタルイーターは戸隠の扱つものより二回り大きく人間が使うと軽く上半身が吹き飛ぶ。口径は七十五ミリ。搭載量は三千発。

## 磁力射出砲搭載オートマトン

- ・全長：四メートル
- ・質量：二百キログラム
- ・武装：磁力射出砲、グレネードランチャー

・説明

・基本のスペックはオートマトンと変わらない。メタルイーターと違い、砂皿緻密が使った磁力射出砲同様火薬を使わないでスチールの弾を飛ばすもので、反動が無いため、質量がなくても良いためオートマトンより一回り小さい。しかし、磁力射出砲は基本狙撃用なため正確な狙いをつけるためAIが高性能である必要があり、メタルイーター搭載オートマトン同様、必要なものは本体に積んでいる為装甲が若干薄い。

・磁力射出砲は砂皿が使っていたものより二回り大きいため、電力の消費が激しいため、2ヶ月程しか実質行動出来ない。

・狙撃用のオートマトンの為、カメラの性能はオートマトンより格段に高く、更に暗視カメラも搭載している。射程距離は七キロメートル。

・武装は磁力射出砲、グレネードランチャー。磁力射出砲の総弾数は二千発。

### 偵察局地専用オートマトン

・説明

まだ本編に出て来ていないため評細は不明。武装は催涙弾、スタングレネード、催涙ガス、毒ガス、火炎放射器と基地制圧、敵の拠点

制圧時の防衛の苦肉の策を目的とした機体。数は少ない。

## バグ

- ・ 全長：八十センチ
- ・ 質量：五十キログラム
- ・ 武装：チェーンソー

## ・ 説明

- ・ ガンダムF91のラフレシアの武装として登場した無人兵器。戸隠はこれをそのまま彌子に造らせた。
- ・ 無重力下ではなく重力下での運営のため、円盤の側面にブースターが四機ずつついている。案外ファンネルやファンングに似ているかもしれない。
- ・ ブースターの関係から三時間しか動けなかったり、人を襲うしか指令を出さないコンピュータを積んでいるため、装甲が弱く、大抵の攻撃で大破する。
- ・ 武装はチェーンソーのみ。ぐるりと円周を囲むように取り付けられたチェーンソーは人を感知すると廻りだし、人の胴体目がけて跳んでいき、真つ二つに引き裂く。彌子も余りの非道、外道な機体コンセプトにしかめ面をした。

## 蜘蛛型補給ロボ《スパイダー》



- ・ 全長：十メートル
- ・ 質量：五百キロ
- ・ 武装：刺突用迎撃ブレード、七ミリバルカン、小型ミサイル、対空ミサイル

・ 説明

・ 蜘蛛を模した補給口ボ。半円の弧を逆さまにした胴体に八本の先の尖った脚を持つ無人兵器。頭の部分は無く、胴体のソナーで辺りを確認しながら動く。カーボンセラミック製。

・ 補給用と銘打っているだけあって、巨大なフォームでオートマトンへの補給用のバッテリーや武装を積むだけで、重量は1トンを余裕で越える。胴体は無垢ではなく、空洞になっており補給用の弾薬やバッテリーを積めるようになっていて、自分の下にオートマトンを誘導して下に向いている弧の部分からチューブとケーブルを伸ばしてオートマトン等のロボットに接続して補給する。

・ 武装は刺突用迎撃ブレード、七ミリバルカン、小型ミサイル、対空ミサイル。ブレードは脚の部分の尖った部分から出して、足元にいる敵性の物体を質量に任せて刺す。七ミリバルカンは牽制程度に放つためのもの。総弾数は六十発。小型ミサイルは全長八十センチ程度の物で、爆風で敵を吹き飛ばす。威力は其処までない。総弾数は二発。対空ミサイルはそのまんま。自動追尾でエンジンがきれるまで追い掛け続ける。総弾数は一発。

## 盛夏祭1（前書き）

今回は閑話として超電磁砲の盛夏祭を執筆してみました。  
それではどうぞ。

## 盛夏祭 1

「ああ？盛夏祭？」

「そつ、私たちが通っている学校、常盤台中学のオープンキャンパスの様なものかしら。それが今度の8月6日にあるのよ。」

「随分先なことって……。それで俺に何かあるのか？」

「実は初春さんと佐天さんをそれに誘っていてね。アンタも一人のけ者は可哀相だから誘おうと思ったの。」

あれは8月1日の時のこと。学園都市統括理事会の一員の襲撃に備えてオートマトンのプログラムを組んでいるときに事は起こった。午前9時頃にコミュニケに着信があった。相手は御坂。何かかと思っていたら、どうやら常盤台中学のオープンキャンパスに誘ってくれるらしい。そんなイベントあったか？と思い、記憶を手繰っていくと、すぐに思い出した。御坂がバイオリンを弾く奴だと。しかしあれは黒子が勝手に二人を誘ったものじゃなかったか？まあいいか。

「ほう。随分高慢な物言いだが……………、行って俺に特はあるのか？」

俺は御坂の、お前は必ず来るだろうという言葉外の物言いに疑問を持ったが、何か有るのか？

「美味しい珈琲が飲み放題だわ。しかも無料。高級な珈琲ばかりよ？」

「乗った！！！行くぜ！！！」

これは乗らねばなるまい。まさか御坂の口からこのような甘美な言葉が出るとは思わなかった。俺は無類の珈琲好きなのだ。思わぬ伏兵だぜ。

.....

そして8月6日。俺は和解した初春、佐天と共に第七学区常盤台中学の外部女子寮の正門にいた。正直昨日の戦闘が結構身体に来ていたんだが珈琲とは背に腹は変えられない。

「ふわ〜……。相変わらず大きいですねえ。」

「本当におつきいよねえ、この女子寮。」

「.....早く珈琲が飲みてーな。」

俺は横で常盤台中学の外部女子寮を見て感想を零している横で、御坂から送られてきた招待状を角を斜めに押さえてくるくと回す。

「情緒に溢れないねえ、近衛は。」

「おいおい、この科学の街に西洋の建造物が建っていることの何処が情緒溢れてんだよ。第一教会がねーじゃねーか。」

俺の右隣で、呆れ顔をしている佐天の頭を小突く。

「いったあー……！乙女の頭を突くとは何事かあ！！」

「人のスカートを嬉しそうにバンバン脱がす奴を乙女とは言わねーよ。そういうのは変態オヤジって言うんだ。佐天・変態・涙子。」

「なんだその、“変態”っていうミドルネームは！！」

「てめえを表す最適な単語じゃねーか。」

隣で佐天がわきやわきやと喚いているが無視。いちいち反応なんてしてられねー。

「まだかよ黒子は……。」

「遅いですよねえ……。」

「……………お前は存外暇そうではないよな。」

俺は招待状をくるくると回しながら壁に背を預ける。佐天とは逆側にいる初春は携帯端末でなにやらしているようだ。

「いやあ……最近“書庫”<sup>バンク</sup>に不当アクセスつまりハッキングしてくる輩がいるんですよえ。毎回毎回手口が変わってくるから楽しい

んですけど、近頃ハッキングの頻度が増えてて……………」

「……………まあ、ご苦勞なこつて。」

「うーん、そんなご苦勞な事じゃ無いんですけどね？」

「ふうん。」

俺はあくまでも平然を装いながら初春から目を外す。恐らくハッキングをしている輩は御坂だろう。一方通行の実験に関することと妹達の事についてだろうと、予想をつけている。

「お待たせしましたわ。」

「やっと来たか、黒子。」

「ええ、一寸込み入った用件が有りまして……………」

「ふうん……………。その腕章とカメラを見るかぎり広報部かなんかの仕事か？」

「ええ、そうですよ。」

やってきた黒子は何時もの常盤台中学の制服を着ていたが、腕章は風紀委員のものではなく、広報部とでかどかど書かれた物をつけ、首からは一眼レフを吊り下げている。

「大方、御坂の写真ばかり取ってたんだろ？」

「何故わかりましたの!？」

「てめえ見てーな変態野郎の思考回路なんざすぐに把握できるっつうの。」

俺は戦々恐々として劇画タッチの顔になっている黒子の首から一眼レフをひったくる。

「ぐえ!！」

なんか女子の口からは出てはならない言葉が出た気がするが、俺は変態にかける情熱は一縷も持ち合わせていない。

「うわー………………。御坂さんの写真ばかりだあー………………。」

「げっ…………!下着姿の写真まであるし………………。これ盗撮じゃないの?」

「変態ここに極りだな。」

俺が一眼レフを操作して今まで黒子が撮影してきたと思われるデータを閲覧する。するとでるわ出るわ、盗撮まがいの写真が。何処のお嬢様だ、と思わせる服を着て顔を赤らめている御坂の写真は成程、広報の表紙を飾れるだろうという、普段からは感じられない清楚さ、可憐さを漂わせているが、後の写真が問題だった。下着姿で何か悶えている所や、スカートの中………………生憎短パンを履いていたが……………、や、裸に近い写真など、グラビアでもしてるのかと思わせる写真ばかりだ。ある意味これも売れるだろうが如何せん貧乳である。俺的に無いな。

「わたくしは断じて変態などという下等な生物ではありませんわ！  
！変態という名の紳士ですわー！」

「自分で変態って言ってるし……………」

「てか、お前女だろ？紳士つつつか淑女じゃね？まあお前が淑女と  
か、『ぷっ！！ワロスワロスwww』って感じだけだな。」

「しかし、これ犯罪ですよねえ。風紀委員なのに。」

「ちよつと！あなた…た…ち…。」

俺たちの悪口にビキリッ、と青筋をたてる黒子。黒子が文句を言おうとしたときに黒子は口籠もる。ああ、来ちまった。

「あら、初春さんに佐天さんに近衛、いらっしやい。来てくれたんだ。」

俺たちの目の前、黒子の後ろに件の写真の被害者である御坂が女子寮のほうからやってきた。黒子からは冷や汗が大量に出ており、角度的には御坂に見えていないが、俺らは失笑をしている。俺はニヤニヤ笑っているが。

「い、こんにちは……………」

「お、お邪魔してます……………」

「よう御坂。珈琲飲みに来たぜ。」

「近衛は相変わらずねえ。」



御坂は何も知らずに黒子の横に立ち、ニコニコと笑いながらも何処か不安そうな笑顔で俺たちを迎える。どうやらバイオリン演奏は緊張しているらしい。

「あれ？その一眼レフって黒子のじゃなかった？なんで近衛が持っているの？」

御坂が俺が持っている一眼レフに気が付いた。というか気付くように挨拶の時手をあげるさいに一眼レフが御坂の目に入るように掲げたんだがな。

「いやなに、黒子がいい写真があるからと見せてくれていたんだ。」

「へえー、私にも見せてよ。」

「ちょ………！お姉さま………！！」

俺が御坂にニヤニヤと笑いながら返答すると御坂は興味津々に一眼レフを覗こうとする。黒子は必死そうだが。

「へえー、よく撮れてる……じゃ……ない………。」

黒子が必死に止めようとするのも虚しく、その手は宙をきり、御坂は俺のもとにまで到達し、一眼レフのデータに目を通してしまった。

「お、お姉さま………！！」

黒子が怯えながら御坂を伺う。件の御坂は額からバリバリと電撃を発している。

「……………黒子……………」

「は、はい……！」

「これ、どじいこと？」

御坂が黒子に示した写真は御坂がほぼ全裸のままの後ろ姿が写っている写真。黒子の方に向けた時の顔は非常に恐ろしかった。

「そ、それはその……………！」

「黒子……………」

「は、はい……！」

黒子が返事するとともに御坂の額からさらに大きな電撃が走る。正直常人が食らえば昏倒ものの。そして、

「アンタは……………、なんて写真を撮ってんだこの変態があああああああ……！」

「にぎや ああああああああああ……！！！！！！……………  
……ああ、いい……………」

御坂の電撃が炸裂した。電撃は一度天に上った後、垂直に黒子に落ちる。黒子は全身に電撃が走っているらしく、身体中からぱりぱり

と電気を放電している。顔は赤らみ、口をだらしなく開けて涎を垂らして、目を上目に涙ぐませている状態で、時折喘ぎ声が聞こえてくるのは余りにもエロかった。エロいったらエロい。

「……………変態。」

俺はそういつて顔を顰めた。

……………

「ふああ〜……………、やっと終わったか。」

「やっとつて言うか、まだ十分しかたっていないわよ?」

「十分は長いぞ?意外に。」

「あっそ。」

あれから十分ほどたって漸く事態が終息した。結局御坂が広報に使えそうな写真以外を消して黒子に返すという形で、写真を消すさいに裸の写真を見たと言うことで一悶着あったが割愛しよう。

さてあれから俺たちは正門から常盤台中学外部女子寮へと入場した。招待状を持つものしか入れないらしく、受付けにそれを提示するとパンフレットが貰えた。

「無駄に凝ってるな。なんだよ飴細工展って。胸焼け起こしそつだ。」

「はわー……………」

「へえ、絵画展かあ。行ってみようかな？」

女子寮に入るなり、思い思いに行動する俺たち。佐天は絵画が気になるらしく、初春は憧れのお嬢様学校の女子寮に入れて、嬉しさでトリップしている。

「あはは……………、やっぱり近衛は近衛らしいわ。」

「本心を言っただけだ。」

御坂は俺の隣でパンフレットを覗きながら苦笑いで言う。

「佐天さん！！ここからここまで回らましよう！！！！」

「いや、全部じゃん！！！！」

「ここには其れだけの価値があります！！プライスレスです！！」

「いや、意味分かんないし。」

向こうは向こうで盛り上がっているらしく初春がパンフ片手に乱舞

している。おい、やめる柵川の恥だ。

「あはは……………、あの二人も相変わらずねえ。」

そんな二人の様子を見て苦笑いしている御坂の目の奥はやはり不安に染まっていた。

「まあ、な。そういうお前はなんか不安そうじゃねーか。」

「えっ！？……………そ、そんな事ないわよ！！」

「吃ってるし。」

「うう……………。」

俺の指摘に驚いた顔をして、反論してくるが、如何せん吃っているせいか覇気がない。いつもの御坂では無く見える。多分妹達の事も関係あるのだろう。

「まあ、お前がなにで悩んでいるかは分かんねえ。」

「アンタでも分からないことがあるのね。」

「人間だからな。」

俺はそういいながら笑い、御坂の頭に手を乗せる。

「ちよっ……………！！」

御坂が顔を赤くしているが俺は構わずそのまま御坂の頭を撫でる。

御坂は反論しない辺り嫌がっているわけではないらしい。

ああ、こんなの俺のキャラじゃねえ。だが守りたい人間に対しては俺は甘くなるらしい。御坂もその一員なわけだ。

「だけど、てめえがなにで悩んでいるかはわからんが、一緒に悩んで考えて反論して言い合いして慰めあつて笑いあつて悲しみあつて慈し見合つて罵りあつて悩みを解決できる。」

「……………」

「だから俺を頼れ。後輩を、友達を頼れ。てめえの力で乗り越えられないと感じたら外聞なんか関係なく頼れ。俺はそれを笑ったりしねえ。」

「……………っ……………!!」

「それが……………友達だろ？親友だろ？」

ああ、俺も甘いな。如何せん昨日家族の大切さを知ったからな。その影響かも知れない。

「……………うん、有り難う。」

「礼はいらねーよ。」

顔を赤らめながら下を向く御坂の頭をぼんぼんと叩きながら笑う。御坂もそれにつられて笑った。

「それじゃ、俺は珈琲でも飲みに行こうかな。お前も来るか？」

「ああ……、私はここでパンフレット配布を手伝わないと行けないんだ。」

「ふうん、大変なことって。」

「……それと黒子。お前って諦めねーよな。」

「ちよっ………！戸隠！！」

俺が御坂を労うと同時に御坂の背後に黒子が出現。瞬間移動のせいか黒子が自分のスカートの中を見られているとは知らない御坂は俺の言葉に、キッ！、と後ろを見る。

「………黒子。アンタまだ懲りてなかったの………？」

「めめめ、滅相もございません！！」

「あれ？白井さんまた何かしたんですか？」

「懲りないですよね白井さんも。」

御坂に睨まれて恐縮しながら土下座をする黒子の背後から興奮でトリップしていた初春と苦笑いを浮かべた佐天が合流した。一応言っておくがここはまだ寮内のエントランスホールである。もちろん人の通りが多いこの場で土下座とはある意味感服してしまうが、いない視線を集めてしまうのは如何なものか。

「さてさて、黒子を嵌める事が出来たし、俺は珈琲でも飲みにいこうかな。」

「ねえねえ、近衛。これ見に行こうよ！！」

「ちよつ……………、俺は珈琲飲みに行くんだって。」

「そんなの後でで良いじゃん。」

「よかねーよ。」

土下座している黒子を尻目に、パンフレットを見て二階にあると思われる喫茶店へ足を運ぼうとしたとき、佐天に腕を捕まれる。

「あれ？これ御坂さんですよね？」

「あつ、本当だ。」

渋々と珈琲を飲みに行くのを後にして、エントランスホールの脇に五人で固まると初春がパンフの一角を指差してビックリする。佐天もそれを見て素っ頓狂な声を上げる。

「これが、お前が不安がっていた一因は。」

「うん、そうなんだけど。さっきので吹き飛んじゃった。」

「お前らしくて良いけどな。」

それは御坂のバイオリンのソロ公演。御坂は当麻が来ることと緊張で不安がっていたらしいが、それも消え失せたとの事。まあ、良かったんじゃないか？

「動かないゲソはただのゲソでゲソ。」



「……………何言ってるの？」

「て言うかゲソはゲソですよ。」

「近衛ってたまに変だよ。」

ちよつと口走っただけなのにこの言われよう。俺なんかした？……………  
……………心当たりが最強に沢山ありますね、ありがとございます。

「まあ、それは置いといてだ。これからどうするかが問題なんだよな。」

「そうね。まあ私は専らパンフ配りなんだけど。」

「私はここから此処まで回りたいです！！」

「だからそれ全部じゃん。」

「わたくしはお姉様の御雄姿をこのカメラで……………」  
「そうはいかないんだぞー、白井ー。」……………「げっ……………」。

俺が声をかけるとやはり初春は何処か興奮げにパンフレットを掲げて見せて、佐天はそれに苦笑い、御坂は呆れながら手に持つパンフをびらびらと上下に動かす。黒子はカメラを両手で持って怪しげな笑みを浮かべる。こいつの場合どんな写真を撮ってくるか分かったもんじゃない。まあその企みは後ろから来た第三者によって潰えたわけだが。

「げっ、とはなんだ白井ー。厨房を手伝う約束だろー。」

「そ、それは……………」

その第三者とは、萌を追求したメイド服ではなき本格的な実用性が伴ったメイド服をきた女学生、早い話、土御門舞夏である。

「約束は守れよ白井。」

「よう久しぶりだな舞夏。」

「おー、戸隠じゃないか。」

実は俺と舞夏は知り合いである。まあ土御門と仕事をしていたらいつか会うのが必然なんだがそんな前置きは置いておこう。

「あの時の飯は旨かったぞ？ありがとよ。」

「いやー、そう言われると作った甲斐があったってもんだなー。」

舞夏と知り合ったのはある日の夕方。土御門と暗部の仕事を終えた後、家に帰る途中、スーパーの袋を持った舞夏とばったり出くわしたのだ。どうやら土御門に飯を作りに行くところだったらしく、原作でも結構気に入っていたキャラだったのでそのスーパーの袋を土御門の寮まで代わりに持って行ってやったわけだ。舞夏は遠慮がちになんか反論していたが、俺が諭してやると顔を赤くして俯いていた。なんて言ったのか、確か、「可愛い女の子が重い荷物を持っているのにほっておけるかよ」だったかな？土御門は俺のキャラの変わりように吹き出したと同時に殺気を俺にぶつけていた。笑いながら怒るとは器用な奴だ。

まあ、なんやかんやあって舞夏にお礼にと晩飯に誘われて、舞夏だけに飯を作らせるのはあれだったから一緒にキッチンに立って飯を

作った。終始舞夏は顔が赤かったが大丈夫だったのだろうか。

「あの、白井さんと近衛さんのお知り合いですか？」

二人でひとしきり笑っていると後ろから声がかかる。初春が俺と舞夏の関係を知っているらしい。黒子は説明する気は無いらしいので俺がするらしい。まあ良いだろう。

「こいつは土御門舞夏。繚乱家政女学校に通う優秀なメイド候補生だ。俺との関係はこいつの兄貴と友達でな、友人みたいなものだ。」

「そして今回の盛夏祭の厨房を一手に引き受けてくれている方ですわ。」

俺と黒子が紹介すると舞夏は恭しく前に出て姿勢を正す。

「紹介に預かった土御門舞夏だ。宜しく頼むぞー。厨房で料理作っているから良かったら食べに来てくれー。」

舞夏が自己紹介すると三人から感嘆の声が上がる。

「へえー、繚乱家政女学校か。凄いね。」

「あのメイドさんの学校ですよ。凄いなあ。」

「実地演習に来てるって事は優秀なメイドさんなんだ。凄いわね。」

その口々から漏れるのは感嘆と驚嘆の声。舞夏も顔を赤くして少し恥ずかしそうだ。うん、可愛い。

「そう褒められると少し照れるなー。まあこれからも宜しく頼むよー?」

舞夏はそう言った後黒子の方を見る。黒子は逃げようとするが舞夏に首根っこを捕まれて阻止される。

「さて白井ー。逃げようなんて思うなよー?仕事が切羽詰まってんだからなー。」

「い、いや……………!!お姉様との甘い学園ライフが……………!!」

「そんな世迷い言は戯れ言に過ぎないからなー。言ってる暇があるなら仕事してもらっぞー。」

「い、いやあああああ……………!!!!」

そのまま舞夏は黒子の首根っこをつかんだまま引き摺って厨房に向かっていく。

「あ、そうだ。」

しかし廊下の半ばまで歩いていくと舞夏は何かを思い出したかのようになり立ち止まり、此方を見る。その顔は何処か恥ずかしそうだった。

「あ、あのな。いい豆を仕入れたんだ。良かったら飲みに来てくれよなー。」

そして、そのまま足早に厨房の方へと向かっていった。

「へえ、舞夏さんも物好きだね。」

「そうですか？私は結構良いと思いますけど。」

「……………」

後ろでは佐天と初春が何か騒いでいた。御坂は何か不機嫌そうな、思案顔で俯いていた。なんだなんだ？

「おい、御坂。何ボーツとしてんだ？」

「へっ?!……………あ、あ…なんでもないわよ!!!私も仕事あるから行つてくるわ!!!」

俺が御坂の顔の近くで手を振ると、御坂はビックリしたように飛び跳ねた後、怒気を含ませた顔でずんずんと、自分の持ち場に向かっていく。周りの人はその只者ではない雰囲気、道を開けている。

「近衛も罪な男だよね。」

「近衛さん、ちゃんと二人の所に行くんですよ？これは決定事項です。」

初春と佐天は何処か面白そうに笑つと俺の肩を叩いて、自分達の行きたいところへと行ってしまった。

「ホントになんだよ……………」

俺は暫しそこで立ち尽くしてしまった。

## 盛夏祭2（前書き）

こんにちは戯言です

久しぶりの投稿。テストが近いのでまた一週間近く次の回までの期間がのびると思います。ですがなるべく早くに投稿したいと思います。

今回は戸隠がデレる回です。………しかし盛夏祭編はいつになったら終わるのかな？

## 盛夏祭 2

さて俺は現在、常盤台中学外部女子寮の中庭らしきところにいる。どうやらオークションが開始されるらしい。

「さあて、どんなものが出品されているのやら。」

俺の目線の先にはオークション会場があり、辺りには百人程だろうか人がほうほうといる。………ほうほうとってこんな時に使う言葉だっけ？まあいいや。

「さあ、始まりました常盤台中学開催オークション！！今年も沢山の商品が出品されています！！」

おお、と辺りから声上がる。存外ノリノリのようだ。

「さあて先ず最初は派手に行きましょう。婚后さんから出展された物でシャネルのバッグで！！五千円から！！」

「安っ！！！！？」

ビックリした。ビックリしたあまり大声を出してしまった。シャネルが五千円だと？あのバッグ香奈が買っていたが五十万はしていたぞ…………。

「五万円！！」

「はい、五万円！！落札！！！！」

カンカンー！

「やったー！！」

色々と考えているうちに一品目のシャネルのバッグは五万円で落札されたらしい。……………てか落札した人の声、どっかで聞いたことが有るんだが、はて？

「んふふー、最初からこれ…………。幸先良いわ。」

……………シャネルのバッグを買ったらしい人間が怪しい笑い声を上げながら俺がいるところまで近づく。てかさっきの声を聞いて誰だか予想が付いた。向こうは気付いてなさ気なので驚かしてやろう。

「……………なにしてんすか、固法先輩。」

「ひゃっー！！…こ、近衛くん！？何でここに！？」

「いや、こっちの台詞っすよそれは。」

目を見開き、眼鏡をずり落として尻餅をつきそうな固法先輩の腰に手を回して支える。うん、ラブコメっぽい。かたや片思いの彼がいるけど。

「ちょ、ちょちょちょちょ一才ー！！これってどういう状況！？」

「いや、中学生相手に吃りすぎ、というかキョ下りすぎでしょっよ。」

「



「あ、あばばばば……。」

固法先輩が壊れた。まあ俺は合法的に固法先輩の胸を堪能できたから役得では有るんだが、ちょっと、いや大分怖い。

「はあー、なんか今日だけで俺のキャラが崩れ去っている気がする。それも悪くないけど。」

実際殺戮大好きなスタンスは日常茶飯事で内包しているけど、さすがにこの人らを相手にしているときは表には出さない、というよりは出せない。今でも人を殺して凌辱したい気分で一杯だが如何せんこんなところで人を殺しては色々和不味い。てか俺は人識くんと同様、零崎な行動はあまり必要なかったりするし。

「……………それで、固法先輩大丈夫すか？」

「え、ええ……、何とかね。」

固法先輩の腰から手を離してしつかりと立たせる。ふらふらしてて危ねーな。大丈夫か？

「それで、固法先輩は何故ここに？」

「ああ、あのね。ここでブランド品のオークションをしててね。毎年来てるのよ。今回は婚后さんからお誘いね。」

「成る程、固法先輩も女の子ですもんね。昔々バイクでかつ飛ばしていた頃もあったけど……………」  
「ちょっとまって!？」……………なんすか？」

「なんで私の過去を知ってるの？」

固法先輩、顔を赤くしちゃって可愛いね。何？照れてるの？リア充爆死しろ。

「いやあ、色々と有りましてね。教える事は出来ないね。」

「そう……。ならあれは知ってる？」

「あれ？……ああ、廃墟の屋上の手摺りに相合傘書いたことですかい？」

「………なんでそんな事まで知ってるのよ。………あなたあの日居なかつたじゃない……。」

「それは俺だから、的なの？」

片目を瞑りおどけて見せると固法先輩は深く、本当に深くため息をついた。

「何か気に入らない事でも？」

「貴方の規格外さというか、あまりのうざさというか、それに呆れてるのよ。」

「開口一番批判ですかい。そんなにディスられる覚えはないんだけどなあ。」

「……………はあ。」

固法先輩はもう一度ため息をついて、俺の方を見る。

「あれを買って。」

「はあ？」

何を言いだすかと思っただら固法先輩は右手人差し指をオークション会場、正確にはオークションの品が書かれている表を指差す。

「私の過去を知ったんだから、あれを買いなさい。当然よ？人の知られたくない過去は勝手に詮索はしてはいけない、子供の時に習わなかった？」

「……………」

うん、初めてこんなこと言われたかも知れない。今まで出会ってきた奴、まあ土御門とかアレイスターとかローラとかは秘密をべらべら喋っても特に何も言わなかった。うん、調子に乗っていたのかも知れない。子供っぽい俺が怒られたことが生まれてこの方無いらな。その際に物を強請るとは現金な奴だとは思って非常に心地がいいな。

「しゃーなーな、買ってやるよ。ていうか元々友達として買うつもりだったんだよ。光栄なんだぜ？立場的には学生で俺に勝てる奴は居ねーからな。それに友達と認められるのは。」

「有り難く思っておくわ。」

「……………棒読みで言われてもなあ。」

固法先輩は特に気にした様子も無く向こうを、オークション会場を見る。目が輝いているのはご愛嬌。オークション会場に目を向けると、日本人形やらのオークションが終了して次の品物に移るところだった。

「さあさあ、次の品はこれ!!! ロレックスの時計!!! これも婚後さんから出展された物です!!! 元値は三十万近いですが、五万円から行きましょう!!!」

……果たして俺は目を疑った。ロレックス? 何でそんなもんが只の一介の中学校のオープンスクールのオークションに出展されてる訳? ……ああ、この学校(常盤台)は普通じゃなかったな。お嬢様学校だし当たり前か。

「あれが欲しいんすか?」

「うん、そうね。」

目が輝いて涎を垂らしている普段の様子とは掛け離れた固法先輩を目に入れないで言う。固法先輩の身体が何だか上気して顔が赤いせいか凄くエロいのだ。襲ってしまいそうな程に。

「……………何だか不穏な空気を感じたわ。」

「気のせいじゃないすか?」

うん、きっと気のせいさ。

「そうかしら。」

固法先輩、しつこいというか疑り深いというか。まあ、厄介だね。

「今はそんなこと気にしている場合じゃないんだがね。」

「……………そうね。」

俺がボソソジャンプで家から転移させた財布を持ちながら言つと、固法先輩は少しだけ疑心暗鬼のまま返事した。なんでこんな暗くなつてんの？

「さあさあ五万円から行きましょう！！！！」

俺は思案したままの脳を活性化させてオークション会場を見る。さつさと買つてトンスラしよう。

「五万二千円！！」

「七万！！」

「八万五千！！！！」

俺は今まさに競りが行われている戦場に舞い降りる。さていくらかで買つてやるうか。財布の中身を見る。二百万ちよい入っているから楽勝に買えるだろう。

「十五万五千！！！！」

俺は傾合いを見て、今までの金額を大幅に越える値段を言う。駆け引きなんか正直どうでもいい。なんせ絶対勝てるから。

「えーっと……………、他には誰もいませんから……………、十五万五千で落札！ー！」

シンとなった会場に戸惑う司会者は、その後直ぐに復帰。落札価格を言った後、直ぐ様別の商品に手を伸ばした。

「それでは、これが貴方が落札したロレックスの時計ですね？間違いはありませんか？」

「ああ。」

俺は会場裏にて商品を受け渡して貰っている。相手の手には十五枚の諭吉さんに、一枚の樋口さん。俺の手にはシックな大人の香がするシルバーのロレックス。所々に宝石があしらってある。

「毎度あり〜。」

「……………。」

お嬢様の言う言葉じゃねえ。そう思ったのは俺だけじゃないはずだ。

あの後固法先輩にロレックスの時計を渡して、そのまま食堂に行こうとしたが、ロレックス片手に小踊りしている固法先輩が御坂、佐天、初春に見つかりついでに俺も見つかった。ちよつと不機嫌顔の御坂にドギマギしたり、言いよられたのは少し焦った。何してくれてんすか固法先輩。

そして、御坂が出展したゲコノートを黒子がなんと五万で落札して、壇上で御坂に愛を叫んだ。御坂が顔を真っ赤に染めて怒鳴ったのは印象深い。

そして俺は今……………、

「ねえねえ、とがくれがイギリス清教徒になつたってホントなの？  
ねえねえ聞いてる？」

「……………うぜえ。」

飯をバカバカと食らっていた大食いシスターに絡まれていた。インデックスですね、分かります。

「ねえとがくれ。」

「……………。」

インデックスは俺の呟きが聞こえていなかったのかしつこく俺に付き纏う。口元にご飯つぶを付けて此方を純粋な混じりっ気の無い目で見ている辺り怒るに怒れない。はあ、俺も甘いのか寛容なのか。

「ああ、聞いてるよ。だからその口に付いたご飯つぶをさっさと処

理しやがれ。」

「あれ？とがくれ変わったね。」

「なんだ偽物とでも言いたいのか？」

俺の忠告を無視してインデックスは首を傾げる。何が言いたいかは大体分かる。インデックスに最後に会ったのは7月28日。俺があの事件で丸くなったのは知らないのだろう。

「違うんだよ。うんと、何ていうかね。前のとがくれは剥き身のままの業物の刀見たいな人で、今のとがくれは大分切れ味の良いナイフみたいな感じかな？」

「刃物には変わりねーじゃねーか。」

「うん、そうかも。」

えへへ、と恥ずかしそうに笑いながら持っていたスプーンを置く。

「でも、前のとがくれより今のとがくれの方が好きだよ。」

「それはそれはお褒めいただき恐悦至極。」

「むう、結構真面目に話してるんだけど。」

インデックスは少し頬を膨らませて、飯をまた食いはじめる。直径三十センチは有ろうかと言う皿に乗った中華料理各種をもの十秒で食い付くしていく。いくら舞夏の飯が旨いからってやけぐいにしても程がある。当麻の財布がすっからかんになるのにも納得がいつ



た。

「めっちゃ食うなお前。イギリス人なのに中華という選択はもう流石としか言えないが、もう少し女の子らしくいけないのか？」

今座っている席とは逆側で「うっ……………！」という呻き声と、「……はあ、馬鹿じゃんよ。」という呆れた声が聞こえた気がした。

「別に私はご飯に関してはそういう偏見はないかも。逆に不味いイギリス料理よりも好きかな？」

「この売国奴め。」

「というか、女の子らしくって何！？女の子はご飯をバカバカ食べちゃ駄目なの？ねえ聞いてるっ!？」

「……………。」

「ちょっと無視しないで欲しいかも!!!」

今更ながらめんどくさい奴に関わったな、と思う俺だった。

インデックスの愚痴を聞き続けているのも疲れた所で舞夏が様子を見計らって珈琲を持ってきてくれた。

「いやー、それにしてもシスターさんの食いつぶりには感嘆するものがあるぞー。」

「むう、まいかまでそんな事言っ……！！！」

「ははっ、悪かったよ。」

「舞夏はあんまり悪いとは思ってないだろ。」

舞夏はどうやら休憩中な様で珈琲をテーブルに置いて、そのまま俺の隣に座った。舞夏はにまにまと笑いながらインデックスに言うもんだから罪悪感を感じていないだろう。てかこれだけ近くに座られりや受信感応で嫌でも分かる。ごめんな、舞夏。

「そうでもないぞー？私は心からシスターさんの事を褒めているんだぞ？」

「本音は？」

「女のくせに大食らいだなー。」

「まいか……！！！」

インデックスが顔を赤くして立ち上がり舞夏を見つめる。ところが舞夏は気にした風もなく、自慢のおでこをキラッと光らせて飄々としてふふん、と笑っている。可愛いなあ。

「あつ、戸隠。その……、………珈琲どうだ？」

「うん？ああ旨いぞ？流石舞夏だ。」

俺が舞夏の可愛い姿を見つめていると件の舞夏が少し赤らめた顔で此方を見てそういう。何この可愛い生物。お持ち帰りしてもいい？

「そ、そうか……。それはよかった……。」

舞夏は俺の返答を聞いて顔を赤くして俯く。何事か、変な事言ったか？と思っていると、俺の脳内にあらゆる感情が流れ込んでくる。それは安堵であったり歓喜であったり、プラスの感情。その発信源は舞夏。それを感じた瞬間、俺はこの異常に手を出したことに後悔した。懺悔したい。はあ、何してんだろうな俺。好きな奴の心を勝手に読むなんて。不本意だとしてもこれは許せない。敵ならば相手の恐怖やら罵倒を好きなだけ聞いて愉悦に浸ってやろう。だが気に入った奴、家族の心を読もうとは思わない。本当に嫌な異常を取ってしまったものだ。

「……………すまん舞夏。後でこの盛夏祭が終わった頃に話があるんだが。」

「えっ？ああ良いぞー。」

取り敢えずこれは呼び出した時に言うことにしよう。インデックスが不審に思つかも知れないからな。実際訝しげに舞夏を見ているしな。何かに気が付いたのかもしれない。

「ねえ……………」

「な、なんだー？」

「なんだよ。」

そら来た。やっぱり気が付いたか。俺の異変に。

「ねえ、まいかはとがくれの事好き「わーーーーー！！！！！！」……  
…やっぱり。」

「ちょ、シスターさん！！！！シスターの癖に配慮が足りてないって  
いうか……！！！！」

「ふふん、さつき馬鹿にされた罰なんだよ！！」

「それとこれとは別だー！！！！」

……………あれ？何だこれ。なんか予想を斜め上に外した自体に  
なった気がする。うん、もう一度言おう、何だこれ。

「はぁ……………、はぁ……………。わかった、もうわかったからな！  
もうシスターさんの為にはご飯作らないからな！！」

「なっ……………！！まいか！！それはあまりにも無常かも！！」

「知らない！！！！私は怒ったんだ！！！！」

「むう、私だって怒ってたんだから！！女の子らしくって、私の勝  
手だもん！！！！」

先程から取っ組み合っつて口喧嘩している二人を見ると何処か口元が緩んでしまう。慌ててそれを隠そうとしたが、まあいいか、こんなものも、なあって気持ちに陥ってしまった。何時ものごとく半目になった眼の目尻をスツと撫でて、何時ものニヤニヤした胡散臭い笑みではなく、微笑ましい笑顔を浮かべるのは殺人鬼にあるまじき事で許されざる行為だが、これもなかなか乙なものだ、と思い、未だ可愛らしく口喧嘩している二人を見た。空はなかなか綺麗に晴れ渡っていたと思う。

## 盛夏祭（前書き）

番外というか閑話に余りにも時間を掛けすぎたのでこれにて盛夏祭編を終了したいと思います。  
なげやりですがすみません。

## 盛夏祭

インデックスと舞夏の子どものような喧嘩を見届けて、その場を後にした俺は適当に辺りを回って展示物を見ていた。まあ、あれです。ぶつちやけ暇だ。周りを見渡しても、学園都市に名だたる名門の常盤台の女子寮に運良く入れて浮かれているガキ共に、彼女と一緒にイチャイチャラブラブしている非常にうざったいリア充共、友達同士でぺちやくちや五月蠅く騒いでいる女等々。ろくな奴がいない。なんだってこんな所に来たのか……、甚だ疑問だったりするが、一先ず置いておこう。ブルーな気分では余りにもここは爽快すぎて気が滅入る。テンション上げて逝こうぜ!!!

「……………なあにやってんだか俺は。」

一人そうやってごちる。辺りをもう一度見回して気付く。今思えば俺には当麻しか親友は居ないのかもしれない。いや居ない。特に必要が無くて、面白みが無く、人間強度が下がるだけのモノなんぞ正直此方から願い下げでは有るのだが、こんなぼつちな状況下の場合、必要の無いものも必要と感ずてしまふ。猫の手も借りたい状態だ。

「今思えば、猫の手も借りたと言ってても割と猫というものは使えるのではないか？マンチカンも私的にも好きであるし、虎やライオンの手が借りられれば鬩いに置いて優位にたてる。やべっ、そう思うと無性にネコが買いたくなってきた!!!」

俺は一人鬼神斬りよろしく辺りを乱舞する。なんだか通行人の目線が酷く痛い気がするが、今はどうだっていい!!!気分は非常にハイだった。

「よし、即断即決は江戸の華！！今すぐ買いに行くぜ！！待ってるよ、マンチカン！！」

「ちよい待ちアンタ何してんの？突っ込みどころが多すぎて何から突っ込もうかどうしようか、そんな状況なんだけど。」

俺の耳に無粋な声が通り過ぎる。

「なんだ御坂か。どうしたんだこんな所で。」

「どうしたもこうしたも、それはこっちの台詞よ。アンタこそどうしたのよ。トチ狂った様に変な踊りして。」

無粋な声の持ち主は御坂美琴。特に気持ち悪い声というわけではなく、勝ち気で有り、何処か子供っぽさを残した素敵ボイスである。

「なあに、簡単な事さ。猫の手も借りたいから、マンチカン可愛いわマンチカン、になっただけだ。」

「非常に関連づけにくくて、非常に難しいボケなんだけど……、これは突っ込むべきなのかな？」

御坂がメイド服の状態のまま、顎に手をあててうむう、と唸る。はてさてこれはどうやって收拾をつけるべきか否か。いやはや非常にどうでも良いな。

「突っ込まずにスルーすれば良いんじゃないか？つまらないギャグに付き合わされるよりよっぽど有意義だろうに。」

「……………それ自分で言ってる悲しくない？」



「いや全く。」

あっけらかんと即答してやると、御坂はどうにも納得いかねえ、うがー、みたいな顔で見る。

「アンタにはプライドってのが無いの？」

「無いな。プライドなんざ戦いにおいては必要の無い贅肉みたいなモノさ。第一に俺は何事も面白ければ良いのでね、正直どうでも良いんだよ。」

「アンタらしいっちゃアンタらしいけどさ。」

御坂の顔には諦めやら、慣れの陰りが見えた。初めて会ったときから今日で約一ヶ月程しか経っていないが、随分と俺への対応に貫禄が出てきている。これも俺の社交性の高さ故の所業だな、あっはっは。

「ところでアンタは何してるわけ？こんな所で。」

「おろ？見てわからんか？わざわざエントランスホールでイチヤイチャしているリア充どもに怨念を送りつつ、ネコの素晴らしさを説いていたのさ。」

「変なの。……まあ私もネコは好きだけどさあ……。」

俺の恍惚というか、満足気な顔を見た御坂は笑顔でネコ好きを主張したが、文末にいくにつれてその顔に憔悴の色が見えるようになり、最終的には俺の奇行を見たときよりも表情に翳りが見えるようにな

る。

「私ってさ、動物、特にネコが好きなんだけどさ……………、能力が発電力でしょ？AIMの影響で……………」

「……………電磁波に敏感な動物、特にネコに避けられるというわけか……………」

「……………うん。」

「うわぁ……………、悲惨というか無情すぎる。何たる所業、この世に神は居ないのか……………」

「あれ？こないだ彌子が造ったものが使える可能性が……………」

「……………えっ？」

「そう思っていると、数日ほど前に彌子に原石の研究の下準備というわけで能力やらAIM拡散力場についての論文を渡して、研究していたときになんか副産物が幾つか出来ていたような。それが使えるかも……………」

「いやなに、AIM拡散力場の研究の一環でAIMを意図的に抑えるような代物が出来たような……………。確か名前は『能力切断』<sup>スキルカット</sup>だったか？余りにも使用用途が解らなかつたからお蔵入りだったんだが……………」

「彌子が偶然造り上げたのは『能力切断』<sup>スキルカット</sup>。ネーミングはそのままだが、使用用途未定の謎の代物だ。首にパッチのように張りつけるも

のである。効果はただ単純に能力者が無自覚に辺りに振りまいてい  
る能力の粕を首の神経系統に干渉して能力発動を霧散させるものだ。  
しかしながら能力者同士の戦闘、特に同系統の能力者同士ではA I  
Mにより干渉しにくい能力が自分に効果を及ぼす。つまり自分の能  
力は効かないのに相手の攻撃はバンバン通るようになるのだ。最も  
自然系、つまり電撃やら炎やらなら上手くいけば無効化させるのは  
可能だが。言うなればこれは能力者にとって足枷にはなれどアドバ  
ンテージにはならないのだ。

しかも、神経系統に干渉、外的干渉するわけだからそれは不当な自  
然においてあり得ない事だ。だから能力切断を使用している間は、  
能力発動は疎か、身体能力すらパッチの効果により低下する。しか  
も低能力者はそれが著しく、能力の計算をしているのに能力が発動  
しない状況になるのだ。だから用途不明。あの稀代の科学者と言わ  
れた彌子ですらそのパッチの画期的な用途を見出だすことが出来な  
かった。偶然の産物であるにしては余りにもお粗末すぎる代物であ  
った。

しかし……………、

「もしかしたらこいつは御坂の為に産まれたものかもな。はてさて  
これは偶然か必然か……………」

俺は手に持つ白いパッチを弄ぶ。能力切断を何故手に持っているの  
か、何故出来たのかなんて分からないがもしかしたら御坂に渡すの  
がこいつの天命なのかもしれない。どうにも偶然には思えないな。  
まるで誰かが小説のシナリオを書いているみたいだ。戯言だけど。

「ちょっと、いきなり黙ったり悟った顔したり一人で納得してない  
で何とか説明しなさいよ。」

おっと、御坂が少々お怒りのようだ。

「すまないな、ほったらかしにして。寂しかったか？」

「ばっ………！！そんなんじゃないわよ！！」

怒り心頭で顔が赤かった御坂の顔はますます赤くなり、熟れたトマトの様になった。非常に美味しそうだ。

「うつ………！なんか不純な動機を感じた気が……。アンタなんかした？」

「いんや何も？黒子が「お姉さま、お姉さま、お姉さまああん！！」、と悶えているんじゃないか？」

「………そつか、そうよね。近衛は特に何も考えないか。………ちよつと複雑かも。」

ごめん御坂。思いつきし考えてた。だが今言わない、今後一切口にしない。考えてたなんてしられたら電撃が飛んでくるなんて目じゃない。本気で命の危機である。

「それで？アンタが持っているそれは何？」

御坂は頭を振り、仕切りなおすと指で俺が手に持つパッチを指す。

「おおこれはだな、彌子……、俺の家族の散装火彌子がA I Mを研究しているときに副産物として出来たモノだ。名前は『スキルカット能力切断』。効果はA I M拡散力場を防ぐものだ。」

「へえ……………」

御坂の反応は割と良いが、どうやら自分へもたらす幸運に気付いてないらしい。

「副作用が身体能力と超能力の効果低減の不良品だ。」

「何それ。有っても何の意味もないじゃない、それ。」

御坂は一転不思議そうな顔をしてパッチを覗き込む。儼然と白く輝くパッチは何も語らない。

「確かに。これは用途不明の不良品だ。しかし、御坂。お前、これを使えばネコはおるか、動物に触れるようになるぞ？」

「えっ……………」

御坂の呆けた声が漏れる。口も大きく広げている。

「ほらよ。」

俺はそんな御坂にパッチを手渡してエントランスホールより玄関に行く。もう俺のやりたい事は終わったんでね。家に帰りたいのだ。

「じゃあな、御坂。バイオリン頑張れよ。」

俺は手を振りつつ、ボソソジャンプで自宅へと跳んだ。

禁書番外 『誰かが見ている』（前書き）

今回は二百万PVを記念して、番外編をしたいと思います。本編は三沢塾で止まっています。この物語は超電磁砲のOVAなので、本編には関係してきません。ひとときの間ですが楽しんでいただくと幸いです。

禁書番外 『誰が見ている』

「うばあ……………、だるい……………」

「そういわないで下さいまし。これも風紀委員の仕事ですわ。」

ある晴れた日常。学生たちが夏休みと言う名の宿題地獄を謳歌しているとき、俺は黒子と共に第七学区をパトロールしていた。何でも警備員のパトロール強化月間に乗っかって風紀委員もパトロールを日常的にするらしい。なんてはた迷惑。

「そんな事いつたってなあ。暑いわ、怠いわ、リア充爆発しろだ、何だかんだで体力削られてんだよ……………。もうこれは怠いとしか言い様がないだろうが。」

「知りませんわ、そんな事。」

「冷たいなあ、おい。」

そんな俺は冷たい冷たい黒子と共にパトロールしているわけだ。もう、嫌になるぜ。なんか面白い事起こんねーかなー。

『白井さん！近衛さん！事件です！！』

「ッ！！どうしたんですの！？」

なんて、呟いていたらホントに事件が起こりやがった。インカムから初春の声が伝わる。好都合、暇つぶしが出来るぜ。

『第七学区、緑地公園で女子高生が暴漢に襲われている模様です！至急現場に向かってください！！』

「分かったが、暴漢の情報はいいのか？」

『今はありません。把握し次第情報を送ります！！』

「了解だ。」

初春の切羽詰まった声色に少し口角が釣り上がる。全く、楽しくなってきたぜ。

「……………碌なこと考えてませんわね。」

「はっはっはっ！！別にその暴漢を公式だからとボコボコにしようなんて思っていないぜ？」

「……………はあ。」

黒子がため息を吐く。幸せが逃げるぞー？

「誰のせいですか。」

「さあてね。そんじゃま、行きますか。」

黒子を散々虐めたのでよしとしよう。そろそろ行きますか。そう呟いて俺と黒子はテレポートをした。



ビルとビルの間をレポートで八十メートル刻みで跳んでいく。その速度は時速240?にも及び、次々と景色が変わる。

「初春、状況は!？」

『新た……な通報に……よると、暴漢の数……は六……名、現場は変……わつていま……せん。』

黒子が横でインカムに向かって話し掛ける。オープンチャンネルにしているので初春の報告は俺にも伝わる。ぷつぷつとインカムからの音声が途切れるのはレポートで跳びまくって電波が追い付いていないからだ。

「取り分は俺が4、黒子が2な？」

「これは遊びじゃないのですわよ？」

「分かってるって。」

黒子とともに緑地公園近くのビルの屋上から飛び降りる。

『早くしてください！でないと……………！！』

初春の報告を耳で聞きながら地面が近づいてきたからテレポートする。近くで学生の悲鳴が上がった気がするが、今はそんなの気にしてられない。はやく行かないと楽しみが減る！！

「着いたー！！」

「ジャケット風紀委員です……………！！」「……………ぎゃあああああああ！！！！」  
「……………お……………」

そして現場に着いたと思えばバチバチと目の前を走る閃光。後に響く暴漢たちの悲鳴。遅かったか……………。

『でない……………、その六人が全員、被害者に……………。』

「……………遅かったですの。」

耳に響く、気まずそうな黒子と初春の言葉に前を見る。目の前には青色の電撃を身体から迸らせる常盤台の制服を着た女子に、地面に倒れ伏す暴漢六人。うわぁ、ひでえ。

『おおー！！』

「えっ……………？」

そして周りから上がる拍手歓声。その歓声に恐る恐ると後ろを見る電撃姫。全く、楽しみを潰された上に面倒な事を引き起こしやがってこのバカは。絶対後で殴る。まあ、今はこの事態を収集しねーとな。

「な、何これ……………」

「あのっ！ありがとうございます！」

「えっ！？…ああ、いや別に。」

女子高生にお礼を言われて戸惑っている御坂に黒子と共にテレポ―トで近づき、がチャリ。黒子が手錠を御坂の腕につける。

「……………つて、ええ！？」

「再三に渡る忠告無視。不特定多数への興味扇動の現行犯で個人的にお姉様を拘束します。」

意味が分からず、虚空で指をにぎにぎする御坂に当然の事のように職権濫用する黒子。

「ちよつと……………！、どういう事？」

「お前はこの野次馬たちにもみくちやにされて霞もない所を触らりたいのか？」

「近衛！？そんな性癖ある訳ないでしょ！？」

「なら、大人しくしてろ。」

そして、事を荒立ててこれ以上面倒事を増やしたくない俺。御坂に近づいて釘を刺す。警備員が来たとしたら、事情聴取なんかで余計な時間を食いかねない。これ以上、この場に居たくないのだ。

『こら、何をしている!!どかんか!!』

『はい、今現場に到着しました。』

噂をすればなんとやら。警備員が二人到着した。うわあ、これは逃げるが勝ちだな。

「ほれ、面倒な事にならないうちにトンズラするぞ?」

「う、ううん……………はっ!?!」

御坂にそういい、警備員とは逆方向に歩く俺と黒子と御坂。しかし数歩歩いたところで、御坂が恐ろしいものを見るような目で後ろに勢い良く振り返った。その目には確かに恐怖が映っていた。

「（俺が知らない展開……………。本編では語られなかった物語か?）」

そして俺は、アニメでもライトノベルでも見たことない展開に少し興奮していた。

「（……………ふふふ、楽しみだ。）」

何せ、俺の知らない事件が今始まるうとしているのだから。

俺は口元を三日月の様に歪めて笑う。

「視線を感じた？」

「……………うん。」

ところ変わって第七学区のある幹線道路の近く。夕暮れの夕日が綺麗で眩しい時間帯。俺と御坂、黒子はそこにいた。

「そりゃあな、あんだけ派手な事したんだ。視線は嫌でも感じるだろうよ。」

「いや、そういうんじゃない。……………。何ていうか……………」

御坂の思案顔に俺は少し戸惑う。確かに御坂があの場合に居た時、俺たちも御坂に対する視線は感付いていた。だが、あの時の御坂は急に何かに怯えるように顔を恐怖に歪ませた。

「それに、……………の今回だけじゃなくて……………」お姉様。」「

考察をする横で御坂が何かを言おうとする。だが、それは黒子が遮ってしまった。まあ、無理もない。視線を感じるなんて、一般の日常では取り立てて話題にすることじゃない。黒子が言葉を遮るのも、また一理有るといふことだ。しかし……………、今回だけじゃないか……………。きな臭いな、この出来事は。

「まだ、レベルアップ事件のほとぼりはまだ冷めていませんのよ？ AIMバーストを倒し、事件を解決したお姉様は今や時の人。視線を感じるのも無理ありませんわ。」

「でも、あれって秘密なんですよ？ ニュースとかでも流れなかったし。」

しかし、判断材料が少ないな。今はこの出来事は後回しにしておくか。

「人の噂を甘く見ちゃいかんぜ？ お前に羨望の眼差しを送る奴も居りゃあ、折角手に入れた能力ちからを取られて逆恨みする馬鹿野郎も出てくるかもしれねえ。」

「そんな視線なら気にしないわよ。」

「……………ふむ。」

「でも、あれは……………。全身を電気が逆流するようなあの視線だけは……………。」

何か気になるが今は帰るとしよう。……………やはり、一度家に帰ったら調査を試みようか。俺たちは御坂のつばやきを最後にその

場を後にした。

禁書番外『誰かが見ている』？（前書き）

いやはや遅れてすみません（；；；）

学校が忙しかったのと、最近購入したスパロボを完全クリアするのに心血注いでしまいました……。現在スパロボは三週目終盤に入りました。シナリオチャート完全クリアはもうすぐそこだ！！



禁書番外『誰かが見ている』？

「ぞわりとする視線？」

「ああ、今日御坂が馬鹿やらかして、それを解決しに行ったら、御坂が恐怖したような顔つきをしていて少々気になってな。何か知っていることはないか？」

「ううん……………」

その後、自宅に戻った俺は今日の御坂の様子可笑しさが気になり、居間でテレビを見ながらポテチを食べている香奈に『視線』について何か知っているか聞いてみた。

「私はそんなの感じた事はないわ。ていうか何よその『ぞわりと電流が逆撫でするような視線』って。何かの能力なんじゃないの？」

「ふむ……………成る程、能力の可能性か。ありがとう香奈。参考に  
なった。」

「ん。（それにしても戸隠にも分からないことがあるのね。学園都市の闇を知りながら、今回みたいに分からないことがあるなんて、  
可愛い）」

香奈の笑顔に少し疑問を持ちながらも香奈に礼を言う。ふむ、能力関係か、それなら彌子が適任か。

「あいつは……………、地下室か。」

俺は地下室に足を向ける。エントランスホールからエレベーターに乗って地下三階まで行く。

「彌子、居るかあ？」

「はいはい、うちは此処やで。」

ナノマシンコンピューターだけでなくツリーダイアグラム並みの演算力を誇る量子コンピュータを三つ搭載されている地下三階のモニター前に彌子はいた。何時ものごとく快活そうな笑顔を浮かべた彌子は元気良く手を振っていた。

「よう。」

「ういー。まさかとがっちから会いに来てくれるなんて！！身体清めんとなー！」

「待て、折角探したのに風呂に行くんじゃないやねえ。」

「やーん エッチー」

「……………はあ。」

そしてそのまま風呂に行く気満々な彌子の肩を掴んで留める。身体清めるってナニするつもりなんだよ。

「んで？とがっちは何しに来たん？」

「あ？……………ああ、実は彌子に聞きたいことがあってな。」

仕切りなおして、頭の上にはてなマークを浮かべている彌子に今日の御坂の事について話す。

「あ、誰かが見ているやんな、それ。最近流行つとるんよ、それ。」

「そうなのか。」

「それで？うちに聞きたいことって？」

彌子は納得したように顔を綻ばせた後、疑問に顔を歪めた。

「ああ、彌子。今回の事例に関係してきそうな能力のリストを上げて欲しいんだ。」

「うーん。」

そして思案顔になる。少し時間がたった後、彌子は目を開いた。

「いくつか上げるとすると、やっぱり精神系。『心理距離』とか、メジャーハート『心理掌握』ハイトレイクやね。」

「やはりか。」

顎に手を当てて考える。それらの能力を御坂に使うとなると、やはり怨恨の線が浮上してくる。だが、これには幾つか穴がある。一つは御坂の怨恨なら、何故他の人間にも被害があり都市伝説になっているのか。

二つ目は何故あの場で御坂のみが狙われたのか。御坂ほどではないものの、俺もあの時の事件ではかなり噂になっている。そこまで大事にはなっていないが、それでもあの時は御坂のAIMを介してA

IMバーストに介入している。怨恨なら俺にも多少は被害が来るだろう。しかしそれが無い。

そして三つ目はレベルだ。今回が怨恨の線の場合、勿論恨んでいるのはレベルの低い能力者だ。だが、メジャーハートもハートブレイクもレベルが三以上必要で、それこそドレスの女や、常盤台のNo.5しか起こせれないだろう。その二人が御坂に怨恨を浮かべている可能性は限りなく低い。……………ふむ。

そう悩んでいると、彌子が別の観点から可能性を提示した。

「後やったら電気操作系やな。感情も思考も何でも人間を動かしたんのは電気や。それを利用すれば相手に不快な気分を与える事ができるかも知れへん。」

「……………ああ、成る程。」

流石彌子と言ったところか。俺なら確実に思い至らない電気系も可能性に入れてくるとは。そうなると犯人は電気系能力者、若しくは電気系の能力者に被害を与える能力者に限定できる。これは調べてみる価値が有りそうだな。

「ありがとう彌子。助かった。」

「貸し一やで？」

「今度デートでもしようか？」

「ふえ？あわ、あわわわわわわ！……！」

彌子に礼を言いながら微笑む。彌子は顔を赤くして慌てふためき始めた。ふふん、俺に勝とうなんてまだまだ甘いよ、彌子。

俺はそういいながらボソソジャンプで自室に戻った。後ろでは彌子が頬を膨らませていじけていた。

次の日、俺は御坂達四人とともにいつものファミレスに来ていた。

「そ、そそそそそれって！！誰かが見ているじゃないですかー！？」

「だ、誰かが見ている？」

俺の左隣に座る佐天が御坂の話聞いて興奮したように立ち上がる。

「今一番ホットな都市伝説です!!……………突然、背を射る謎の視線。振り向いても誰もいない……………」

あ、なんか語りだした。俺はさして興味もないのでコーヒーを口に含む。

「それでも視線は確実に、少しずつ近づいてくる……………」

佐天の語りに呆れている黒子を見やる。頬杖をつきながらストローを銜えており、俺にアイコンタクトで、止める、と喋ってくる。まあ、止める気は無いんだが。

「やがて……………、視線に取り憑かれた人は……………、部屋から一歩も出られなくなる……………」

どンドンと口調が重くなっていく佐天。遂に御坂や初春までもが呆れていた。

「ドアの向こうから……………、視線を感じるからです……………。それでもある時一人の女の子が思い切ってドアスコープを覗いたそうです……………」

……………。そしたら、」

そこで一拍間を開ける佐天。そして、

「ぎゃあああああ!!……………、つて!!……………あれ?」

何処からともなく取り出したスマートフォンにそれこそいつの間にかアクセスしたのか都市伝説のサイトを開きながら叫ぶ佐天。それに初春は突然の悲鳴に息を散らし、黒子は呆れて、御坂は茫然としている。

「怖く無いですか？」

「怖くねーよバカ!!」

俺は見当違いな事を言う佐天の頭に拳骨を繰り出した。耳元で叫ぶんじゃねーよ。

「もー……………、佐天さんったらまたそんな都市伝説……………」

「あたた……………、でもさあ。」

「きつとストレスの所為ですよ。」

あれから少したち、俺たちの前に注文した商品が並びはじめた頃、話が再開された。俺の前にはアイスコーヒーがある。

「そうだな、ここ最近忙しかったから、それは有り得るかもしれないな。どっかの都市伝説と違って。」

「近衛、それどういことよ。」

「なんでもねーよ。」

コーヒーを口に含んで、お茶を濁す。すると、御坂が何かに気が付いたように頭を擡げた。

「あれ？初春さん端末動いてるよ？」

「ふえ？」

初春がカバンに手を入れて端末を取り出した。

「あ、本当だ。」

御坂の言う通り初春の端末は電源がついていて、GPS機能が作動していた。

「凄いですね。どうしてわかったんですか！」

「電気系能力者によくある事ですね？電磁波を感知しやすいのよ。」

「へえ。」



御坂の言葉に感心する佐天。しかし、俺はそれに一つ引つ掛かるものがあつた。

「……………どうしたの？近衛。」

「いや、一つ気になることがあつてな。」

「何が気になつてるの？」

考え込む俺を見て、佐天が心配そうに俺の顔を覗き込んだ。

「いや……………、御坂。」

「なに？」

「首にパッチを当てているときに、その嫌な視線を感じたことはあるか？」

聞くと、御坂は一瞬考え込んだ後、ハッと顔を上げた。

「……………無いわ。」

「よし、これで一つの可能性を証明できる。」

「どういふことですか？」

黒子が疑問を口にしながら聞いてくる。俺はノートパソコンをボンジャンプで手に取り、机の上に置く。

「一つの可能性、その誰かが見ているが都市伝説ではなく人為的要

因に依るものだということだ。」

「……………」

御坂が黙って俺を見る中、俺はノートパソコンのキーを入力していく。ディスプレイには様々な情報が乱立しては消えていく。

「それはどういったモノで？」

「まあ、これを見てみな。」

黒子の質問に答えながらノートパソコンを全員に見える位置に置く。

「これは？」

「御坂に渡した特殊パッチ『能力切断』のスペックだ。」

そのノートパソコンにはスキルカットの評細データが乗っている。御坂の証言とこれの利害関係が証明できれば犯人が特定できるはずである。

「スキルカットっていうのは能力者が無自覚に発しているAIM拡散力場を神経伝達系に干渉することで抑制する効果を持っている。これは元々俺の家族の研究の副産物で用途不明の代物だったのだが、御坂の動物に触れたいという願望に対してプレゼントしたものだ。」

「AIM拡散力場を抑制、ですか。確かにお姉様にしか用途はないかも知れませんわね。」

「どういう事ですか？」

俺と黒子のやりとりに初春が疑問を口にする。

「御坂はA I M拡散力場によって微弱な電磁波を発信している。だが、動物とは総じてそのような電磁波には弱いのだよ。」

「あ、そっか！御坂さんは動物に触れたいけど電磁波によって触れない。それを解消したのがスキルカットなんですね。」

「その通りだ。」

初春の一を聞いて十を知るその頭脳明晰さにウィンクを返しながら賛辞する。さらにパソコンを弄っていく。画面には御坂のデフォルメされた二頭身御坂ちゃん（先程命名）が周囲に電磁波を拡散させている動画が流れている。ナノマシンを使えばこの程度のCGは一瞬で造れるのだ。

「そしてそのスキルカットは御坂のA I Mを抑制するだけでなく、その副次効果まで抑制するのさ。」

「つまり周囲の機械や人が発する電磁波を感じ取れなくなる、ということですね。」

黒子の言葉に合わせてデフォルメ御坂ちゃんの首筋にスキルカットが貼られる。と、同時に周囲からの電磁波を遮断した御坂が諸手を挙げてピヨピヨと跳ねだした。

「……………いや、それはわかったけど……………、これ何よ…………。」

「実物より可愛いなあ。」

「あんだとごらあ!？」

画面に映るデフォルメ御坂ちゃんを見ながら顔を引きつらせる御坂にとどめの一言を言うと、額に青筋を立てて髪の毛の先から紫電が飛び散った。コワイネー。

「まあまあ、落ち着け。何も御坂が可愛くないとは言っていないだろ？ロリ御坂ちゃんも実物御坂も可愛いぜ？」

「んなっ……………!!!」

御坂を落ち着かせるために言った一言で御坂が顔を赤くして撃沈した。上気させた顔に涙ぐんだ目でジュースのストローを啄む御坂はキョロキョロと辺りを見回した後俺を上目遣いしてみた。

「……………それ……………、ホント？」

「ぐはっ……………!!!」

なにか男の大切なものを失った気がする。なんて可愛らしいのでしようか、この娘は。もう周りから聞こえてくる、「でたよ天然ジゴロ。」とか、「これで何人も女性が犠牲になったんですね、本当にありがとうございました。」なんて最近のネットでも見ないような台詞は聞こえなかった。今は御坂の可愛さが異常すぎて仕方がない。俺の電撃姫がこんなに可愛い訳がな……………ズドン!!!

「へっ!？」

某有名なライトノベルの題名パロをしようとしたら、何処のズドン

巫女だ、というような音が横からした。恐る恐る視線を左に向けてみれば、俺と初春の頭の間になにか細長いものがあつた。どうやら金属矢のようでソファアの背もたれにめりこんでいる。あつ、初春が泡噴いている。

「なにお姉様とイチヤイチャしていますの、と・が・く・れ!!!」  
泡噴いている初春に合掌しながら俺は目の前で黒い障気を纏っている悪鬼羅刹に目を向ける。あ、死んだかも。

「ちよつ、黒子……。私はイチヤイチャだなんてそんな……。でも、そういう関係になれたら……。」

ちよつ!!! 御坂さんや!!! なに火に油注いじゃってるんすか!!! いや、電撃姫のことは好きだし護りたい人だ。だが、この状況でそれは逆効果だ!!!!!!

「と〜が〜く〜れ〜!!!!!!」

ゆらり、と幽鬼のように近づいてくる黒子。こうなったら頼める奴は一人しかいない!!!

「佐天!!! なんとかしてくれ!!!」

最後の頼みの綱である佐天に目を向けると、佐天は物凄い笑顔でこちらをみた。おつ、望み高か!?

「うん、それは無理」

物凄い笑顔で死刑宣告されただけだった。はい、死亡フラグ乙。

「……………これは死んだかも。」

最後に見たのは銀色に輝く尖った物だった。

禁書番外『誰かが見ている』？（前書き）

短いすねえ

禁書番外『誰かが見ている』？

「ぜえー……………、ぜえー……………。死ぬところだった。」

「それは戸隠が悪いのですわ。」

「理不尽だっ！！」

「あなたが言いますの？それを。」

場所は一転、俺たちは風紀委員第117支部に移動していた。理由は勿論、先程の乱闘騒ぎである。銀の金属矢を辛うじて避けた俺はそのまま黒子と乱闘を始めた。すると、店の奥から見た目麗しいお姉さんが現れて、手に持つ金属製の盆で俺と黒子の頭を殴り、店の外に連れ出されたのだった。その騒ぎがあったため、俺たちは風紀委員の支部に戻ってきたわけである。

「それよりも、さっきの考察の続きを始めろぞ。」

黒子のジト目攻撃を掻い潜り、俺は初春が座っている椅子に近づいた。後ろから「逃げましたわね…………」。と、呆れたような声色をした言葉が聞こえたが無視する。

「さて、さっきいったようにスキルカットは御坂のAIMを無効化する役割がある。そして、スキルカットを発動するときには御坂は妙な視線を感じない。この事からこの一連の事件は人為的な物であり、手段は電気系能力、もしくはそれに準ずる何かである、と推測できる。ここまでではいいか？」



初春の後ろに立った俺は新たに増えた固法先輩も交えたメンバーを見やる。四人とも頷いたのを確認して、俺は続ける。

「そこで俺はいくつか仮説を立ててみた。まずは心理系能力者の能力という線だ。」

「サイコメトリー、ですわね？」

「ああ、そうだ。」

黒子の補足に首肯しながらホワイトボードを引っ張りだしてきてサイコメトリー、と黒で書く。その下に主な能力を書いていく。

「今回のように人の感情を操作できる能力には限りがある。例としては『メンジャーハート心理定規』、『メンタルアウト心理掌握』だな。」

「精神掌握は常盤台の先輩にいたわね。学園都市第五位の能力者にして常盤台最大派閥のトップ。」

御坂の言葉に俺は続ける。

「その通りだ。精神掌握に関しては御坂や黒子の方がその人となりは詳しいだろうし、学園都市第五位の人間がこんな低俗な悪戯をするわけがない。」

「そうですわね。常盤台の人間とあろう人がこのような行動に出るのは考えられませんわ。」

黒子も同意の用で心理掌握について詳しい二人の言葉に、彼女は関係ないことがわかる。他の三人も同意の首肯をしたのを見てホワイト

トボードに書かれている心理掌握の横に×マークを書く。昨日の時点である程度結論が出ていたとしても、このように討論するのは大切なことだ。新たな発見がある場合もあるしな。

「さて、次に心理定規だが……。」「それってどんな能力なんですか？」

次の能力である心理定規について考察しようとしたら初春が疑問を投げ掛けてくる。

「そつだな、簡単に説明するでしょうか。」

俺はそういいながらホワイトボードに簡単な絵を書いていく。心理定規と頭部に書いた人間、A、Bと頭部に書いた人間だ。AとBの間には必要十分条件の矢印（ ）を書いて、その上に赤でハートマークを書く。

「心理定規とは、簡単に言えば人と人との心の間を数値に置き換えられる能力だ。」

「……………？ どういう事？」

書き終えたところで前置きを言うと、御坂達は頭上にはてなマークを浮かべていた。俺はそれを見ながらレーザーポイントを取り出して絵を指す。

「例えばAさんとBくんがいるとする。この二人は相思相愛だという事にする。」

AとBの間にあるハートマークにレーザーポイントを当てる。

「そこに、心理定規の能力を用いると、このハートマーク……、つまりこの二人の心の距離を数値に表せれるのさ。相思相愛なら数値は3、みたいな感じだな。」

俺はそっぴいなながら矢印の下に3、と数字を書き込む。

「その何処が関係あるの？」

御坂の疑問が飛んだ。この質問はもつともだろう。心の距離がわかるだけで別に人に何かできるわけじゃないのだから。だが、俺はしたり顔をしながらホワイトボードに矢印を書き込む。A 心理定規と。その下に3、と書き込んで。

「ところがどっこい。すごく関係が有るのさ。これの真の能力はその人の心の距離を自分に置き換える事が出来ることなんだ。」

「なっ……………！」

そして説明をした瞬間、全員が驚いたように顔を歪めた。この能力の恐ろしさに気付いたのだろう。

「つまり、それって人の心の持ち用を好きに変えられる、って事……………？」

「そういう事だ。」

御坂の恐る恐るといった質問に首肯しながら肯定する。

「こいつは戦いの場に於いては最強だろうな。自分が護りたい、愛

していると感じている気持ちを心理定規に置き換えさせられるんだから。敵だと頭では理解していても、心が伴わない。愛すると感じている人間は誰も、殴れやしないだろうさ。」

説明していて、俺も薄れ恐ろしく感じる。こいつの恐ろしいことはその節操のなさだ。対象の人間の愛から憎悪まで、相関図のように表して自分に適用できるんだから。俺も妹たちとの間を適用されたら、戦えるかどうか怪しい物がある。

「……………なるほど、つまりこの能力者が首謀者だと仮定した場合、被害者に対して最も嫌う物との間を自分に適用して、相手に嫌悪感を持たせる、ということですね？」

「そういう事だ。こいつの場合目の端に無意識に捉えるだけで能力が行使される。心理定規が対象を見つめれば、それが嫌な視線になるだろうさ。」

とりあえず、自分の事に対しては置いといて。黒子の推理に補足を加えていく。ここまで証拠や推理が当て嵌まれば、この心理定規が犯人のように感じるが、実はこいつには徹底的な穴がある。

「しかしなあ。実はこいつは犯人じゃないんだわ。」

「……………というと？」

「この心理定規、精神掌握と同じように単一能力ワンオフアビリティ、なのさ。」

そう、精神掌握にしる心理定規にしるこいつった特殊超能力は電撃ロキアや炎のような自然系能力とは違い、能力者の本質、自分だけの現実パーソナルリアリティをダイレクトに反映した物だ。同じような能力者が五人、六人と出

るものではないのだ。

「つまり、心理掌握なら常盤台の先輩、心理定規ならドレスの女、と行使者が決まっているということだ。」

「成る程……………」

俺の補足に御坂が納得したように目を瞑り、顎に手を当てて頷く。

「この心理定規を使うドレスの女は俺の同業者みたいな物だ。なかなか表には出てこない人物だし、一応筋が通った人間だ。この能力の可能性はないだろう、というのが俺の見解だ。」

御坂達の様子を見て持論を話す。御坂達も俺の言葉に賛同を示したので、心理定規の横に×マークを書く。

「それじゃあ次だ。次の候補は電気系能力者というものだ。」

「電気系能力者ねえ……………」

次の候補である電気系能力者という仮定をホワイトボードに書く。電気系能力にもずいぶん種類があるから、というのが理由である。

「さつきまでの心理系能力はどちらかというと精神系にアプローチをかけるものだが、電気系能力は科学的に感情にアプローチをかけてくる。この違いはわかるよな？」

俺は心理系能力の上に精神、電気系能力の上に科学と書き込む。この違いは割りと明白である。簡単に言うなら、感情を『感情』という一つの事象として捉える』か、『電気信号による産物として捉える』かだ。感情を感情そのものとして捉えるのが心理系能力、電気信号

と捉えるのが電気系能力である。

「それは分かるよ。」

「よし、なら仮説を立てていくとしよう。この電気系能力者が犯人の場合、その犯人は御坂のような攻撃を得意とするタイプじゃなくてハッキングを得意とするタイプだと仮定できる。」

俺はそれを踏まえてホワイトボードにどんどん書き込んでいく。

「理由としては人の感情を電気信号を操って操作するのは相当難しいからね。私でも携帯端末からハッキングくらいは出来るけど、人の感情を操るくらいの電気は作れないわ。そこまで精密なものは静電気なんて目じゃないくらい小さいからね。私がしたら相手の脳を沸騰させちゃうわよ。」

御坂の説明に頷いて、ホワイトボードを見る。

「その通り。脳を流れる電気信号はとても微量だ。静電気より小さいかもしれない。そんなものを意のままに操れるのはそれこそギアスくらいだろうな。」

「戸隠は出来るじゃない。『跪け』って。」

「……………ん？んんん？」

「どっつしたの？」

御坂の言葉に引っ掛かるものがあつた。異常と呼ばれる力。発信能力と言ふべきもの。効果のベクトルは違うが、何か引っ掛かる。

AIM拡散力場、発信、パッチ、能力……………。

……………っ！そういう事か！！

「初春っ！！」

「は、はい！！」

ガバツ、と顔を持ち上げて初春に声をかける。少々怒鳴ってしまったせいか若干怯えているが、今は関係ない。

「今から言うことを全部洗い直してくれ。」

なんせ、この馬鹿げた楽しい事件に終止符が打てるのだから。

禁書番外『誰かが見ている』？（前書き）

短いです



禁書番外『誰かが見ている』？

あれから数十分が経過した。俺たちはソファアームに座り、机の上に置いてある資料を読んでいた。

「これが、誰かが見ているの正体……………」。

「発電能力者による特殊知覚……………、ねえ。」

そこにあるのは俺が初春に指示をして調べてもらった犯人への糸口だ。俺はクリップで一つに纏められた論文のコピーを手にとってパラパラと捲り、内容に目を通していく。

「発電能力者が無意識に感じる電場、磁場、電磁波を逆手に取って不快な視線を感じるようにするって所だな。」

「ええ。論文の筆者である城南麻子は元長点上機学園の能力開発者ですので、このレベルの装置なら造れるでしょう。」

論文はなかなか興味深い内容だった。発電能力者のAIM拡散力場の特徴を利用した知覚系統の論文だ。筆者が長点上機学園の元能力開発者だから、こんな際物の実験なのかと思っただが……………、

「そして被害者は名だたる名門の生徒ばかり。完璧に私怨だな。」

「そのようね。」

彼女の実験と思われる行動の被害者は全員おぼっちゃまとかお嬢様といった名門校に通う生徒ばかりだという。恐らく俺の推測である

が、自分の功績を長点上機に認められず解雇されたのを逆恨みして名門の生徒に八つ当たりするとともに、レベルアップ事件で有名になった御坂に近づいた、って所だな。

「それにしても、この先公。なかなかのやり手みてーだな。警備員のパトロール強化月間と同時に私怨と実験を行うんだからな。」

だが、理由はどうあれこの事の進め方には感嘆を禁じ得ない。今日まで俺に気付かせず、実験を繰り返していたんだからな。

「そうね。だけどこの悪事はここで終了のベルが鳴っているわ。」

「そうですね、ここまでの証拠と資料が揃っているのなら検挙は風紀委員でも出来ますしね。どうやら向こうは御坂さんを狙っているからこの第七学区内の事件扱いですから。」

まあ、それなりに楽しめたよ城南麻子。俺としては温い事件だったが、一から捜査していくというのも、なかなか楽しいもんだっとな。

「それにしても城南も可哀想ですね！御坂さんに目を付けられるなんてー！」

「そ、そうね……………」

しかし、気になるな。御坂の奴、なんであんな後ろめたそうに目を逸らしてるんだ？

「それにしても城南も可哀想ですね！御坂さんに目を付けられるなんて！」

「そ、そうね……………」

私は不意に佐天さんの言葉に目を逸らしてしまった。何から目を逸らしたのか。自分でも分かっている。今回の事件のことで、レベルアップ事件の事だ。

レベルアップ事件は、私と風紀委員が解決したことになっている。これの何処が可笑しいのか。そんなの決まっている。私が、というところだ。この事件は全部私の視線の先にいる近衛戸隠が解決したに等しいのだ。

近衛戸隠は事件が始まる数週間前からレベルアップの存在について知っており、犯人まで特定していた。自分の愉しさを求める本能に則って事件終盤までそれを証さなかったが、それでも近衛戸隠はレベルアップ事件を操作していたような気がする。

私たちが初めて木山先生に出会ったとき、近衛は木山先生の個人情報の一部をばらした。今思えばあの情報は木山先生しか知らない記憶だった。AIMバーストの影響で私と初春さんは知っているとしても、あの時点で木山先生がチャイルドエラーの先生だったなんて分かりもしない。自分もチャイルドエラーだからなんて最もらしい事を言っていたけど、それも嘘臭い。

他にもある。

AIMバースト、その本当の名前は虚数学区・五行機関。いくら近衛が裏の世界に繋がっていたとしても流石に学園都市の最深部に迫るような情報は知らないはずだ。

近衛はやはり私たちを誘導していたような気がする。ことあることに私たちにヒントを与えていた。核心に迫る事ではなく、ヒントにたどり着くためのキーワードを。

なんだか近衛は未来を知っているようだ。 比喻表現ではなく実際に全てを知っているようだ。

だけど、私はこれを駄目だとは思っていない。きっと近衛にも最愛の妹にすら教えられない秘密があるのだろう。それに関係しているに違いない。

随分と近衛の肩を持つようだが、近衛のやり方を肯定したつもりはない。確かに人間というのは欲が強くて本能的に闘争を好む。だけど理性的な頭脳を持ってそれを抑制できるはずなのだ。だから私は近衛のやり方を肯定しない。

だけど、私は近衛に対して嫌いという感情を持ってない。………  
というか、寧ろ好きかもしれない。べ、別に勘違いしないでよねっ  
！！恋愛じゃなくて友達って意味だからっ！！

………ん、ごほんっ！！

………それはともかく、なんで私が近衛を嫌いになれないのか、いや私たちがなんで近衛を嫌いになれないのか。それはきっと近衛が悪い奴じゃないからだ。何というか、三流じゃなくて一流なんだ。

場を弁えれるし、何よりも私たちや妹たちを大切にしてくれる。だからといって殺しを肯定できるわけじゃないけれど、むやみやたらと殺すより好感を持てるのだ。なんというか、近衛は殺戮をしているんじゃないかと、『戦争』をしているみたいだ。きっと近衛は自分で殺戮大好き、だとか殺戮を始めようとか言っているのだろう。彼の嘘は、戯言は分かりやすい。きっと彼は優しいんだと思う。

なに？随分と近衛の肩を持つじゃないか？もういいわ、認める。私は彼が、近衛戸隠が異性として好き。素直には認めたくないけれどね。本当ならびりびりと電撃を放って否定したいところだけど、あの優しさは反則よ。中性的な顔立ちでそれだけでも目を奪われるのに、初めて会ったときのあの可愛い発言。私の趣味を肯定した上でそれを似合っているなんていわれたら……。コンプレックスを褒めて女の子を落とすなんて物凄いプレイボーイよね。落とされた私が言うんだから間違いないわ。それにライバルが多いわね。素直にならないと乗り遅れる気がするわ。香奈ちゃんに小夜ちゃん、奈美ちゃんに舞夏ちゃん。ざっと見ただけで五人。みんな強敵ぞろいだわ。でも私は負けないわ。だって私はレベル1からレベル5まで上がりつめた女。絶対に近衛を……。ううん、戸隠を落としてみせるわ。ふふ、ふふふ。私はしつこいわよ、戸隠。

……。なんだか話はずれた気がするけど気にしないわ。こういつ時戸隠ならなんて言うのかしら。

「気にしたらダメ、だろ？」

そうそう、それぞれ……。ってえ！！！心読まれた！？まさか今までの独白も……。

「くっくくく……。さあてね、どうだろうな。」

怖ッ！！ていうか恥ずっ！！！！

「くっくくく……………。さあてね、どうだろうな。」

俺は御坂を見ながら言った。が、なにが独白なのかはさっぱりわからんがな。取り敢えず御坂が無言で苦い顔をしたり、額からバチバチ雷出したり、頭掻き毟ったり、とろんと惚けたような表情をしたので特別にサイコメトリーを使って心を読んでみたのだ。どうやら面白い内容は終わってしまったようだったが、今も面白いからいいか。

「さて、それはともかく。作戦会議と行きますか。」

俺は御坂の様子にニヤニヤしながら紙を机に投げた。

禁書番外『誰かが見ている』最終話（前書き）

ようやく完結です。こづいづ閑話はもっとうとしていきたいですね。

そして、初春はどうしても弄られキャラになってしまう。弄りやすいんだもの



## 禁書番外『誰かが見ている』最終話

「さあて、作戦会議と行きますか。」

俺はそういつて口元を歪めた。

「うわぁ、悪そうな顔してるわね。」

その様子を見て御坂が引きつった笑顔を浮かべながらいう。他の人間も同様なのか苦笑している。

「だってよ、久しぶりに風紀委員の仕事で骨のある仕事じゃん。やる気でない方が可笑しいって。」

俺はわざとらしく満面の笑みで爽やかに答える。しかし、黒子はそれをジト目で見ていた。

「その心は？」

「公的に先公ボコれて超嬉しいです!!……………っは!?!? 謀つたな、シヤア!!」

「あなたが口走っただけですの。それにわたくしは赤くて三倍速いわけでも生き別れの妹がいるわけでもありませんわ。」

黒子の謀略にまんまとはまったガルマ……………もとい俺は冷や汗を掻きながら目を逸らした。他の四人の視線が冷たいです。

「それはともかく、作戦会議をするんじゃないの? 私早く帰ってひと—」

「一のアルバムをダウンロードしたいんだけど。」

「あつれえー？佐天さんなんか冷た過ぎやしませんか？」

「しるか四天王のうちの三番目。」

「誰がチャンピオンを引き立てるための囃ませだゴラァー!!」

特に冷たいのは佐天。言うに事欠いて四天王の三番目とか……………。

なんか四天王の三番目って一番弱いイメージ無い？「ふっ、アイツは四天王の中でも最弱……………。次はこの私が相手だ!!」みたいな。

「はいはい、馬鹿なこと言っでないで早く作戦会議を始めるわよ。

私も今日は用事が有るんだから。」

「男、ですか？」

「ば、ばばばばば馬鹿!!んんんんんな訳無いでしょ!!!?」

「はい、ダウト。」

そしてさらにカオスになる一七七支部。なんとなさげに宣った固法先輩に鎌を掛ければ顔を赤くしてわたわたと騒ぎだした。きつとレツドテイルズだったかの彼氏に会いに行くのだろう。初だなー、先輩も。牛乳効果によってでかくなった胸もこれじゃあ宝の持ち腐れだよ、馬鹿野郎。

「固法先輩や。嘘つくならもつとましな嘘つけよ。」

「さすが呼吸するように嘘をつく人の言うことは違いますね！！貫禄があります。そこに痺れも憧れもありませんけど！！！」

「……………舐めてんのか、初春。」

「ぎゃああああああ！！ギブキブ！！近衛さんのアイアンクローは洒落になら……………ない……………」

そんな初な固法先輩に呆れていたら初春が調子のつた事をいいやがった。サーチ&デストロイを信条とする俺はすぐさま初春の顔を掴み、アイアンクロー。バタバタと手のなかで暴れていた初春だが、時期に力が衰えていき、最終的にはビクンビクン、と痙攣して気絶しやがった。俺はそれを確認して、手をパツ、と放す。ドグシャ、と生々しい音を立てて初春は床に崩れ落ちた。あ、パンツ見えてる。

「……………こうして、悪は滅びたのだ。」

「う、初春ー！！！！！」

初春のパンツは見なかったことにして劇画風に気取って初春の亡骸（死んでいない）に背を向けると、佐天が棒読みで叫びながら初春に駆け寄った。

「あ、縞パンだ。クンカクンk「やらせねえよ！！！」

折角初春のパンツ（水色と白のストライプ縞パン）は見なかったことにしたというのに佐天はそれを蒸し返したうえに危ない行動を始める。具体的に言うなら股に顔を埋めて……………、

「……………冗談だよ。」

「じゃあ、目を見て話せやコラ。」

即刻止めて肩を掴んで言い聞かせる。だが、佐天はそっぽを向いてさらには口笛まで吹き出した。……………いつか、こいつ犯罪起こすだろ……………。俺が言えた義理ではないが。

「なんでこんなに話題が脱線するのかねえ。」

「アンタが言うな。」

俺が佐天の肩をつかみながら呟くと、御坂から鋭い突っ込みが。全く、面目ない……………とは思ってませんけど何か？

## 閑話休題

結局、作戦は陽動作戦に決定した。御坂……………、もとい美琴（そう呼べといわれた。メアドも交換した）を囷とした物だ。簡単に説明すると、犯人である城南にマークされている美琴を使い、城南の位置を特定。美琴が警備員が居たことに慌てている演技をしている間に城南の逃走経路を逆算して周囲を固法先輩、俺、佐天が固める。黒子が城南の後ろから瞬間移動で接近し、その場で取り押さえられたならよし、取り逃がしたなら俺たちが追跡、確保をする手順だ。これも簡単な作戦ではあるが、今のこの状況なら一番効果的な手段である。因みに初春はナビゲーターである。左耳に着けたインカムと、俺と彌子が作り上げたディスプレイ内蔵型だて眼鏡に逐一報告

をするのだ。因みにインカムと眼鏡を始めから付けているのは俺と佐天と固法先輩。美琴と黒子はポケットに忍び込ませてある。

さて、長々と説明させてもらったが今現在、俺はA 1、つまり第七学区のショッピングセンター前のバス停近くに待機している。虚空爆破事件のあったビルの前だ。因みにあの作戦会議の日から一日経って、今は昼ご飯を食べたあとだ。

「初春、現在の状況は？」

『御坂さんと白井さんがポイントA 3（区画整備地区）の路地裏で目標と接近しました。白井さんが発信機を取り付けたようです。』

「了解。」

初春のオープン・チャネルからの報告に返答したあと、眼鏡の耳掛けにあるスイッチを操作してディスプレイの電源を入れる。右目のレンズにソナーが現れて左斜め上に赤い光点と距離が浮かび上がる。同時にその周り数十メートル圏内に青い光点が四つ現れた。赤い光点、城南のすぐ近くにある青い光点二つは美琴と黒子の物だろう。そして俺とデルタを結ぶように配置されているのが佐天と固法先輩の物であろう。俺は空中から飛んで行けるように光力操作の能力の発動準備する。周りには不特定多数の人間がいるが、ここは生憎と学園都市。能力を発動しても騒ぎにはならないだろう。俺の能力を知っている柵川の連中は昨日のうちに暗示を掛けてショッピングセンターには近づかないようにしてあるからばれる事はない。いざとなったら記憶操作をすればいいしな。

「……………さて、後は何事もなく終われば『不味いですわ！』」

キイイイイイン！！！！！！」 うおっ！！！！」

俺がいざというときの対策をたてながらバス停に背を預けていると、インカムから耳をつんざくような音と二人の呻き声が聞こえてくる。と、同時に赤い光点が川のある方へ逃げ出した。

「この音……………、スタングレネードか！！」

『そ、そうですね……………！目標から証拠品は押収しましたが逃げられてしまいました……………。』

どうやら土壇場でスタングレネードを使われたらしい。つまり、今からは俺たちの出番というわけだ。

「いや、よくやった。と言っておく。目標の逃走ルートからお前たちはポイントA 8（川を横切るように掛かる橋）に向かえ。」

『了解、しましたわ……………。』

まだスタングレネードのダメージが有るのかつつかえつつかえな返事をした黒子に労いの言葉を掛けてディスプレイを見る。と、同時に光力操作で光の翼を広げて一気に上空までバレルロールしながら上がる。

「初春、目標は？」

『現在佐天さんと固法先輩が追跡中ですが、モーターボートに乗ったのか振り切られています！現在ポイントA 9（学園都市の第九学区に繋がる用水路）を利用して逃走しています。』



れていない。

「目標を発見、威嚇射撃を行う。」

『うっかり殺しちゃった……………、とか止めてくださいね……………？』

「それは保証できんなあ。」

『ちよっ……………！！』 プチッ

俺は川の上を飛びながら目標である城南が乗っている大学のモーターボートを確認する。耳元のインカムから聞こえてくる初春の音が五月蠅いので電源を切るついでに、眼鏡の左レンズのディスプレイを立ち上げる。レンズには狙撃銃の照準のようなものが映り、モーターボートの横の水面に照準が合わさる。そして、俺は服のなかからDL搭載ドラグノフ狙撃銃ディस्क・レドームを取り出して構える。俺が使うこの眼鏡は他のやつが使っているのよりオプションが多い。俺の身体を構成している生体ナノマシンを用いてDLと眼鏡を同調。照準を覗き込まなくても狙撃が出来るようにしたのだ。

「さて、そろそろか。」

俺は右レンズに映るソナーに表示されている右矢印が近いことを見て、急停止してドラグノフをホバーしながら構える。ボートは後数百メートルでA 8に繋がる用水路を通過する。狙撃銃で威嚇してA 8に誘導するのだ。俺は左レンズの照準をボートの左側の水面に合わせる。口径を大きくしているため炸裂弾を装填してある。水面に着弾した瞬間破裂して水を巻き上げるだろう。その衝撃を利用するのだ。



「……………ふう、近衛戸隠、目標を狙い射つ！」

そしてタイミングを計り、引き金に指を置き、絞り、引く！！  
三回轟音が鳴り響いて、数瞬遅れて水面に着弾して水を巻き上げる音が聞こえる。照準をズームして見てみると、城南が慌てて舵を右に切り、A 8 に向かう用水路に入って行くのが見えた。

「よし、成功。超凄いな、さっすが俺」

俺はそれを確認した後、ドラグノフ狙撃銃を服のなかにしまい込み、光の翼をはためかせて追跡する。

「おっ、あれは美琴と黒子か。」

ボートのスピードに合わせて等距離を保ちながら追跡していくと、進路にある橋のつえに美琴と黒子がいるのが見えた。

「くっ……………！！！」

前方のボートから城南の呻き声が聞こえてくる。詰んだな、こりゃあ。

ズギユウウウウウン！！！！

「うおっ！！！！」

俺が前方を見ると、美琴が超電磁砲を放った。オレンジ色の光線が

ボートの先頭を捕えて炸裂する。艦載兵器でもあるレールガンだ。ただのコインを射ちだしたとしても相当な威力がある。なにが言いたいかというと、

「船が、空を舞っている……………」

そう、船が空を舞っているのだ。くるくると慣性の法則に従い空中を回転して飛んでいくボート。そのボートはそのまま美琴を越えていき、橋のうえに着弾する。それと同時に舞い上がった水が落ちてくるが、黒子が差し出した傘により、濡れるのは免れたようだ。

「終わったな。」

俺はそう呟きながら、橋の下で息を整えている佐天と固法先輩の方に向かう。

後日談というか後書きのようなもの。野次馬根性が働いたのか黄色いKEEPOUTのテープが貼られている外には第七学区の生徒や先生が何事かと見に来ていた。警備員の護送車に乗り込んでいく城南の後ろを見ながら嘆息する。案の定、彼女の事件動機は自身の研究が長点上機に認められず解雇されたところにあるとの事。私怨でここまでやるとは、なかなか見上げた人間である。

「まあ、一件落着だよなあ。」

「そうね。」

この学園都市というのは文字通り教育機関が集まった所だ。超能力開発ばかりに目を奪われがちだが、世間のためになる便利道具や医薬品、兵器まで造り上げている。教育しているのは子供ばかりではない。大人も教育しているのだ。だから研究に必要と思われるタバコや適度な酒、コーヒーなど、人によって集中力をあげる嗜好品には税をかけられていない。目先の税金よりも、その後集中力を上げた研究者が開発する可能性に賭けているのだ。それと同じ理由で、教育に必要な教科書や参考書、辞書、それに準ずるものは値段が安く設定されている。研究、開発されたものも同じで、大学の研究室が設計したモデルハウスなんかは試験品として教員に安くで提供されたり、土地価格や建設費を学園都市が負担してくれたりするのだ。しかし、それは逆に功績を上げられなかったらそうだったサービスは得られないのだ。第九学区なんかはいい例だ。あそこは年功序列で人の上下を決めず、完全実力で地位が決められる。そして地位が低ければ淘汰されていくのだ。彼女も、その一人だったに過ぎない。ま、それを考えるとこの五人の女の子達は凄いのかもしれない。黒子は若い頃の過ちを繰り返さないように努力し、

初春は黒子と肩を並べられるようハッキングやクラッキングなんかのエンジニアとしての腕を磨き、  
佐天は周りが凄い人間ばかりなのに引けず自分のできることをして、  
固法先輩は好きな男の人のために戦い、  
そして、美琴はレベル1からレベル5まで上り詰めた。

別に俺は人からもらった能力でも構わない。手に入れたとしてもその能力によって晒される環境や時代に耐えなければならぬ。そして、その能力を使い熟せなければ意味が無い。ま、こんなことを独白しても意味はない。

「さて、今から飯でも食いに行くか。土御門からつまい店を教えてくださいましたんだ。俺の奢りでいいからさ。」

「あら、太っ腹ですわね。」

「へえ、やるじゃない。」

「なにを食べに行くんですか？」

「肉にしようよ。」

「私は魚がいいわね。」

「よし、ついでにあいつらも呼んでくるか。今日は食べるぜ!！」

この街では勝者が常に上に立つ。今くらいはその余韻に浸ってもしないんじゃないか？それに、頑張ったみんなへ俺からのご褒美だ。

## 吸血鬼の存在（前書き）

話が開くと読みにくいと思ったので改訂しました

## 吸血鬼の存在

「ああ……………、あちい……………」

「はあ、戸隠。もっとしつかりしなさいよ。」

今日は8月9日、吸血殺し編の始まりを彩る最高の一日である。そんななか俺は屋敷のそれ程暑くない冷房の効いたリビングでうたたししながらテレビを見ていた。その姿を見て香奈が呆れる辺り、非常にだらしない姿なのだろう。憮然としてソファに座る俺を見て、更に一度溜め息をついた香奈は呆れながらキッチンへと戻っていった。時刻は午後3時。おやつ時である。キッチンの方からは紅茶の芳醇な香と、珈琲の特徴的な香、お茶菓子のバームクーヘンの甘い香が漂ってきた。

「ほう……………、バームクーヘンねえ……………」

「どうしたの？そんな世界の終わりを見たような顔をして……………」

「別に何もないさ。」

ソファに座り、バームクーヘンの乗った皿と珈琲を俺の前に置く香奈を見やりながら、ぼんやりとテレビを見る。今は丁度三沢塾の宣伝CMが流れていた。

吸血鬼。いや、この時点では吸血殺し（ディープ・ブラッド）か。彼の存在は吸血鬼という概念を肯定する一つの可能性だ。今頃いたい何処で生き、血を啜っているのか分かりもしないが、吸血鬼という概念が存在しているなら是非ともお目にかかりたいものだ。

「ふうん……………」

「なんだその懐疑的な目は。」

「さあね、戸隠が何考えてんのかなあ？……………なんて思っていただけよ。」

「包み隠さず話す癖は直したほうがいいぞ。」

「はいはい。」

そしてコーヒーカップを口に付けたまま考えに耽る俺を訝しげに見る香奈。呆れているのか、既に諦めているのか分からないが、前向きではない気持ちが言葉の端々から感じ取れた。

「さて、今日はどうしたもののか。」

「あれ？ステイルから仕事が回ってきていなかったっけ？」

「そういや、そんな話もあったな。」

俺が珈琲を飲みながら呟くと、香奈が思い出したようにノートパソコンを開く。メールボックスにはイギリスのローラからメールが来ていた。

「うえ……………、実質五十のオバサンのくせにメールに顔文字とか絵文字使うなよ。」

「わざわざクイーンズイングリッシュじゃなくて日本語で送ってくる辺り、悪意を感じるな。」

メールを開けて読むと、日本のギャルが送るようなメールがあった。余りのおぞましさに目を背けてシャットアウトしたい位だったが、ここは幾つもの裏の仕事をパスしてきた身。ここで負ければ男が廃るといふものだ。

「うぶっ……………、何々？三沢塾に囚われている巫女を助けだせ？何これ……………」

「そのままの意味だ。巫女さんが塾に囚われているんだよ。塾をジャックした魔術テロリストにな。」

「何それ……………」

香奈は呆れたようにメールボックスを閉じた。普通ならどんな与太話だと思っな。

「魔術テロリストはアウレオル・イザード、ローマ正教徒でインデックスに心酔してる奴で、巫女さんは原石、“吸血殺し（ディーブブラッド）”を持っている。彼女の存在は吸血鬼の存在を肯定するからな、かなり重要な人物な訳だ。」

「へえ……………、吸血鬼ね。会えるのなら一度でいいから会ってみていわ。」

そんな与太話を説明すると、香奈はうつとりとした表情をする。

「しかし吸血鬼ねえ。この世界の吸血鬼はどんな存在なんだろうな。」



「どんな存在、つて？」

「いや、例えば仮に真祖の吸血鬼でも色々あるだろ。例えば世界と繋がって無尽の力が有るとか、例えば魔力や身体能力が高く健康な身体であるとか。普通の吸血鬼でも鏡に映らない、日を浴びると灰になる、心臓に杭を刺されると死ぬ、ニンニクと十字架が弱点人に許可されないとその人の家に入れない等々。特徴だけでも大量にある。そしてそれぞれで特徴が随分変わってくる。だからこの地球の吸血鬼はどんな存在なんだろうかな、と。」

「さあ、会ってみないと分からないけど然程さっきの前提と外れる事は無いと思うわ。だって吸血鬼だもん。」

うつとりとした表情をしていた香奈は俺の前提を真摯に聞いた。

しかし、この世界の吸血鬼はどんなだろうな。アルクエイド・ブリュンスタッド的存在か、それともエヴァンジェリンやキスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレード的存在か。天使とか大規模術式を使えば普通に現界するから案外その類かも知れない。いやあ、胸が熱くなるな。

「そうだなあ、案外身近にいるかもな。」

「ふふふ、例えば隣に………とかね？」

あれから数時間経った後、ステイルが待っていると思われる……  
…、というか待っている三沢塾前に俺は来ていた。

「よう、ステイル。」

「ああ、君か。来てくれたのか？」

「なんだ、俺のことをサボり魔かなんかと思っているのか？」

「はは、いやそんな事は無いよ。」

ステイルは俺が来たことにより少し意外そうに目を丸くした。首を背けることもなく俺と口論した事は評価に値するが、心底ウザイ。

「そんなこと有るだろうが。……さて、後は当麻だな。」

俺が頭を掻きながら辺りを見回すとステイルの顔が引きつる。

「僕にはなんであの男が必要なのか分からないね。」

「おやおやく？嫉妬かにゃ、ステイルちゃん？」

「声を変えて気持ち悪い声色を使って言わないでくれ。」

まあ、ステイルったら。インデックスさんの隣にいるのが自分じゃ

なくて当麻なのが気に入らないのか。俺にとってはステイルと当麻が争っているのを端から見ているのが意外と面白いから、特に止める気は無いけどなあ。当麻の右手に炎剣を防がれて忌々しく舌打ちをするステイル、容易に想像できるな。

「…気持ち悪いとは心外だぜ。こんなに可愛らしい声で科をつくっているんだぜ？」

「老婆の様な声じゃないか。」

「悠木碧さんに謝れ!!!」

因みに悠木碧さんがヒロインを務めるGOSICK、面白いよ。見せてみてね？

「……はあ、誰だいそれは。まあ、良い。君の奇行は出会ったときから大体予想がつけれるようになった。今回もその類なんだろう。それにしても、あの男遅いな。」

「おい。何一人で完結しているんだ。お前何ぞ凡人に、俺を1ミリも理解されたなんて認めねーぞ。」

「凡人とは心外だね。僕はこれでも十四歳にしてネセサリウス所属の魔術師だ。凡人等と評価されるいわれはないね。」

ステイル「マグヌス。ネセサリウス所属の魔術師。炎系統の魔術を得意とする。しかし、やはり俺にしてみれば凡人だ。」

凡人と非凡。違いは明瞭であり、確実だ。ステイルは秀才、そして俺は天才。奴は努力の才で、俺は天賦の才だ。一緒に去れるつもりは無いし、引き合いに出されるなんて鳥肌が立つ。死ねば良いのに。

「てめえはいつまでも凡人だ。人の域を越えない人間は、何時までも、凡人だ。」

「……………ふうん。まあ、君の持論に耳を貸すつもりは元々無いからね。勝手に言っていると良いさ。」

ステイルが飄々と気にした風も無く言うのに、俺は負けて無様だと思っていた。口論で負けるとは、俺もまだまだと言うことか。

「……………なんでお前ら二人揃って反対向いて立ってるんだ？」

そんなピリピリと空気が刺々しくチクチクとした中、当麻が不審顔でやってきた。十分遅刻だ、馬鹿野郎。

「なあに、少々戯れていただけさ。」

「……………戯れにしては険悪だな。」

「五月蠅い。さっさと行くぞ、クズ野郎。」

「んなっ！…てめえから呼び出しておいてその言い草はなんだ！！」俺が折角にこやかに、穩便に事を済ませようとしたのに一瞬でぶち壊しやがったこのステイルの野郎。アウレオルにやられても助けてやらねえ。

「まあ、今はそんな戯れしている暇は無い。さっさと行くぞ。」

「……………ちっ！！」

当麻とステイルの舌打ちが後ろから聞こえた。もうさっさとアウレ  
オル殺して終わらせようかな、この仕事。アレイスターの依頼じゃ  
ないし。

俺は一つため息をついて三沢塾の扉を開けた。

三沢塾は危険で一杯 (キリッ (前書き))

話が開くと読みにくいと思うので改訂しました

### 三沢塾は危険で一杯（キリッ

「……………随分と静かだな……………」

当麻が俺の横で呟く。俺はそれに頷いて前を見た。エントランスと  
思われる今の場所は閑散としていて、窓から入り込む夕日のオレンジ  
色の光が暗く影を落としていた。受け付けには誰も笑顔を浮かべ  
て座っておらず、人っこ一人居ない。

「一応潰れた塾だしね。それに、魔術師が出入りしているんだ。人  
が居るほうが可らしいね。」

「ふうん、ローマ正教も厄介な事案を取りこぼしやがったものだ。」

俺は閑散とした塾のエントランスを眺め、ある一点に目を付ける。

「あれは……………、成る程なあ。面白くなってきやがった。」

そこには甲冑が有った。ヘルメットの首元から血を流している甲冑  
が。

「おい！！あれって！！！！」

「騒ぐな上条当麻。」

「でも……………！！」

「騒ぐなといっているだろう。敵に気付かれる。」

「……………」

それを見て当麻が騒ぎ、ステイルが諫める。だがステイル。ここに入った時点で奴さんには気付かれているんだよね。

「当麻、魔術の世界には人死にはつきものだ。こいつはただ運命に則って死んだだけだ。気に病む事は無い。」

「気に病む事は無い、って……！！そんな事って、有るかよ！！」

当麻が憤りを感じさせながら叫ぶ。甘い、甘いねえ。

「そんな事が有るのが裏の世界だ。今は理解できんかもしれんが、知っておいたほうが良い。」

「……………くっ！！」

甘い、甘い考えは特に俺は悪いとは思わない。というか俺には戦いに於いての感情というのは無いから分からないと言つものも有るが。

「さてさて、一度二階に上がってみるとしますか。」

「そうだね。止まっているより動いている方が良いね。」

感情論というのは余り好かない。感情が嫌いだから。俺にとって必要な感情は愉悦と家族愛だけでいい。

妙な視線を感じる。アウレオールの黄金Ⅱ錬金の術式だ。まだ理解し切れていないから反転術式を発動するのは無理そうだな。



「二階への階段は二つ有るな。片方は食堂に、もう片方は第一学習室に向かうものか……………」

「まずは食堂に行くか。」

「そうだな。」

俺は食堂に続く左側の階段を駆け上がる。ステイルはルーンカードを持ち、当麻は自分の右手を見ながら後に続いてきた。

「これが……………」

「だねえ。随分普通の塾なこつた。」

ステイル、当麻と共に階段を駆け上がり食堂の扉の前に立つ。普通の塾に食堂は無いのだが、まあそこは学園都市クオリティという事で。

「もう、普通の塾では無いけどね。」

「かつ！そりゃそうだ。」

塾の扉を眺めて、ステイルの言葉に心底笑う。普通の塾には術式が展開される事は無いからねえ。

「さて、僕的には何かが待ち受けていると思うんだけど、どう思う？」

「術式が常時展開されている。設置型の魔術の類だな。待ち受けているとみて間違いないだろう。」

スタイルもわかって聞いているのかニヤニヤと笑いながら右手の力  
ードを掲げる。そしてもう片方の手は……………、

「その意味はよくわからんが……………、てめえ、何ちゃっかり俺の  
手を握ってんだよ。」

当麻の右腕を掴んでいた。絶対に当て馬にする気だ、こいつ。

「何って、当て馬にするからに決まっているじゃないか。」

言いよった!! 当て馬にするって言いよったぞこいつ!!

「ちよっ……………！お前！当て馬ってひでーなおい!!」

「酷い？酷く有るもんか。君はうちの教徒である禁書目録を特別に  
扱う。僕らは禁書目録を君に貸す（レンタルする）代わりに君の右  
手を借りる。ギブ&テイクだろ？」

「……………てめえ。」

……………くくっ。随分面白くなってきたじゃないか。勘違いして怒る  
当麻に、勘違いさせて怒らせるスタイル。どちらも道化で楽しいね  
え。

……………それにしてもスタイルだ。わざわざ自ら悪役を買って出る辺り、  
かなりの心酔っぷりだぜ。

「まあまあ、お前等のやり取りは楽しすぎてもっと見ていたいくら  
いんだけど、時間が押しているからな。そろそろお終いにしてく  
れ。」

「言われなくても。」

「……………クッ!!」

組織に存在している限りついて回る呪縛。ステイルも神裂もインデックスも振り回されている呪縛。ローラ・スチュアートも随分厄介な鎖を用意したものだ。

「さて、と。ステイル。」

「なんだい？」

今は関係ないな。俺も精々立派に道化師として振り回されてやろうか。気紛れが酷く質の悪い道化師としてな。

「この設置型の魔術に、銃器は効果があると思うか？」

「なんだいいきなり藪から棒に。そんなの普通に考えれば分かるだろう？魔術に現実には殆ど効果は無いさ。常識だ。」

「……………だよな。」

さて、先ずは下準備だ。先程ステイルに確認したように拳銃などの実弾系統は魔術の効果にたいして殆ど影響を与えない。魔術は幻想で異能、拳銃はリアル、現実だからだ。これは不変の定理であり覆る事は略無い。

「なら概念付与した弾丸なら効果有るよな？」

「……………まさか君、霊装を？」

「……………それこそまさかだ。ちょっとばかり似非霊装をね。造って見たのだ。」

だが、魔力付与、概念付与の物質なら別だ。魔力効果、概念により術式を破壊することも出来る。お忘れかも知れないが俺は十万三千冊の魔導書の知識をデータとして有する。ならば、神話程ではないにしろ霊装、神具、宝具を製作する事が可能だ。

「どのような？」

「弾丸と薬莢にカノ（炎）のルーンをテレズマを籠めながら彫って、炎という意味を抽出する事で炎の魔力攻撃が出来るようにしたのさ。技術と知識があれば誰でもできる。」

「成る程ね。」

言うなればルーン魔術。カードやらを使って魔術を使うと起動、発射、発動とトリプルアクションが必要であるが、銃ならダブルアクションで済むし、連射も出来る。その代わり狙いが直線的だから避けられやすいけど。

「さて、そろそろ行くこうか。」

「ああ。」

「おう。」

スタイルに説明し終え、俺は食堂の扉を開けた。

「……………ははあ、成る程ね。」

呷く。食堂の様子を見て俺はにやりと笑う。

「随分手の込んだ術式だね。近衛、これが何かわかるかい？」

ステイルも同じように笑うが、額には汗が出ている。

食堂には多数の学校の違う生徒がいた。しかし様子が異常だった。友達と談笑するわけでも無く、飯を食うわけでもなく、勉強する訳でもない。ただそこに座っているだけだった。

ただそこに座っているだけの彼らは俺たちを見てギョロリ、と顔を向けて見つめる。その顔には感情はなく、まるで人形のような。

「今回の騒動の首謀者、アウレオル・イザードの黄金鍊金だ。多分此等はそれによって造られたまやかした。」

「これが幻想だったのか!？」

当麻が目を見開き叫ぶ。相変わらず生徒達はギョロリと此方を見たままだ。

「ああ、そうだ。此れは魔術で造られたまやかした。」

「その魔術はどの様なものなんだい？」

俺が当麻に返答するとステイルが疑問を聞いてくる。

……………まずいな。

「その問いに答えたい所だけど……………、一先ず逃げるぞ!！」

「えっ？………なっ！？」

ステイルが驚愕に声を上げる。ステイルの目の前に光弾が横切ったからだ。

「なっ、何が………！？」

「話は後だ！！」

ステイルと当麻が慌てている中、俺はCZ75を構えて引き金を引く。

ドン！！ゴウツ！！！！

床に着弾した弾から炎の柱が発生した。直径一メートル、高さ二メートル程の円筒型の炎はゴウゴウと燃え盛りながら回転する。

「取り敢えずさっきのホールまで行くぞ！！！！」

俺はそれを見やり当麻とステイルに叫んだ。当麻とステイルはそれに頷いて俺の後に続いた。

「はあ、はあ。……………あれは何だよ。」

「僕が知りたいね、それは。」

食堂からエントランスに戻ってきた俺たちはベンチに座る。当麻は息切れをして苦しそうだ。

「あれは黄金錬金だ。」

「黄金錬金？何だそりゃ？」

ステイルが漏らした疑問に俺が応える。当麻は初めて聞いた術式名に疑問を隠せないようだ。

「黄金錬金。その昔、中世ヨーロッパでは占いと錬金術が魔術の、ひいては国家の要だった。さて、ステイル。」

「なんだい？」

「錬金術の一番の理想は何か、知っているか？」

ステイルは俺の質問に逡巡したが、すぐに顔を上げて俺を見る。

「卑金属を貴金属に変える、だっけ？」

「正解だ。」

ステイルの解答に笑い、話す。

「さっきステイルが言った通り、錬金術の一番の理想は卑金属を貴金属に変える事だ。因みにこの際の貴金属とは金のことだ。」

「それはわかったけど、今の話にそれは関係有るのか？」

当麻が聞いてくる。俺はそれににやりと笑い話す。

「関係ある。何故なら黄金錬金とは自分の言霊や、創造物を具現化させる錬金術のハイエンドだからな。」

「……………」

ステイルが押し黙る。化け物に出会ったかのように顔を蒼白く染め上げている。

黄金錬金。自分が創造したものや、気持ち、言霊に即した物を自在に具現化させる錬金術。アウレオル・イザードの持つペンダントにより完成された錬金術だが、その実、かなり凶悪な錬金術だ。当麻はその危険性が分かっていないのか不思議そうに顔を歪めている。

「それってどういう事だよ。」

「簡単に例を交えて話すか、例えば銃の弾丸が曲がると思えばその通りに弾丸は軌道を曲げる。自分に服従するドラゴンがいると



思えばドラゴンが現れる。そして人が死ぬビジョンを思い込めばその人間は死ぬ、と言う事だ。」

「……………最強じゃねーか。」

当麻の顔が驚愕に染まる。目を見開く当麻はかなり滑稽だ。

「……………確かに最強だが、欠点があつてだな。自分の精神状態に左右されやすいのだよ。」

「……………というと？」

ステイルは俺の言葉に疑問を表す。

「自分が相手に恐怖を抱けば、相手は自分の恐れるものに变化する。平常心で錬金しないと自分が不利になるのさ。」

「成る程ね。」

エントランスのベンチに座り、アウレオルの黄金錬金について話す。間違いなく最強の部類に入る魔術の黄金錬金だが、使用者の精神がダイレクトに伝わる。ある意味諸刃の剣とも言えるかもしれない。

「……………対策法は無いわけではない。いざとなれば俺が受信感応と言葉の重みでアウレオルの精神いじくっても良いんだが、相手の技量が上の場合レジストされる可能性がある。確実に破壊しに行きたいと思う。」

「そつだね。僕も黄金錬金を聞く限りだと真つ正面から対峙をしたくない。」

正直ステイルに言った通り受信感応と言葉の重みを使えばアウレオ  
ルなんて一撃でのせる。実質能力のレジストなんて、アウレオルに  
は出来ないだろうし。何故、楽に終わらせないのか。それはただ単  
に面白くないからだ。だから俺は当麻達に戦わせようと思う。

「なら、そろそろ行くとしますか。」

「そうだね。」

「……………おう。」

早速行動だ。俺にやることなんて無いだろうけど。まあ、精々楽し  
むとしますか、

アウレオルスと姫神の空気が異常（前書き）

ようやく完結です。

それにしてもローラは弄りやすいなあ

## アウレオルスと姫神の空気が異常

「うらあああ！！」

当麻の右手が振るわれ、光弾が霧散する。

「よし、破壊破壊破壊だあ！！！」

俺とステイルはそれぞれ銃と炎の剣を握り騎士甲冑を燃やし尽くす。

「おらおらおらー！！！！死ね死ね死ねえ！！！」

ズドドドドドドド！！！！

俺は両端からやってくる騎士甲冑に銃弾を浴びせ、カノのルーンを発動し、燃やす。正直超能力のが強えー。

「よし！！これで最後だな。」

一際大きい扉の前でこれまた一際大きい騎士甲冑を蹴り飛ばし、騎士甲冑の残骸を踏み砕く。ああ、手応えねー。

「随分と荒らし回ったね。良いのかい？こんなことして。」

「別に良いんだぜ？所詮ただのビルだからな。」

一息付いていると、ステイルがルーンカードを人差し指と中指の間に挟んで構えながら俺に言う。いやはや、所詮ただの石ころのビル

を破壊してはいけないなんて法律は無かったはずだ。ならば無問題  
！！） 器物破損

「ふうん、まあ君がいつて言うなら良いんだね。」

「……いや、良くないだろ。」

当麻、暗黙の了解つても、あるんだぜ？

「さてさて、そろそろ本丸に攻め入りますか。気分は明智光秀で！」

「……負け戦だろ、それは。」

「三日天下と申したか。」

「気にしちやいかんよ、そんな事。」

ケラケラ、ケラケラと笑いながら扉に手をかける。左手にはコルト  
パイソンが握られている。いやー、気分は大切だよな。

「待て。」

だが、大きな扉に手を掛けようとした際に何ものかに呼び止められ  
る。

「ああ？」

視線を声を掛けられたほうに向けると、そこには緑色の髪の毛をし  
た男がいた。手にはやじりのような形をしたペンダントが鎖に繋が  
れて垂れ下がっている。グレゴリオの聖歌隊か？……いや、こい

つはアウレオルス「ダミーだから瞬間錬金リメン・マゲナだな。触れたものを瞬時に黄金に変えてしまっやじりだ。俺は金のなる木と呼んでいる。

「貴様ら、この場になんによ、うだ……………」

パン……！！

アウレオルス「ダミーが口を開いた瞬間に俺はコルトパイソンの引き金を引いた。銃弾はダミーの頭に吸い込まれていき、地面に赤い花を咲かせる。

「ちよっ……………！！」

「別に止めなくてもいいよ。」

「でも……………！！」

俺は地面に崩れゆくダミーを睨みながら地面を蹴る。後ろから会話が聞こえてくるが、無視してダミーの頭を掴み、百八十度捻る。ゴキッ！！と鈍い音が響いて、ダミーの頭が後ろを向く。俺はついでにとダミーの左胸に手を突き刺し、

「破壊」

エクスプロージョン  
空間爆破を発動。完璧にダミーの生体機能を奪い去り、左胸から腕を抜く。ダミーが握っていた瞬間錬金を取り、錬金術を発動。ダミーを完璧な金に変えた。

「よし、これでダミーを封じれたな。」

俺は金になったダミーを地面に転がして手に付いた血を拭う。後ろから当麻とステイルが走ってくる。

「どうしたんだい？」

「どうした……、てかなんでこんなっ!!」

振り向くと、瞬間当麻に掴み掛かれる。どうやら殺人をしたと勘違いされているようだ。

「まあ、落ち着け。」

「これが、落ち着けるかよっ!!」

「落ち着けて!!」

「うっ……!!」

肩に掴み掛かり揺すってくる当麻に言うが、聞き耳を持たないようなので実力行使。当麻の腹にパンチを入れて強制的に当麻を放させた。俺はそのついでに立ち上がり、埃を落とす。

「落ち着いたか？とりあえず聞け。こいつはアウレオルスⅡダミー。今回の騒動の首謀者であるアウレオルスⅡイザードが造り上げた魔導人形だ。人じゃないからな、一応言っておくが。」

「えっ、人間じゃ、ないのか？」

「ああ、今さつき左胸に手を突き刺したのはあの魔導人形の機能を止めるために魔導炉を破壊しただけ。術式の根幹を破壊すれば崩壊

する。世の理だろ？」

俺の説明に驚いた当麻に俺は瞬間錬金を見せ付けながら言う。瞬間、やじりが崩壊して空中に消えていった。物質を金に変えるというこのやじりに含まれた根幹の術式を破壊したのだ。

「因みにさっきまで持っていたのは瞬間錬金という霊装だ。簡単に言えば呪文とか魔方陣とかの術式を刻み込んだ道具だ。祈りとか儀式とかでも造れるな。代表的なのはロザリオとか天使像とかの偶像だな。」

「……………？……………えっと？」

ついでとばかりに当麻に色々と説明したのだが、どうやら理解できていないようだ。はあ、とため息をつく。

「まあ、家に帰ったらインデックスに聞いてみな。きっと分かりやすく教えてくれるだろうさ。」

「お、おう……………」

当麻が返事したのを見て俺はアウレオルス「ダミー」を足で踏みつけて破壊する。甲高い音を立てて崩壊したそれは金色の粒子を撒き散らしながら宙に消えた。

「いいのかい？金じゃなかったか？」

「別に金なんかいらねーよ。所詮紛い物の金だ。」

俺は踏み抜いた態勢のままスタイルに笑いかける。スタイルの横で



当麻が羨ましそうに見ていたが、この金は鑑定したら偽物だってばれるからなあ。そんな価値はない。

「それよりアウレオルス・イザードだ。多分その扉の向こうにいるからな。」

俺は舞散る金には目もくれず、扉を指差す。一際大きな扉の上には学長室と書かれていた。

「それじゃあ、行こうか。」

俺は二人に了解を得、扉を開いた。

「あつ、忘れてた。」

「……………どうしたんだい？」

俺は二人に了解を得、扉を開けようとして、その手を外した。二人が怪訝そうに見ている。俺はニヤニヤと笑いながら、口を開く。

「いやあ、グレゴリオの聖歌隊を止めてくるのを忘れていたよ。」

「グレゴリオの聖歌隊？まさか、アレがここに存在するのかい？」

俺の言葉に驚愕の表情を浮かべるステイル。当麻はよく分かっているようなので会話には参加していない。

グレゴリオの聖歌隊というのはローマ正教の保有する霊装で三三三三人の祈りを収束して槍にし、攻撃するものだ。その攻撃力は凄まじい物がある。アウレオルスキュリオティラーイザード自身、『骨董屋』と呼ばれることもある。霊装の扱いにはかなり精通している。アウレオルスはこのグレゴリオの聖歌隊を本来の使い方ではなく、占拠した三沢塾の塾生の聖呪を利用し黄金錬金を完成させている。このグレゴリオの聖歌隊さえ潰してしまえば、アウレオルスは力の半分を失ったに等しいはずだ。

「ああ、アウレオルスはグレゴリオの聖歌隊の力を使って黄金錬金を使用している。」

「まさか、そんな事が出来るとはね。」

「彼は有名な魔術師だから、それ位は出来るのだらう。」

俺はステイルと当麻を見ながら言う。

「俺はそのグレゴリオの聖歌隊を破壊、若しくは確保をしてくるからお前たちはアウレオルスを頼む。」

「分かったよ。本来は僕が行くべき仕事なんだが、君のほうが上手く出来るだろうからね、任せたよ。」

「よく分かんねーけど姫神がアイツに囚われたまんまなんだ。絶対にアウレオルスをぶっ潰す！！」

ステイルと当麻は俺の願いを了承した。これでグレゴリオの聖歌隊を確保できる。あの攻撃力や術式は大分参考にするものがあるからな。ありがたく、頂いていく、としよう。

「それじゃあ、頼んだぜ。」

俺は口角が釣り上がるのを二人に見せないように後ろを向いて、右手を上げてから走る。アウレオルス、イザード、貴様からはあらゆる物を奪い取ってやるよ。グレゴリオの聖歌隊も霊装も、黄金鍊金も。

「ククッ……………」

簡潔に完結を語ろう。

「グレゴリオの聖歌隊ゲツチュー」

簡単に手に入ってしまった、グレゴリオの聖歌隊。

「まさか、こんな簡単に手に入るとはなあ。」

グレゴリオの聖歌隊は最初に行ったあの食堂を抜けた先にある事務室の奥に存在した。淡く黄金に輝くそのやじりはそれなりに幻想的で綺麗だったと言えるだろう。俺はそれを見た瞬間、魔術の相互パイプラインと術式を把握したため、余裕でアウレオルスとグレゴリオの関係を破壊できた。だから今現在、三三三三三人の塾生の聖呪は俺に向かってきているわけだ。恐らく都城の発信能力を使えば聖呪なんてすぐに集められるから、かなり俺の能力に合った代物だろう。さつきから透視能力でアウレオルスと当麻の戦いを覗き見しているからもう少して黄金錬金の術式も把握できるからさらに俺の力は増すだろう。

「しかし、凄い反発力だな。魔術と超能力の関係は。」

だが、一つ問題なのは魔術と超能力の反発が予想外にでかいのだ。今までのルーン魔術や、概念付与は難易度の低い簡単な魔術であるから超能力との反発も少なかったが、黄金錬金は余りにもデータが多すぎて結構厳しい。俺の身体はすべてナノマシンで構成されているため、記憶の欠落もないし、電脳化しているため超能力や魔術をデータとして保存できる。だがこの黄金錬金は超能力を全て体外に散布してあるナノマシン群に一度移さないと使えないみたいだ。つまり、こいつを使っている間は超能力が使えないと言うわけだ。そして魔術と超能力のデータをそれぞれ交換するのに掛かるタイムラグは約一秒。達人なら殺せるレベルだな。まあ、俺には超能力にも魔術にも属さない第三の能力である異常があるから死にはしないだろう。

「お、終わったな。合流しにいこうか。」

ふと、アウレオルス達の方を見ると、当麻が竜王の顎でアウレオルスを食らい尽くした所だった。俺はすぐさまボソソジャンプを発動して転移した。

後日談というか後書きのようなもの。

あの事件は原作通りアウレオルスという存在を殺す事で終結した。今ごろ別人として有意義に暮らしていることだろう。

「話はわかった。その三沢塾は私が取り壊しておこう。姫神愛沙も上条当麻の学校に編入させる手筈を揃えておく。イギリス清教にはお前から報告しておけよ。」

「わかってるって。んじゃ、足がつかないようにな。」

「ああ。お前もな。」

そして今、俺はアレイスターに当麻の監察報告の真つ最中だ。アレイスターからは当麻について回り、外部からの接触の警備と、当麻の行動の誘導をするように依頼されている。今回の事件も対象になるから報告していたわけだ。今回の事件は情報の伝達ミスによる勘違いだからローマ正教ともイギリス清教とも険悪なムードにはなっていないが、まあ形式的なものだと思ってくれればいい。

俺はアレイスターとの電話を切った後にもう一度電話帳を開いて、最大主教のいる教会への電話番号を選択する。スリーコール後、応答がされた。

『お待ちしておりけることよ、トガクレ。』

応答後、聞こえてきたのは相変わらず変な日本語を使う最大主教ことローラ・スチュアート。俺は多少ふざけながら応える。

「よう、スラマツパギ。」

『ス、スラマツ……………パギ……………？なにたるものかしら？』

最近のアニメでまりあほりっくアライブに並ぶくらい面白いと思うアニメで出てきた挨拶の言葉。もちろんローラは存在すら知らないだろう。

「おいおい、知らないのか？スラマツパギは日本における伝統的な挨拶の言葉だぞ？由緒正しき京都発祥のな。」

『そ、そうなりたるか？』

もちろん嘘である。

「ああ、これを知らないなんて日本語を喋れたとは言わないぜ？」

『し、しかし土御門はそのようなことは……………。』

「余りに一般的過ぎるから知っていると思っただら。常識だからな。」

もちろん嘘である。

『なんと、それではわたくしはいまだにちゃんとした日本語を話せていなかったというけりかしら。』

「その通りだ。良かったな、ここで知ることが出来て。」

『ええ、有り難く思っけりよ。』

なんて騙しやすいんだろうか、こいつ。アホの子だからしょうがないのかな？

「さて、本題だが。」

『姫神愛沙のこと、でありけるわね。』

「ああ。」

まあ、とりあえずローラもうまいこと騙せたから仕事の話だ。

『姫神愛沙はイギリス清教所属の人間にせしめ、彼女の力を抑えるためにケルト神話の十字架を使用しますわ。』

「ま、それが妥当だな。形式的な物でもイギリス清教の十字架を付けておけば他勢力からの抑止になる。」

『ええ。』

とりあえず、姫神愛沙はイギリス清教徒扱いにしておけば安心だからな。オリアナのときに警戒すればいい話だ。それに吸血殺しは相当強い能力だ。利用すれば利益も産むだろう。他にも、俺は雲川芹亜との契約で原石を保護する側だ。近くにいたほうが何かと便利だ。



「それじゃあ、また連絡する。」

『わかりけるわ。』

「じゃあな、スラマツパギ。」

『ええ、スラマツパギ。』

こんな考察には意味はないからな、とりあえずもう一度ローラを弄って電話を切る。

「ホント、あいつって馬鹿だよな。」

後日、ローラからスラマツパギを使って恥をかいたと抗議の電話が来たのは、まあ、予想できた事だろう。

平和な一日と、始まる一方通行（前書き）

短いし、駄文。

正直、無理やりくさいですが、読んでくれると幸いです

## 平和な一日と、始まる一方通行

「最近よく見るなあ、ミサカ。」

8月20日。俺は今、第十五学区の繁華街に来ていた。時刻は朝の9時。朝だから知らないが繁華街の大通りには人が疎らにしか確認できない。この第十五学区自体が大きな繁華街だから、今の時間帯の過疎率は学区一かもしれない。だから、横を擦り抜けていく人の顔をしっかりと識別できていた。

「軍用ゴーグルに学生カバンの中に忍び込ませたF2000。完璧ミサカだな。」

ミサカ妹達。本来、超電磁砲のDNAマップを利用した軍用クローン。暗部にも入っておらず、レベル5になったときの年齢が小学六年生だった御坂は接触するのが簡単だったため、DNAマップを用意に入手出来たのだろう。表向きは筋ジストロフィーの治療に役立てるためと言うことだったが、それはブラフ。研究者達は御坂にそう言えば簡単にDNAマップを提供する事を知っていたのだ。全くあざといなあ。

「しつつかし、今回の事件は俺は介入しづらいんだよな。アレイスターに睨まれるし。」

しかし、この軍用クローン製作もブラフだった、と御坂が知ればどうなるだろうか。ミサカ妹達には二つの活用方法がある。

一つは一方通行の絶対能力進化計画。元来軍用クローンとして造られた妹達だが、如何せんレベルがオリジナルより低く、レベル3し

かない。レベル3では到底軍では使用できないため、妹達の量産性と汎用性に目を付けたのだろう。彼女達は二万体制造され、一方通行により毎回違う方法で殺されていく。一方通行は順調に経験値を蓄めていき、二万体制したところで、晴れてレベル6になれるという寸法だ。まあ、こいつは完成できれば万々歳、ってところだが、アレキスターはこれをもブラフにしているねえ。

二つ目は妹達によりAIM拡散力場を全世界に散布して、虚数学区・五行機関を制御するものだ。虚数学区・五行機関では風斬氷華が言うように、物理法則や魔術などが全て既存とは違う法則に置き換えられる。これにより、魔術師は魔術を従来の方法では使えなくなり、自滅していくのだ。これには妹達も関係しているらしい。

まあ、らしい、と推測しているのは俺は既存の知識しか把握できず、未来の情報は知ることが出来ないからだ。未だ原作でははつきりとアレキスターの思惑は記述されていないからな。俺にはアレキスターの考えを知ることが出来ないのだ。奴は0と1で表す事が出来ない次元を一つ超越した存在だからな、超能力も魔術も効きやしない。さすがに俺にも同時に複数ヶ所で存在することはできない。エイワスとアレキスターは真正正銘の化け物だ。いやはや、肖りたいね。

「ま、こんな考察も今の時点では未来の事象だ。今はこの始まったばかりの世界を愉しむことにしようか。」

俺は考察を中断して、ヘッドフォンをかける。そしてボソソジャンプを発動して、第七学区に跳んだ。

第七学区に着いた俺は直ぐに本屋に向かう。どうやら新刊の小説が発売されるらしいからな、購入しに行くのだ。

「お、魔まマ三巻はっけーん。今日は大量だなあ。」

とりあえず本棚を物色して目についた小説や漫画を手にとっていく。今のところ、ハードカバーが三冊、文庫が五冊、ラノベが十冊、漫画が十冊だ。占めて合計三万円なり。アミューズメント関係は高くてしょうがないね、学園都市は。

「ありがとうございますー……………」

俺は後ろから聞こえてくる店員のやる気の無い声をBGMに店内から出る。出入口のガラス戸を開けると、むわっとした風が肌をなぞる。まだまだ夏真っ盛り。猛暑とも言っているレベルだ。

「……………暑いなあ、太陽死ねば良いのに。」

「なーに馬鹿なこといつてんだよー、近衛ー。」

「……………ああ？」

外に出てジリジリと照りつける太陽を眺めながら呟くと、後ろからこの季節によく合う澁刺とした声が聞こえてきた。後ろを振り向くと、そこには佐天がいた。朝から厄介な奴に会ったな！。

「よう、佐天。どうしたんだ、こんなところで。」

厄介だ、と思いつつも割と好いている奴だから嫌ではない。というより暇潰しができる相手だから好意に値する。

「いやー、今から初春んところ行こうとしてるんだけどさあ、暑くって暑くって。さっきそのコンビニでジュース買って来たんだ。」

「それで初春の所に行こうとしたら、本屋から出てきた俺に出会ったと。」

「そついつ事。」

佐天は相変わらず中学生には見えないような大人びた笑みを浮かべる。その中にもあどけなさがあるのが可愛いところだが。

「それじゃあ、俺も初春の所に行こうかな。どうせ暇だし。あいつ今日は一七七支部だろ？」

「そだよ。」

「なら、一緒にいこうか。」

「うん。」

佐天は一層華やかな笑みをこぼして俺の前を歩きだす。俺はその横について歩き、一七七支部を目指した。

「うーす、初春。」

「うーい春ー！ー！」

「きゃっ、佐天さん！ーそれに近衛さんも、どうしたんですか？」

第七学区にある一七七支部に着いて、カードキーで鍵を開けた後直ぐに佐天は扉を開けて初春に抱きつきに行った。ホント、仲が良いなこいつら。

「いやあ、今日は初春当番だっていうじゃん？折角だから遊びに来たんだよ。」

「俺は暇潰し兼遊びにだ。」

俺は初春と話ながら何時もの定位置であるソファーに座り、ポケットからノートパソコンを取り出し、開ける。初春はあり得ない光景に苦笑しながら椅子から立ち上がる。端末が動いていることから風紀委員の定例報告書かなにかを書いていたんだろう。

「あはは……、そうですか。それじゃあお茶淹れますね？二人とも何時ものでいいですか？」

「うん、いいよ。」

「俺は今日はコーヒーじゃなくて紅茶を頼むわ。」

「分かりましたー。」

初春はそのまま給湯室へと小走りで行く。いつも、俺たちが飲むお茶やコーヒーは初春が淹れていてくれたりする。たまに俺や固法先輩も淹れることもあるが。

「いやあ、相変わらず使いやすいな。あの花束娘は。」

「黒いなお前っ！！」

まあなんにせよ。初春は人が良いというか、純粹だから扱いやすい。まったく持って俺も大概鬼畜だよな。



「佐天、いつの日も人間は黒く生きていかなくちゃいけないぜ？」

「いやいやいや、そんなの近衛くらいだから！！私はそんなに黒くないよ！！」

確かに佐天は腹黒くない。少々エロいがその程度だ。そういや、今思えばこいつら中一だったな。元々俺って高校生だからな、高校生視点で話してしまう。ま、セクハラにならない程度には話すけど。

「そうだ、佐天。」

「何？」

「私、輝きたいんです、と神兄様って言うてみて。」

「え？私、輝きたいんです！神兄様！！……………これでいいの？」

「おう、ご馳走様でした。」

うん、ただの声優ネタ。伊藤かな恵良いよね。最近の好きな声優に入ってるよ。

「お茶入りましたよ。」

「お、いい匂いじゃないか。」

「ありがとうーう、初春。」

「いえいえ。」

まあ、そんなアホな事をしていると初春がお盆を持ちながらやってきた。ローズヒップだったか、そんな感じの種類の匂いがした。初春がソファアに座ったのを確認してカップに口をつける。うん、うまい。

「そつえばさっきなにをやっていたんですか？」

「ん？」

カップに口をつけたまま目を伏せていると、初春からの言葉に目を開ける。どうやら興味津々のようだ。だけど教えたとしても俺得であつて、誰得？って感じだからな。

「ああ、ちよつとね。俺の要求を佐天に台詞として喋ってもらったんだよ。あ、そつだ、初春。」

「はい、なんですか？」

この際だ、初春にもやつてもらおうと考えた俺は初春に声をかける。

「ふんすつ、とギー太ゝつて言つてみて。」

「え？えつと……………、ふんすつ！ギー太ゝ！……………これでいいんですか？」

「ありがとう、ご馳走様でした。」

「……………なにを馬鹿やつてんだか……………。」

俺の要求どおりに某軽音部の真似をしてくれた初春に拝み倒す。後ろでは佐天が呆れたように肩を竦めている。えっ？誰得かって？俺得だよ！

「さて、色々と楽しめたから俺は本でも読むかな。」

「ここにきてまで趣味に走るなよ……。」

「たまにいますよね、こういう人。友達の家に行ったときにみんなと遊ばないで一人漫画読む人。」

「あ、いるいる……！」

満足した俺は書店の買い物袋を漁り、ラノベを一冊取り出す。前の世界でも割とオタクだったからな、俺。……しかし、あまりはずけ言われるのは堪え難いな。

「俺の読書の邪魔するな。邪魔したら風穴あけるわよ……！」

「ひい……！実銃出さないでよ……！」

「近衛さんがやると、洒落にならないんですから……！」

佐天と初春に邪魔されないように釘を刺す。最も、指したのはメタルイーターの銃口だが。……別に上手いこと言った覚えはないよ？ホントだよ？

「それならよし。……あ、声戻しとかねーと。」

「……わざわざ声を変えてまでパロディしなくても。」

「あはは、そうですね……………」。

勿論、俺がパロディやネタに走るときは声帯変化で声を変えて行く。お気に入りには若本だ。オオオオル・ハイル・ブリタアアアニアアアアア……………!

……………ごほん、少々テンションが上がってしまったようだ、失礼。

「ま、これもいつもの光景だよね。」

「はい、いつもこれくらい平和なら良いんですけど。」

「……………」。

まあ、さっきまでのやりとりは割と毎日やっている。事件がなくて暇なときとか。こうやって平和だと戦いがなくて欲求不満になるが、戦いが無いというのもなかなか乙である。昔の俺なら、ひよつたなとか馬鹿にするんだろうけど、この一カ月はまさに怒涛の一カ月だった。もう、一年は立っている気分だ。だけど、そのおかげで護りたい家族ができたんだ。今ぐらい、ひよつてもいいだろう？これも、一つの運命だ。

**孤独を打ち払う者、孤独を進む者（前書き）**

いやあ、まさかこんなにシリアスになるとは思わなかった。

読んでいただけるとありがたい

## 孤独を打ち払う者、孤独を進む者

あれから数時間後、俺は第一七七支部を発ち第七学区内の公園にいた。俺が当麻に出会い、そして今日事件が始まる公園だ。全く、事件発生が分かっているながら知らない振りをするのも大変だよな。罪悪感なんざ無いが、護ると決めた御坂のクローンだ。精々この事件が終わったら護ってやるとしよう。この事件は御坂だけではなく一方通行にとってもプラスの意味で転機となる。発生を未然に阻止、なんて馬鹿なことはいらない。

「さて、コーヒークーヒークと……………」

まあ、今回の事件に関しては傍観者になるわけにはいけないからこつやって御坂と当麻の登場を待っているわけだが……………」

「……………」それにしても、遅いな。そろそろ日が暮れてくるんだが。

来ない。御坂も、剩え自販機に札を飲み込まれる当麻すら来ない。どういふ事なんだろうか。

「……………」場所でも間違えたか？それなら笑えない凡ミスだな。」

まさかとは、と思いながらも何処か確信めいている考えにかぶりを振る。まさか、場所を間違えたなんて笑えない冗談なら別の日にして欲しい。これじゃあ、事件介入に対しての足掛かりを一つ失うし、介入の日時が遅れる。そんな事、出来る対策が限られてくる。別にこの事件に関しては当麻に任せておけばいいと思うかもしれないが、俺の行動には前提として大きな物がある。それは俺をナノマシンの

身体にした張本人、創世神の心の渴望を埋めて満足させること。俺の愉悦を求める事と、利害があつたからしていたことだが、一度決めたことは遣りぬきたいのが俺の信条だ。それが満たされないのなら、この世界に意味が無い。そういった意味でも、俺の原作介入には意味があるのだ。

「……………まったく、ついてないね。」

それがここで頓挫する可能性があるなんてついてない。

だが、俺のこの心配は予想の斜め上で解消されることになる。

ジュジュジュ……………！…ピッ！

『もしもし……………？戸隠？……………ちょっと相談したい事があるんだけど……………。』

ピッ！

時刻は七時を周り、辺りが薄暗くなってきた頃、俺はある場所に来ていた。第七学区のショッピングモールの南出入口だ。右手には携帯、左手はポケットの中に突っ込まれている。

「（御坂の方から相談事？まさか、俺が今回の事件に関して何か知っていると感じいたのか？）」

御坂からの電話。それは短くて単調な言葉の羅列だったが、彼女がなにを伝えたいのか、すぐにわかる電話だった。

「（いや、あれは助けを求めている声だった……。妹達の一人との邂逅で覚悟と決心がついたのか。）」

怯えと恐怖、それに隠されるように真実への探求を孕んだ声。縋るように紡がれたそれは俺の予想だにできなかった事だ。だからこのように御坂に申し込まれた待ち合わせ場所に来ているわけだが。

「（なににせよ、護ると決めただ。最後までそれを貫き通すさ。）」

そう、決意を決めたときに、目の端に常盤台の茶色のカーディガンを身につけた女の子を捕えた。



今日私は第七学区のショッピングモール近くを歩いている。時刻は七時を回っており、普段なら寮長先生に怒られるのが怖くて帰宅している時間だ。だけど今日はなんとでもやりたいことがあった。寮長先生に怒られても、黒子に嫌みを言われても、為したいことがあった。

「（戸隠に相談………………。我ながら私も思い切ったことをしたことね。）」

そう思いながらも、戸隠に相談が一番最適なのは気付いている。天邪鬼なんだ、私は。

「（……………戸隠は、未来を知っている。証拠もないし、荒唐無稽だけど、何故だか確証を持てる。）」

女の勘、って奴だろうか。戸隠は確実に未来を知っていると思っている。もしそうだとするのなら、私は彼をどうするのだろうか。きつと、恥も外聞もなく頼ってしまっだろう。好きな男にはどんな事情があるうと甘えなくなる。

「(ていうか、私も変わったわねえ。素直に、正直になるだけでこんなにも大胆になれるんだから。)」

まだまだ私は中学に年生だから色香も魅力もないかもだけど、やっぱり好きな男の前だ、可愛く居たいのは女の性分だと思う。

「(ま、今からの話はかなりシリアスだから、そんな甘えるなんて事、無いと思うけど。私も戸隠もお互いに隠していることが多い。それを確かめにくんだから。)」

私は少し、ほんの少しだけ気合いを入れた。正直、AIMバーストの時より緊張している。ホント、戸隠は厄介ね。

「(……………そこもまた、魅力だと思うけど。)」

そして電撃姫は殺人鬼と邂逅する。恐らく、今この瞬間から、物語は違う方向へとシフトしていくだろう。

「それで？相談したいことって？」

御坂とショッピングモール前で落ち合い、夜の公園に来た。公園の噴水前にあるベンチに座りながら俺は御坂を見やる。辺りには防音と索敵の魔術を施してある。他の人間には恐らく聞こえてはいないだろう。他の人間が見当たらないが。

「……………相談の前に、幾つか聞きたいことがあるの。」

周りに人がいないことを確認していると、御坂が俯きながらも口を開いた。最も、俯いているせいでその表情は窺い知れないが。

「……………なんだ？」

やっぱりそうきたか。大体予想はついていたんだ。ただ確証がもてなかっただけ。擡げた先にある御坂の顔が語っていた。御坂は俺が未来の知識をもっていることを、もしくはそれに準ずる何かを持つ

ている事を知っている。いや、それを感付いている。

「アンタは、未来の知識を持っているの？」

「………………。 (黒子しかり、美琴しかり。二人とも鋭すぎるぜ。大方今までの会話から何かを感じ取ったんだろうけど、それにしても、だ。)」

別に責めているわけじゃない。寧ろ感心している。よくそんな不確定要素だけで正解まで至れたな、と。流石は美琴だ、と声を大にして褒めてやりたいところだ。

「アンタは…………、戸隠は今まで私たちを導いてきた。何気ない会話のなかに答えに至る道筋が存在した。だから私はアンタが未来の知識を持っているって、思ったの。」

「そんなつもりは、無かつたんだが」とぼけないで!!…………。」

だけど、美琴は焦り過ぎている。答えに、全てに早く至りたい。そんな気持ちが滲み出ている。なぜそんなに急いでいるのか俺は知っている。だからこそ、俺は彼女の相談事とやらを断らなくてはいけない。

「アンタは答えを知っているんでしょ!!!早く…………、早く教えてよ…………!!!」

「…………。」

やはり脆い。弱冠中学二年生には学園都市の闇のほんの手前ですら猛毒になる。涙を流しながら俺の胸ぐらを掴み、泣き叫ぶ彼女は

つにもまして傲慢さが浮き出ている。だけど、だからこそ。

「あ、……………」

「……………美琴。お前の願いは本当にそれか？」

「……………」

「……………美琴、お前は真実を知れただけで満足するののか？」

保っておけない。美琴は、俺が手を出さなくてもいつか闇に片足を突っ込む。それが俺によって早まっているだけ。だけどそれでも俺にだって誇りがある。決して崇高な誇りじゃないが、護りたい奴は徹底的に護る。そう決めたんだ。だから美琴を腕のなかに抱きにくめる。驚いたように声を上げる美琴は俺より少し身長が少ないためか俺の肩に頭を乗せている。

「……………いいのよ、私は真実を知るだけで！！私は……………、それで……………、報われるんだから！！！」

嗚咽混じりの涙声。殊勝な事を言うようだが、美琴はこの背中にあらゆる物を背負いこもつとする。レベル5の責務でも、美琴のプライドでもなんでもいい、それが美琴の枷となる。

「美琴……………」

「なによ……………！！！」

「……………俺の前だけは、お前の本当の姿を、本心を見せてくれ。」

「えっ……………」

美琴は今思えば中学二年生だけでなくまだ少女だ。妹達を造り出したことやそれを悔やんで阻止しようとするのも美琴だが、可愛いフアンシーな物を見て笑うのも、友達と馬鹿やって笑うのも、当麻や俺に雷撃を落とすのも、全部美琴だ。そんな当たり前を消してはいけない。俺は抱きすくめる体形をやめて、向き合うように美琴を見つめる。

「確かに、お前は真実を知れば報われるだろう。」

「なら……………!!」

「だけど、お前の心は報われるのか？」

「え……………」

「お前の心はそれで納得できるのか？安まるのか？わだかまりを無くせるのか？」

「……………」

「確かにお前の責任を背負おうとする姿勢は凄いと思う。だけど、お前自身を封じたままで責任を果たしていいのか？」

俺が言えた義理じゃない。真実を知りながらも全て隠して、物語を面白くしていく人間だ、俺は。彼女等からしてみたら、俺は憎むべき相手、倒すべき敵だ。赤の他人だ、と言ってしまえばそれで終わるのだろう。後は当麻に事件解決してもらっただけだ。だけど、こいつ、俺と見つめ合う奴に関してはそうも行かない。こいつはもう

俺の大切な人で護りたい家族だ。ほっぽりだして、いい加減に終わらせたくなんて無い。

「なら……………、うっ……………、どうしろって……………、言っのよ……………  
！！私は……………、私は……………！！！」

「……………助けて、って一言聞かせれば良い。」

「えっ……………。」

「助けて、って俺に言ってくれ。美琴の本心を有りの儘に曝け出して。」

「そんなので……………、アンタを巻きこめれる訳ないでしょ！！！」

「そんなので、俺はお前を助けるよ。」

俺は再度美琴を抱き締める。後頭部に手を回し、腰を引き寄せて密着する。美琴の柔らかい身体が俺の前面を埋め尽くす。暖かい体温が俺に浸透してくる。

「俺は手が血で汚れた殺人鬼だ。そんな俺が言えた義理じゃないけど、俺はどんな事をしてでもお前を護り、助ける。今まで隠していたことも、お前が背負っているものも全部、俺はお前が少しでも楽になれるように一緒に持ってやる。」

全部背負うなんて言わない。俺が全部背負ってしまったら、今までの美琴の思いが、心が無意味になる。だから助けるだけ、救済するのだ。

「だから、お前の心を教えてくれ。美琴。」

俺がそう呟いた瞬間、俺の耳元から嗚咽が聞こえる。同時にシャツの右肩が生暖かいなかで濡れていく。ふざけていたなら『涙の意味を変えるもの』、と嘯いてみたのだが、生憎とシリアスシーン。流石の俺もふざける気にはなれない。

「たすけて……！たすけてよ……！！グスツ……、お願いだから、たすけてよ……！！」

涙と嗚咽、そして美琴の懇願。俺の身体は全てそれに侵食されて埋め尽くされた。

「ああ、お前を助けてやる。そして、俺が今まで隠してきた罪を、お前に教えてやるよ。」

俺はそれに応えるように美琴を抱き締める力を強める。甘い空気もムードも漂っているわけじゃない。互いに互いをわかり合う瞬間。もしかしたら俺の罪を、生業を知った美琴は俺を見限るかもしれない。家族は、俺から離れていくかもしれない。だけど俺は孤独になつてでも美琴を、妹達を護り続ける。それが、家族愛をもつ殺人鬼の本能だから。

「（アレイスター、今回はかりは俺はお前の思惑を外れる。別に構わんだらう？お前の計画には支障が無いはずだ。）」

俺は美琴を抱き締めながら心の内で思う。

『（今回だけじゃないだろう、お前が離れるのは。だが、私が成し遂げられなかった物をお前は手にしようとしている。それには賛辞



の言葉を挙げよう。」

それに応えるように、窓の無いビルからアレイスターの言葉が聞こえたような気がした。

**孤独を打ち払う者、孤独を進む者（後書き）**

今回の話からメインヒロインは御坂美琴になりましたー！！

おめでとおー

という訳で何故かハーレムルートから遠ざかった近衛くんですが、ハーレムにするつもりだったんですね。このまま純愛にしちゃおうか迷っています。妹達？義妹といえど近親相姦はねーべさ。

次回はようやく一方通行の登場か！？作者にもわかりません。

殺人鬼の親友（前書き）

テスト期間なのに投稿して大丈夫か？

大丈夫じゃない、問題だ。

はい、という訳でテスト期間の所為で遅れましたが、次話です。読んでくれると、うれしいぜ

## 殺人鬼の親友

俺は血に塗れた殺人鬼。

家族を何よりも大切にする殺人鬼。

今日、一人の女の子が家族になった。

今日、きつと色んな人の分岐点になる物語を加速させた。

なれば俺はその物語を面白可笑しく改変してやろう。

××を開始する。死にたい奴からかかってきな。

「ひつぐ……………、うつ……………、えう……………、」

今、俺の腕の中では一人の女の子が泣いている。俺の大切な人にして家族。この世に『一人としていない』大切な女の子だ。

「美琴、俺は妹達にも事実を教えていない。これが終わったら必ず教えるよ。」

俺は彼女の頭を撫でながら言う。美琴の瞳からは涙がとめどなく流れているが、次第に目蓋が落ちてきている。

「だから、今はこの戦いが終わるのを待っている。」

「……………ん、すう……………、すう……………」

そして、完全に目蓋が閉じた。俺はそれを確認して、ボソソジャンプを発動させる。ここは人通りの少ない公園のベンチ。索敵と傍受阻害のルーンを刻んだ場ではあるが、人払いはしていない。こんなところで寝かせておけば襲ってくださいと言っているようなものだ。

「今は眠りな。俺はお前に全てを話すから。」

そして、そう呟いた後俺はボソソジャンプを発動した。ボース粒子が辺りに舞い散り、美琴の身体が虚空に消え、俺の身体から重みが

無くなる。

ピッピ。ピッピ。ピッ！

『電撃姫がそつちにいったと思う。事情は後で話すから今は寝かしといてやってくれ。』

身体から重みが無くなったところで、香奈にメールを打つ。コミュ二ケだからナノマシンを発動させるだけで文字が打たれていくから楽だ。……………しかし、草影から覗く視線が、なんとというかスゲー気になる。大方当麻なんだろうが。

「見てたんだろ、当麻。」

「うっ……………、ばれてたのか……………」

「当たり前だ。俺に分からないことなんて未来の事実だけだからな。」

少し意地悪気に背後から覗く視線の主の声をかける。視線の主はバツが悪そうに草影からがさがさと出てきた。やはりと言うか当麻だった。

「……………それより、その資料は……………」

「ん？ああ、これか？ビリビリんとこの寮の部屋で見つけたからちよいと拝借してきた。」

「占有離脱物横領罪、というか窃盗罪だぜ？」

「うっ、悪いとは思っているがな。」

「またもバツが悪そうに笑う当麻の手には紙束が二十枚ほど握られていた。原作では当麻は橋に行つて美琴と戦はずだが、バタフライ効果なのか邂逅場所がこの公園に変わっている。まあ、何れにせよ当麻は美琴の元に来た。当麻の女の所に行く力は保たれたままなのは良かった。当麻にはこれからも事件に巻き込まれて貰つて色々経験して貰わないといけないからな。………一番の理由は俺の愉悦のためだ。」

「悪いと思つていられるだろう事は分かっているさ。」

「そうか。」

「当麻が俺の横に座つたのを見て、俺は目線の先にある十メートルほど離れたところの自販機に右手人差し指を向ける。途端に俺の前の空間に二つ缶が浮かんでいた。一つはブラックコーヒー、当麻のはコーラだ。」

「………お前、それこそ犯罪じゃね？」

「気にしちゃダメだぜ？当麻。」

「当麻のジト目に気にせず缶を渡す。当麻は気にしないようにしたのか、無言で缶を受け取りプルタブを開けた。カシュッ！という快活な音の後に、コーラの独特な薬品臭が漂う。当麻がコーラをぐいっ、と煽つたのを見て俺も手に持っているコーヒーを飲む。苦い。」

「……………なあ。」

「……………ん？」

しばし無言が続いた後、当麻が急に切り出した。当麻は俺に声をかけたというのに俺の方を見ておらずベンチの背もたれに後頭部を預けて空を仰いでいた。今だに八月であるから少し蒸し暑い。

「……………お前、この事件の真相を知っていたんだってな。」

「……………まあね。」

数瞬、当麻が言った言葉にどきりとする。別に罪悪感を感じているからとか、そんな良心は持ち合わせていない。単に当麻が呟いた言葉に重みがあったからだ。

「お前は敢えて、その真相をビリビリに伝えず傍観していた。」

「そう、かな？」

曖昧模糊に笑う。あれ？この使い方あっていたか？……………どうでもいいか。今の話のほうが単純に大切だから、そんな日本語が合っているか合っていないかなんて些末な事だ。そう、些末な事。当麻との本音の語り合いのが重要に決まっている。

「別に俺だつてわざと隠していたわけじゃ……………、いや、わざと隠していたんだけどさ、それに悪意は伴っていないんだよ。然るべき時に知ってこそ、物語に必要なファクターが生まれる。そしてそれが交差して、物語が加速していく。俺はそれを選定しているのさ。」

「神様、みたいだな。」



「どちらかというと、調律者……、指揮者に近いね。」

当麻との語らい。大事な事には違いないのにどこか違和感が拭えない。なにが可笑しいのだろうか。

「そうか。」

さらに当麻は俺の違和感何ぞ知らぬふりでコーラを煽る。なんか、当麻らしくないなあ。……ああ、当麻らしくない、か。そうだが、俺は一度もこの話をし始めたときから説教を聞いていない。当麻はこの手の話は頗る嫌いで一発殴つても俺を説教するはずなんだ。それが無かったから違和感が拭えなかったのか。

「……………怒らないのか？」

ふと、聞いてみる。ミサカの実験までは後数十分猶予がある。聞いてみても罰は当たるだろうが、不幸は当たらないだろう。話を聞いていたらミサカは殺されていましたよ、なんて本当に洒落にならないからな。

「怒る？……ああ、叱ってやりたいさ、お前の事を。」

まあ、聞いてみたら概ね予想通りの返答が返ってきましたと。しかし、まだ違和感が拭えない。

「叱ってやりたい？……叱る気は有るのに叱らないのかい？自分で求めているようで、気恥ずかしいが、珍しいじゃないか。」

「叱らないじゃなくて叱れない、か？確かにお前は人の運命を弄んでいる。俺はそれが許せねえ。」

「なら、なぜ？」

当麻は、おもむろに立ち上がった。その顔は空を見上げたままで表情を見ることは出来ないが、そのツンツン頭はなんだか誇らしげでもあった。

「お前はさ、」

当麻が語りだす。

「殺人鬼で、天邪鬼で、冷徹で、残忍で、残酷で、破壊的思考の持ち主で、社会不適合者で、殺戮大好きで、性格破綻者かもしれない。

だけどさ、」

酷い言い草だ。実の親友にここまでぼろくそにいう奴はいねーだろ。作者の友達でもここまで言わねーぞ。

俺が呆れて肩を竦めていると、当麻は肩ごしにこちらを見た。そして、

「大切な所では嘘をつかないんだよ。」

「……………」

おう……………。明らかに不意打ち。不意打ちにも程がある。なんとなくか、こっぴड़ずかしい。顔が火照る……………、とまではいかないが恥ずかしい。

「お前はさ、本当に最低な性格をしてやがるんだよ。だけどさ、いつでも大切な場面では凄い真面目になってさ、嘘はつかねーんだよ。」





女だったら一瞬で惚れてるぜ。

「はは、だよな。」

「おう。」

さあて、なんかスッキリしたことだし良いことがしたくなったねえ。良かったな一方通行。お前が初めて俺の善いことを受ける人間だ。一度つきりだから泣いて感激しろよ？……………それと、一つこの唐変木に言つとか無くちゃいけない事があるな。

「それと、当麻。」

「ん？」

「その笑顔、インデックス以外に見せないほうがいいぜ？」

「は？なんでだ？」

「……………はあ。」

「なんでそんな露骨なため息をつかれていらっしやるので！？」

インデックス、俺はちゃんと忠告したぜ？後はてめえが素直になるだけだ。命短し恋せよ乙女。お前には幸せになる権利がある。××  
が言っただから間違いはねえ。

「……………ま、これも一つの運命か。『運命石の扉』シユタインズ・ゲートの選択、  
つてね。」

……はてさて、この物語り。どうやって転がしていこうかね。  
どうせなら楽しいほづがいいよな？俺は、ハッピーエンドしか好き  
じゃないんだ。

## 殺人鬼の親友（後書き）

唐突ですが、オリキャラのCVって誰でしょうかね？

戸隠、香奈、彌子、小夜、奈美。

よろしければ感想を書く際に、一緒に書いてくださると嬉しいです。

**接触する正義と悪党。裏で動くは最強の殺人鬼（前書き）**

なんか微妙な所ですが、長くなりそうなので切りました



**接触する正義と悪党。裏で動くは最強の殺人鬼**

「……………終わる。この茶番が。そして、きっと世界は交差していか  
くだろう」

いつだっただろうか、香奈たちに家族とは何か、を教えてもらった事がある。別に香奈に諭されたわけでも、俺が試行錯誤したわけでもない。本能的に感じ取ったとでもいうべきだろうか？ 家族とは何かを家族思いの殺人鬼に気付かせるなんてアイロニー、俺は笑って飛ばすけど、もしこれが、一人の人生を揺るがすなら、きっとそれは楽しいギャグと認識してしまうだろうね。なにが言いたいのか？ そんなの決まっている。

「この戦いは所詮、俺にとっては物語の楽しい楽しい前哨戦プロローグでしか無かったってことさ」

誰に言うまでもなく、俺は静かに月を眺めながら呟いた。

「……………月がでている」

その月は、青白く慈悲の光を照らして一人の白髪の少年を包んだ

「……………」、おい。この場合、『実験』ってなアどうなっちゃうんだ？」

第何学区だったか忘れた。第三学区だったか？ そんな、さして興味を持つこともない特筆すべき所の無い学区に俺はいた。詳しくいうなら、その学区内の所謂操車場と呼ばれる場所だ。その場所で俺は一人の少年と対峙していた。白い、白い、余りにも白々しい少年に。

「さてね。この場合だと、君の実験は一つ先へとシフトするはずだな。」

「あア？ なに言ってやがんだ、お前。」

その少年の名前は一方通行。本名は×××××。この世から神聖にして真性の名を捨てて、一つの運命の歯車として生き始めた哀れな優しい一流の悪党。俺にしてみりゃあ、ただの男であるのだがな。

「いや、君には関係の無い話だ。此方の仕事……………、もとい私事のことだ。気にする必要はない。」

一方通行と話ながらチラリ、とシスターズの方を見る。一方通行も俺の視線が移動したのに気が付いたのか、自分の後ろに仰向けで倒れるシスターズを肩ごしに見た。

「それよりも、随分酷い有様だなあ。所詮は『レディオノイズ欠陥電気』、というわけか。」

「……………てめエ、この実験の関係者かア？」

「残念ながらそんな人生的に美味しい仕事にはついていないさ。言ってみるなら、君の大ッ嫌いな殺人鬼さ」

「……………ンだと？」

一方通行の様子を見ながら俺は嘲り笑う。くく、ゾクゾクするね、この絶対感。一方通行すら知らない情報を持ちながら、それを眼前にちらつかせて焦らす。DSにも程があるだろうよ。

「まあ、俺が殺人鬼であろうと能力者であろうと今の状況に於いてはまったくもって意味の無いことだけだな。だってそうだろう？君が何をしようと俺の存在は揺るがないのだから」

「なに意味不明なこといつてやがるンだ、そこの屑野郎がよオ」

確かに、意味不明な事を口走っているな、俺は。だが、これは別に支離滅裂に意味の無いことではない。俺は一方通行と戦う予定はない。一方通行と戦うのは当麻だ。俺はあくまでも美琴に真実を教えるのが目的であり、一方通行とシスターズの救済はその副次事業に過ぎない。あくまでも一方通行と因縁があるのは当麻だ。俺は一方

通行に対して必要以上の感情は持ち合わせていない。野郎に欲情する趣味は無いからな。だから、俺はこうやって一方通行を惑わせている間に当麻が登場するまでの時間を稼いで序でにミサカ第10032号の傷をナノマシンを散布して治しているのだ。

「おや、屑野郎とは随分な口のきき方だね。俺としては屑よりも葛の方が好きなんだよ。ま、戯言だがね。」

ナノマシン散布の際に散布されたナノマシンは超医療行為ナノマシンだ。傷口の壊れた細胞の除去、細胞分裂の促進、血小板の増幅、さらには癌細胞の破壊、ナノマシン自体が細胞としても作用する。そして一日経つと血中から腎臓へと行き分解されて尿から排出される。他人に使うに一番いいナノマシンだ。

「……………葛は食べ物だろうがよ。それにしてもふざけたヤロオだなア、てめエは」

「あはは、誉め言葉をありがとう。×××××君？」

「……………くそ野郎がア」

呻く一方通行に嘲り笑う俺。うまく道化を演じていると自分自身自負しているよ。それに、今回は先程も言ったとおり当麻が一方通行と戦うわけだから俺は一方通行に揺さぶりを掛けるに過ぎない。ま、傍観者に撒するとしましようか。

「おっと、いきり立つなよ一方通行。別に俺はお前と戦う予定は無いんだからな」

「あア？」

臨戦態勢を取り、今にもベクトル操作して飛び掛かってきそうな一方通行に手で制止をする。一方通行は怪訝そうな顔つきで俺を睨む。  
ガタツ！！

「……………やっときたか、当麻」

「……………おいおい、まアたいレギュラーか。……………ツたく、ウザッてーな、カスが」

瞬間、一方通行の後ろから物音がする。と、同時に一方通行の意識が後ろに集中したのを見計らい、ミサカシスターズのもとまで瞬間移動をして近づく。物音がするほうを見ると、当麻がその場に立っていた。

なぜ当麻がこの場に来るのが遅くなったか。それは俺がこの場に細工を施すためだ。魔術的因子、科学的因子を辺り一帯にちりばめて当麻のバックアップをするのだ。その準備のために一方通行の意識を俺に集中させて、判断能力を低下させるのに、あの道化を演じていたというわけだ。一方通行は空気中の分子の振動まで予測できるからな、冷静なままだと簡単にナノマシンの存在も把握されていただろう。ま、一方通行の沸点が低かったお陰でうまくいったけど。もう、この手はあまり使えないな。準備に精神力を使いまくる。

「ははっ、それじゃあ俺は傍観に徹するとしましようか。後は任せたぜ、HERO？」

精神力を回復させる序でにミサカシスターズを掴んで近くのコンテナの上に瞬間移動する。

「……………これはどういづことですか、とミサカは困惑を顕にしながら質問します」

ただ一人、間抜けな声を出しながら首を傾げているミサカが首を捕まれて親トラに運ばれる子トラの様になっていたのはまあ、ごく愛敬といふことで。

「がア……………」

当麻の拳が振るわれ、一方通行が後方に吹き飛ばす。

「ぎゃはははははひはは……………！ おもしれエ、おもしれエぞてめエ……………」

それに対し、起き上がった一方通行は狂った笑みを浮かべながら当麻を睨む。……………なんかキャラが被るなあ。

「お前は……………、お前はなんでこんな実験を！！」

「そおんなの、楽しいからに決まってるだろうがよオ！！！」

再度肉薄する二人。拳を振るい、ベクトル操作で砂礫を巻き上げ、鉄骨を飛ばし、横回転で避ける。元々、普通の高校生より少し上くらいしか身体能力が無い当麻と、基本的にベクトル操作に頼らなければ普通の高校生以下の戦いは泥沼だった。なんだか、時間がかかりそうだな……………。暇だからミサカシスターズに絡むとしよう。

「おい、ミサカ」

「はい、なんですか？、と今の状況に困惑している気持ちを押さえながら平静を保ち返事をします」

「……………めんどくせ」

……………ごめん、無理だわ。最初の最初、プロローグに入る前から断念するわ。アレだ、ポケモンで博士が出てくる前から電源を切るかのようなプロローグ具合から断念だわ。なに？ あの面倒くさい喋り方は。いくらミサカネットワーク内で同士たちに報告する意味を含んでいるとしてもやり過ぎだろう。誰だ、こんな設定にしゃがった野郎は。

「先に質問をしてきたのは其方だというのに面倒くさいというのは失礼に値するのでは？ という他人に顰蹙を買いそうな言葉を胸中

に留めながら質問します。どうなさったのですか？」

「キイイイイイ！……！！ 突っ込みたああああい！……！！」

もう苛々する……！！ なにこの突っ込みどころ満載の会話は……！！  
突っ込みどころが多過ぎてどこから手を付けていいのかさっぱりだ  
よ……！！

「……… なんだかユーモアな人ですね、と若干馬鹿にしたニュア  
ンスをほのめかしながらミサカは感心したように言います」

「……… 全く、訳が分からないよ」

ミサカシスターズは悪口とか陰口を包み隠さず言う天然だからな。  
突っ込みどころが多いのはしょうがないよな。しかし、陰口を包み  
隠さず言うって、もうすでに陰口でもなんでも無いな。ま、どうで  
もいいけど。

「……… 全く訳が分からないよ、と言いたいのは此方です。」

「あ？」

「私たちミサカシスターズはお姉様オリジナルから造られたクローンです。故  
に単価十八万のクローン一体助けたただけでああなたになんの得が有る  
のでしょうか？、とミサカは疑問を口にします。」

それにしてもこのシスターズアホである。ネタに走ったわけでも、  
戯言でもなくそう思う。確かにこのシスターズは科学的観点から見  
ればオリジナルである美琴と同一であろう。だが、魔術師でもある



俺の視点から見ればこの第10032号も他のシスターズも別の人間だ。その理由は魂。非科学的であるが、死海文書、カバラ、セフィロトの樹といった比較的有名な体系や書物には輪廻転生といったものが存在する。その方面から突き詰めていけば、彼女等の魂は同一ではなく別物であると認識できる。非科学的過ぎて証明のしようがないのだが。

「……………まあ、確かにお前達を個人的に助けるのはデメリットが多いから、普通は十八万の為に助けようとはしないな。」

「ではなぜ？ とミサカは更なる疑問を投げ掛けます。」

「お前が、ミサカだからだ。」

「……………?」

どうやら意味がわかっていないようだ。例え研究者たちから学習装置で知能を得ているとは言え、知識は軍事関係、血なまぐさい事ばかりだ。俺が言えた口では無いが、彼女達には常識が足りないと思う。まあ、何れそんなものは増やしていけばいいのだが。なんだかクローンに同情的だな。ま、美琴のクローンだからというのもあるが、俺自身も遺跡の管理人のクローンだからな。クローンの事には賛成的だ。

「今はわからなくてもいいさ、これから知っていけばいい」

「いえ、私は本日8月20日午後八時付けで一方通行により殺害されますので学習は無駄です、と若干諦めの念を込めた口調で報告します」

「……………はあ、君はこの状況を理解できてないみたいだなあ」

「この状況とは？ とミサカは困惑している表情を浮かべながら言います」

「無表情じゃねーか。ま、それは後で纏めて教えてやるよ」

ミサカシスターズの頭を撫でながら話す。俺としてはこのミサカシスターズはアレイスターの駒としてではなく、俺の駒として手元に置いておきたい。同じクローンだからか、情が移ったみたいだ。

「今は、何故か来ちまった電撃姫を護衛する騎士となりましょうか」

そして、そのクローン達のお姉様である電撃姫は俺としてはなにもにも変えがたいものだ。せめて、俺の命を賭してでも護るとしますかね。

「……………うっ……………うっん？」

「ああー、起きたみたいですよ？」

「……………誰？……………はっ！戸隠は!？」

暗い暗い闇の中に私は浮かんでいた。独りぼつちで、寂しくて、誰かに支えてほしくて、泣き付きたい気持ちで一杯だった闇。私はそこから意識が浮上し、明るい光に目を細めながら瞼を開ける。瞬間、先程まで伴にいた少年を思い浮べて、飛び上がりながら、辺りを見回す。

「戸隠さんですかぁ？戸隠さんなら今ごろ戦いを眺めているんじゃないですかねえ？」

辺りをキョロキョロと見回していると、近くから女の子の声が聞こえた。何処かで聞いたことのある声だ。

「……………あなたは……………」

「久しぶりですね、御坂ちゃん。災息でしたか？」

「……………近衛、奈美さん……………」

「はい、みんなのアイドル奈美たんとは私のことですよ？」

そっだ、戸隠の妹にして大切な家族の一人、近衛奈美さんだ。いつ

も朗らかと笑っていて掴み所のないほわほわとした雰囲気醸し出して、私の中では可愛い人で認識している。

「いや、それにしても久しぶりだねえ。奈美さんは御坂ちゃんに会えなくて悲しかったのですよ」

「は、はあ……………」

「こーら、奈美。あまり御坂ちゃんを困らせるんじゃない」

「おやおや、香奈ちゃんじゃありませんか!」

「……………そんなビツクリする事かよ……………」

そんな奈美さんに抱きつかれながら悲しい発言されても若干返答に困るわけで……………。なんか忘れてるなあ、と思いながら苦笑していると、奈美さんの後ろに少し呆れたような表情をしたお姉さんがいた。

「……………香奈さん」

「久しぶりだね、御坂ちゃん。元気だった?」

「はい、お陰さまで」

奈美さんの後ろに現われたのが近衛香奈さん。近衛家に一度ご飯を食べに行った際、家事炊事掃除と何でもこなしていた凄い人。綺麗な赤銀の髪の色が特徴の美人だ。

「いや、すまないな。うちの奈美が迷惑をかけたようで」

「いえ、別に迷惑なんて……………」

「そうだそうだー！！私は迷惑なんかかけてないよう！」

「……………うっさい、奈美。黙れ」

「んにゃ！？ 小夜ちゃん酷いよ！！」

「……………五月蠅い、いい加減黙れ」

そして最後に静かに奈美さんの後ろに現われたのが近衛小夜さん。  
静かな理知的な雰囲気を持っている少し背が低めの女の子だ。

「……………ごめん、電撃姫。奈美が五月蠅かったら遠慮なく電撃か  
ましていいから」

「……………えっと、それはちょっと……………」

「やさしい奴……………」

三人の女の子が私の前に並ぶ。三人とも私より年上だ。そして戸隠  
の大切な家族でもある。

「……………それよりも戸隠は？」

そうだ。今一番大切なのは戸隠の事だ。私は何故かソファーに寝か  
されてご丁寧にタオルケットまでかけてある状態だった。さっきま  
で公園で戸隠に泣き付いていたというのに。いつの間にか眠ってし  
まっていて、戸隠が家まで運んでくれたのだろうか？ ………………

それだったら割と恥ずかしい。

「戸隠さんですかぁ？さっきも言ったとおり、今は第三学区の操車場にいると思いますけど」

「……………第三学区？……………もしかして!?!」

「うん、御坂ちゃんの想像したとおりだと思うよ。今、戸隠は一方通行の所にいる」

「……………」

言葉が出なかった。そういえば意識が落ちる前に何か言っていたような気がする。心配するなどが、信じているとかそんな類。きつと戸隠は戦っているだろう。

「おっと、行かなくちゃとか、思っちゃダメだよ？」

その事実に関向かいそうになった身体を香奈さんに押し止められる。

「なんで、ですか？」

「今が一番大切な刻だからよ」

「……………なんですか、それは」

押し止められる理由を聞いても適当に返された。再度聞いてみただけ、応えてくれることは無いだろう。あまり期待していない。

「うーん、多分今言うべきことじゃないから、あまり理由は言うべきじゃないんだけど、彼にとつて、戸隠にとつて確認の刻なの。確認が何かは言えないけど。まあ、私としては変な理屈を並べて、戯言を言っているとしたか思えないんだけどね?」

「……………」

戸隠はなかなか自分の本心を明かさなから、と香奈さんは続けて苦笑いをした。確認、それがなにを意味するのか分からないけど、きつと深い意味はないんだろう。どうせ戸隠の事だし。

「……………あ、」

戸隠の事を考えて、香奈さん達の方を見て違和感を感じた。

「ん? どうしたの?」

「そういえば、香奈さん達は今回の件について何か知っているんですか?」

「ああ、まあちょっとね」

そう、香奈さん達はまるで私がここに来ることを知っているかのように、今回の事件に知識があるかのように話が自然だった。それを聞いたら、香奈さんは後頭部を撫でながら再び苦笑した。

「予備知識はある程度聞いてるんだけどね、戸隠から。ま、それを語るには彌子の力が必要かな?」

「……………彌子?」

「私たちの、大切な家族だよ」

香奈さんから聞きなれない人の名前が出た。どうやら、あの戸隠<sup>はか</sup>、  
またしても家族を増やしたらしい。

「彌子ー？」

悶々と、言葉にし難い気持ちに苛まれていると、香奈さんがキツチ  
ンであるつか、そちらに声をかけた。

「はいなー、呼んだー？」

すぐに快活そうな声が向こうから聞こえて、ぱたぱたとスリッパが  
床と擦れる音が近づいてくる。そちらを見ると、茶髪をポニーテ  
ールにしてニコニコと笑う美人がいた。………また美人か。

「おー、起きたんやね。」

「あの、あなたは？」

「あ、忘れとったわ。うちは散袈火彌子、科学者兼研究者よー？  
彌子ちゃん、って呼んでな？」

「よろしくお願いします、彌子さん」

「……………最近の子って冷たい……………」

ニコニコと朗らかに笑いながら顔を覗き込まれたから、少し仏頂面  
になりながら訪ねる。直ぐに彌子さんは自己紹介したけど、なんだ



かこの人の言うことには天邪鬼にしたい気分になる。関西弁だから、とっつきやすいのだろうか？

「はいはい、嘘泣きは止める！ さっさと今回の事件に関して説明をして」

「……………うう、なんかうちの扱いが酷い気がする」

「……………彌子なんてそんなもん」

「……………酷いっ！！」

……………どうやら家族からもそんな扱いらしい。ていうか散袋火つて、名字が違うのは何故だろう。どうせ戸隠の事だからいろいろ有るんだろっけど。

「……………うう、皆なんか、皆なんかあ！！」

あ、いじけた。

「……………はあ、面倒くさいわね。」

そして、その様子にため息をつきながら呆れる香奈さん。こちらにアイコンタクトで、ごめんね、と言っているので、気にしないでください、と返した。

「……………ありがとね」

私のアイコンタクトを受け取った香奈さんは礼をしながら彌子さんを見る。そして、奈美さんに指示を出した。

「はあ、奈美」

「はいはい！」

「刺しちやいな」

「……………えっ？」

なんか、今不吉な言葉が聞こえたような……………。

「あいあいさー！！」

そして、奈美さんの手元に突所として現れるナイフ。グルカナ이프。東南アジアの武装民族が使う、大型の岩のようなナイフだ。奈美さんはそれを嬉々とした表情で持ちながら彌子さんのもとに、……………  
……………って！！なに私は説明しているんだ！！！！

「ちよっ！！！！ ストップ！！ ストップ！！！！」

今までのシリアスモードはどこにいった！？ 流石近衛家！！ シリアスブレイカーを全員が兼ね備えているとは！！ ってか、ちよっ、奈美さん！！ 逆手に持ったナイフをどうなさるのでー！！？

一応終わった一方通行（前書き）

やっとここまでたどり着いた！！

しかし、遅れて申し訳ありません。テストに修学旅行、宿題三昧、全統模試とやる事が多くててんてこ舞いでした。

理由としてはこんなものです。どうぞ、楽しんでいてね？

## 一応終わった一方通行

「はあ……………、はあ……………、はあ……………」

「はあ……………、はあ……………。いやあ、少し調子に乗っちゃったわね」

「……………それで済むのね」

あれから数分。私は息を切らせながら膝をついていた。

奈美さんがグルカナイフを取り出して彌子さんに突撃したときはどうなるかと思った。本当に刺しにいくかと思うほど鬼気迫る表情だったせいか、無駄に頑張って取り押さえただけ、今思うと、これも近衛家流の励ましなのかもしれない。……………多分それは無いと思うが。

「さて、落ち着いたところで事情を話すとしますか」

全員が落ち着いてソファアに座ったところで香奈さんが切り出す。その手には先ほど小夜さんが淹れてきたコーヒーが注がれたコーヒーカップが握られている。コーヒー独特の香ばしい香が鼻孔を擦った。確かに美味しいから戸隠がコーヒー好きになるのもわかる気がする。

「……………ま、今は関係ないか」

「ん？ 何か言った？」

「いえ」

「そ、なら話すわね」

今は香奈さんが話してくれるという戸隠の目的とやらを聞くとしよう。

「まず、戸隠の目的ね。実は私も知らされていないのね。だから私から見た見解だと、目的は何かの区切りをつけること、そう踏んでいるわ」

「何かの区切り？」

「ええ」

香奈さんが思慮深い顔で頷く。

区切り。何の区切りだろうか。今回の事件は私の問題が発展して出来たものだ。それに戸隠が関わってくるとは思えない。だけど、香奈さんは私よりも戸隠の事を知っている。何か引つ掛かっているのかも知れない。

そうやって、深く考えていると、小夜さん、それに新たに増えた最愛ちゃんと理后ちゃんも加わる。

「…戸隠はどんなときも傍観者を気取っていた。私たちは義理の妹だから戸隠の出生した頃を知っていたわけじゃない。もしかしたら、そこに傍観者を気取る切っ掛けが有るのじゃないかと思ってるの」

「……………私も同意見。とがくれはあまりにも色んな方面の上層部の人間にたいして顔が広い。学園都市統括理事長にイギリスの国政

の一角を担っている最大主教、世界中の魔術師が狙う禁書目録、最低でもこんだけの人間に知り合いがいる。普通はこれだけの人間と知り合いになるのは無理」

「他には世界に二十人しかいない聖人とか、あの最強の陰陽師、安倍晴明も輩出した平安から続く土御門寮の出身の陰陽師。戸隠の名前も戸隠神社とがくしに関係あるとも思っているからね。それに普通の人間ならまず知ることのない暗部の組織を全部超知っているですからね。私が超所属していたアイテムの個人個人のプロフィールまで全部知っていましたから。ま、そんな事は超どうでもいいんですけど」

「いや、ちょっと待ってください!!」

「ん？ どうしたん？」

「どうしたって………、今なんて言いました？」

なんか、聞き捨てならないというか聞き捨ててはならない言葉が多々あった気がする。

「なんてって、学園都市統括理事長とか最大主教とかのこと？」

「そう!! それです!!」

なんだ、学園都市統括理事長とか最大主教とか魔術とか聖人とかって!!

「それがどうしたの？」

「それがどうしたの？、ってどうしたどころじゃないですよ!!」

学園都市統括理事長は言わずもがな、聖人つてジャンヌ・ダルクとか孔子とかの偉人のことですよね!？」

「ま、まあね。聖人全員が偉人つてわけじゃないけど大体あっていいよ」

私の鬼気迫る表情に驚いたのか、言葉をつまらせながらも香奈さんは応える。聖人といえば、中国では聖人君子というように賢人だとか賢者だとかの意味を持っていて、欧州なんかでは聖人はいわば神の信託を受け取る預言者のことで、彼ら聖人が歩いた場所や住んだ場所は聖地になるとまでいわれている。そんな凄い人間と知り合いなんて、ホントアイツは何者なのよ!!

「あ、あの……………」

「……………アア!？」

「ちょ、怖いよ御坂ちゃん。肩が痛いから離してほしいんだけど……………」

「あ!!! す、すみません!!」

私の下から呻き声が聞こえたので下を見ていると苦痛に顔を歪めた香奈さんがいた。華奢なその身体に似合った、細く滑らかな曲線を描く肩を握り締めていたようだ。申し訳なく思った私は、慌てて飛び退く。

「あたたたた……………」

「ほ、ホントにごめんなさい!!」

「いや、いいよこれぐらい。驚くのも無理ないからね」

香奈さんは私が悪いのに笑いながら許してくれた。お姉さんだなあ。

「ま、御坂ちゃんみたいにまだ裏の世界に一步片足踏み込んだだけじゃ話にはついていけないわよね。私たちも最近ようやく裏の世界の勢力図とか、基本的な用語を知ったばかりだしね」

「……………は、はあ」

でも、こんなに大人なお姉さんでも裏の世界で生きていると思うと、この世界はなんて不条理なんだろう、って思うわね。まあ、戸隠たちの生き方を否定するわけじゃないんだけどね。

「さつきも言ったとおり戸隠は何かを知っていてそれに基づいて動いている。それは戸隠が帰ってきてから聞くとしましよう。私たちも随分隠し事をしているから」

「あの、それは私が聞いてもいいことなので？」

それにしても、香奈さんたちはさつきから私も混ぜて凄い裏の話をするらしい。私はこの事件の真相と戸隠の秘密さえ知れたらいいのだから、別に香奈さん達が抱えているという隠し事を聞くつもりは無いのだけど。だけど、

「もちろん。だって家族じゃない」

「……………」



そう、戸隠達近衛家の最大の謎は赤の他人ですら直ぐに家族と認めるのだ。誰でもってわけじゃないけど、家族をとて愛している。そこに入れてもらえるのは勿論、嬉しいのだけれど、それでも家族と認めるのが早すぎる気がする。

「どうしたの？ そんな鳩がガトリング食らったような顔をして」

「それは多分死体が残らないぐらい木っ端になると思う……………」  
「じゃなくて!!」

香奈さんの微妙なギャグに取り敢えず突っ込んであげて、香奈さんに迫る。

「家族って、私はまだ貴方たちに出会って二回目ですよ？ 家族だなんて、血も繋がってないのにおかしいですよ……………」

私は困惑した表情で言った。正当性はあった。だけど、それは正真正銘の地雷だったみたいだ。

「……………御坂ちゃん」

「は、はい……………」

「それは私たちを侮辱したと取っていいのかな？」

「え……………?」

突所として変貌した香奈さん。見れば他の人も一様に怖い顔をしている。

そういえば、

戸隠の家の人間は全員血が繋がっていなかった。私はどうやら本当に馬鹿な事をしたらしい。私の後悔を余所に、香奈さんはなおも語る。

「御坂ちゃんは知らないかもしれないけど、私たちは血が繋がっていないのよ。元々私たちが出会ったのも一ヶ月かそこらだしね。だけど、私たちはそこらの家族よりもよっぽど家族よ。血も縁も無いけれど、私たちは家族」

香奈さんの言葉に頷く皆。私はその言葉に俯くしか無かった。軽率だった。考え無しも甚だしい。

「だから、御坂ちゃんのその言葉は私たちにとっては侮辱に等しいの。だって私たちは血が繋がっていなくても家族だから」

「……………」

上から降り注ぐ言葉。その言葉のうちにはどれだけの愛情が含まれているんだろう。きっと溢れんばかりの愛がたまっている。

「……………私が考え無しでした。ごめんなさい」

そんな愛を感じたから、私は謝るしか無かった。私にはまだまだ彼らの事は理解できていなかった。次はどのような説教が来るのだろうかと、身を強張らせていると、

「……………ありがとう」

「……………えっ？」

フワリ、と私の頭を抱き抱えるように影が差した。同時に頬や頭に感じる布地のザラザラした感触。どうやら香奈さんに頭を抱き抱えられているらしい。甘い匂いが鼻腔を撫る。

「君は自分の非を認めて謝ってくれた。私たちは御坂ちゃんに私たちを知ってもらいたかったんだ」

「……………」

スツ、と私の頭から手を離して私と向き直る香奈さん。その瞳には慈愛の念が含まれていた。

「一般的常識なら義理の家族には愛情が生まれにくいのが普通。それに出会って間もない人間を家族だと信頼するのは愚の骨頂。御坂ちゃんはその固定概念に沿って先程の様に判断したんだよね？ それが普通だから自分を卑下しないでね。だけど、私たちという存在がいることも忘れないでほしいかな？」

ま、さっきまでの私も大人気なかったよね？ ごめんね、と香奈さんは茶目っ気たっぷりウィンクして謝った。

「……………あう」

瞬間、身体中の力が抜けて情けなく地面にへたり込んでしまった。世が世なら英雄に近い器を持っているだろう香奈さんの威圧感私を重く蝕んでいた。ここまで寛容な人は中々いないだろうから。

「おいおい、超電磁砲といえど人の子ということかな？ まさかそこまで腰を抜かすとは思わなかったよ」

「……………暗部の殺気を表の人間で耐えられる人間は少ないかと特に香奈は私たちのなかでも特別な気がする」

「……………ふふ、実際特別なんだけどね」

「ん？ なんかいった？」

「いや、なんでもないよ」

香奈さんと小夜さんの軽口の応酬を横で眺める。あるところで香奈さんの様子が自嘲するような笑みを浮かべていたような気がするが、私の目の錯覚だろう。

「さて、色々といざいざも解消できたことだし、話を再開するとしてみましょうか」

「……………そうだね」

やはり目の錯覚だったのだろう。私の視界に映る香奈さんは何時ものごとくお姉さんな艶やかな笑みを浮かべていた。

「さて、どこまでいったかな？」

「戸隠の知り合いの話しまでだな。こちらはそれを勘ぐつとるつちゆつ話や」

「そうそう、そんな話だったわね」

香奈さんと彌子さんは話を中断していたところまでを確認してから、私の方をみた。

「さて、私たちはやっぱり戸隠には疑問を感じざるを得ないわけね。彼の圧倒的力と権力、人脈は高々中学生が握れるものではないの。私は戸隠に何かがあるのか聞くつもりでいるわ」

「……………私にもそこに同席して欲しい、そうですね？」

「ええ、理解が早くて助かるわ」

香奈さんの口振りから予想して言ってみたが当たっていたようだ。赤の他人にはこんな話はしないし、先ほど家族認定してもらった。この推測にいたるまではそう難しいことではない。

「そしてそのためには戸隠が早くこの場に帰ってくるのが必須ね」

「そうやね。でもうちらには戸隠から待機命令が出てるえ？ 勝手に動いていいんかいなあ？」

香奈さんと彌子さんの問答を聞きながら今までの会話からやるべきことを選定する。まずは戸隠の最終的な力の確認、次に出生の秘密、最後に魔術との関係と三つだ。これは一刻も早くというわけではないが、私たちの心の内で燻る知的好奇心を抑えるためには素早い方がいい。

だが、今私たちは戸隠より待機命令が出ているらしい。きっと一方通行との戦いに巻き込みたくないのだろう。この辺りに戸隠が先読

みしていたかのような予定調和が見受けられる。まるでこの場で待機しているように昔から定めていたように。全てを見過ごされているようだ。だけど、そんなものは香奈さんに関係が無いように思えるのは何故だろうか。その理由は直ぐ様解決した。

「いいに決まっているじゃない」

「えっ？」

可愛らしげに微笑む香奈さんは目を細めて、口元をにんまりと釣り上げていった。

「約束は、破るためにあるのよ」

……成る程、流石戸隠の妹だ。予想の斜め上をいく解答だった。

「そして来てしまったというわけか。第三学区の操車場に」

「そゆこと」

「はあ……………、折角の仕掛けが台無しだぜ……………」

俺は困惑していた、いや、驚愕していた。何に？ 香奈たちが俺との約束を破ってまでここに来たことだ。わざわざハイヤーを回してまで、だ。

「んで？ 何しに来たんだよ。わざわざ危険を冒しにきたのか？」

「違う、全然違うよ」

香奈に聞いた話を総合して聞いた。横にいるミサカ第10032号や、美琴、妹達も傍にいる。当麻と一方通行は未だに拳をぶつけ合っている。そんななかこのほのぼのさは正直別空間にいるように感じる。

「約束は破るためにある。ただの知的好奇心だよ」

「……………はあ」

そしてこの香奈の解答である。流石俺の妹と褒めるべきか、それとも心配させるなど叱るべきか迷うところである。タダでさえ当麻と一方通行が空気になりかけているのに、これ以上俺たちの会話を増やしていいものか。ますます当麻達が空気になるじゃないか！！

「なにか？ お前らは単純に知的好奇心で、面白半分でこの場に来た、と」

「そうだよ？」

再度ため息。眼前にいるこのお姉さんは相当豪胆なようで。普通の感性を持っている人間なら叱るんだろうな。だけどこの場に普通の感性を持ち合わせた人間は生憎とない。全員が全員、特出した力を持っている。香奈の戦闘能力の低さも、俺たちと比較して一番低いだけで、実際は完全武装の警備員十人を相手しても殺害できる程度の力はある。そんな人間が常識を持ち合わせているだろうか、いや無い。馬鹿と天才は紙一重なんだよ。

「……………はあ、これも俺が仕込んだ結果、か」

「何か言った？」

「いや、なんにも」

ま、これにも俺に原因の一端がある。香奈と小夜、奈美は出会う前、つまり雑貨稼業の店で保護したときはただの一般人だった。力も権力もないただのチャイルドエラー。だが、俺と出会ってから事態は好転した。香奈たちは最初から才能を持っていた。俺が殺しを仕込



むとスポンジのように技術を吸収していった。その最たるが奈美だ。出会った当初はほんわかした天然娘だったのに、一ヶ月裏に浸かれれば、真つ先に俺色に染まった。……………結婚式のウェディングドレスの意味じゃないぞ？ 戦い方が狂気じみてきたのだ。ナイフを振り回し、重火器をぶつ放すという俺的戦いに染まってきたのだ。奈美には零崎的血が流れていたのかもしれない。まあ、そんな感じで、この三人と、彌子というマッドサイエンティスト、理后、最愛等という裏世界最強ラインナップに常識人はいないのだ。唯一例外の美琴は叱られると思って目と口を堅く結び、涙を浮かべながら頭を腕で隠している。……………お前俺より（身体年齢的に）年上だろうが。

「ま、来ちまったのはこの際しようがないから何も言わん」

「……………怒らないの？」

「ぐはぁ！ー！」

なんか、美琴の様子を見てみるとスゲー怒る気が失せる。だから、この件については何も言わないことにした。しかし、ここで伏兵登場！！ 怒られると思っていて美琴は涙目のまま赤く上気した顔で上目遣いを行使用して見上げてきた。……………不覚にも吐血してしまっただじゃないか。

「……………ふむ、美坂ちゃん。流石ね」

「……………顔を赤らめて上目遣い、その上涙目なんて私たちじゃ恥ずかしくて出来ない。私たちに出来ないことを平然とやってのける。そこに痺れる憧れる」

………なんか、後ろからスゲー気になるネタが聞こえた気がするが、突っ込んではいけないだろう。お忘れかもしれないが、原作ではこのシーンはかなりシリアスな場面だ。これ以上コメディ色を多くしちゃダメだと思う。

俺はそう思いながら、口元についた血を拭う。どうやらそろそろ戦いに片が付きそうだ。

そういえば俺がこの世界に来てすでに二カ月になる。

だが、この二カ月は俺と世界にとってまだ始まりのプロローグだ。

俺は確固たる地位をこの場に築き上げた。そろそろ、行動に移ろうか。

「一方通行に上条当麻、禁書目録、そして俺こと舞台の支配人に脚<sup>アシ</sup>本家。舞台の役者は出揃った。俺はせいぜい、物語を面白くしようかね？」

俺は、当麻が一方通行を殴り飛ばして終結した戦いを眺めながら、仕掛けを回収する。悲しいかな、バタフライ効果のお陰で、プラズマなんざあらわれやしなかった。折角その対処魔術を用意していたというのに。

「ま、それもまた一興か」

当麻の拳に崩れ落ちる一方通行。ここに物語の撃鉄は振り下ろされた。

**綺麗に話を纏めるための茶番（前書き）**

お久しぶりです、戯言です。

今回は前話の補完です。ま、後何回か続くけどね

## 綺麗に話を纏めるための茶番

「さてさて、楽しい楽しい暴露回の始まりだよー！！！！」

やあやあやあ、久しぶりだな。毎度お馴染み主人公の近衛戸隠だぜ。先程まで当麻と一方通行が殴りあいをしていたのを見ていたが、それも終了しちまったから現在は近衛邸に今回の当事者が集まっている。

「……………テンション高いな、おい」

「ハツハツハ、ようやく俺の謎？ が解きあかされるんだぜ？ 楽しみになるに決まってるだろお」

「それは同意ね。私も純粋な知的好奇心が止まらないもの」

「……………うん、私も」

先程からテンションが高い俺にげんなりしている当麻。その当麻の視線は横でむつとりとした表情で腕を組み、目を瞑る一方通行へと向けられていた。そして俺から見て左側には香奈、小夜、奈美、彌子がパソコンに色々打ち込んでいる。恐らく俺の謎？ を記録していくのだろう。向かって右側にはミサカ第10032号と美琴、最愛、理后が座っている。こちらもどことなく楽しそうだ。

「……………オイ」

「ん？ どつたの一方通行」

「どつたのじゃねーよ。なアンで俺もここにいるんだよ」

全員いることを確認し終えて俺がソファアに座ると、前方の当麻と同じソファアに座る一方通行が睨みを利かせながら聞いてくる。

「そんなの、君が当事者だからだろ？ 一方通行クン？」

「……………ちッ」

一方通行にわざとらしくニヤニヤとした表情で答えると、一方通行は忌々しげに舌打ちをして俺から視線を外す。一方通行の横には当麻が座っているからな、能力を行使したとしても、押さえ付けることは出来る。それに、本能的だが、俺の正体の一端にも気が付いているらしいから動きを見せないのもあるだろうが。まあ、それはさておき……………

「さて、早速今回の事件について、から話すとしますか」

「今回の事件について、これについてはまず学園都市の最終理念に触れてからにするか」

俺は立ち上がり、そう言う。まずはこの事件の真意と裏について整理と結論を出してから俺の話に移るとする。

「さて、美琴」

「何？」

「この学園都市が能力者に対して何を目標としているか、知っているよな？」

「勿論よ、レベル6を目指すこと、よね？」

「正解だ。おめでとお〜」

美琴の言うとおり、今回の事件に関して、最も根幹を為しているのはレベル6という神に至るための究極だ。この概念が今回の事件を引き起こした、といってもいい。

「まず最初に、美琴に答えてもらったレベル6について話をしましょう。まあ、これには知識をある程度持っている人間も多いだろう」

俺の言葉に反応したのは現役の学生である美琴、当麻。裏の世界で

生きる最愛、理后、彌子、一方通行だった。まあ、一方通行は当事者だからな。知っているのは当然か。

「神ならぬ身にて天上の意思に辿り着くもの。レベル6を目指すために学園都市が掲げたスローガンみたいなモノだ。この言葉で天上の意思はイコール神の事と認識してもらってかまわない」

「……………神様だア？」

俺の言葉に反応したのは一方通行。一方通行は嘲笑を浮かべて口を開く。

「神さまなんぞ、この世にはいねエだろうが。この科学に溢れた世界によオ」

確かに。一般常識的にはこの学園都市に住む人間、先進国の宗教に疎い人間は神という不確定な概念だけの存在を信じる事はしないだろうな。だが、

「この世界に神はいる。それは魔術という事実が真実を裏付けている」

「……………なんだと」

この世界に神はいる。いや、どの平行世界に行こうと神は俺たちの頭の上に座している。俺を造り出したあの創造神が俺に神という存在を強制的に認識させるように。

「魔術という技術がこの世界にはあるのだよ、一方通行」

「……………魔術ってアレかア？ リリカルなんたらッて、術式唱えて隕石落とす奴かア？」

「いやいや、そんな魔法少女的魔王でも、最終お伽噺的メテオでも無いから。もつと現実的で理解できる範疇のものさ」

「……………ふうん、アンタがこないだ第一七七支部で使ってたのは魔術、な訳ね？」

「その通り」

一方通行と美琴と会話をしながら俺は手元に一枚のカードを取り出す。ステイルの様に改造ルーンは使用していないが、カノのルーンを刻んであるものだ。俺はそれを見せびらかすように全員に見せる。そして、

「このように一枚のカードでも条件を満たせば……………」

ポウッ！！

「……………おお……………」

「焰剣を出す事が出来る。超能力者なら特によくわかるだろ？ ところが超能力とは似て非なるモノだって」

俺は術式を発動して、焰剣を手元に造り出す。この世界には天草式のような場と条件を満たせば発動出来る魔術もある。詠唱という行為もあまり必要が無い。

「凄いなあ、ここまでの形と熱量を出そう思ったら発火能力者でも



レベル4から5は必要やね。しかもここまで安定させるなら、それこそレベル5はいる。超能力者じゃ無いと難しいやろうね」

「そうね、それに炎は温度が高くなれば高くなるほど色が青白くなっていく。白炎ならそれこそプラズマ化していても可笑しくない。摂氏温度なら一万。でも、これは内側に熱量を保有しているだけのモノで、三千程度しかない。炎色反応でも起こしてなかったら白炎なんて造り出せないわね」

「俺のベクトル操作を受け付けねエ。俺たちが知らねエ技術、魔術で出来ていると認識しても不思議じゃねエな」

超能力者二人にマッドサイエンティストが簡単な見解を述べる。少し見ただけでここまで考察出来るのは感嘆を感じざるを得ない。

「まあ感じてもらった通り、こいつは魔術の代物だ。そして魔術というのは神という存在を無くしては語れない。不確定ではあるが神というものの認識を垣間見ることが出来たと思う。さて、話を戻そうか」

俺は腕を一振りして焰剣を消す。そして、当麻たちを見る。

「学園都市が神ならぬ身にて天上の意思に辿り着くもの、通称S Y STEMを目指しているのはさつき話したと思う。さて、このS Y STEMとはレベル6を表すのだが、これを造り出すために学園都市が行った計画は何か分かるよな、一方通行、美琴」

「「……………絶対能力進化計画（レベル6シフト計画）」

「正解だ」

いやあ、美琴と一方通行に答えさせるときは不覚にもゾクゾクと愉  
悦が沸いてきたね。うんうん、気まずそうな、言いにくそうな表情  
でボソボソと話す姿。家族だったから良かったものの、一般人だっ  
たら潰したくなるくらい愉しかったね。

「さて、この絶対能力進化計画は一方通行という最強の能力者に戦  
闘という経験値稼ぎさせてレベル6にレベルアップさせるといふ非  
常にシンプルで簡素な計画なわけだけど、これには様々な思惑が入  
り混じっているわけ」

「思惑、ね。最近聞いた話から察するに、量産型能力者計画（レデ  
イオノイズ計画）のクローンの処理、神ならぬ身にて天上の意思に  
辿り着くもの、暗闇の五月計画、木原一家、だと推測できるわ」

「香奈、パーフェクトだ」

「……………香奈、凄い」

「ありがと、小夜」

きゃいきゃいとかしましく笑いあう三人娘。だが、当麻たちとの温  
度差は激しい。というか、当麻たちはあまり話についていけない  
気がする。うん、あの一方通行ですらだ。これは問題と言うより、  
話が滞る可能性がある。説明しますか。

「話についていけない人間がいるから一つずつ説明していくとし  
よう。まず、最初はある最強の能力者が産まれたことから始まる」

語りの序章は一方通行についてだ。これは此れからの俺たちの関係

の円滑化に付随する。原作では結局美琴、当麻はなぜ一方通行が計画に参加していたか知る描写が無い。これでは一方通行は悪人のレツテルを張られたままになる。一方通行は一流の悪人だ。三流に間違えられたままなど、俺としても面白くない。俺だって一流の悪人を自負しているし。

「その最強の能力者はある理念があった。人を護る、という理念だ。超能力というのは強い理念があればこそ、力が強くなっていく。それは彼にも例が漏れず彼は弱冠小学四年生でレベル5へと上り詰めた。その能力者の能力はベクトル操作、通称一方通行だ」

「「「「……………」」」」

当麻、美琴、一方通行の表情が驚愕に染まる。当麻と美琴は一方通行を信じられないものを見ながら、一方通行は誰も知らないはずの自分の過去を知っている俺にたいして。しかし、俺はそれを気にせず話を続ける。

「最強の能力、一方通行はまさしく人を護れる能力だった。その少年は歓喜した。しかし、強すぎる能力は当人の思惑を外れて外界に影響をもたらす。最初は虐められている少年を助けたときだ。最強の能力者はいじめっ子といじめられっ子の間に入り、能力を行使する。しかし、制御を間違えていじめっ子は腕を複雑骨折させられて吹き飛んだ。最強の能力者はそれを最善だと認識した。だが、助けてもらいたいじめられっ子は最強の能力者にこういった。『化け物』と、」

「……………テメエ……………、それを何処で……………」

「ふふん、それはこの事件の概要を補完してからにしてくれと、」

「こちらとしても話しやすいのだけど」

「……………チツ、好きにしる……………」

一方通行が抗議の目を此方に向けてくるが、周りの集中している目に当てられたのか、俺の言葉に反論もせず大人しくなった。

「じゃあ、どんどんいこうか。」

その少年は、化け物と呼ばれた事に酷く傷ついた。だが、学園都市に彼の心を理解できる人間は居なかった。彼を危険と感じた当時の学園都市統括理事会は彼を始末するために暗部、果てには軍隊をも動かして、彼を殺しにいった。だが、少年は物理法則に則ったこの世界に於いて最強。兵器などで殺すことは出来なかった。そして、彼はますます暗闇に堕ちていく」

当然といえば当然か。すべての世の中で力を持つ英雄でも悪人でも、最終的には孤独に堕ち、ひとりで死んでいく。オルレアンを救ったジャンヌ・ダルクは敵国であるイングランドで、魔女認定を受けて火炙りに、ケルトの英雄アーサー・ペンドラゴンは部下に裏切られ国を焼き、半神であるギルガメッシュは友である土くれを殺して独りになった。他にも力を持ちすぎて孤独に堕ちていった人間は数知れない。

ただ、そいつらは力の使い方、世の渡り方を知らなかっただけ。なまじ力を持ちすぎると無駄なプライドがまとわり着く。今の日本人のように他人指向型の人間に墜ちるといつているわけじゃない。ただ、一つ見方を変えるだけで、それだけで目の前にある道は開けるものだ。一方通行はそれが出来なかっただけ。

「彼はそれを自分の力が足りないからだと自虐した。もっと力があ

れば頼られると、もつと力があれば人を護れると。それを目ざとく見つけて利用したのが学園都市統括理事会だ。彼らは絶対能力進化計画を彼に見せ付けた。彼はそれに賛同した。力を付けられるのなら二万人を殺すのも厭わないと」

そして、彼は人を護るために、人を殺すという矛盾を犯しはじめた。俺は目の端で当麻を捕える。瞬間、当麻は一方通行に掴み掛かった。

「てめえ、それは本当か!!!」

鬼気迫る表情で一方通行を睨む当麻に、一方通行は忌々しげに顔を歪める。

「……………事実だ」

「てめえ!!!!!!」

「止めとけ、当麻」

「だが……………!!! そんなの、一人の人間であるミサカ達が可哀相じゃねーか!!!!!!!」

「落ち着けよ、当麻。話には続きがあるんだ」

「……………え、」

事実だと肯定した一方通行を殴ろうとした当麻の拳を止める。当麻は俺をも睨んできたが、俺は気にせず話を続ける。

「当初、絶対能力進化計画は御坂美琴というレベル5を千人以上殺

さなくてはいけなかった。だが、発電能力者レベル5を千人集めるのは不可能。その時、学園都市統括理事会が目をつけたのがクローニングを手懸けていた違法研究所」

「……………」

「美琴の因縁、筋ジストロフィー解明研究所だ。彼らはレベル5である美琴のDNAマップを彼女の善意に付け込んで手に入れて量産型能力者計画を発案した。彼らはクローニングに成功したが、クローニングされたミサカ達は良くてレベル3しか発電能力を発現しない欠陥電気<sup>レディオノイズ</sup>。とてもじゃないが軍用には転化出来なかった。だが、それに目を付けたのが学園都市統括理事会だ。奴らは人を人として見ない。それは研究所も同じだった。一体十四万で造れるクローン、それを二万売れるんだ。研究所は金に目が眩んだんだよ」

「……………最低ね。魔術界に於いて人には一つの魂が宿ることになっている。それは例え造られたクローンだろうと。それを戦争の道具のように……………」

香奈が苦々しく唇を噛んで呻く。俺たちは殺人鬼だ。だが、俺以外はむやみやたらに人を殺さない。それこそ、香奈たちは勝手にわけもわからぬまま造り出されたミサカ達を殺すことをよしとしないだろう。俺？俺は殺すよ？必要があれば、だがね……………話を戻そう。

「だがな、最強の能力者である彼は違った。彼はこの計画に矛盾がある事を知っていて半ば諦めながら計画を遂行していたのさ。だが、残り半分は良心で殺すことをよしとしなかった。彼は何処かで自分を止めてくれる人間が現われることを望んでいたんだ。自分が負ければ、自分は最強じゃなくなる。そうすればこの馬鹿げた計画は終

わり、これ以上ミサカ達が『殺される』事は無くなると。彼は自分の事はどうでも良かったのさ。自分は闇に堕ちていい、だからミサカ達をこれ以上殺さないでくれ、とね」

「成る程、だから被験者一方通行は戦闘中私達と会話をして私達が自分を倒せるように誘導していたのですね、とミサカは戸隠の言うことに感嘆を漏らしながら納得します」

「……………」

ミサカの言葉が引き金になったのか、当麻は一方通行の胸ぐらを掴んでいた手を放す。一方通行は忌々しげにこちらを睨みながらソファに座った。そして、衝撃を受けているのは当麻だけじゃない。俺以外のこの場にいる人間全員だ。彼女等は一方通行を意外なモノを見るような目で見つめる。一方通行はその注目するような目線に耐えられなくなったのか、舌打ちをして目を瞑る。

「とりあえず最強の能力者の話は終了したな。つまり、今回の計画において一方通行の罪は消えないが、事実は消えた。ツリー・ダイアグラムも打ち落とされたし、この計画はもう繰り返される事はないな」

「へえ……………ん？ ちょっと待って……………」

「どうした、美琴」

「……………ツリー・ダイアグラムが打ち落とされたって、ホント……………？」

「え？ ああ、うん。打ち落とされたぜ。インデックスによって」

ああ、そういえば美琴はツリー・ダイアグラムが打ち落とされたの知らないんだっとな。

「インデックスが暴走擬いの事をしてね。最強魔術の竜ドラゴンの殺息で木っ端微塵に爆発しちゃった」

「……………はあ……………」

俺がその時の事を説明すると、美琴は緊張がキレたように息を大きくはいてソファーにのめり込むように座り込んだ。計画がもう再開される可能性が消えたからだろう。可愛いなあ、全く。でも、ミサカ達のクローニングも、今回の計画もすべてブラフだと知ったら、こいつらはどうなるんだろうな。ま、少し楽しみではあるな。精神が崩壊するか、それとも気持ちを奮い立たせて立ち向かうのか。楽しみだぜ。



## 初のナノマシン使用（前書き）

タイトル通り初のナノマシン使用回。詳細は見て！！　ちなみに彌子の関西弁は大阪弁ではなく、三重の伊勢弁です。作者が三重県出身ですから。　疲れた　えらい、等という表現がありますが、解りづらかったら感想などで指摘していただけると嬉しいですよ。

## 初のナノマシン使用

「さあさあさあ！！！！！　お次は俺こと近衛戸隠様の暴露大会だぎや  
あああああ！！！！！！」

「「「.....」」」

どうも、毎度お馴染み主人公の近衛戸隠だぜ。今度の話は俺の秘密大暴露大会だぜ。意図？　そんなの面白いからに決まってるだろ？　物語り的には全く進まないから読まなくても次回から楽しめると思うけど。ま、今回で俺達家族のこれからが決まると思えば、ある意味有意義な物にはなるだろう。

「さてさてさて、まずは俺の出生と、君たちに会うまでを話すとしてようか」

全員が無言で俺を見る。その瞳には好奇心と、不安が映っている。これからなにが起こるか、怖いのだろう。わからないでもない。未知のモノに触れるのは誰でも戸惑うもの。しかし、その先には自分の知らない何かが待っている。だから人は色々なモノを探求していくのだからうけど。今はこんな話をしている場合じゃないな。真面目に行くとしてよう。

「俺の出生。それは一般からとてつもなくかけ離れたものだど誰も  
が言う。何故か？　普通に溢れた家族の中に生まれた俺は、三歳の時に両親を無くした。交通事故だといわれていた。それだけなら悲劇の主人公に俺はなれただろう。しかし俺は普通ではなかった。三歳にして神童と言われ始めて、小学校低学年の時には周りの高校生は俺に知力も腕力も適わなくなった。俺に友達は居らず、親戚も俺

には触れようとせず、だが俺はそれを普通だと思っていたんだ」

一方通行の話に似ている、と思う。別に処遇とか、人生とかの話じゃない。『力を持ち過ぎるものは孤独になる』という点で、だ。一方通行も、俺も力を持つが故に孤独になった。まあ、俺の場合自分が孤独だとは知らなかったんだがね。

「んで、俺は高校生まで生きていたわけだが、ある日唐突に死んだんだよ。喉に蕎麦を詰まらせて」

「「「「「え？」「」「」」」」」

全員から唾然とした様な声が漏れる。絶対死因のところだろう。

「あの……………」

「ん？ どつたの？」

「喉に蕎麦を詰まらせて死んだって、ホント？ いや、てか死んだの、一度……………。戸隠って……………」

「ああ、それは今から理由を話すから」

ほらな。案の定香奈から疑問の声が飛んだ。一方通行まで驚いてやるよ。まあ、この話はまだまだ続きがあるから聞いてもらうとうしよう。

「さて、話の続きを話すとうしよう。俺は蕎麦を喉に詰まらせて窒息して死んだわけだが、それは事故だったわけだ。俺はある存在に殺されたのだよ」

「ある存在……………」?

「そう。遺跡の管理人、と呼ばれる火星人に」

また時間が止まった。次は火星人という単語によるモノだろう。だが、今度はさっきの前例があるためか気にしないようにしているらしい。ま、いい判断だ。

「遺跡というのはあらゆる平行世界、過去、未来、異世界の情報を集積するナノマシン搭載コンピューターで、遺跡の管理人はその情報を纏めあげてを一手に引き受けている人間のことだ。俺は遺跡の管理人に運命というデータを改竄されて殺されたわけ」

「……………」

話が突飛すぎる。それが沈黙の原因だ。俺が喉に蕎麦を詰まらせて死んだと話したら、それには犯人がいて、その犯人は火星人。うん、俺ならこんな妄言、相手しないね。だが、当事者だからこそこんな話をする事が出来るわけだ。

「なぜ殺されたか、それは俺の出生に関わる」

特に他の人間の対応を気にすることなく俺は話を続ける。

「俺は三歳の時には既に異常の一端を垣間見せていた。俺は神様に弄ばれた人間なのだよ」

俺は決め顔でそういった。

戸隠の話は想像を絶していた。三歳の時に孤独になり、それを普通だと認識していたこと。三歳にして異常の一端を垣間見せていたこと。そして、彼は創造神が造り出した玩具であること……。

うん、本当に想像を絶した。だって創造神の玩具って、神様そんなに暇人（人？）なの？

戸隠の話 요약するとこうだ。創造神は暇である。暇だから遺跡と呼ばれる情報集積システムの中にあつた戸隠の生体データを遺跡の管理人と同じモノにして、尚且つナノマシンによる身体強化を施して、普通の世界に於いて強すぎる力はどれほどの影響を及ぼすかを観察する。しかし、普通の世界では支えきれない程の力（情報）を手に入れてしまった戸隠は魂という唯一無二のデータと、一つのクローン体を残して死亡。平行世界や異世界に一人として存在しない人間になつた戸隠は遺跡の管理人に聖人とアブノーマル・完成を貰い、情報のストックが十分にあるファンタジーがある世界、この学園都市がある世界に来た。彼はナノマシンであるがゆえに、魂が消されないかぎり死なないという。うーん、信じがたい。

「……………信じがたいわね」

美琴ちゃんが思案顔でそういう。美琴ちゃん曰く、戸隠は初めて彼女等と出会ったとき、空から降ってきたという。今思うと、瞬間移動をしたあとに地面を陥没させたらしいが、瞬間移動は運動エネルギーを引き継いで発動しない。つまり、戸隠がレポートで地面を陥没させるのは難しいといえる。それに、彼の言うことは一応整合性が取れている。だが、不確定要素が多過ぎるのだ。それにいままら戸隠をナノマシン複合体、所謂シリコン整形体とか生体アンドロイドと認識するのは難しい。どこからどうみても人間だもの。だから信じがたい、のだ。

しかし、戸隠は私たちの反応を予想していたようにしたり顔で笑いながら、ナイフをグルカナイフを取り出した。彌子が一瞬びくついたのだが、奈美のあれ、トラウマになったのかな。

「まあ、お前らの言うことはわからないでもない。というか、お前らが正当性に溢れている。だからさ、」

「……………その笑顔、まさかと思うが、そのナイフを突き刺して、戸隠さんナノマシンだぜやったー、とか……………、やるわけないよな……………?」

いや、ごめん当麻くん。多分戸隠ならやると思うな。

「おお、当麻よくわかったな。その通りだ」

「なに、馬鹿なくせに空気は読めるんだな、的な顔してナイフなんか握っちゃってんですかー!? いや、自分で言っていて悲しいけ

れど……！」

「悲しいなら言つなよ、馬鹿当麻」

「それが親友に言う台詞か……！　　とうかすぐにナイフを手から離しなさい……！」

「やだ」

ザクン……！！

「……あ……」

ほらやった。ほれ見たことか。マジで自分で右腕を切り落とすやがりましたよ。そして戸隠は何事もなかったようにグルカナイフを服のなかにしまう。いや、手首からだばだば血が出ているから何事も無いわけは無いんだけどね。ほら、突然戸隠がナイフで腕を切り落とすからみんな啞然としているわけだ。しかし、

「ほらほら、よく見てみな」

「おお……！！　　血が止まってきとる」

「……しかも、落ちた腕も動いてる」

私も彌子も小夜も奈美も戸隠の腕の断面を見ながらビックリしている。別に断面の肉とか骨に驚いているわけじゃない。戸隠の腕の断面の血がどんどん止まってくる、というか黒い砂のようになって空中を停滞して、さらに床に落ちている腕もビクンツ、と一度痙攣したかと思えば空中に浮かび上がり、それも黒い砂になった。この黒

い砂がナノマシンだろう。

「よいしょっと」

戸隠が気の抜けた掛け声とともに腕の断面に黒い砂を集めた。その時点でこの場にいる全員が戸隠の腕に注目する。

「うわ、グロツッ!」

「……………おお!」

「……………グロテスク」

美琴ちゃんがおののき、奈美が目をキラキラと光らせ、小夜が無表情で傷口をじっと見る。当麻くんと一方通行くん、最愛ちゃん、理后ちゃん、彌子ちゃんは興味津々に見ている。男の子と、研究者、だものね。

さて、戸隠の腕は、というと最初にナノマシンで骨を造り、その周りに筋肉、血管が形成され、その上に真皮、皮と形作られていく。最後に光の筋が幾重にも通り、戸隠の腕が元通りになった。

「ファンタジー……………、いえ科学の極みね」

私はその様子を見てこう言うしか無かった。ファンタジーな不死は、『私』、だもの。



綺麗に話を終わらせるための本気（前書き）

短いですが、どうぞ

## 綺麗に話を終わらせるための本気

あれから数時間後。俺たちの話は漏れなく終了した。美琴、当麻、一方通行は魔術という存在に裏の世界の勢力図を理解したようである。原作よりも断然早い展開だ。何よりも魔術という存在を知ることが出来たのは大きいだろう。

他にも、俺の名前が戸隠神社に関係あるのか？ という疑問があったが、俺にはその辺りを知る術はない。俺が知ることが出来るのは、俺が知っている知識と、それに付随する事だけだ。未来の事や、根本的に知らないことは何も知りはない。だから俺が感じる事が出来るのはあの創造神のみだ。他の神の知識は無いし、存在を感じる事が出来ない。だが、戸隠神社に祭られている祭神は八意思兼神やこころのおもいかねしんという知識を司る神なのだという。どことなく運命を感じざるを得ない。

そつだ。運命と言えば先程からこの場の空気が重かったりする原因でもあったな。今から香奈と彌子が先程まで話していたことを紹介しよう。

まず香奈だ。端的に言おう。香奈はヴァンピールだ。ヴァンピールとはヴァンパイアと人の混血で、ヴァンパイア寄りも力は弱いが無点が無い種族だ。香奈はかの有名なルーマニアの吸血公ヴラド・ツェペシュの子孫だという。血統的にはフランス、日本、イギリス、そしてルーマニアのクォーターらしい。(有り得ねえ……………)

そして香奈はヴラド公の血を色濃く受け継ぎ、不老不死に魔術の行使を可能としている。

次に彌子は異常持ち（スキルホルダー）のようだ。昔、学園都市がツリー・ダイアグラムを創ろうとした際に彌子の頭脳を媒体にニコロコンピューターを創つたらしい。その際に実験に失敗。膨大な知識が頭の中に流れ込み、異常が誕生したようだ。俺はこれを聞いて戦慄した。何故なら、学園都市は偶然でも異常を人工的に造り上げたのだ。これは脅威だ。しかしこの事実を知っているのは多分、アレイスターのみだろうから問題ないのだが。

しかし、この空気はどうかならないだろうか。香奈がヴァンピール、彌子の境遇。二つの話を聞いたあと、つまり今この瞬間の空気が重過ぎるのだ。

「…………ごめん、変な話しちゃったね……」

「うちもごめんな……。たはは……………」

成る程、香奈と彌子は人知れず自らの正体を示唆していたのだ。香奈は吸血殺しのときに、ヴァンパイアが身近に存在する事を比喻に、自らがヴァンピールであることを伝えようとしていた。彌子は自らの異常性を見せ付ける事によって、異常を気付いて欲しかった。今思うと、わりと分かりやすい意思表示に思える。

「戸隠……………」

「とがっち……………」

縫るような視線。自我が崩壊していきそうな、そんな視線。彼女等は危惧している。自分たちが家族じゃなくなること。恐れている。

自らが淘汰される事を。だが、俺はそんな事はするつもりは、ない  
！！

「香奈、彌子」

「……………」

「俺はお前達の事を憐れだと同情したり、謝ったりはしない」

「……………」

「だけど、感謝させてくれ」

「……………えっ……………」

驚愕を顔にする二人。涙を浮かべたその瞳を俺に見せる。周りが静かに見守る中、俺は彼女等を見つめる。頬に手を添えると暖かい。撫でると二人を感じる。俺は二人を感じていた。

「俺にお前達を一層感じさせてくれる。俺にお前達を思わせてくれる。俺にお前達を見せてくれる。俺はお前達を一層知れた。俺はお前達を……………」

『一層愛せる。人であろうと無かろうと、人と違う能力があるうと無かろうと。お前達は俺に近づいて、俺と並んでくれた。お前達は何であろうと、俺の大切な妹だ』

陳腐な言葉の羅列。こんなことしか言えない自分を殴りたい。だが、

こんな言葉であろうと、泣いて、喚いて、そして愛を感じれるのならば、俺の胸の中で泣く妹を愛せるのならば。陳腐な言葉にも、口をついて出た言葉にも感謝をしたい。そう思いながら俺は妹を抱き締めた。確固たる存在を定着させるように、確固たる存在を感じるように。

学園都市統括理事会（前書き）

短いです……、投稿します。

## 学園都市統括理事会

『戸隠、居るか？』

「お？ おやおやおや、アレイスターじゃあないか。どうしたんだい？」

『少々入り用でな。今すぐ第七学区窓のないビルに來い』

一方通行事件が終了し、家族の結束が一段と増し、一日ほど経過した今日、俺は地下三階の指令部にいた。冷房の効いた部屋で音楽を聴きながら読書をしていたところ、アレイスターから通信があった。なにやらききな臭いというか、妙な雰囲気だ。

「命令形かよおい、まあいいけど。それで、俺は窓のないビルに行けばいいのか？」

『ああ、ボソソジャンプによる転移を許可する。至急速やかに來い』

「了解」

『よし、通信を切る』

プツンとモニターの電源が落ちる音が聞こえた。アレイスターが急かすあまり、『至急速やかに』と日本語をミスっているのを指摘しないまま、俺はボソソジャンプの発動演算をしていく。

「なんだろうな、『至急速やかに』行かないといけない用事とやらは」

俺は人知れずアレイスターの挙げ足を取り、家族に伝言を残して窓のないビルへボソンジャンプをした。

「あ？ 学園都市統括理事会への加入？」

「ああ、先ほど私が決めたのだ」

「……………どういうことだよ」

俺が窓のないビルに着いたとき、相変わらずアレイスターは生命ポッドの中で培養液に漂ったまま逆さになっていた。そして、これま



た相変わらず気味の悪い声を響かせて俺にいった言葉が前述の、俺が学園都市統括理事会に加入するという事だ。……大方予想は付いていたがな。

「お前は一方通行と御坂美琴、上条当麻、ミサカシリーズに学園都市上層部の機密をリークしたな？」

「ああ」

「それが学園都市統括理事会で問題となった」

「また、戦闘でもおっぱじめるつもりか？」

「いや、違う」

アレイスターの否定に眉根を潜める。前回の事件で前科のある俺は学園都市統括理事会のメンバーの一人に攻め入られた事がある。それを鑑みるにまた戦闘になるのかと思っていたのだが……。…やはり俺は原作にない展開には弱いな。対処が思いつかねえ。

「なら、なんだっていうんだ？」

「お前なら簡単に推測できるだろうから率直に言っ。お前の行動監視と学園都市の実益のためだ」

「……………あゝ、なるほどね。そういう事が」

対処は思い付かなかったが、アレイスターの言わんとしていることは容易にわかった。

「つまりは俺をアレイスター直属の暗部にして御するのは不可能だと感じたお前は逆に学園都市統括理事会に入れて暗部を保有させることで事態を収束させたいわけだな？」

「ああ、お前の周りには優秀な駒こまがいる。それを学園都市の為に使えば利益はバカにならない。それに今回の騒動もお前が学園都市統括理事会の人間なら誤魔化しがつく」

「はいはい、把握した」

言いたいことはわかる。つまりは俺を飼い馴らしてアレイスター自身の目の届く範囲に置く。その上で香奈、奈美、小夜、最愛という優秀な戦闘員に、彌子という優秀な技術屋、当麻、一方通行、美琴、理后という計画に必要な人間を間接的に操れるというわけだ。さらには貝積敏継、雲川芹亜と提携した原石解析も進むというわけだ。これほどうまい話は無いだろう。

「これは命令ではない、要請だ。別に断ってくれても構わない。だが、学園都市内に於いて学園都市統括理事会は軍や政府の側面を持つ。貴様の暗部や配下の罪を消し去ることも可能だ、さらに物資などの必需品や研究施設も学園都市が用意しよう」

「配下じゃなくて家族なんだが……、まあいい。それで、そんな高待遇して何が目的だ？」

「先ほども言ったとおり行動監視が目的だ。貴様の動きは把握しておいて損はない。それに私は野望家である以前に学園都市を経営する学長であるのだよ」

「ふうん」

アレスタアの目を見る。その瞳には何も映ってはいないし奴の考  
えることはわからない。だが、ここで磐石な利害関係を築けば、後  
々の行動も楽になる。ならば……………、

「いいぜ、学園都市統括理事会の末席を汚してやるよ」

「……………その言葉は辞めたときに言うのではないか？」

アレスタアと冗談を言いながら俺は目を細めた。

## 自己と他者の選定（前書き）

お久しぶりです、戯言です。

なんだか、荒らしの馬鹿が変な事をほざいていたのを心配してくれた方が多くいらっしゃいました。まずはその方たちにお礼を申し上げます。

そして、戯言は生きてます。荒らしなんかは気にしていませんのでご安心を。

長々と待たせてしまい申し訳ないです。

## 自己と他者の選定

学園都市統括理事会の役員になり、次の日。俺は家でゆっくりとしながらテレビを見ていた。

「あー……………、だりい……………」

ソファに寝そべり、右手には煎餅、左手は頬杖をつく感じで頭を支えている。

美琴と当麻は一昨日、話が終了すると同時に家に帰った。一方通行もいつの間にかいなくなり、今家に滞在しているのは御坂妹だけとなっている。

「だらしがないですね、このだらしがない方が私たちを助けた方だと思つと有り難みが無くなります、とミサカ第10032号は目の端に涙を湛えながら嘆息します」

「涙も出てない無表情で何をいつてんだか」

御坂妹は頭に軍用ゴーグルを引つ提げたままりビングにあるもう一つのソファーに座り、持つてきていた湯呑みに茶を淹れる。

「俺にも、ちょーだい」

「嫌です、とミサカは頭を振りながら断固拒否の意志を貫きます」

「ちっ、まあいいか」

御坂妹、なんつーか美琴に似すぎて怒るにも怒れない。この容姿、卑怯だろ。

俺は寝そべる体勢から起きてソファーに座りなおし、御坂妹に向き直る。

「それで、お前どうなんだ？」

「どうなんだ？、とは？ ミサカは主語も何もない言葉に呆れを覚えながら聞き直します。要領の得ない話し方しか出来ないのですか？」

「……………」

あれ？ 御坂妹って毒舌キャラだったか？ なんかム力つくぞ……………。

「……………まあ、いいか。それで、お前も怪我は良いのか、と俺は聞きたいわけだ」

「成る程、そうならそうと早く言ってください。時間の無駄です、とミサカは目の前にいる困ったさんに呆れながら、それをおくびにもださず言います」

「いや、ペラペラ喋ってるから、お前」

俺は御坂妹の毒舌を聞き流して御坂妹の外面を見る。相変わらず無表情でどことなく某ヒューマノイド・インターフェースを思い浮かべるその顔にはなんだかやるせなさを感じる。いや、これはやるせなさというよりも何か別の意志がある気がするが、うん、まあどうで

も良いなこんなこと。

御坂妹の怪我の治療は御坂妹に聞く迄もなく完了しているのは承知している。何故聞いたのか、ただのノリだ。

「怪我の話でしたね。私の怪我は既に感知しております。銃瘡も跡形もなく消えているので、治療した彌子さんは素晴らしい方ですね、とミサカは今ここに居ない方を手放して褒めます」

「彌子の腕は確かだからな。クローン用の延命治療も中々だったろう？」

「私たちには延命などは必要ないのですが、しかし、寿命が延びるといふのは不思議なものです、とミサカは心の内に出て来た違和感に首を傾げながら答えます」

「それが生きるという事だ」

「生きる、ですか……」

「ああ、人が生を受け、自己を把握し、他人を把握し、他人の視線に恥ずかしがりながらも自己を他人の評価で縛り上げ、自己と他人の違いを理解し、そして死んでいく。この流れが人の『生きる』であり、人生だ」

「……………」

ミサカの間答が止まる。彼女の瞳には何も映されてはいないが、しかし、彼女は気付いているのだろうか。彼女が生きるを理解しはじめること、それは自己と他人の違いを理解し始めたと言うことだ。未だに赤子のように視認する自己と感覚する内側の自己を統合しき

れない彼女であるが、いつか彼女等は一人の個人と自己を手に入れる事になるだろう。

「まあ、こんな問答はあまり意味を為さないよな。人間には魂があり、観念がある。一個人の価値観なんざ、語ったところで無駄ではない」

「……………」

俺が言葉を続けても、御坂妹は何も言葉を紡がない。俺は一つため息をついて、彼女の座るソファーに移り座る。そして、彼女の頭に手を置いて、少し身体を寄せた。

「……………、何を……………」

「わかるか。これが個人で他者だ。髪の色も手の感触も目の色も肌の色も温もりも何もかもが違う。みんな違ってみんな良い、なんて月並みで偽善をいうつもりはねえ。だが、俺とお前の間に、お前と美琴の間に、お前と妹達の間には確かに違いがある」

俺の胸板に当てられた御坂妹の頭が身動きをする。そして、くぐもった声が聞こえた。

「なんだか、わかる気がしますとミサカは漠然とした思いの丈を貴方に伝えます」

俺は御坂妹の言葉に顔を綻ばせた。

「今はそれで良いぜ。いつか、お前は『お前』を手に入れるだろうさ」



「……………はい」

\*

なーんて甘々な雰囲気は御坂妹と醸し出していたのだが、いま思えば明日には天使墮としの日が来るのをすっかり忘れていた俺は、家の周りに神道と十字教の結界を張り巡らせて天使墮としの順位変更の影響を無くす。土御門や神裂は聖ジョージ大聖堂の地下にいたら順位変更は外見のみだった。内側の自己と、外側の他者の違いに気付いていたのだ。そこから、結界はかなり有効だ。俺の身体は余りにも異質だし、俺はこの身体が無けりゃ戦う事もままならない。故に結界を張ったのだった。

「天使、か」

今思えば、天使墮としにより墮天される天使はガブリエルだ。かの有名なマリア様に受胎告知を、イスラームの祖に神のお告げをした有名な天使である。かのガブリエルと戦えるのはまたとない機会だ。天使の力を見極めておく事も今後に役立つしな。

「ま、何とかかなんたる」

俺はそう嘯き、笑った。

**御使墮しと世の理不尽（前書き）**

大分時間が開いてしまいました。が投稿です!!

テスト期間に入る。ので次の投稿は何時になるのやら……

## 御使墮しと世の理不尽

ついに御使墮しが発動した。うん、簡単に言うようだが世界は大混乱だ。大混乱というか、一部大混乱的な？ 当麻から引つきりなしに電話が掛かってきてるぜ。

全部無視しているがな！！

さて、なんだか前置きすら無くて困憊、になっっているだろうから簡単に説明しようか。

まず当麻が海に行きました。

偶然新居を購入した当麻パパがお守りを信仰やら宗教やらに忠実に配置し、御使墮しを発動。

サーシャにミーシャ・クロイツェフ、ガブリエルが墮天。

当麻が困憊　今ここ。

うん、簡単だが大体分かるよね。皆原作知ってるしね。だが、原作ではなんかラリツた人がいるがアニメじゃ居ないんだよな。あの辺りが問題なんだよな。

まあ、そんな事さして問題は無いんだが。今の問題は俺の境遇にある。別に姿形が変わっちまった、なんて落ちではない。バチカン市国並みの対界結界を張ったんだ。姿形が変わるなんて事は万に一つもない。

じゃあ、何が大変なのか。目の前のアレイスターさんから言われた命令が面倒なんだよ！

「……………もう一度聞いていいか？」

「二度も言わせるな。今回の天使崩しで出た被害と、御使墮しの原因となるもの『全て』を解決してこい。これはお前が学園都市統括理事会に参入するための必要十分条件だ」

「あり得ねえ」

まさか事件の全てを終わらせろなんて命令が下るとは思わなかった。あの事件も大概当麻に任せときゃ解決する話だ。俺が手を下すまでもない。確かに俺はあの事件にはある程度手を出すつもりではいたが、これでは余りにも偽善すぎる。俺の性にあわない。

「有り得ないことではない。これはイギリス清教、そして学園都市学長アレイスター・クロウリーへの誠意を見せるための必要な儀式だ」

「つまりアレか、俺が学園都市統括理事会に参入するためにイギリス清教教徒としての自覚と奉仕の精神を、学園都市統括理事会員としての理解と行動を対外的に示さなくちゃいけねえ訳か」

「理解が早くても助かる」

全く……………。こうしないと形を保てない組織というのはめんどくさくてありゃしないな。組織みたいな人間の集まりに完全は成立しない。故にこの茶番、ローマ聖教、ロシア正教への義理立ても大変

だ。

「私としては貴様を学園都市統括理事会になんとしてでも据えておきたい。しかし、中ではなく外からの圧力が掛かるのが問題だ。『今の段階』で、此方との軋轢をローマ、ロシアと生むのは得策ではないからな。法王、教皇には誠意を見せねばならん。貴様も聖人の一人としてな」

「聖人つてのは後世の人間が定める英雄の事を言うんだぜ？ 俺みたいな人格破綻者が名乗るべき称号じゃねーよ」

「……………、まあ貴様がそういうのなら、と言いたいところだが、世界はそれでは認めてくれないからな。貴様から天使の力、テレズマが溢れているのは事実だ」

「……………」

聖人ねえ……………。殺人鬼が聖人なんて世も末だな。まあ、この世界の聖人は行い云々ではなくテレズマを持っている人間を言うからな。中には聖人でありながら協会の汚点になるからと闇に葬り去られた聖人もいるかも知れない。

「まあ、貴様が何を思うのかは知らないが、一度イギリスの聖ジョージ大聖堂に行くといい。恐らくローラ・スチュアートからも同様の指示があるはずだ」

「いや、てめえからそれが聞けただけで十分だ。それに神裂も同じ勅命を受けているはずだからな。イギリスには行かない」

「……………貴様に神の加護があらんことを」

俺はアレイスターに背を向けてボソソジャンプをした。日の光が目  
を貫き、俺は空を見上げる。空は何時ものごとく青を一面に張りつ  
けていた。

「……………神なんざ信じていなかろうに」

俺は空を見ながら嘯き、当麻がいるだろう寂れた海水浴場を目指し  
てジャンプする。

「よう神裂、土御門」

「……………貴方は」

「おう、戸隠じゃねーか」

俺がボソソジャンプしたのは海水浴場の近くにある波止場のカフェ  
だ。そこには外見的には姿の変わらない神裂と土御門がいた。

「大変なんだってな、お前ら」

「貴方にも情報が回っていましたか」

「ああ、ローラ経由だな」

「そういつ戸隠は何も変わってへんにゃー」

土御門のニヤーニヤー言葉にイラツとしながら、

「まあな、俺の家にはそれなりの防御結界張ったし」

「それなり、と言いますと？」

「バチカン市国、サン＝ピエトロ大聖堂並のを」

「……………キチガイだにゃ」

土御門のニヤーニヤー言葉に更にイラツとしながら俺は家に張った結界を思い起こす。

なんて事はない、あらゆる防御結界を張りまくってバチカン市国の虹色の結界を模しただけだ。家の近くにある地脈や、風水、神話を魔術的に利用すれば聖人であるらしい魔術師である俺ならば張れる代物である。

これのお陰で家族全員順位変動もなく、美琴も姿が貸し出されなかった。いくら美琴の姿を借りた当麻の従姉妹だろうと、当麻と美琴がイチャイチャするのは許せん！！

「なんか、この御使墮しを予期していたかのような用意周到さだぜよ」



「ふん、何のことやらさっぱりだぜ」

「……………はあ」

土御門とくだらない事を喋り、その横で神裂がため息をつく。まあ、ため息をつきたい理由も分かるが、俺としてはこの御使墮しを早く解決したいところだ。そんな思いを感じ取ったのか、はたまた他の理由からか神裂が澄ました顔を海水浴場に向けて歩きだす。

「まあ、ため息をついていても何も始まりません。今回もなんやかんやで騒動の中心にいるあの少年のもとに行きましょう」

「おっ、ねーちゃんがやる気やぜ」

「流石シヨタコン。友達の彼氏を奪う事も厭わないとは……………。恐れ入るぜ」

「シヨ、シヨタコンとは何ですか！！ 私はまだ十八です！！」

「「えっ」」

「え？」

「土御門も近衛も酷いです……。女性の年齢で遊ぶなど……」  
「かかか、さつきから悪かったと言ってるだろ？」

「そつやぜ。俺らも悪かったぜよ」

「……………」

俺たちは先程から膨れっ面で前をずんずんと歩いていく奇抜な格好をしているジャパニーズサムライに手を焼いていた。さつきの波止場のカフェで神裂に年齢ネタを仕組んだら、予想以上に真に受けてしまったのだ。俺は土御門に近づいて、

「おい、てめえ。あれ何とかしろよ」

「お断わりだ。お前の方が魔術師的にも年齢的にも年下でルーキーだ。先輩の代わりに自爆してきな」

「ちいせえ、ちいせえよ先輩。ちっさすぎてシスコンを馬鹿にしてしまいそうだぜ」

「黙れ、お前が盛夏祭で舞夏の約束すっぱかしたせいで舞夏落ち込んでんだぞ」

「なら今度デートしてこよ」

「貴様っ……………!!」

サングラスの奥で目を光らせ、青筋たてる土御門から一步下がり辺りを見渡す。あ、勿論舞夏を蔑ろになんかしてねえぜ？ 土御門を蔑ろにしてんだ。

「それにしても、なんか視線が痛いな。なんか有るのか？」

「……………」

俺が辺りを見渡しながらさりげなく言うと、土御門は青筋の代わりに冷や汗を垂らす。…………… ああ、そういえば……………、

「…………… アンタの今の入れ物、ひとついはち——、何だったな、そう言えば  
「！！」

「……………」

俺の嘲笑を含んだ言葉にも土御門は冷や汗を垂らしながらも何も言わない。ラッキー！！

「かっかっか、似合わねー、似合わねー！！ アンタが——！？  
似合わなすぎるにも程があるだろ！！ くくっ……………くっ、あっは  
っはっはっは！！！」

「笑い過ぎだろ、お前！！ 俺だって傷ついてんだぞ！！！」

「あ？ なんで？」

少し涙を湛えた土御門の抗議に疑問で返すと、土御門は少し気落ちしたように言った。

「イギリスから急いで日本に帰って舞夏に会いに行ったら、舞夏、モデルになってたんだが、俺、舞夏のことすぐ気付いたのに、舞夏は……」

『うおおおお、——だぞおおお！——！』

つて、いつも俺に見せる笑顔より三倍ぐらいの笑顔で『俺と気が付かず』抱きついてきたんだ……」

「……………」

うわぁ……………。ひでえ……………。舞夏、そりゃひでえよ。シスコンに対してその仕打ちはひでえよ……………。

「うう……………、まいかぁ、まいかぁ……………」

どしゃり、と膝をついてさめざめと泣く土御門。おい、お前。一応他の人間には——に見えてんだから止める馬鹿。順位変更してない俺と当麻と当麻パパ以外には——に見えるんだから……………。

「……………何をしていますのですか、土御門は」

「……………心の病だ、気にしてやるな」

流石に異変に気付いた神裂が膝をついて泣いている土御門を見てきよとんとした顔で聞いてくるのを、俺はしみじみとした口調で返すしかなかった。

## 入れ替わり立ち替わり（前書き）

テスト期間、まだ続けてますが一息ついたので投稿。

感想が返せていませんが、感想物凄く感謝しています。簡単ですが  
ここでお礼申し上げます。

ISの方も早く完成させないとな……

## 入れ替わり立ち替わり

「ねえねえ、当麻お兄ちゃん早く遊ぼうよ!!」

「ちよつ、舞夏……」

後ろで何かが崩れ去る音がした。これは、酷い……。

「うう……、まいかあ……」

「あれ、土御門じゃねえか。それに戸隠に神裂も」

「……………当麻」

何があったのか。何処かでこれを見ている人間は何が起こったのか分からないはずだ。端的に言おう。当麻の従姉妹の乙姫ちゃんが舞夏になっていた。後ろでは当麻にいちやいちやしている乙姫ちゃんを見て泣き噎ぶ男が一人。土御門だ。

「……………なんつーか、当麻」

「ん？」

「お前、馬鹿だな」

「いきなり罵倒された!? 当麻さんが一体何をしたので!?!」

「黙れ、うつせえ」

「……………」

当麻が沈黙したのを確認した後、土御門に近寄り、膝をつく。

「……土御門」

「……」

「兄は、つれえよな」

「……戸隠!」

土御門の肩に手を置いて同情の笑顔で言うと、土御門は涙を浮かべて、俺の肩を組んだ。

「くそ! 悔しいぜよ!! あんなツンツン頭なんかには舞夏が!!」

「ああ、そうだな。うぜえよな、可愛い女の子ばかりはべらして」

「リア充なんて死んじまえ!!」

「なんか、めつちや罵倒されてんですけど!? てか、戸隠てめえ人のこと言えねえだろ!!」

当麻の絶叫を無視して立ち上がる。海は、それはもうシユールな光景が広がっていた。

「海の家スタイルに御坂妹、際どい水着を着たインデックスに砂浜に埋まる青髪ピアス……。どいつもこいつも終わってんなあ、おい」

唯一変わらないのは当麻パパに当麻、そして俺か。

「おい、また当麻なんかしたのか？」

「なんつも、してねえよ！！俺を何だと思ってるんだ！！」

「一級フラグ建築士」

「即答かよ……………」

激昂する当麻の横を通り過ぎて辺りを見回す。海の家にコンビニー  
ト、テトラポッドに綺麗に見えて汚染物質バンバンの海。ありふれ  
た日本の海がそこに広がっていた。

……………まあ、日本の海には人が頭だけ出して縦に埋まっていな  
いがな。

俺は足元にいる涙を流す大男を視界に入れないようにする。なんつ  
うかこれ、御使墮とし終わった後悲惨なことになりそうだな。

「まあ、それはさておき。当麻よ」

「……………なんだ」

俺の言葉に気だるけに反応する当麻。当麻の様子に苦笑しながらも  
俺は、

「流石のお前も、何が起きているか、分かるよな？」



「あ、ああ……………、なんかみんなの様子がおかしいよな。なんつか、外見と中身がそっくりそのまま入れ替わっているような」

「おお、そこまでは知ってたのか。じゃあさ、今回の騒動起こしたとされる最重要人物がお前だつてされてる事は？」

「……………は？」

当麻の様子に変化が訪れる。予想外の出来事に口をあんぐりさせていた。俺は気にせず、

「今回の騒動は御使墮しとってたな。その説明は追々するが、この魔術が当麻を中心に起こってたよ」

「……………え、そんな事……………っ!!」

「知らない、だろ？」

「あ、ああ……………」

当麻の言葉に被せて俺はニヤリと笑う。俺は後ろに立つ人物にそのまま声をかけた。

「だよ、神裂。攻撃するんじゃないぞ」

「……………近衛、戸隠」

俺の後ろに立ち、七天七刀を今に抜きそうな神裂の行動を手で制する。

「残念ながら、神裂。今回の魔術に関しては当麻は犯人じゃねえ。なぜなら一部の人間を除いて超能力開発をしている人間は魔術を使用すると反発力が働いて身体が自壊する。今回の御使墮しは大規模魔術だ。御使墮しを行使したら当麻の身体はバラバラだろうよ。もつとも、当麻には幻想殺しがあるから魔術行使は不可能だがな」

俺は早口で神裂に言葉を告げる。神裂は渋々といった様相で引き下がる。当麻は何が何だか、といった感じで混乱している。

「ええと、結局どうなってんだ？俺、なんかこの黒髪サムライに睨まれてるんですけど」

「ああ、こいつはイギリス清教必要悪の教会所属の聖人、神裂火織だ。インデックスとかステイルの同業者だ。因みに土御門と俺もな」

「……………、はあ！？ 土御門が魔術師！？ お前カリキュラム受けてんじゃないか！！」

当麻は記憶喪失のことを公に言えないため、神裂と知り合っていたという事は口に出さなかった。まあ、この場にいる人間は当麻が

記憶喪失であることは知っているのだがな。

「俺も一応魔術師だぜい。ま、最上位の陰陽師からレベル0の超能力者じゃあ、割にあわないがにゃー」

「ならなんで……………」

「端的に言えばスパイ、つて奴だにゃ」

「なっ……………!」

当麻は驚いて、土御門を指差した。

「と、戸隠のパクリだあ!!」

「俺のほうがベテランだぜよ!!」

あ、そういや当麻は魔術勢力に原作より詳しいんだったな。俺が教えてたせいで。

「まあ、それは置いといて。今回の騒動は当麻を中心に世界中に広がっている。御使墮しつてのは急遽取り付けられた名前だが、簡単に言えば、天使を墮天させて人間を上位に召しあげるものだとして理解してくれればいい」

「天使つて、確か実在するんだよな。偶像崇拜とかなんとか……………」

「その通り。天使つてのは強力な力を持つ。世界を塗り替えるほどの力をな。この外見と中身の入れ替わりもその副次的効果にしか過ぎない」

俺の言葉に当麻が神妙に頷く。当麻は何か得心いったかのように、

「俺は幻想殺しで打ち消したのは分かるが、戸隠と土御門、それに神裂は無事だったのか？」

「俺は家に対界結界を張ったからな。御使墮しの影響はほぼ無かった。まあ、余波で防弾ガラスが二十枚割れたけど」

「俺とねーちゃんはイギリスのウィンザー城に居たからにやー。バチカン市国並とはいかねーが歩く教会並の城塞結界のお陰で半分術に掛かった状態だ」

当麻の言葉に土御門が説明をし、神裂は青筋を立てて、しかし、冷や汗もかいて目を伏せている。

「半分術に掛かってる？ てことはお前ら術に掛かってる人間には別人に見えるって事か」

「そういう事。俺たちは人気アイドルーに見えるらしいぜい」

「んな！？ キサマ、俺がゴタゴタで苦労してる時に！！ そんなリア充フェイスを手に入れてやがったのか！！」

バツが悪そう、というか居心地悪そうに目を伏せる神裂を無視して意気揚々と自らの境遇を語る土御門。当麻は土御門に掴み掛かり、ギリギリと歯軋りしている。

「なーんか、この身体ゴシップ記事にモデルとの熱愛をスッパぬかれてて街中に出たらバツ持ったファンの女の子に追い掛けられる

ツアーを開催中だぜい」

「羨ましいい！！ 羨ましいいぞてめえ！！」

「……………羨ましいか、それ」

てか、バット持ったファンの女の子に追い掛けられるのが羨ましいとは、当麻ってばDMなんだな、素敵！！

「さて、土御門と当麻は戯れてるから神裂、そろそろ犯人探しといきましようかね」

「あの、二人を放っておいて良いのでしょうか……………」

「ああなった二人は暫くあのまんまだろうぜ。俺が土御門に連絡すればいい話だから、気にする必要は無いぜ？」

「ですが……………」

「俺が信用ならないかい？ それともいまだに当麻が犯人だと思ってるのか」

「い、いえ……………、そのような訳ではないのですが」

「なら良いじゃん」

俺はいまだにスクラム組んで唾み合う当麻と土御門を一度見やった後、神裂を連れて歩きだす。何にしても閑散とした海水浴場にも周囲の視線というものがある。魔術行使は別の場所でやるのが良いだろう。

「ちあて、お仕事いってみよつか」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1230n/>

---

とある異常（アブノーマル）の能力完成（スキル ジ・エンド）

2011年12月3日08時53分発行